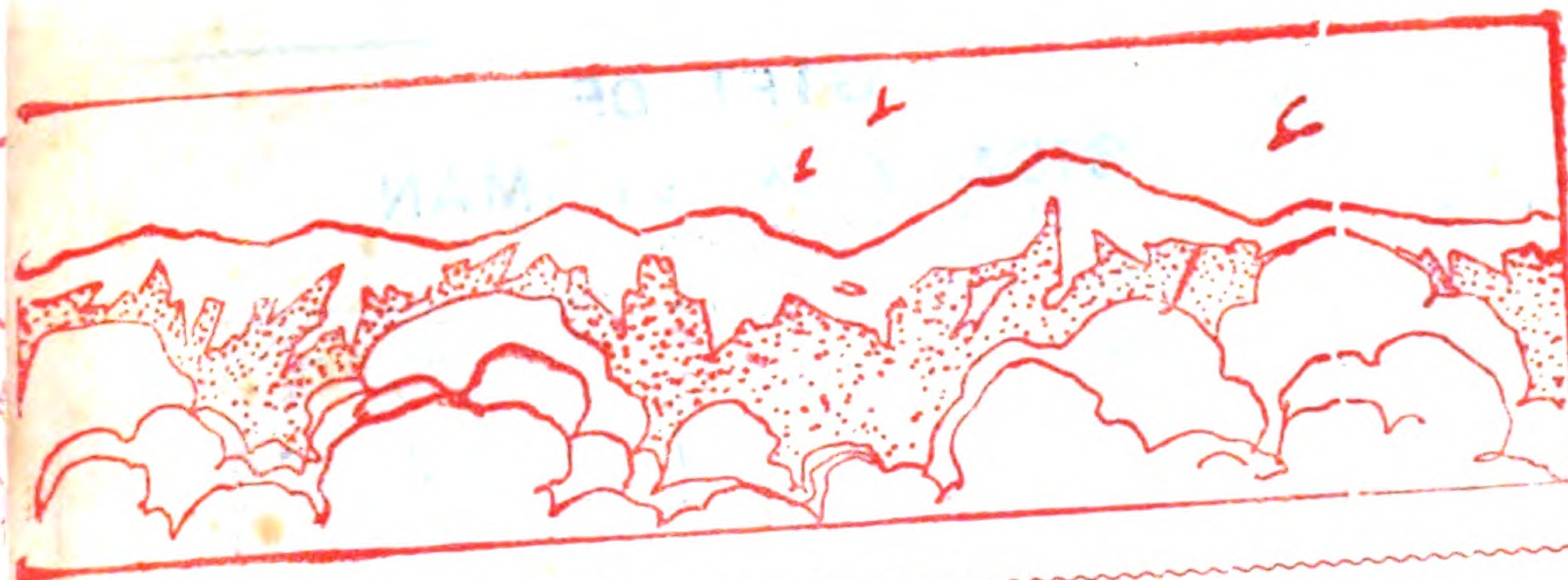
THE KAIZO

改造

二月號

1923



改造二月號目次



モオパッサン作 廣津和郎譯

（四六判天金羽二重裝幀、五三〇頁
定價金二圓六十錢、送料十九錢）

重版
又重版
人氣湧が如し

美貌の友（ベラミ）

モオパッサン全集

各卷撰擇御隨意

第二卷	生の誘惑	價 二、九〇	送 一九
第三卷	戀の力	價 二、六〇	送 一七
第四卷	狂へる戀 外十九篇	價 二、八〇	送 一七
第五卷	水の上 外九篇	價 二、七〇	送 一七
第六卷	戀の謝肉祭 外二十八篇	價 二、八〇	送 一七
第七卷	湯の町の戀	價 二、七〇	送 一七
第八卷	我等の心	價 二、四〇	送 一七
第九卷	寢室の一隅 外十六篇	價 二、八〇	送料 一七
第十卷	嫉妬	價 二、五〇	送料 一七
第十一卷	流轉する娘 外廿八篇	價 二、五〇	送料 一七
第十二卷	妻の告白 外二十五篇	價 二、五〇	送料 一七
第十三卷	罪の肉塊 外十三篇	價 二、七〇	送料 一七
第十四卷	女の巧み 外十六篇	價 二、[illegible]	送料 一七
第十五卷	女の一生 家庭の平和	價 二、六〇	送料 一七

東京市麴町區飯田町一ノ二
株式會社 天佑社
振替東京一〇一二八番
電話九段一一七三番



米國製
ムーアー萬年筆の
優良なるは
他に無比
此萬年筆は決して漏りませぬ

日本總代理店 東京 神戸 米國貿易會社

其他市内及全國著名の百貨店文房具店にあります

●特約販賣店●

京橋 伊東文房具店
同 文祥堂文房具店
同 文永堂文房具店
日本橋 三越呉服店
同 白木屋呉服店
上野 松坂屋いとう呉服店
神田 文房堂
大阪 三越呉服店
名古屋 松坂屋いとう呉服店

宮内省藏版
文部省發行
印刷局印刷

明治天皇御集

十二月一日發行　木版本

美濃版形和紙和装
上、中、下全三冊　二百四十五枚
一部　定價　十圓
送料　内地　十八錢（臺、樺　四十錢／鮮、關　五十五錢）

十二月五日發賣　活版本

菊版形和紙和装
全一冊　三百十四頁
一部　定價　一圓五十錢
送料　内地　十二錢（臺、樺　三十錢／鮮、關　四十五錢）

明治天皇が歌聖にましまして御製の數も非常の多數に上つてゐる事は、我々臣民の間でも夙に傳へ承つてゐる所である。宮内省では大正五年十月二十一日旨を奉じて臨時編纂部を設け、部長に入江子幹事に故近藤久敬顧問に故山縣公、故徳大寺公、故黒田子委員に井上通泰、長谷信成、東坊城徳長、坂正臣、池邊義象、大口鯛二、千葉胤明、佐々木信綱、故須川信行を任じ其他書記、囑託若干名を置きて御集編纂の任に當らしめられ、同八年十二月二十日編成を奏上せられた。此御集は幾萬の數多き御製の中から千六百八十七首を抄され、明治天皇御集と題し、若干部を印刷に附して先般夫々の向へ御下賜になつたのである。御集は實に金玉の響で國民一般が天皇の御盛德を仰ぎ奉る資料として、又日常修養の鑑として最も適當のもので、六千萬國民が日常誦すべきものであるから、宮内省と文部省と協議の結果、印刷局で印刷の上文部省で發行し、當會から發賣すること、なつた。

此御集は木版本と活版本との二種であるが、其内容には少しも變りはない。木版本は専ら宮内省所藏の木版本を紙型に取り、御下賜のものに擬して装釘しつとめて原本の體裁を存することを目的としたもの、活版本は文部省で變體假名を普通のものに改め、濁點を附し、更に卷末に索引を添へられたもので極めて價格を低廉にし廣く普及せしめることを目的としたのである。希望の向は本會に申込まれたい。

御集發行に付　文部大臣の辭

今回宮内省に於て明治天皇御集の編纂成り、思召を以て夫々へ下賜せられたり。此の御集は、明治天皇の御盛德を仰ぎ、御仁慈の大御心を偲び奉るに最も適當なるのみならず、又實に國民にとりて修養の鑑たるべく、教育上にも極めて有益なるを以て、宮内大臣と協議の上、刊行して廣く之を頒布することとせり。

此の御集が普く國民に拜誦せられんことは予の切に希望する所なり。

大正十一年九月

文部大臣　鎌田榮吉

發賣所　印刷局内　朝陽會

振替口座東京四三六〇五番

内地各官報販賣所及全國著名書店にて販賣す

第一巻

オーガスチン懺悔錄出來

冥想懺悔叢書

佐久間政一君譯 エピクテータス語錄	木村毅君譯 アウレリアス冥想錄	宮原晃一郎君譯 オーガスチン懺悔錄	平林初之輔君譯 ダンテ新生	[illegible]田泉君譯 パスカル感想錄	宮島新三郎君譯 カアペンター吾日吾夢

冥想は心の休息である懺悔は心の洗濯である。人は冥想によつて精神的に受けた傷痕を繕ひ靈魂の至深所に觸れて新たなる生命の戰ひに再び立つの勇氣を得る。又人は懺悔によつて心に溜つた汚垢を洗滌し去り太初の純眞無垢な姿に還り得る。然るに吾々が生くる世の中は餘りに繁忙、雜踏で心に休息を與へ、洗濯を施す暇が奪はれてゐる。吾々は自ら冥想の扉を開き懺悔の殿堂に跪くには餘りに氣力がなくなり過ぎてゐる。茲に於て古來偉人の冥想錄や懺悔錄を披讀する事が緊切な所以である。吾々は之れに導かれつゝ精神的流浪を終へて心の故郷に還るのである。忘れてゐる心の至深所の扉を開くのである。見捨てゝゐた靈の太初の姿に邂逅するのである。實に吾々は先哲の遺著に接し機緣に據つて觸發さるゝ所がなければ遂に永久其境地に到りつく事は出來ない。本叢書に收むる六篇は恐く長い間人類の精神も之を腐蝕させ得ず幾多先進の鑑識家の之を抹殺し得なかつた不朽の名篇である。けに人の品性は架上に收むる書冊によつて窺知し得られる。自分の胸底に健全なる精神的王國を建設しようと念ずる士の必讀を希うて止まない次第である。

頒布略記
六册分前納 金十四圓也
三册分前納 金七圓五十錢
一册宛前納 金貳圓六十錢

東京小石川水道町 文明書院 電話番町三五四二 振替東京一七二〇二

戯曲

愛すればこそ

谷崎潤一郎氏の大名著

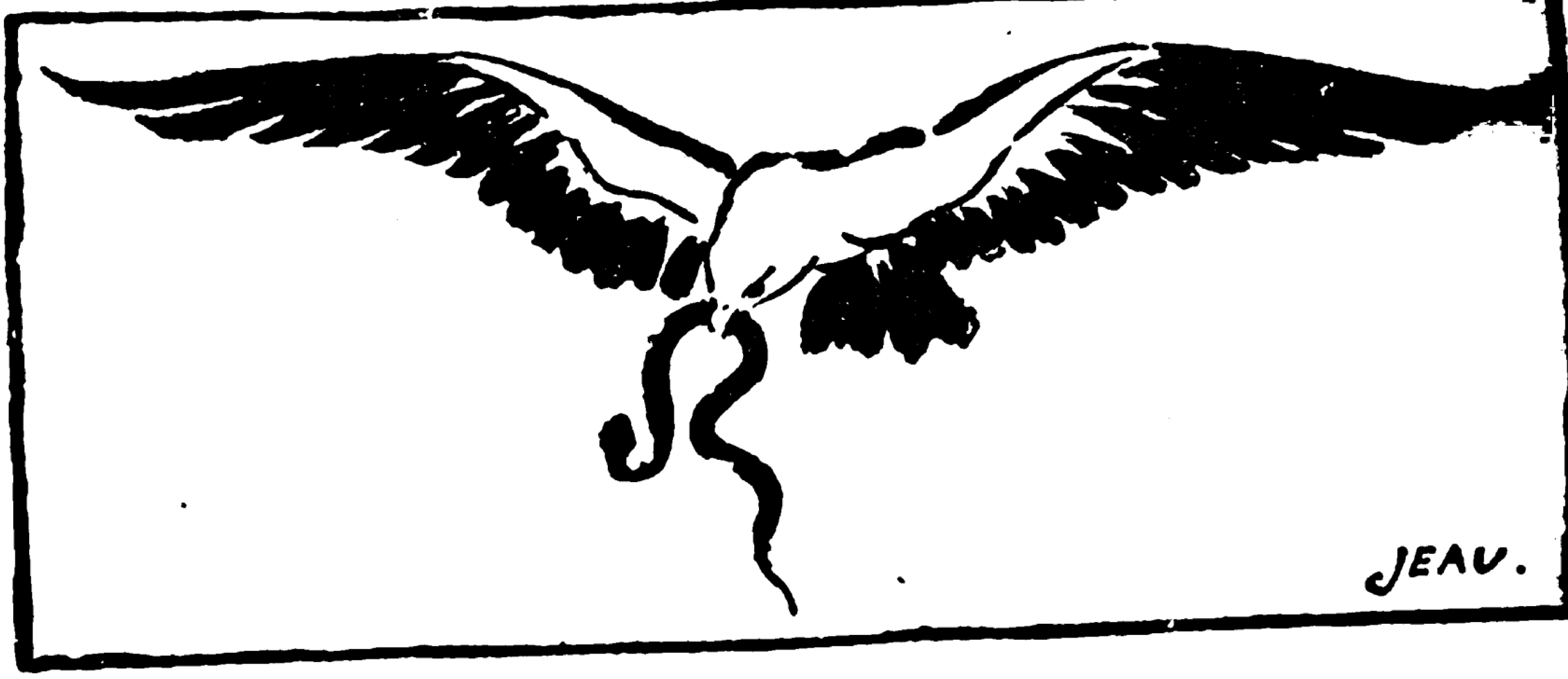
本書は明治、大正の藝術壇の代表作として不朽の神品と稱せらる。三角關係の深刻なる戀愛を描いたもので、人間愛慾の惱みがいた〱しいまでよく表現されて、讀む人をして一氣に藝術の殿堂へと引ずつて行く、眞に名人の名作で、千古に光輝を放つ快著だ。

大正文壇の藝術的代表作

定價壹圓六拾錢
送料拾五錢

第四十四版

東京市芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二番



==((改造二月號))==

政府、樞府、民衆の三つの心

樞府と政府との葛藤はもとより、豆の如き小さな問題だ、我々は樞府の存在が國家進化の上にも、民衆幸福のためにも有害だと思つてゐる、しかし眞に備はる人々の何を云はうとそれの自由は認めねばならない、それを氣に病む政府の自信なきを笑ふより他に道はない、一顧問の發言がたとへ不純の動機からだとはいへ、すべてに自分の主張を貫く能はざる政府は當然辭すべきである、尤もどの內閣が更ろうとどうせ我々に有難味は少いことではあるが、しかしそれが進歩の或道程を語るものであれば更迭は歡迎すべきである。

ただ、玆に見逃しがたき一大問題が殘る、それは陰謀好きの一隱居の野望によりて氣ままに破壞される內閣は、やはり國民全體の內閣であろうか、國民全體が一枚の衣を剝ぎ、一椀の食を節してまでも、納稅して支持して行く親みの多い我々の內閣であろうか――、その疑問がいたいたしく自分等の頭にひびいてくる。

國家をかたちづくり、社會乃至內閣を形成するのはそれが金持ちや、或特殊權力者の遊戯に出づるものであつてはならぬ、すべての人生の目的を遂げる上には高邁なる理念と、純眞なる境地に立つを必要とする、然るに我國の政治を大觀すれば、其機能は朽腐し、人心は弛廢して何等の見るべきものがない、文化は日とともに進むが、內閣は封建時代に讓らざる多大の權力を擁して民衆に臨んでいる、そしてその行使されて居る權力に民衆の信賴がどれほどあるか、溫かい希望がどれほど繫がつているか。政府者も、樞密院の役人どもも此一點に思を潛めたならば冷汗三斗の思ひがあろう。

こうした人類の幸福と、人生の目的を無視するものどもばかりに制肘されておる我々民衆は差詰めどう手段すればよいのか。



眞と美

西田幾多郎

一

一方から考へれば、我々は眞なるものが美であると考へざるを得ない。虚僞なるもの、作られたるものに對しては、それが如何に巧であつても、之に對して藝術的價値を認めることはできぬ。夢の如き御伽噺であつても、それが藝術的價値を有する限り、我々はその中に何等か深い人情自然の眞を認めざるを得ない。無論斯く云ふも、人情の美といふことゝ藝術の美といふことを混同するのではない。如何に醜惡なる人情であつても、それが人情の眞として藝術的對象となり得るであらう。虚僞なる藝術的價値を有せないが、虚僞なる藝術家の心事も亦藝術的對象となり得るであらう。自

然を對象とする藝術についても、同樣のことが云ひ得ると信ずる。藝術的價値を有するのは、我々の主觀的作爲を許さない、何等かの意味に於て客觀的に與へられたものでなければならぬ。

併し又一方から考へれば、眞と美とは何處までも區別せねばならぬと考へることもできる。眞なるものが必ずしも美なるものではない美なるもの必ずしも眞なるものではない。數學的眞理の中には、如何にも齊整的にして美と思はれるものもあるであらう、音樂的とすら思はれるのもあるであらう。併し或數學的眞理が美であるといふことと眞であるといふことは固より同一ではない。科學的眞理の如きものゝ中に美感といふ如きものを求めるは難く、音樂の如きものゝ中に眞理といふ如きものを認め難いと考へ得るであらう。我々は眞と美との關係を如何に解すべきであるか。

二

私は先づ形式美と內容美との區別について考へて見よう。雜多の統一とか、齊整とかいふことは、感覺的內容に關係のない純なる形式美と考へられるであらう。併し斯く考へる場合に於て內容といふのは知識的內容の意味であつて、美的內容の意味ではない。かゝる意味の內容は美的價値に對して無關係であり、偶然的であるのは云ふまでもない。併し此の如き知識に於ての形式と內容との區別よりして、所謂形式美を無內容とすることはできぬ。私の考では內容なき美といふものはない、美には表現せらるべき內面的生命がなければならぬ、純なる內面的生命の表現が何時でも美と感ぜられるのである。所謂形式美なるものの本質をカントの如く解するならば、それはカント自身が考へた如く單なる形式美といふべきものではなくして、却つて我々の純なる理性的生命の內容を表現せるものではなからうか、理解力といふ一つの精神作用を、作用の作用の立場から反省して見た作用自身の內容の表現と見るべきではなからうか。形式美はか

ゝる意味に於て一種の内容美でなければならぬ。我々が種々の作用を有するから種々なる生命の内容があり、種々なる藝術美が成立するのである。

成形美術が空間を對象とするとすれば、空間は成形美術に於てその内容をなすものと考へねばなるまい。之に對して色といふ如きものすら外面的と考へ得るであらう。況してそれが基督の母たるマドンナの像であるとか、希臘の女神たるヴエーナスの像であるとかいふ如き概念的内容は、藝術的内容に對しては、全然外面的と考へねばなるまい。併し之が爲に成形美術は形式美の藝術であるといふことはできない。若しフイードレルの如く考へるならば、成形美術は我々の純粹視覺の表現であり、成形美術の内容をなすものは純粹視覺の内容でなければならぬ。我々が概念の網を破つて純なる視覺作用の立場に立つ時、純なる成形美術の對象界が現れて來る。是に於て物が生きて來るのである、空間が生命を以て滿たされたのである。生命とは主客の合一の相である、我が物となり、物が我となる時、生命が現れ來るのである。此の如き意味に於て純粹視覺の立場の中に統一せられ得るかぎり、色が成形美術の内容を成すことは云ふまでもなく、藝術家の人格の深さによつては、宗教的内容と思はれるものすら形體化することができるであらう。特にマイエルの云ふ如く表象藝術と考へられる詩に於て、概念的内容が直にその内面的内容を成すことは、何人も認め得るであらう。私は美に形式美と内容美と云ふ如き區別があるのではなく、すべてが内容美といふべきものであると思ふ。唯、藝術的内容に種々の區別があるのではなからうか。普通に所謂形式と内容との區別といふのは知的内容の區別を美的内容に移したものと思はれるのである。

三

美が上に云つた樣な意味に於てそれぞれの內容を有つて居るとするならば、それは知識內容と如何なる關係に於てあるであらうか。視覺作用には成形美術の美があり、聽覺作用には音樂の美があり、而してそれ等の美が經驗內容の異なるに從つて、特殊なる內容を有するものとするならば、知的內容と美的內容との間に何等かの內面的關係があると考へざるを得ない。例へば均齊美といふ如きものであつても、それが形に於ける場合と、音に於ける場合と同一とは考へられないであらう。その美が深くなればなる程、一つの美は他の美によつて代へることのできない美的內容を有つと考へ得るであらう。藝術家の創造作用が客觀的に何物かを構成する構成作用であるとするならば、その構成作用は經驗の客觀的法則に從はねばなるまい。成形美術は視覺的經驗の法則に從はねばならず、音樂は聽覺的經驗の法則に從はねばならぬ。美的內容は此等の法則に制せられて、特殊の內容を有つとも考へ得るであらう。

我々が色と色との關係とか、音と音との關係とかいふものを定めるのは、視覺とか聽覺とかいふものに依らねばならぬ。我々が之を判斷意識の立場に於て判斷の形に構成することによつて、感覺的知識の眞理が成立つのである。所謂色相といふ如きものは此の如き關係の體系と見るべきであらう、表象自體の眞理として、苟も視覺を有するものは何人も認むべき眞理と考へられるのである。而して斯く感覺內容を判斷の形に直して考へるといふことは次の如く云ひ得るであらう。我々の自由我といふのは無限なる作用の作用であつて、理性はその限定の方面であり意志はその發展の方面である。ヘーゲルも思惟を意志の反省的方面と考へて居る（Philos. d. Recht Ed. 2 S. 5.）我々は感覺的眞理を構成するといふことは、部分的作用の內容を作用の作用の立場の內容に直して見ることであると考へ得るであらう。作用の作用の立場の反省的方面たる理性は、すべての作用の內容を自己の內容に直して、自己自身の對象界を構成すると考へるこ

とができる。斯くしてすべての個人的主観に對して、一般妥當的なる客観的眞理の世界が構成せられると考へることができる。併し又一方より考へれば、視るとか聽くとかいふことは、その内容が理性の立場に於て反省せられると共に、創造作用としての自己自身の内容を有すると考へ得るであらう、知的内容に分析することのできない自己自身の積極的内容を有すると考へることができるであらう。純粹感覺の表出運動と考へられる藝術家の創造作用は、此の如き内容を表すものと考へ得るでもあらう。

右の兩方向は固より相反する方向ではあるが、經驗的知識を確立するには、一般的理性が特殊的作用に從はねばならぬ。經驗内容を反省して一般的眞理を構成する前に、先づ一般を内に含む特殊が構成せられねばならぬ。我々が現實に見るとか聞くとかいふことが、かゝる經驗を構成することである。我々は働くといふことによつて一般を特殊の中に含むことができるのである。藝術的創造作用もかゝる特殊化の方向を進めて行くに過ぎない。斯くして眞と美とは相接するのである、眞の裏面に美が伴ふて居ると考へることができる。藝術的創造作用といふのは唯主観的に物を構成するのではなく、客観的に物を見ることである、深い實在を見出すことである。物にあつては右の如き創造の方向と反省の方向との間に何處までも罅隙があると考へられるが、我に於ては此兩方面が内面的に結合して居ることが明である　無論我が我を創造して行くといふ如き場合では、それが直に藝術的創造作用とは云ひ得ないであらう。自己を創造して行くのは嚴肅なる道德的行爲である。物に於て藝術的創造作用は、我に於て道德的行爲となるのであるが、兩者共に同一の方向である。兩方向の内面的結合が斷たれた時、それが藝術的創造作用となると考へ得るであらう。

感覺的經驗が眞理の基となるといふ時、特殊が一般を含むといふ時、その特殊は形式論理に於て考へられる如き特殊でないことは云ふまでもない、理性を超越する意志の立場に於ての統一でなければならぬ、個性的統一でなければなら

ぬ。知識は此方向に進むことによつて客觀性を得るのである。此意味に於て、眞なるもの丶基礎に美なるものがあるといふことができる。經驗的眞理の確信の基に、一種の美的直觀が働いて居ると考へることができるのである。美の上に眞が漂ふと云つてよい。意識一般の立場に於て認められる經驗的眞理に反する美の內容はない。何となれば美的直觀は理性を內に包み、無限に之を個性化して行く方向であるからである。知識の客觀性を失ふことは同時に美の客觀性を失ふことである。唯一般的眞理は美の內容の成立の條件となるが、一般的眞理は直に美ではない。美の內容は何處までも個性的でなければならぬ。眞理であつても、それが個性的となればなる程、美的內容に近いて來る。無論何處まで行つても個性的なものと一般的なものは結合せないと考へ得るのであらう、何處までも美は美であり、眞は眞であると云ひ得るであらう。此兩方向は眞に作用の作用の自覺の立場といふべき宗教の立場に於てその內面的合一を得るのである。宗教の立場に於て個性化と一般化との兩方向が結合するのである、眞なるものは美、美なるものは眞となるのである。

四

我々は普通に知覺と思惟とを區別する、併しこの二つの作用は如何なる點に於て異なり、如何なる點に於て同じと見るべきであるか。思惟といふのは知覺的經驗によつて與へられた內容を區別し整頓する單なる形式的作用ではない。思惟は思惟自身の內容を有つのである、數理の如きものは純粹思惟の對象と考へることができる。何、思惟を前に云つた如く意志の裏面として考へて見れば、思惟は一面に於て一つの創造作用であると考へることができる、自己自身の實在界を構成すると考へることができる。自由我の世界は思惟が思惟自身を反省することによつて創造せられるのである。之に反し知覺的經驗といへども單に受働的ではない、單なる靜的直觀ではない。純なる直接の作用としては、作用が作用

自身を省み、作用が作用を生む一つの事行である。我々が一歩々々物を深く見て行くことは、一歩々々物を深く考へて行くことゝ同じである。視覺の世界は視覺に連なり、思惟の世界は思惟の世界に連なる。作用が作用自身を對象としても各が各自身に十全なる獨自の世界を創造するのである。我々の視覺作用は、色の表象自體を內容とすることによつて發展するのではなく、直に前の作用に接續することによつて進むのである。畫家や彫刻家は眼を以て考へ、哲學者は思惟を以て見るのである。プロチヌスの云ふ如く思惟することは見ることである。

それでは如何なる意味に於て、知覺と思惟とが區別せられるのではあるか。知覺に於ては、作用から作用への推移が直接にして無意識と考へられ、思惟に於ては、その間に罅隙があり、意識的であると考へられるのは何に由るのであるか。私は思惟を作用の作用たる意志の反省的方向として、すべての作用に對して自由なる統一の立場として見ることによつて、之を解し得ると思ふのである。すべての經驗は、その純なる狀態に於ては、作用の純なる內面的連續として、意志の射影と見るべきであらうが、我々は作用の作用たる意志の自覺の立場に於て、之を作用自身を對象として見ることができる。思惟はかゝる立場の反省的方面として、その限定作用として、すべての作用に對して、獨立であり、自由であり統一的であり得るのである。表象の立場は感覺の立場を、想起の立場は表象の立場を超越し、之を內に包むの故を以てその內容に對し、獨立であり、自由である。思惟の立場はかゝる意味に於ての極限と見ることができる。表象は感覺の連續ではない、感覺の立場から見ればその間に罅隙があり、感覺の統一として無意識的なるものも、表象として意識的となると云ひ得るであらう、表象に於て無意識なるものも、記憶に於て意識的となると云ひ得るのであらう。

併し私は如何なる經驗に於ても反省的方面の知識と作用自身を見る創造的方面の知識とがあると思ふ、此の區別が永久眞理と事實眞理の區別として現れるのであらう。視覺作用が色や形を識別して行く時、無論まだ判斷の形に於て區別せられるのではない。併し此の識別が赤は靑と異なるといふと云ふ如き判斷の基礎となるのは云ふまでもない。私はかゝる知的內容を視覺の世界に於ける永久眞理と見たい。所謂色體 Farbenkörper といふ如きものは、かゝる知的內容に基ける永久眞理の體系と考へることができる。赤と靑とか識別せられるには、赤の視覺と靑の視覺とが、此兩者を綜合する視覺一般の立場から反省せられるのである、視覺が視覺自身の內容を反省するのであると考へることができる。或はそれは判斷であつて視覺ではないと云ふでもあらう。併し現在に二つの色を併べて、之を識別するものは、視覺でなければならぬ。或は感覺と感覺とは互に直に相區別するといふかも知れない。併し互に獨立なるものは相區別することはできぬ。兩者が識別するには、兩者の綜合統一する全體がなければならぬ、否兩者はこの全體の分化發展と見られなければならぬ。此の如き識別作用が心理學の所謂感覺作用となるものである。或はそれは感覺作用として、眼の場合に於ても、耳の場合に於ても、同じものであるとも考へられるであらう。無論我々は感覺一般の立場として感覺作用といふものを認め得るのであるが、具體的には一々が特殊的でなければならぬ。視覺作用は斯くの如く識別的方面を有つと共に、純なる作用の連續として構成的方面の內容を有つ、即ち知的方面を有つと共に意的方面を有つ、而して後者の方向に於て徹底したものが成形美術の內容をなすと考へ得るであらう。我々はこの方向に於て視覺の世界に於ける事實眞理を有つと云ふことができる。此の如き見方に於てディルタイの云ふ如き心理學が成立するのである。藝術的實在に對して藝術的眞があり、眞と美との結合を此の方向を見ることができるであらう。藝術的美の中に心理的眞が含まれて居ると考へ得るであらう。セルバンテスの描けるドンキゾートやシエキスピーヤのハムレットは、それが個性的なる藝術的創造た

ると共に、心理學上の一つのタイプと考へることができる。無論、藝術的内容が直に心理的眞理とは云ひ得ない、藝術的内容は知識内容に還元することのできない様に具體的なものと云はねばなるまい。併し物理學者が現實の經驗的眞理から一般的なものを見出す如く、藝術的内容の中に知的内容を含み、一種の心理的知識は此立場によつて客觀的となると考へることができるのである。

右の意味を明にするには、實在とか事實的眞理とかいふものについて考へて見なければなるまい。實在といふのは意志の對象界と見るべきであらう。可能の世界から區別せられる現實の世界は、無限の眞理を統一するアプリオリのアプリオリの立場に於て構成せられたものでなければならぬ、モナッドは神意によつて創造せられるのである。カントの意味に於て知識の客觀性といふことは、現今西南學派の考ふるやうに單に一般妥當的であるといふばかりでなく知識の形式と内容との結合に求めねばなるまい、而してかゝる結合は唯作用の作用の立場に於てのみ可能である。此意味に於て客觀的知識は實在の知識であるといふことが出來る。事實眞理といふのは此の如き意味に於て實在の知識でなければならぬ、意志が自己自身を反省した知識的内容でなければならぬ。無論意志は意志自身を反省し盡すことはできない、反省し盡すことのできるものは意志とは云はれないであらう。物自體は知識の達すべからざる意志自身の無限の行先である。併し作用自身の内に反省せられることによつて成立する事實的眞理は、單に對象的なる永久眞理とは相反する立場に於て成立すると考へることが出來る。ライプニッツのアダムの概念、西南學派の歷史的認識は、皆作用が作用自身の内に省みる立場に於て成立するのである。歷史的認識の基たる一般者は自然科學知識の一般者とは同一ではない。所謂事實的眞理、歷史的認識を右の如く考へ得るならば、私は之を行爲の内容と考へ得ると思ふ。右の如き知的内容

の成立の基には動的一般者がなければならぬ、即ち之を動くもの、働くものゝ內容として考へねばならぬ。無論既に省みられた知的內容は直に動くもの、働くものゝ內容とは云はれまい。併し動くもの、働くものは無內容ではない。我々は「時」の內容を自己の內容として働くのである。此の內容を離れて我々の內容はない。我々の道德的行爲といふのは、歷史的事實を內容として成立するのである、かゝる知識を內容として進むのである。超越的意志が自己自身の中に反省する知的內容が歷史的知識となり、超越的意志の發展が道德的行爲となる。歷史的眞と道德的善とは表裏相接してゐる無論主觀的善の立場から見れば、歷史の背後に善の理念があるとは考へられないであらう。併し私は今姑くヘーゲルの世界史の理念についての考を引用するに留めて置く。ヘーゲルは理性的意志、具體的善は最も有力なるものであり、此の如き働く善即ち神の攝理の發展が世界史であると考へ、Die Wahrheit des Wahren-das ist die erschaffene Welt と云つて居る（Hegel, Die Vernunft in der Geschichte, Hrsg. v. Lasson. s. 55）。

右の如くにして世界史の內容は道德的意志の內容と考へられ、Struktur の心理學の內容は藝術的創作の內容と考へられ、善なるもの、美なるものによつて、眞なるものが立せられ、眞なるものによつて、美なるもの、善なるものが立せられる、眞と善と美とを同一の方向に於て見ることができる。視覺的體驗について云へば、單に抽象的に色の種々なる關係を示せる色體の如きものは、思惟體驗に於ける純理の體系に比すべきものであつて、我々が思惟の立場に於て所謂經驗的實在力を有する如く、視覺的體驗は已自身の實在界を有つ。而して經驗的事實が法則化せられて自然科學的眞理となる如く、視覺的體驗の內容も一種の心理學的眞理として法則化せられるのではある、併し我々は意識一般の立場に於て唯一なる現實の世界として事實的眞理の世界、歷史の世界を有つ如く、成形美術の創作的立場に於て視覺的世界に於ける個性的事實の世界を有つと考へることができる。一あつて二なき藝術的內容は視覺の世界に於ける一度的な事實である。而して歷史的認識が一度的なもの、唯一的なものゝ知識と考へられると共に、その中に無限の永久眞理を含むと考へ得る如く、藝術的作品の中にも無限に永久眞理を含むと考へ得るであらう。

自由國と奴隸國

室伏高信

一

今日の國家は自由國である。明日の國家は奴隸國である。

私たちは過去數年の間に、社會問題の八釜しい時代を經驗した。この時代には、余程無能な人か、または余程高踏的な人でない限り何等かの方法と内容とで社會問題についての彼等の意見を發表した。人々は慥に「社會」の存在に氣がついた。これだけでもつて過去數年の間における社會問題の八釜ましかつた時代は決して無意味な流行の時代でなかつたといふとができるであらう。近頃になつて特にこの「社會の發見」を高調する學者が現はれてゐる。人間の種々なる發見のうちで社會の發見は最も主要な發見の一つであるとまで云ひなしてゐる。私たちはそれが學問上にもつてゐる意味をよく理解してゐるつもりである。ヘエゲル哲學が國家を道德の高きにまで登昇させた時には國家と社會との區別を高調することは慥に必要なことであつたのである。しかも社會は今日になつて發見されたのではない。社會はクロポトキンも云ふてゐるとほり人間以前なのである。人間が社會を造つたのでもない。社會が人間を造つたのでもない。社會は人間以前の存在であつたのである。人間の社會となつてからも、今日の人類學を信じえられるものとすれば二十萬年乃至五十萬年の間人間の社會は存在してきたのである。國家の歴史はこの悠久な社會の歴史に比べると物の數にもならない程に短い記錄である。しかもこの短い記錄が今日の生活を支配してゐる。ヘエゲルが國家を道德的觀念の實在にまで高めたことは決してたゞ彼の思想的遊戲であるだけではない。國家と道德とは既に久しく同一物であつた。國家が道德の高きに上つたのではない。道德が國家の低きに墮したのである。それにもかゝはらずそは道德と國家との一致であつた。國家を離れて道德はなかつた。法律を離れて道德なるものはなかつた。われ／＼の世界では何世紀かの間道德とは神の命でもなく、カントの謂ふところのカテゴリツシエ・イムペラチイフでもなく、そは一

つの國家的命法であつた。國家制度が人間の社會に生れてからまだ甚だ短い。しかもその短い間に國家の魔力は奇蹟にも近いほどに征服の凱歌を揚げた。社會が發見されたのではない。國家が發見されたのである。社會と國家とが區別されたのではない。國家の偉大の前に社會が沈沒したのである。現代は社會の發見された時代ではなくて社會の沈沒した時代である。へエゲル哲學は今は全くその光を失つた。それにもかゝわらずへエゲルの國家哲學が今日の國家的世界生活の中心原理であることには何の變りもないものである。今日の國家はたゞ政治生活の中心をなしてゐるばかりではない。道德生活においても、社會生活においても、若しくは經濟生活においても、舞台の中央には常に國家が立つてゐる。

資本主義は個人主義だと云はれてきた。現代文明は個人主義文明だと云はれてきた。天賦人權說が發見されて以來それは個人主義として說明されてきた。レエセイ・フエイルが唱へ出されてからそれは個人主義の代表語として知られてきた。しかも自然權說はピユウリタン革命においてのやうに生命、自由、財産の說であつた。ロックにとつては財産とは生命、自由、財産であつた。Life, liberty and estate ——それがロックの謂ふところの property であつた。この說がボルテエル、ルソウ ディデロウ等によつて佛蘭西に輸入されて革命の人權宣言となつたこゝに近代政治文明の紀念塔を見ることが出來るのである。これとともにチユルゴウによつて創造されたレエセイ・フエイルが英國に輸入されてアダム・スミスの「民富論」となつた。商業及び工業の獨立宣言であつたのである。人々はこの財産權、商業權、工業權の獨立宣言を目して個人主義だと名づけたのである。また從つてそれを自由主義だと名づけたのである。私たちはこゝに人類の歷史上に初めて經驗した巨大な解放運動の記錄をもつてゐるのである。

解放は自由と同意義に解せられてきた。解放運動は個人主義運動と解せられてきた。解放は自由を意味するであらうか、解放によつて個人は發見されるであらうか。解放とは何か。解放された人とは何か。Emancipation とは「Freigabe」である。解放された人とは Freigelassener である。それは放免である。放免された奴隷である。即ち自己解放ではなくて與へられた自由である。スチルナアの言葉でいへば解放された「犬」である一片の鎖を引づつてゐる犬—— ein Hund, der ein Stück Kette mitschleppt ——である。自由の衣をまとつてゐる不自由人である。獅子の皮につゝまれてゐる驢馬なのである。解放された猶太人は猶太人である。解放されてもされなくても猶太人

である。プロテスタントの國家がキャソリックを解放することは可能である。しかも解放されたキャソリックは依然としてキャソリックである。解放されてもされなくてもキャソリックなのである。アダム・スミスの民富論を讀むものは彼が自由市民自由商業を謳歌しながら、そこに「眞に自由」になつた人々を見出してゐるのを見逃すことはできないであらう。奴隷と自由人とはどの點において區別されるのか。彼に從へば人頭稅が奴隷の標象だとされることは誤謬である。租稅を支拂ふことは政府に服從することではあるが、しかもそは奴隷の標象ではなくて自由の標象である。奴隷には人頭稅がないからだと云ふのではない。そは彼自身が支拂者でないからである。自由人は何故に自由人であるか。彼は幾らかの財產をもつてゐる。彼自身主人の財產となることはできない。彼は自身に人頭稅の支拂者であるからである。つまり奴隷は主人との交涉において存在する自由人は國家との交涉において存在する。こゝにアダム・スミスの謂ふところの自由人が存在するのである。憐れなる自由人である。權力に直接從屬するが故に自由人である。獨立なるが故に自由ではなくて從屬するがゆえに自由である。從つてアダム・スミスにおいての自由とは政府に依存する自由である。政府によつて與へられた自由である。自己解放の自由ではなくて Geschenkte Freiheit である。一片の鎖を引づつてゐる犬——彼たちはこれを解放と名づけた。自由民と名づけた。個人主義と名づけた。若しくは革命と云ふた。革命はこの鎖を打ち切るために企てられたのではなくてそれを引づるためであつた。個人主義は鎖を個人の手から打ち切つたのではなくてそれを引ずることであつたのである。それが自由民なのである。

自由民は第三の地位だとされてきた。地位は階級ではない。Stand と Klasse との混同は今日の社會問題の論議におつての最も大きな誤謬の一つである。地位は政治的關係である。この點はカウツキイの最近著「プロレタリヤ革命と其綱領」のうちに明瞭に論ぜられてゐるところである。從つてある種の地位とある種の階級とは偶々一致することもある。また一致しないこともある。第三地位は屢々ブルヂョア階級と混同されてきたしかも第三地位は一つの政治的地位である　經濟的地位ではない。第三地位は內部的統一ある階級でなくて一つの Nichtstand である。一の門閥に對して一つの地位の形體をもつてする抗議なのである。ブルヂョア革命とはブルヂョア階級によつて行はれた革命でなくてこの一つの地位、dritte Stand によつて行はれた革命なのである。從つてそれは一階級の革命ではなくて一つの地位の革命である。一つの經濟的統一階級の革命

ではなくて一つの壓迫された地位が他の特權的地位に對して企てた政治的デモクラシイの運動であつたのである。こゝに第三地位が解放されたのである。それが自由民なのである。しかも第三地位であつて階級ではない。從つて內部的統一が存在しない。第三地位が解放された時に第三地位はそれの本來の性質であつた Nichtstand の性質を失つた。そこに階級的分裂が生れた。ブルヂョア階級とプロレタリヤ階級との鬪爭が始まつたのである。鬪爭は地位鬪爭から階級鬪爭に代つた。從つて政治的鬪爭から經濟的鬪爭に代つてきたのである。しかもブルヂョアもプロレタリヤもともに自由民である。自由民は都會民である土とともに生きてゐる人間ではなくて煉瓦とともに生きてゐる人間である。オスヷルト・シペングラアの「西洋の滅亡」の第一卷については既に私の感想を述べたことがある。その第二卷もまた私の近頃手にしたもののうちで最も感激的な書物である彼に從へば農民は永久人である。歷史人ではなくて永久人である，これに對して都會は精神である。大都市は「自由精神」である。それは前代の宗教を改革して新らしい他の一つの宗教をもつて置き換へた。ブルヂョア宗教がこれである。ブルヂョア宗教自由學問—— eine bürgerliche Religion, die freie Wissenschaft ——自由科學はブルヂョアの宗教である，都會宗教である。それは都會的經濟生活の半面である，都會は經濟歷史の支配者である。それは農民的な土地の原價値の觀念の代りに抽象的な金錢の觀念をもつて置き換へたのである。都市は精神を意味するばかりではなしに、金錢を意味する，都市は Geldplätze である。金錢の場所である。ブルヂョア階級とは精神の階級であるとともに、金錢の階級である。金錢の階級であるとともに自由精神の階級である。プロレタリヤ階級はこの精神生活、「自由精神」の產物である。自由科學の產物である。金錢の場所の產物である。ブルヂョア階級が優越階級として優越地位に登つた時にプロレタリヤ階級は第四地位に落とされたのである。こゝに「自由精神」の進化が存在するとともに金錢の支配の進化が存在する。金錢の獨裁政治—— Diktatur des Geldes ——がそれである。自由科學はその精神的武裝である。近代的デモクラシイとはその政治的武裝である。それは獨りプロレタリヤに對するブルヂョアの獨裁であるばかりではなしに土地の原價値觀念に對する抽象的貨幣價値の征服である。農民に對する都會民の獨裁である。シペングラア曰く、デモクラシイとは農民のうへに都會民の世界觀を要求する政治形體であると。こゝに私たちは近代的デモクラシイの本質を見ることができるのである。

だから解放とは自己解放ではなくて金錢の解放である。自由

民とは自由なる人民でなくて自由金錢の人民である。永久人ではなくて金錢人である。創造人でなくて經濟人である。こゝにドミニウムが復活したのである。ロオマを支配したドミニウムの觀念が近代文明の生活原理として復活したのである。レエセイ・フエエルの名のもとにロオマのドミニウムが現代に復活したのである。

レエセイ・フエエルは「眞に自由」ではない そはチユルゴウのもとでは商工業稅の免除である。アダム・スミスにおいては人頭稅を支拂ふことの自由である。レエセイ・フエエルが自由であるがゆえに近代の資本主義が發達したと解することは一般に信んぜられてゐる。こゝに社會問題における國家主義者の誤謬が存在する。繰返していへばレエセイ フエエルが自由であつたがためにドミニウムが近代に復活したのではない。それが不自由であつたがためにドミニウムが復活したのである。ドミニウムには常に一片の鎖が繋がつてゐる。ロオマにおいてそうであつたがごとく今日においてもそうである。ロオマ法では財產の權利は排他的で且つ無制限とされてゐた。主觀的の權利である。しかも私有財產は法律の仁惠である。法律によつてのみ保障が存在する。それが力である。力がなくては財產は存在しない。財產は力に屬する。故に窮局において國家に屬する。國家は何時にても個人の財產權を破ることができる。財產權は不可侵ではなくて可侵である。故に自由ではない。與へられた財產は與へられた自由である。Grade des R: hts である。自由なのはロオマ帝國であつて自由民ではない，不可侵なのは近代國家の權力であつて解放された犬ではない。地上の自由は常に權力者に屬する。被權力者には自由は存在しない。故に自由は解放者の所有である。被解放者は常に不自由である。解放されてもされなくても不自由である。スチルナア曰く、お前たちは自由を望むか？お前たち愚者よ！お前たちは權力を得よ、然らば自由は自らきたらん。—— Ihr sehnt Euch nach der Freiheit? Ihr Thoren! Nehmet Ihr die Grwalt, so käme die Freiheit von selbst. ——自由は力とともきたる。自由は與へられることはできない。與へられた自由は自由ではない。力は法律以上のところに立つてゐるからである。自由をえようとするものは力を破壞するか、力を獲得するか、一つの道を撰まねばならぬ。力を破壞すれば自由を妨げるものはない。力を獲得すれば地上の自由は自ら附着してくる。こゝにドミニウムの觀念はイムペリウムの觀念と切り離して考へることはできない。こゝにロオマにおいてのように現代においてもイムペリウムがドミニウムとともに支配する。

近代的デモクラシイが自由の標象だと云ふ證據は一つもない佛蘭西大革命は人間の不自由を高めた。人權宣言は自由民宣言である。中世紀は一般に專制政治の時代だとされてきた。しかも眞に自由を求める人々は常に中世紀において人間の寶を見ることができるであらう。この時代はイムペリウムの影を沒した時代である。中世の封建王侯はイムペリウムによつて支配したのではない。コンコルデイアの支配した時代である。イムペリウムに對するコンコルデイアである。ロオマのイムペリウムに對する中世紀のコンコルデイアである。そして中世紀のコンコルデイアに對してロオマのイムペリウムが再び近代に復活したのである。それはデユギイによつて最も明快に指摘されてゐる。それは政治史のいろはである。多くの政治學者はこの政治史のいろはをさへ握むではゐない。現代の政治に對する彼等の解決の根本的誤謬はこの點から生れてゐるのである。

現代の主權の觀念は人民主權の觀念でないとはいはない。主權は××××する。主權は不可分である。讓渡すべからざるものである。絕對的である。人權宣言はしかく宣言してゐるのである。佛蘭西人民は人權宣言によつて最高最大の主權の地位にと押しあげられたのである。しかもボサンケイの指摘してゐるとほり、人民主權は國家主權である。國家主權に反對して人民主權を云々することは小供らしい無意味である。人民の總意なるものが存在するかどうかはこゝに問題としなくてもいゝ。しかも國家の意思と區別して人民の總意なるものがありうるであらうか。國家意思でなくて人民の統一意思なるものがありうるであらうか。こゝに總意の說、人民主權の觀念は必然的に國家我の觀念、國家主權の觀念、從つて國家的絕對我の觀念とならざるをえないのである。

國家の目的が道德にあるかどうかを詮索すること位ひ愚ろかなことはない。權力者は常に道德家である、道德の名によつて權力が存在するが道德が權力を製造するのではない。權力が道德を製造するのである。道德のあるところに權力が存在するのではない。權力のあるところに道德が存在するのである。國家の目的は道德にあると云ふたイエリネツクは愚ろかな法學者である。國家は權力であると云ふたイエリネツクは賢明な法學者である。國家は權力である。昔のボオダンが云ふたことは今日の國家についても眞理である。デユギイは國家を主權から救はうと努力しつゝある。デユギイの努力が今日の法律學には大きな貢獻でないと私は云はうとしてゐるのではない。私の云はうとすることは何人が如何なる學說を立てようとも今日の國家が主權國家であることに微塵だも影響するものではないと云ふこ

とである。主權は排他的である。權力は排他的である。自ら亡ぶるか他を亡ぼすかである。他を亡ぼさなければ自ら生きることはできないのである　こゝにバクウニンの「共同墓地」が考へられるのである。そこには道德はありえない。あるものは道德ではなくて力である。力を道德と名づけてゐるのである。勿論その力は經濟的權力の上に根ざしてゐると云ふことがいへるであらう。人は儲けようとあせる。こゝに人々は貨幣を追ふて走る餓鬼である。人々は食はねばならぬ。こゝに人々はその生存を脅かされながら、意識的に若しくは無意識的に奴隸となつてゐる。モンテスキユウは專制政治の精神は恐怖の心だと云ふたことがある。今日の人々はその食物の脅かしの前に戰々恂々としてゐる。それが近代人である。シペングラアの永久人でなくて近代人である。こゝに食物の專制政治が存在する。そは土地の原價値の世界ではなくて貨幣の獨裁の世界である。今日の國家は貨幣國である。貨幣がうづ高く積み上げられて人々は奴隸に落ちる。埃及の專制王は奴隸の苦役によつてピラミッドを建てた。近代の世界は貨幣の山のもとに「自由民」と稱する奴隸の骨を埋めた。フエロウの鞭はロックフェラアの貨幣である。

自由民は再び賤民である。しかも私が既に述べたとほりドミニウマはイムペリウムとともにきたらねばならぬ。主觀的財產權は主觀的最高權とともにあらねばならぬ。貨幣はロックフェラアがもつてゐるために貨幣であるのではない。ロックフェラアが政治を買つてゐるからである。買はれた政治が貨幣を裏書きするからである。國家の背後にロックフェラアが立つてゐるごとくにロックフェラアの背後に國家が立つてゐる。イムペリウムの背後にドミニウムが立つてゐるごとくにドミニウムの背後にイムペリウムが立つてゐる。私たちはこゝに近代國家の巨獸とそのメキヤニズムとを見るのである。

多くの法學者が國家は一つの有機體だと云ふた。若しくは法人格だと云ふた。ギイルケ、イエリネック、グリイン、多くの「權威」ある法學者の名を擧げることは容易である。多くの「權威」ある法學者が國家を有機體に、若しくは人格にまで高めた。しかも如何なる「權威」ある法學者も國家を自然人に造りあげることはできない。そこで國家には機關がなければならない。機關によつてのみ國家の意思は表現することができる。機關が國家の意思だとした時に國家の意思である。機關は國家の意思を製造する。國家人格は啞者であつて機關は雄辯である。國家人格は無能であつて機關は萬能である。そこで機關の意思が國家の意思であるか、若しくは機關そのものの意思であるかを論んずる法學者が出てくるのは當然である。しかしこゝには

それが國家の意思であるか機關の意思であるかの問題は第二に置いていゝ。第一に分つてゐることはそれが國家の意思であると否とにかゝわらずまた機關の意思でもあると云ふことである

議會の速記錄を讀む。進行係岩崎勲が立つて「本案は可決確定されんことを望む」と云ふ。議長奥繁三郎が「異議はありましよまいか？」と諮る。異議はあつてもなくてもいゝ岩崎勲が異議なしと云へばそれで萬事を終つてゐる。「異議あり」と云ふ聲は神の聲ではない。「異議なし」と云ふ聲が國民の聲である。何故なら政友會は多數である。岩崎勲は個人的に何ものであつてもいゝ、彼が政友會員でありさへすればよい。彼の聲は政友會の聲である。故に議會の聲である。故に國家の意思である。かくして國家の意思は造られてゆく。政友會が決議する度に國家の意思が造られてゆく。政友會は國家の意思の製造者である。何故なら政友會は力であるからである。國家の意思は常に力とともにある。イエリネツクが國家は權力團體だと云ふたことは彼の創意ではないが眞理である。力のあるところに國家の意思がある。しかしその力はたゞの力であつてはならない。それはエネルギイでなくて Cratology である。磨きのかゝつた力である。國家の名によつての力である。エネルギイがクラトロギイとなり、クラトロギイが國家權力となる。こゝに力は積極から消極へと移るのである。建設から破壊へと變るのである。

人民主權は國家主權である。それが自由國と名づけられたものである。自由國とは自由民の國家である。故に人民の自由ではなくて人民に自由を許可するものの自由である。故に國家の自由である。國家の自由は專制である。人民の不自由である。人民の不自由において國家の自由が存在する。人民の不自由が大きければ大きいほど國家の自由は增大する。專制國と自由國との區別は專制と自由との區別ではない。ともに專制國であるともに權力である。それは權力の區別ではない。ホッブスのレバイアサンが云ふてゐるとほりそは權力の區別ではなく便宜の區別である。ゴドウヰンの「政治的正義」を讀むだものは彼が國民集會なるものについて峻烈な批評を加へてゐるのを見るであらう。彼にとつては共和國は人民の國家ではない。それもまた一つの Userpation の方法であるに過ぎないと。

今日は自由國の時代である。ブルヂュヨ時代は自由國の時代である。自由國の極政は民主的共和國である。民主的共和國は・ブルヂョア國家の極致であるとともにプロレタリヤの國家形體でもある。ラサルレの社會民主主義は、自由國の境を出でゝはゐない。エンゲルスがプロレタリヤ獨裁政治の形體は民主的共和國であるといふてゐる場合にマアクス主義の國家形體もまた

一つの自由國である。今日のごとく民主的共和國の榮えてゐる時代はない。政治的デモクラットは少しも悲觀することの必要はない。そは到るところに鬨の聲を揚げてゐるではないか。亞米利加においてのように歐羅巴でも民主的共和國の時代がきてゐるのである、

民主的共和國の時代は人間の解放が完全に行はれた時代である。今日は世界のブルヂョア國において人間の解放が完全に行はれつゝある。解放された人民は自由民である。自由民の足には一片の鎖が繫つてゐるとは既に述べた。解放の半面は組織である。それがデモクラシイと稱せられてきた。近代的デモクラシイとは解放民の國家である。解放民の國家は民族的統一國家である。デセントラリゼエションではなくてセントラリゼエションである。セントラリゼエションの中央に主權が立つてゐる。主權が中軸である。全體が主權の派生である。主權の組織である主權は何ものかの力である。社會は契約ではない。國家も契約ではない。社會は契約以前である。主權は不可分である。契約は可分である。契約は本來自由である。主權は本來不自由である。セントラリゼエションは契約ではなくて機械化である。コンコルデイアではなくてイムペリウムである。民主的共和國の時代は機械化とイムペリウムとの時代である。ナポレオンは近代的國家の建設にとつては大きな功勞者の一人である。彼は統一國家の理想を鼓舞した。彼は國民的軍隊を造つた。その時からまた一世紀を過ぎた。この一世紀の間に革命はなかつた。幾つかの革命的企圖がなかつたと云ふのではない。今日の世界がナポレオン主義を革命したものでないと云ふことである。あべこべにナポレオン主義は過去一世紀の間にいよ〱發達した。國家は統一國家となつた。セントラリゼエションは完全にまで近くなつてきた。機械化は幻妙の域にまで進んできた。ナポレオンの軍隊は今日の一國の炭坑に働く坑夫軍の數ほどにも足らない。英國の炭坑夫は彼等の仲間から今年の總選擧で四十九人の代議士をウエストミンスタアに送り出した。科學の力、機械の力、國家の力は、人類の自然鬪爭を終局にまで導いた。佛蘭西では數世紀の間狼やその他の野獸を征服するために特別の官廳をもつてゐた。マラテスタの「アナアキイ」を讀むとこの官廳は狼を根絕しようとはしなかつた。狼の根絕の代りに狼の保存に努力してゐた。何故なら狼が根絕されたら彼等はその瞬間に職業を失はねばならないからである。それにもかゝわらず人間の自然鬪爭は殆んど驅逐し盡した。森は開かれた。沼澤は埋められた。幾萬千の道路と鐵道とはそれを各方面に横切つてゐる。河は航海に適するようになり、港は碇泊に便となつた、近

河は海を結び付けた。都市は次第に發達した。人口は農村を去つて都會に集中した。石炭、電氣、空氣、水、金屬の鎖は人類を數千萬里の統一組織にと結合した。コムトの社會學を讀むだものは彼が思惟形體を社會組織に結合してゐるのを記憶してゐるであらう。神學的思惟方法は軍事的王國的社會組織において存在する。形而上學的思惟方法は絕對權の時代において存在する。そして實證主義は工業時代の思惟方法であると。現代は實に實證主義の時代だと云ふてもいゝであらう。それがブルヂョアの宗教であるブルヂョア學者が實證主義の全能を主張する。それは主知的世界解釋である。數學のアパラアトによつて萬有を解釋しようとする。地理學的社會學ができる人類學的社會學ができる。優生學ができる。心理的社會學ができる。美の問題も解剖台に載せられる。精神分析學が現はれる。人間は自由に若返ることができるとされる。人間はベルを押しさへすれば生活ができるようになりつゝある。學者の仕事はタイプライタアで參考書の名前と頁數とを列記することである。參考書の名前と頁數とがなるべく多く外國書であり、他人の讀まぬ書物でありそしてその數が多ければ多いほど人々はそれを大學者だと云ふ。大學者は無數に大學の研究室に腰掛けてゐる。學者の大論文は所謂通俗雜誌の卷頭を飾りつゝある。大學の講壇だけでなしに街頭の思想をも大學教授が獨占しつゝある。多くの讀者はなるべく鎖煩な、なるべく讀み惜い、なるべく讀まなくてすむ大論文を歡迎する。讀むためにではない。讀まないためにである。讀むべきものには生命が必要である。今日は一切の方面を通じて生命が萎縮しつゝある。生命が麻痺して參考書が死んでゐる。人間が死んで學者が並んでゐる。學者は人間ではない。知識である。參考書である。ボルガの飢民のように魂の喪失者が現代に滿ちてゐる。これが現代である。現代の中央に國家が交つてゐる。國家は最大の靈魂喪失者である。人間の靈魂喪失が完成に近づいて國家はいよ／＼偉大となつた。現代は國家の偉大な時代である。從つて個人の最も微弱な時代である。愚ろかな學者は國家人格と個人人格との並行主義を說いてゐる。國家人格が個人人格と並行するとしたら國家は權力者ではない。國家は契約の當事者である。命令者でなくてコンコルディヤの當事者である。組合ではなくて組合員である。即ち國家ではない。國家主義の自殺である。國家を救ふことを目的として國家を奈落の底に落とすものの愚ろかである。今日の國家は如何に愚ろかな學說のあるとないとにかゝわらず嚴として舞臺の中央に立つてゐる巨像である。われ／＼の生活はこの巨像に中心を置いてゐる。われ／＼は國家と離れては一日も生存すること

できない。一疋の美しい小鳥を手にして北京の郊外に遊んでそれを野に放つてとに人生の喜びを見出してゐる支那人にとつては彼等はその生れるより死ぬるまで國家を意識することを必要としないであらう。しかも文明人にとつてはその母體から生れ出でた瞬間から靈魂人ではなくて國家人である。彼は生れて二週間以内に役場に届出らねばならぬ。彼は種痘をしなくてはならぬ。彼は滿六歳になると小學校に行き、文部省で造られた道徳を暗記しなくてはならぬ。二宮尊德と乃木大將を讃美しなくてはならぬ。でなければ受持教員の地位が危ういのである。學校の成績は彼の世間的な地位に一つの有機的關係をもつてゐる。彼の運命は彼の世の中に出た瞬間に決定されてゐる。運命は開拓すべきではなく決定されるものである。成功と云ふことは彼の生活における的である。如何にして成功すべきかを教へることのできる人は出版界の編者となることができる。しかも成功は彼の努力の報酬でもない。才能の報酬でもない。勿論人格とは何のかゝわりもない。人格が卑くければ卑いほど成功の可能性は幾分か增加してゆくことは事實である。しかし何千萬人のうちの幾十か幾百かの例外をこゝに語つてゐるのではない。大多數はたゞ運命の翻弄である。機械的作用は人間の意思を決定する。人間の行動と地位と力とを決定する。神聖なのは神のザアへである。人間のザアへは人間のものである。自分のザアへはたゞ自分のもの—— Meinige ——であるといふたのはスチルナアであつた彼はこの點から彼の有名な Der Einzige を出發させてゐるのである。しかも現代において「私のもの」が存在するか。存在するは神のものである。「人間」のものである。神も「人間」も各々彼自身のほかの何ものにもかゝわつてゐない。その神と「人間」とが萬物をもつてゐる。「私のもの」はどこにもあまされてはゐない。「私のもの」と見えるものは神のものである。「人間」のものである。「人間」と神とは現代においては國家である。國家のほかに神のあつたのは中世紀である。現代においては國家のほかに神はない。國家のほかに「人間」はない。それが民主的共和國である。それが自由國である。人民主權である。人民國家である。人民國家はメキヤニズムの妙所に立つてゐる。自由國は權力國家である。人民主權は國家主權である。エンゲルスに從へば昔の如何なる族長と雖も今日の一警吏ほどの權力をもつてはゐなかつた。クロポトキンに從へば Volksstaat は如何なるオウトクラシイの形體よりも人間の自由にとつて危險なのである。

私たちは、今こうした世界の一住民として運命づけられてゐる。エゴイストは云ふ、—— Mir geht nicht über Mich! —

──私には私以上のものがない！　僞りのエゴイストである。私以上のものばかりである。私以上のものに苦しんでゐる。「私」が最高であるがゆえに現代の病があるのではない。あまりに多く「私」以上のものが充滿してゐるからである。普遍我が欠けてゐるからではない。普遍我の獨裁に惱むでゐるからである。

自由が再び私たちを呼びもとめてゐる。幾代も幾代も機械化の運命に飜弄されてきたイッヒが再生の惱みに苦しみつゝ私たちに呼びかけてゐる。こゝに明日が來らねばならぬ。

二

明日はきたりつゝある。明日の豫言者は市に滿ちてゐる。唯物論者とマアキスとは運命の萬能を信じながら、生産樣式の力を神にまで高めながら、尚豫言者の流行に入ることを忘れてはゐない。豫言多くして明日は混沌である。豫言がなくてではない豫言者が多くてゞある。人々はそれを革命時代だといふてゐる社會主義者だと云ふてゐる。マアクス主義者だと云ふてゐる。世界革命の時代だと云ふてゐる。ボルシエヴヰキは流行である革命の歌を歌はなくては時代後れである。ボルエヴヰキでなくては流行後れである。賢明の人、流行を好む人は一部は親鸞を讀むで既に飽いた。一部はレニン、ブハリン、ラデツクを讀むでまだ飽くことを知らない。ロマン・ロオランは駄目だ。彼はボルシエヴヰキとなりえたいからである！ゴルキイは反革命だ。彼はエス・エル黨を辯護したからである！大杉榮は一時は左翼黨であつたが今は反革命だ。ボルシエヴヰキを攻擊したからである。かくして運命の數奇な鐵はバアクマンを、ゴオルドマンをシヤピロを、パンカアストを、ゴルテルを、コロンタイを、ロシア革命」の著者としてのロオザ・ルクセンブルクを、革命家の列から反革命家の列にと組みかへた。反革命家の名簿は「變節漢」で一杯になつた。そして「革命家」が鬨の聲を揚げてゐるしかも社會主義者、共產主義者、マアキストに眞に革命家であるか。

三

マアクス主義は革命主義であるか。日本の有名なマアクス主義の一學者はマアクス主義を論じて、それは進化主義であり、また同時に革命主義であると云つた。進化主義と革命主義とはともに並び立つことができると彼はいふた。進化主義者としてのマアクスは新しい組織を産み落すべき母親である。革命家としてのマアクスは産みの惱みを輕くする産婆である。マアクスは産婆であつて母親である。マアクスは怪物である。マアクスは自ら彼等の一團を指して歐羅巴を徘徊する怪物だといふたこと

があつた。マアクスは正しく怪物である。怪物の正體は母であるか産婆であるか。若しくは外科醫であるか。若しくはそれ等の合成人であるか。

マアクス主義は將來のユトピヤを畫いてゐる。そのユトピヤは無政府の狀態である。その無政府はレバイヤサンの考へたやうに、デモクラシイの墮落した狀態であるのではない。デモクラシイの老衰して死に終つた狀態である。その狀態はマアキストの特有のユトピヤではない。それはマアクス主義ではない。マアクス主義はそれへの過程のうちに存在する。社會民主主義若しくは無産者階級の獨裁政治がこれである。

社會民主主義は政治的であるとともに經濟的である。カウツキイはプロレタリー革命を政治的革命と經濟的革命とに分けてゐる。こゝにプロレタリヤ革命の特質がある。ブルヂョア革命は一階級の革命ではない。一つの地位によつての革命である。こゝにブルヂョア革命は必然的に政治革命である。これに對してプロレタリア革命は一つの地位の革命であるとともに一つの階級の革命である。從つて政治的革命であるとともに經濟的革命である。そしてそのプロレタリヤの地位はそれの經濟的關係から發生してゐるものであるからプロレタリヤ革命はその根本において經濟革命でなければならない。こゝにマアクス主義は共產主義を運び入れてくるのである。マアクス主義においての經濟革命とは集產主義への進化である。資本の私有から資本の國有または共有への進化である。その一つの進化を革命と名づけてゐるのである。しかもこの進化に、革命的の如何なる要素が存在するであらうか。私有資本が國有資本になつた時にそこに如何なる革命的要素が存在するであらうか。資本主義の發達、集積說、恐慌說、崩壞說、トラスト、カアテル、國有、共產黨宣言の十ケ條はわれわれが幾度となくマアクス主義の經濟學者によつて教へられてきたところである。しかもその豫言に何等かの革命的要素が存在するであらうか。少數の資本家が一人の國家人格となつた場合にそこに何等かの革命的變化が存在するであらうか。最近の「社會問題研究」のうちで日本の有名なマアクス主義者河上肇氏は共產黨宣言の十ケ條を仔細に列擧しながら、それ等のものが旣に各國で實行せられ、若しくは實行されつゝあると云ふ意味のことを述べた。各國とは何か。資本主義の各國である。マアクス、エンゲルスが社會主義革命の綱領として揭げたものが資本主義國家のブルヂョア政治家によつて旣に實行されてゐると云ふのである。それが革命であるかブルヂョア政治家はプロレタリヤ革命家であるか。ビスマアクロイド・デョオヂ、西園寺公望は社會革命家であるか。マアクス

主義に於ける經濟革命とは、彼等の謂ふところの資本集積說、恐慌說、崩壞說が眞理であるとしたら資本主義の發達の頂上である。マアクスが資本主義をもつて彼自らの墓を掘るものだと云ふたのはこの意味である。集產主義は資本主義の革命ではなくてそれの頂上である。それの自然的發達の頂上に立たうとしてゐるものである。だから進化ではある。革命ではない。進化の助長ではある。革命の支持ではない。資本主義の助長ではある社會革命の支持ではない。ピエイレ・ラムスの「無政府主義宣言」がマアクス主義を批評してロシヤに於いても獨逸に於いても墺國に於いても、マアクス主義は一つの資本主義の再建者—— Wiederbauer des Kapitalismus ——だと云ふてゐるのはこの意味である。集產主義者は革命家ではなくて資本主義者である。資本主義の再建者である。その延長である。現在の惱みの救濟者ではなくてその惱みの合理化である。自儘な資本主義のりに合理的資本主義の要求である。

私は既に資本主義のもとで生活が機械化したことの事實を述べた。しかもその機械化は尙ほ最後の舞台にまで進んではゐない。資本家はわれ〱の生活を機械化した。しかも資本家の自儘に一任したのでは機械化は完全にそれ自身の生命を生きることができない。何ものかゞ資本家にとつて代らねばならぬ。生活の合理化はもう一步を進めねばならぬ。理知は尙ほ最後の働きをあまされてゐる科學は宇宙の有限を證明することができるまでとなつた。實證主義は形而上主義を驅逐した。しかも尙ほ科學は經濟化しなくてはならぬ。科學は共產主義化しなくては滅亡するであらうとは英國の有否な科學者ソデイの喚聲である。機械化の機械化である。『ブルヂョアの宗敎』は、集產主義の宗敎である。ブハリンは「共產主義のアア、ベイ・ツエイ」を說いて科學のプロレタリヤ化を說いてゐる。科學の集產主義化である。ブルヂョア宗敎の合理的經濟的統一運動である。資本の集中はトラストでもカアテルでも充分ではない。集中は常に一つの中心を理想鄕とする。一つの中心は國家我である。生產において、消費において、資本において、それの合理化は一中心の要求である。國家我の要求である。即ち一つの國家的有機體の要求である。カウツキイはあらゆる意味においてマアクス主義の最も正直な正確な研究的な學者であることは今も昔も變るところはない。彼は集產主義の境地を一つの有機體だとなしてゐる。彼曰く—— Es ist ein Organismus höchist komplizietr Art, Aufs äusserste empfindlich, wie alle hochentwickelten Organismus. ——一つの有機體である。最も複雜した有機體である。非常に感受性の强い有機體である。スペンサ

アの社會のような有機體である。マアクス主義の新社會はスペンサアの舊社會である。人間の生活の統一の要求である。一つの我の要求である。幾つかの我の存在の代りに一つの統一的な普遍我を要求するのである。それが集産主義においての國家である。普遍我が國家によつて完全に表現される狀態を名づけて集産主義と云ふのである。

資本主義國家のもとでは、ドミニウムとイムペリウムとが並び存するとは、私の既に述べたところである。集産主義のもとでは、ドミニウムはイムペリウムに完全に一致する。即ち合體する。財産はなくなるのではなくて、國家の財産となる。われ〳〵が大海の水を吸みとる時に、その水は何人の財産でもないことを知るであらう。集産主義は、私有財産を大海の水にすることではない。大海を領海にする。私有財産を國家の財産にする。ドミニウムを直接に國家に接合する。こゝに經濟的權力が個々の分裂衝突の不經濟から離れて國家のもとに合理化する。即ち經濟的權力が政治的權力と合一する。資本家の手にあつた力が直接に役人の手に移る。亞米利加國家の背後に立つてゐたロックフエラアがその幕を切つて出てくる。ロックフエラアが國家となる。國家は最早や領土的國家ではない。經濟的國家である。經濟的權力が合理化して法律となる。國民の意思となる「人民主權」となる。經濟的權力が「最高最大の力となる。國家が最高の進化をとげる。最大の權力國家となる。スチルナアの言葉を借りていへば「共産主義は個人的財産を廢止することによつて一層に私を他への從屬、即ち一般または總體への從屬に逆轉させる」のである。Allgemeinheit Gesamtheit への從屬である。最も合理的な從屬である。從つて完全な從屬である中央集權はマアクス主義の神である。中央集權の神が支配して人間は空前に微小となる。最後の自由が失はれる。完全に奴隷と化する。アダム・スミスの世界では奴隷は人頭税を收めることはできない。自由民だけが人頭税を收めることができる。集産主義の世界では最早や自由民は存在しない。人頭税を收めるものはなくなる。國家が唯一者である。國家が人頭税を收める。凡ての國民に代つて人頭税を收める。ドミニウムとイムペリウムとが國家に集中して人々は完全な奴隷となる。奴隷國が自由の廢墟のうへに建てられる。奴隷國が近づきつゝある。ベロックが Servile State が近づきつゝあると云ふたのは決して誤つてはゐなかつた。

カウツキイは奴隷國の産婆役である。レニンはその外科醫である。メンシエヴヰキは奴隷國の産婆役であつてボルシエヴヰキはその外科醫である。産婆と外科醫とが爭つてゐる。奴隷國

の建設者であることの點においては同一である。

ゴトウヰンは Collective Wisdom の說を批評してそれはあらゆる欺瞞のうちで最も分り易い欺瞞だといふたことがある。メンシエヴヰキはその欺瞞のうへに奴隷國を建設しようとしつゝある。社會主義の名によつて總意の說を鍍金しようとしつゝある。人民主權の說に鍍金しようとしつゝある。社會有機體說を鍍金しようとしつゝある。しかもその有機體はスペンサアのいふような半無政府主義ではなくて主權國である。奴隷國である。

ボルシエヴヰキは國家を自由國から階級國家へと引落した點において、最も鮮やかな役割を演じた。しかもその階級國家とは政黨國家である。ロシヤにおける國家とは政黨である。共產黨である。階級國家は再び共產黨國家へと引落されねばならぬ共產黨だけが國家である。ボルシエヴヰキの國家とは共產黨だけの國家である。共產黨がブルヂョアに、プロレタリヤに、農民に、メンシエヴヰキに、エス・エルに、無政府主義者に君臨する主觀的權力中の主觀的權力である。奴隷國中の奴隷國である。一つのメキヤニズムの有機的作用だけではない。フエロウの鞭が再び支配する。ハアシッチがロオマ帝國を支配したように、若しくは今日の伊太利を支配しつゝあるように、赤衛軍の

フアシッチがロシヤを支配する。

われわれは自由國から奴隷國へと移りつゝある。奴隷國は自由國の完成である。自由國の最後高頂に奴隷國が立つ。今われわれはその時代にと移らうとしつゝある。

エンゲルスは嘗つて彼の究局の理想郷を名づけて「自由の王國」と云ふた。自由の王國はかくしてきたるであらうか。

アインスタイン教授の講演(續)

石原純

五　特別講演

十一月二十五日から六回に亙りて東京帝國大學に於て特別講演が開かれました。これは相對性理論を稍々專門的に講義されたもので、之を理解し得るだけの素養のある人々を限りて聽講をゆるされました。講演の內容はたとへ既に教授が著書などに公けにされたものに屬するとは云へ、これをその創始者自らの口から聽くことは、私たちの極めて稀に接し得る機會であつてその心理的効果に於て著しいものがあるに違ひないと思ひます。そればかりでなく講義の後に準備せられた質問論議の時間を利用することが出來たならば、そこには到底他に得られない價値ある機會をつくることも出來たでありませう。かやうな意味に於てこの特別講演は最も有益な企畫なのでありました。

講演は理學部物理學教室の中央講堂で毎日午後二時から一時間半繼續せられ、その後に凡そ一時間ばかり質問の時間が與へられました。そして二十六日の日曜を休んで十二月一日に終りました。私たちは毎日その聽講席に座りました。天井の高い急勾配のあの廣い階段教室に集まつた多くの人たちはどんな感激に充ちてその講義を聽き入つたことでしたらう。頭髮の白い老先生もそこに交つてゐられました。皮膚の異つた西洋人とそしてその夫人もゐました。それから若い學生たちの顏も見られました。それらの雜多な聽衆はめいめい〱の頭のなかに一人の偉大な物理學者の風丰を描きながらアインスタイン教授を待ち、そしてあの超俗的な藝術家らしい教授の口から流れ出る暢達な獨逸語を耳にし得たことでした。私たちは教授のその言葉のなかに開展されてゆく相對性理論を通じて、自然がいかに私たちの理解のなかに美しく入つて來るかと云ふ神秘さを感ぜずにはゐられないことでした　理論物理學の眞髓は實にこの相對性理論に於て具體的に私たちに示されるに充分であるからです。教授の親切な説明に聞き浸つて自分の周圍を忘れてゐると、私はど

どか昔の學生時代にかへつたやうな、しかももつと緊張した氣分になりました。教授の話されるのが獨逸語であることに氣づくと、またどこか獨逸の或る大學で講義を聞いてゐるやうな氣分も湧きました。そしてまたさう云ふ夢ごこちから放れて現在私たちの昔座つたことのあるこの大學の講堂でいろいろな人たちを交へてこの講義が行はれてゐることを思ひめぐらすと、それが滅多に出遇はない特別の機會であることを意識して一層の緊張さを覺えるのでした。それと同時に同じやうな隙間もない緊張さを充たしてゐながら、しかもこの教室に列んでゐる雜多な人たちのなかに、獨逸語の聞きにくさうな、若くは數式の解釋に苦しむやうなものもないではなからうと云ふやうなことが想像されて、教授の講義と私たちとの間に或る隔たりの挾まれてゐないでもないやうに感じもしました。けれどもそれらの障礙にも拘らず教授の言葉の響きを耳にし、その風丰態度を眼のまへに見てゐる私たちの心にはともかくも何等かの形で直接の交渉がつながれてゐる程に、この教室の空氣が落ちついてゐたことは事實です。ほんとうにそれは確かな事實でした。私はこのなかに得られた教授からの感化が將來何等かの意味に於て私たちのうちにあらはれるであらうことを期待し得ます。私はこの滿足をもつてこの六日の最も大いなる收穫として見たいと思ひます。

講義の內容は大體に於てアインスタイン教授が先年米國プリンストン大學に於て講ぜられ、近く「相對性理論に關する四講義」として獨逸で出版せられたものと同樣でした。第一日には先づ特殊相對性原理に於て時間を定義するために光速不變の法則に依らなければならないことを述べ、これは論理的に必然なのではなくて、一つの物理的假定であることを明らかにし、之に反し舊力學に於て絕對時間を假定せるガリレイ轉換は力學的法則を共變的になし得るも、もはや電磁現象には成り立たないことを說き、之がために私たちは光速不變の法則と特殊相對性原理とに基づくローレンツ轉換に赴かねばならないことを論ぜられました。之に次いでローレンツ轉換式の演繹、これによる物指と時計との變化、球面波の不變の特性、速度合成の法則などを述べられました。第二日には自然法則がローレンツ轉換に對して共變的でなければならないことを述べ、この轉換を滿足する兩座標系に於て法則の形式が一致すると云ふことが特殊相對性理論の本質であつて、これが可能的自然法則をあらはす方程式體系の許容條件でなければならないことを說かれましたこの關係がミンコフスキーによりて數學的に簡單な有效な方法をもつてあらはされたことは、丁度熱力學に於ける自然現象の

非可逆性がエントロピーの概念によりて簡單にされたのと等しいと云はれました。物理學的に測定し得る量は座標系に無關係なこと、また或る座標系に關しては之等の量は空間的並に時間的の何れかに屬すること、光速以上の速度は不可能なることの說明が之に續きました。次いで一般に物理的方程式はいかに建てられなくてはならないかと云ふ問題に入り、通常の物理學に於て之等が空間内の方向に無關係になるためにヴェクトル解析が用ひられる如く、四次元のミンコフスキー世界に於て不變なるためには一般にテンソル解析によりて云ひあらはされなければならないとなし、この解析法が說明されました。そして力のヴェクトル、張力のテンソルなどの例によりて之を具體的に明らかにし、更に進んでテンソルの轉換式、高階級のテンソル、その對稱性等に云ひ及ぼされ、またテンソルの加法、乘法、低降(Verjüngung)、特殊テンソルなどにつき詳細に說かれました。第三日は之に引續いてテンソルの微分法を說明し、流體力學方程式の例を引き　すべて之等のテンソル計算が空間の等向性に相當することを示されました。特殊相對性理論に於ては時間が空間座標と全く同等の役目をなし、依りてミンコフスキーの四次元世界を形作るのです。眞空に於けるマックスウェルの電磁方程式がかやうな四次元世界に於けるテンソルとして云ひあらはされること、電動力及びその仕事が四次元ヴェクトルとして簡單な形式を得ることが說明せられ、更に質點の運動を論じ、謂はゆる固有時を用ひて運動及びエネルギー式をあらはし次いで之等を一般のテンソル方程式によりて書きあらはされました。

かくて特殊相對性理論を終りて第四日から一般相對性理論が始まりました。即ち物理的方程式を任意の運動に對して共變的にすることが出來ないであらうかといふ問題です。之がために先づ廻轉系の例を取れば、そこではもはやユークリッド幾何學は成立しません。從つて直交座標をおくことは出來ないので、私たちは一般にガウス座標を取らなくてはなりません。之を一般の空間に於て考へますと、その性質は空間内の微小線分の長さが座標微分によりていかにあらはされるかに依りて決定されます。この場合の係數は謂はゆる基本テンソルと稱する第二階級のテンソルでありまして、その性質はリーマン幾何學によりて論ぜられたものです。私たちは任意の運動座標系に於ては之を用ひなければなりません。更に加速座標系の問題は惰性的質量と重力的質量との同等なる關係から重力の場の理論と連關します。そこで重力の場に於て適當たる加速度をもつた局所座標系を導き入れゝば、その上では充分短い時間内に重力の全くあら

はれないやうな狀態を經驗することが出來ます。卽ちこの局所座標系に於ては特殊相對性理論が成立しなければなりません。私たちは之から一般座標系に立ち戻ることによりて、重力の影響を理論的に計算し得る筈です。この場合に私たちの座標空間を決定する基本テンソルは物指と時計によるとばかりでなく、そこの重力の强さを定めるのであります。特殊相對性理論に於ける座標轉換は單に幾何學で謂はゆる垂直轉換なるものに制限せられてゐましたが、こゝでは一般の任意の座標轉換があらはれます。之に對して基本テンソルやその他の量がいかに變るかと云ふことは、すべてリーマン幾何學の論ずる處なのです。そしてその理論は更にリッチ及びレヴィ・チヴィタによりて大成されました。之にありてはテンソルのなかにその轉換性質により共變的、逆變的及び混交的の三種類を區別しなければなりません。敎授は之等のテンソルの加法、乘法、低降、微分等に就て說明せられ、更に萬有引力理論に於て最も重要なリーマンのテンソルについて詳しく述べられました。第五日は萬有引力の問題でした。力にはたらかれない物體の世界線は特殊相對性理論に於て直線で與へられますが、これを加速度をもつた座標系から見ると曲ります。併しこの線は尙ほその空間に於ける最短距離の線としてあらはされます。かやうな式が一般に惰性の法則に相當するものとすれば、それは同時に重力の場に於ける物體の運動の法則を與へると解することが出來ます。敎授はこの考へのもとに一般の力學方程式を導き、そしてこの物體の運動が直線の形をとるとき卽ち重力の場がなくなるときに如何なる量が消失する必要あるかを求めて、依りてこの量を重力の場の特性を決定するものとして見出されました。更にこの運動の式に相當するエネルギー・テンソルを求め、また舊とのポアッソン式に相當する重力の場の方程式を立て、その第一近似として實際にニウトンの引力の法則が結果することを示されました。又時計及び物指が重力の場に於て受ける影響を論じて、光線屈曲の事實に及び、次に惑星の運動を論じて近日點運動の事實を導かれました。

　一般相對性理論が法則の共變性を主張することの重大な意味を以上に於て明らかにせられた後に、第六日は宇宙論の問題に進まれました。舊物理學に於ては宇宙空間に無限の擴延をゆるしましたが、卽ち空間内に立方的格子體を無限に多く連續的に並列させられ得ることを假定しましたが、相對性理論に於ては空間内に剛體を並列する方法は重力の場の性質に依るのであつて、從つて幾何學の問題の空間の物理學的考察と相離すとは出來ないのです。それ故世界がどれ程大きいかと云ふことは一般

相對性理論の問題となりてあらはれるのです。尤もよほど以前から空間の曲率については論ぜられたこともありましたが、それは空間自身の獨自的問題であつて物理學には少しも關係をもたなかつたのです。之に反して私達の場合には空間の問題は重力の理論と結びつき、又之が加速座標系によりて置き換へられる處から、惰性と密接に關聯してゐます。ところが物體の惰性卽ち運動變化に對する抵抗は通常或る空間に對してのみ意味をもつとせられてゐます。ニウトンは之がために絶對空間なるものゝ存在を假定しましたが、それは物體の惰性と關聯する點に於て物理學的實在でなければなりませんでした。けれども之によりて絶對空間に實在性を與ふることは異常な困難をもたらすものです。教授はこの點に關して新らしい見方を私たちに示されました。相對性理論に於ける空間及び時間は之を決定する基本テンソルが物指及び時計を定めるものであり、また同時に重力の場を與へるものである點に於て全く實在性をもつものです。しかもこの重力の場は他の物體によりて起されると解しなければなりませんから、一つの物體の空間に對する惰性は之によりて他の物體に對する惰性に歸せられます。この意味に於て惰性は物體相互の間にあらはれる相對的性質に外なりません。そればかりでなく物體相互間の惰性は單に直接に物體間の距離によりて云ひあらはされるのでなく、却つて周圍の空間に於ける重力の場の近接的關係として與へられると云ふことは、近代物理學に於ける作用の近接性（Nahewirkung）の假定を滿足するものです。一般相對理論はかやうにして私たちの認識論的要求に最も適合するものと見なすことが出來るでせう。私たちは空間の近接的性質を云ひあらはすためにこの場合に新らしくエーテルなる概念を導き入れることが出來ます。特殊相對性理論でエーテルを抹殺した理由は之の物質性を否定しやうとしたからであつて、原子や電子が運動狀態をもつのに反し、エーテルの運動狀態を考へることの無意味であるのを主張したに過ぎません。それ故一般相對性理論でエーテルの概念を取り入れることは決して之と矛盾するのではなくて、エーテルに物質性を喚び戻すわけではなく、只之によりて實在的空間の性質を云ひあらはさうとするだけです。教授は之等の說明に次いで尙ほ宇宙空間の有限にして閉ぢられた形をもち得ることを述べられ、かやうな考へ方は神秘的なものでもなく、既にリーマン幾何學に於て與へられたものであるとして二次元のリーマン表面が球面に相當して測られたときそれが有限の擴がりをもつことを補通俗的に示された後、宇宙球空間も同様に類推せられることを述べられました　そして一般相對性理論では宇宙空間が全體としてかや

うな性質をもたねばならないと云ふ議論が之に續きました　私たちは天文學で無限の遠方に重力の場の存在しないこと、從つて基本テンソルが特殊相對性理論に於けると同じな常數であることを假定します。併しこの空間の限界條件はすべての可能的な座標轉換に對して不變ではありません。私たちは法則の共變性を要求しながらこの限界條件に或る特殊なもののみを選び出すことは不滿足を感じなければなりません。一方にこの問題は既に述べた物體の惰性の問題にも關します。惰性を物體相互間の性質と解すれば或る加速座標系に移つたときにあらはれる空間に對する抵抗をやはり他の物體の重力の場に歸せなければなりません。かやうな物體は即ち宇宙空間全體の性質を決定するものであつて、之等の關係がすべての座標轉換に對し常に共變的であるためには　空間の限界條件も等しく共變的でなければならないのです。之等の點から見て或る絕對の限界條件を取り除くことは必要になります。そしてそれが空間に閉ぢられた形を與へ限界を無くすことによりて最も自然に解決し得ることは興味多いものと謂はなければなりますまい。實際私たちは宇宙空間の到る處に物質を分布しその平均密度を零でない或る有限の値をもつと假定することによりてこの結果に到達することが出來ます。併しかやうな場合の空間幾何學を見出すことは只之までの重力理論だけでは解き得ないのでした。之がためには物質の内部にその各部の物理的力と相平衡する壓力を考へる外に物質の周圍の空間にも或る壓力の存在を假定しなければならないことを教授は指摘されました。そして之に相當する變更を尚有引力の方程式に導き入れることによりて始めて宇宙空間を有限のものとすることに成功されたのでした。かやうにして宇宙の空間並に時間はそのなかにある物質によりて定まり、物質と共に之が有限の大きさをもつことが結論されるのです。

以上は講演の極めて大畧の順序を述べたに過ぎません。私はこゝにそれ以上詳細に亘ることを避けなければなりませんでしたが、この前後六回の講義が相對性理論の深奥を聽者に示すに足りたことを信ずるものです。教授はひたすらに諄々として之を黑板の前に講ぜられました。いつも冬の短い日がこの講堂のなかに早く晩れて黑板の上に大きな電燈がともされてからも、時間を忘れて言葉を續けられました。私たちも教授の幾日もないこの講義が惜まれるやうにして、時間の經つのを感じないのが常でした。恐らくさう云ふしつくりとした空氣がこの講堂に充ちてゐたことは事實であつたでせう。

講義が濟んでからの質問の時間もかなりに延ばされました。勿論多くの人たちは外國語の不自由さから、自分ではなした、

たくさんの質問を悉く差し控へなければならない遺憾さをもつてゐたことでしたらう。けれども教授が或る二三の質問に對して極めて親切に多くの言葉を繰返されるのに感動せずにはゐられなかつたことと思ひます。教授はその講義並にそれらの質問への應答に於てどこまでも物理學者としての態度を保たれてゐたことが眼につきました。理論物理學と最も密接の關係ある數學的論理についても、數學それ自らは別の論究を待つべきものであつて、相對性理論の論じやうとする處は實在的自然現象にあるとせられてゐます。勿論實在は或る所與ではなくて構成せらるべきものであると教授は云はれます。ともかく自然をいかに理解すべきかと云ふことに教授の思考は向けられてゐるのです。そして謙虚にこの問題に沈潜することによつて偉大なる相對性理論が生れたのです。私たちは深く之を省みて、教授の仕事に感謝すべきであると思ひます。

十二月一日、それはこの私たちに取つて意味ぶかい講義の終る日でした。私たちすべての聽講者は一冊の署名帳にめい〱鷲ペンと墨汁とによりてローマ字で自署し、これを紀念として教授へ贈ることにしました。そこには長岡教授の草せられた感謝の辭と、講堂が黒板を後ろにして撮られた教授の寫眞と、大學構内の池畔で冬枯の木立を背景にして撮つた一同の寫眞とが添へられました。後に教授はこの贈りものに對してどんなによろこばれたことでしたらう。數おほい日本からの土産もののなかで之が最も意味のある思出のふかいものであるとして嬉しさに湛へられたことに、私たちも限りない親しさを感ぜずにはゐられませんでした。

六　各地方に於ける講演

アインスタイン教授は十一月十八日東京に着かれてから十二月一日までかなり忙がしい每日をそこに過ごされました。講演の外に各處の招待や學生からの歡迎會や見物などで每日のプログラムが充たされました。たくさんのさう云ふ申込みの應答に對して改造社が困り抜いた程でした。それでも教授は出來る限り多くの好意を承け容れるために諸處の學生の會合などに出て挨拶をされました。「私の若い友達よ」といふ言葉で喚びかけながら自分の歡迎を謝し、そして科學の仕事が國際關係を超越した世界の人間の共同的のものであることを歷史上の例について述べ、學生たちの之に對する將來の責任を注意して之を諭せられ、また自分への賞讃に對しては、科學者がその研究の結果に於て偶ま偉大なる業績をもち得ることは單なる僥倖に過ぎないとなし、隱れた多くの功績者のあることを指摘されました。

教授に接したすべての學生たちはこの偉大なる科學者の素朴な態度や暖かみをもつた言葉によりて、恐らく教授に對する敬愛の念を深めないものはなかつたでありませう。私はほんとうに斯やうな例を極めて稀に見ることが出來ると信じます。教授の性格氣質は私たち東洋人のこころにそれ程近い親しさを具へてゐたのです。たとへ教授の講演を理解し得ないものでも、その性格を通じて眞摯な〻科學への一路を望見し得たでもあらうことは、蓋し私たちの異常なる幸であつたことと思ひます。

教授は東京の講演を終へた翌日仙臺への旅途に上られ、十二月三日仙臺での講演をすませて歸路日光に二日の休養を經て六日東京へ戻られ、翌日すぐに再び關西地方への講演の旅に出立たれました。かくて十二月八日名古屋、十日京都、十一日大阪十三日神戸、で講演を重ねられ、奈良　宮島の觀光を中途において二十四日最後に福岡で講演せられました　私はその間名古屋以下の各講演地に從ひましたが、何處でも盛んな歡迎がありそして聽衆の極めて眞摯であつたことに教授と共によろこびをもちました。

各地に於ける講演の内容は東京に於ける最初二回のものと殆ど同様でありました。只時間の都合や土地の状況に應じて多少の取捨を試みられただけですから、こゝに一々繰返す必要はないと思ひます。併し私は尚二三の注意すべき點を附け加へておきませう。

名古屋での講演は簡潔に要處のみを述べられたので最も判り易いものであつたと私は思ひます。京都では根本的の問題に稍々多くの言葉を費されました。「運動の概念が相對的であることは既に希臘時代に知られてゐたことであるが、この概念的の立場に於ける相對性と、運動の物理的原因に立ち入りて力學的に之を主張することの間には差別がある」ことを明らかに述べられ、そして「お互に一様な速さで動く惰性系が單に概念的に同等であるばかりでなく、物理學的法則の記載に關して等價であると云ふ一つの物理學的主張が特殊相對性原理である」ことを特に強調されました。これは相對性理論に取りて極めて大切な基礎であると思ひます。即ち「自然現象に關して特殊相對性原理が成り立つかどうかは決して思惟的にアプリオリの根據が存在するのではなく、それは純粹に經驗的の事實であり。物理學上の精密な觀測によりてのみ判斷　らるべきものである」ことを繰返して説明されました。また特殊相對性原理と光速不變の法則との外見上の矛盾は、幾何學並に時間を物理學と無關係に見なしてゐたために起るのであつて、例へば空間内に剛體を並置する法則としての幾何學は決して物理學と獨立なものでは

なく、從つて亦ユークリッド幾何學は唯一の思考し得る空間的關係を云ひあらはすのではなく多くの可能なもののうちの一つに過ぎないことを云はれました。之と同樣に時間並に同時刻を決定するには物理學的の定義を得たければならないのです。そして之を光の法則によりて二つの互に動く惰性系について同等に定義するならば、時間並に同時刻の概念は全く相對的になります。また靜止せる棒の長さは之に沿うて單に物指をおき並べることによりて測られるに反し　運動せる棒の長さを測るには或る觀測者から見て同時的に之が瞬時寫眞を撮り、その上で兩端の距離を測らなければなりません。この二つの場合の長さは前者は時間に無關係であるが、後者は同時刻の概念に關係します。それ故兩者が同じ結果を與へるかどうかは決してアプリオリーにはその判斷の理由をもたないのです。教授は之から前の如くローレンツ轉換の說明に入られました。また一般相對性理論に於て相等假說及びその應用を述べられた後に、往々陷り易い誤解をこの機會に於て指摘したいとして次の事がらを述べられました。

「物體の周圍の空間には常に重力の場が存在しますから、そこに惰性系は考へられないやうに思はれますが、併し私たちが空間の一點で或る適當な加速度をもつ座標系に移ればそこにはいつも重力を取り去ることが出來ます、そしてその上では惰性の法則がその儘成り立つことが經驗せられます。例へば地面上の空間で自由に落ちれば全く重さを感じないやうなのは之に相當します　けれどもこのことはその考察せられた點の周圍の無限小の範圍に限られるものであつて、空間全體には擴げられません。卽ち私たちはどんな加速度ある座標系に移らうとも、その空間内のすべての場處の重力を消失せしめることは出來ません。何故なれば重力の場は實在的の物體によりて生ずるものであつて、單に幾何學的構造によるものではありませんから、單なる座標轉換によりて之を消失させることは出來ないのです。」

教授はこの誤解を警戒した後に、併しこの相等假說によりてそして他の物理的假定を附加することなしに萬有引力理論の導かれることを示されました。ニウトンの引力理論は空間の或る構造を假定することに相當しなければならないのに反して、相等假說は單一の且つ最少の假說によりてより以上の精密な引力理論を供給するのは、之の著しい特徵であるとせられました。

大阪では寧ろ通俗的な云ひあらはし方を多く用ひられたのが眼立ちました。

「この部屋のなかで光が進んでゆくのを私たちは測りて一秒間三十萬キロメートルと云ふ速さを得ます。物理學では通常こ

の大さをｃと云ふ符號であらはします。」……「今一つの鳥が光と同じ方向に飛んでゆくとしたなら、この鳥から見て光の速さはどうなるでせう。若しこの鳥が光と同じ速さで飛んだなら光は鳥に對して少しも先へは進みません。ともかくかやうな鳥から見れば光の速さはｃではなくて之より小さくなるに定まつてゐます。若しまた光が前方に送られ之に反して鳥が後方に飛んだなら、鳥に對する光の速さはより大きくなるでせう。この例から見て鳥には光速不變と云ふことの成り立たないのは明らかです。」「部屋から見た光の進み方と鳥から見たのとはちがひます　之は特殊相對性原理への矛盾でなければなりません。」「併しこの矛盾はなぜ起つたでせうか　それは光が一秒間に幾ら進んだと云ひあらはしますが、この一秒と云ふ時間を一度は部屋から云ひ、もう一度は鳥から云うてゐます。そしてこの兩者の一秒を最初から同じと假定してゐますが、併し論理的に時間の絶對をどうして主張することが出來るでせう。」

「二つの電燈がそれぞれこの部屋の左右兩壁にあつたとき之が同時に點火したと判斷します。けれどもこゝに充分長い汽車があつて部屋の兩壁を貫いて映つたとしたなら、汽車に乘つてゐる人は前の電燈の發光をやはり同時と見るでせうか。」「私たちは双方から見ての同時刻を光速不變の法則から定義しなくてはなりません。」「然うすれば一秒は部屋に對してと鳥に對してとは異ふことになります。

こんな言葉で判り易く特殊相對性理論が話されました。

「ガリレイの法則は一つの弱點をもつてゐます。他から力を受けない物體は一直線に一様な速さの運動をつゞけると主張しますが、然らば力のはたらかないと云ふことは何によりて知られるかと云ひますと、それは加速度を起さないこと、即ち一直線に一様に動くと云ふことによりて定めるより外ありません。之は循環的な論理であつて、それだけでは私たちに何も教へないことになります。これをどうにかしなければならないと云ふことは認識論的に力學へ向けて發せられる要求です。私たちはこの外に尚ほ物理學的の要求を之に附加することが出來ます。それは重さのある物體が空氣の抵抗を見逃せば鐵の球でも鉛の球でもすべて同じ加速度で落ちると云ふ大切な事實を力學が少しも説明し得ないといふことです。」

かやうにして一般相對性理論の問題が説かれました。

「この部屋を地面から離してどこまでも遠い處へもつて行つたと云ふことを想像してごらんなさい。これは即ち私たちの一つの思考實驗です。さうすると地球の重力はだん／＼消え失せて、しまひにはこの部屋のなかの物體が重さをもたなくなるで

せう。つまり物體を部屋のなかの空間に放しておけば、その儘そこに浮んでゐて少しも落ちて來なくなるでせうし、又若しこの物體を衝き動かすとすればそれは一樣な速さで一直線に動き出します。これがガリレイの惰性の法則です。ところでこの部屋の屋根のうへに綱をつけて一樣な加速度で引つ張つたとしたなら、それでも部屋のなかに同じ自然法則が成り立つでせうか」かう云ふ具體的の例は難かしい事がらの理解をよほど援けるにちがひありませんでした。

神戸のはこの大阪に於けるのと殆ど同樣でした　福岡では再び稍と抽象的に話されました。運動の概念的相對性即ち哲學上の意味のものと、物理學的のそれと異なることを注意して左の一歩を附け足されました。

「哲學的に見て運動はどこまでも相對的であつても、物理的には或る絶對性が考へ得られます。舊物理學では實際それがゆるされたのでした。即ち光學に於て私たちは全空間を充すエーテルなる媒質を假定し、之に對する運動を認識し得るとしました　かやうな運動は物理學的に絶對と見なされるのであつて、またエーテルに靜止せるものを絶對靜止として云ひあらはすことが出來ます。エーテルそのもの並に之に對する運動が物理學的に認識し得られないやうな場合に始めてこの絶對運動や絶對靜止が意味を失ふのです。」

ところどころでの云ひあらはし方や引例などは斯やうに多少の相異がありましたけれど、ともかく相對性理論を極めて通俗的に、しかも徹底的に講ぜられたことは私たちの等しく教授に感謝すべき處です。以上の各地以外の諸處からも非常な熱心さをもつて講演を希望されたのがかなりありましたが、教授の滯在日數が限られ、且つ豫定のプログラムどほりを實行せねばならない事情のため、之を實現し得なかつたことは多少の遺憾がないでもありません。けれども一方に於てかやうな通俗講演をもつて餘りに多く教授を煩はすことは　その尊い研究上の仕事を妨ぐる點に於て、また教授自身の必ずしも好まれない處である點に於て、充分に遠慮すべき筈であつて、既に以上の通俗講演を日本に於て重ねられたと云ふだけのことに私たちは異常なる滿足と感謝とを捧げなければならないと思ひます。

教授は私たちの誠意に對してまたいつも心からの誠意を應酬されました。感激に觸れては私たちの希望を超えて敢ておほくも　らなされました。東京の學生の歡迎をよろこんで自動車のなかから群る學生たちに握手を交はされたことや、講堂に入りきらないで外庭に待つてゐた學生たちに、出口からもう一度挨拶の主旨を繰り返されたことや、名古屋を立つとき停車場のプ

ラット・ホームに見送りのため、しかも靜肅に整列してゐたたくさんの學生に感動せられて、汽車の窓から別れの挨拶を述べられたことや、京都の學生歡迎會に極めて有益な興味ある一場の演說をなされたことなど、私たちはどんなに美しい快さを經驗したことでしたらう。

私はいま最後に述べた京都での演說についてもう少しこゝに云はなければならないのを感じます。それは十二月十四日でした。その前日もその日の朝も薄雪が屋根屋根に見えた寒い日でした。私たちは教授に從つて正午に大學へ行つて午餐會に列なりました、それが終へて僅かの休憩の間を京都の教授たちがそれぞれアインスタイン教授と話されてゐました。やがて學生の歡迎會の時刻が來て教授が席を立たれやうとしたとき、私は西田教授からの申出を傳へたのでした。西田教授は旣に私の書いたやうにアインスタイン教授の招聘の動機を最初に改造社の山本氏に與へられた人です。そして若し今日何か話して頂くことを願ひ出ることが出來るとしたなら、アインスタイン教授がいかにして相對性理論をつくり上げられたかと云ふ經歷を聞きたいものであつて、それが一般學生並に自分等に取りてどんなに有益であるか知れないと云ふことを熱心に申し出されたのです。

アインスタイン教授は恐らくはこの西田教授への好感をもつてゐられたことでせう。そのときすぐにもう歩を移しながら答へられました。

「それは簡單ではない。けれど若し自分にそれを話してくれと云ふことなら、さうしませう。何を話すも同じですから。」

私たちに取りては併しそれは異常な有難さでありました。相對性理論の內容は恐らくは他のたくさんの書物を繙くことによりても之を知ることは出來ます、けれどもこの理論の創始者が自らいかやうな考慮や苦心を經て之に到達したかと云ふことを私たちは他に求めることは出來ません。ましてそれを教授自らの口から聞くことの出來るよろこびは外には決してないことです。教授はかやうにして別項（如何にして私は相對性理論を創つたか）のやうな話を學生のまへになされたのでした　私たちは歷史上稀に見る一つの偉大なる物理學理論がいかに深い思慮と考察とのもとに、またいかに美くしい友情のもとに生れ出たかをこゝに審かに知ることが出來ます、異常な天才と努力とを以つてしやうとも、限りない自然の事象は必ずしも一人の頭腦によりて解し盡されるものではありません。お互の私心のない親切さをもつてこの人間の大きな仕事に共力することはどんなに必要であり、また快いことでありませう　私は小さな世の人たちが自分の僅かな所見を誇り、若くは強いてこの偉大な事實に

反抗する間に、謙虚に自からの價值を說いて、尙ほ我々として人々と研究を共にしやうとなされる教授の心を高く仰ぎ視ないではゐられません。

七　講演後記

「世界ぢゆうのいろいろな有樣を見るのは自分にとりてほんとうに望ましいことです。自分は夢のなかに見るやうな日本を知りたいためにこの旅行に出かけて來ました。實際私には日本ほど特殊な興味を感ずる處はありません」と教授はいつも私たちに云はれました。「科學と藝術とはそれ程異つてゐるけれども、それでも兩者は之等が湧き出る同じ精神力によりて相關聯してゐる」と教授は筆をとつて書かれたこともありました。「科學は一つの宗教である」と云ふ言葉も書かれました。教授は藝術をも人間の永遠の尊い仕事として科學と共に愛好されてゐます。また科學の對象としての自然の外に、藝術の對照としての自然を觀やうとせられます。そしてこの意味で遠く隔つた日本の山河や田園や風俗や、また全く歐洲の藝術傳統の外に育つた日本の固有藝術を非常に興味ふかく見られたのでした。講演の暇々にさう云ふものに接することがどんなに教授をよろこばせたことでしたらう。

柔らかな空らしい自然のなかに小さな木造の家を建てゝ簡單に住んでゐる穏かな心の人たちとしてこの國の生活を印象されたのでした。歐洲のやうな生存競爭の激しい深刻さのないことがすべての人たちの感情をどんなにゆるやかに伸び〱とさせ美くしい家族的親愛さを湛へさせてゐるのであらうと、これを羨まれました。もとより近代の生活がそれを漸次薄らがせてゆくことを見られはしたでせうが、それでも歐洲に全く欠けてゐるたくさんの美點をこゝに見出してさう云ふ有樣が現實に存在してゐるのを眼にしたことをよろこばれました。靜かな教授の性格には、日本の人たちが遠慮ぶかいつゝましさを具へてゐることがかなりの快さを導き出すに足りてゐました。何といふはにかましい可憐な心のもち主であらうと日本の女性を見られもしました。

日本のいろいろな藝術がこのなかに自然に育つてゐることを教授は觀取されたにちがひありません。能樂のしつとりと落ち着いた綏かさのなかに、象徴的な複雜さを含んだ緊張しきつた動作のあるのに教授は寧ろ驚異の情をもつて對されました。空想的な哲學的なこゝろに浸されて教授はいつまでもそのまへに座らうとせられました　また一方に原始的な鋭角的な要素を殘してゐる古代の雅樂に異常な興味を感ぜられました。東洋的の

古畫に接しては陰影をもたない判きりした輪廓線の鋭さをいつも眼につけられました。また寫實や投射法を無視した構圖に對してもそのおのづからな感情に導かれてそれらが少しも觀照を妨げないことを注意されました、神社佛閣に於ける彫刻や建築にも少なからぬ興味を刺戟されたことでした。併し私は京都の仙洞御所のなかで清涼殿の前庭をかこんだ一帶の趣きが最も深く教授の頭に殘されたことを想ひます。そこにはきれいな箒目を縱横にもつた白砂で埋まつた四角な廣い庭がありました。それを圍んで二方にはすつきりとした廊下の半ば白い腰障子が並んでゐました　西側は清涼殿の表で黃ろい簾が紅の紐で結んで黑瓦の下に平行に懸つてゐるのが見られます。南側には紫宸殿の後側の板戸がありました。「何といふ瀟洒なこゝろよい建築であらう。私は未だ嘗てこんな氣もちの安らかなものを見たことはない」と教授はほんとうに驚きの表情に充ちてそこに佇まれました。砂を敷いた庭の一隅に一叢の僅ばかりの竹林か四角な圍ひをもつて立つてゐました。それから稍隔つて二三本の竹があつたきりで、外には靜寂のほか何ものもありません。昔は朝になるとこの竹林に小鳥が來て囀るので時刻を知つたさうだと云ふやうな說明をおもしろがつて聞かれました。もうずつと先方へゆかれた夫人を喚び戾してそんな話を繰返された程でした。明け放しな宮廷の寒さを身に覺えながら、昔は火の氣もおかれなかつたことや、宮廷内で三十七歲を超えるまでは冬足袋もゆるされずに素裸足でゐなければならなかつたことなどを聞かれて、ふしぎな夢もの語りのやうにも思はれました。かやうな場處を中心にしてなだらかな美しい山々で圍まれた京都の一帶は教授に最も深い感じを與へました。この地方での講演の間とそれをすませてから京都にかなり長く滯在せられたのもそのためです。

一般に人間とその藝術とが教授の最も知りたいとせられる處でした。そのために何でもないやうな襖模樣や金具などにも感興を惹かれました。之に反して床の間が檜の一枚板であるとか柱が柾目の杉であると云ふやうなことは教授に取つて何の價値もなかつたのです。名古屋城の金の鯱も教授には少しの注目すら與へませんでした。寧ろその形體の趣きや、城の屋根瓦が波のやうな感じをもつことをよろこばれました。そこに尊ぶべきものは材料の値高さではない。人間のこゝろのあらはれであると信ぜられてゐたからです。そして極めて平民的な教授は富豪の家に於て、古畫を見ることをさへ厭はれた程です。ありの儘の平俗な生活を知るために田舍みちを自分で步いて見たいとも云はれました。自動車の代りに電車へ乘ることをお好まれまし

た。須磨で親しく街を歩いて市の防火宣傳の雲の建札が辻に立つてゐるのを感動されたり、人形や菓子の並んでゐる店や、魚屋や市場のまへに立ち止まつてもの珍らしさに多くの時刻を移されたりしました。福岡で洋式旅館のないことを心配して改造社では門司の三井倶樂部を借りてそこに泊つて頂きましたら、福岡講演の翌日に再び九州大學の午餐會にそこへ行かなくてはならないのを好機として、教授はぜひとも一度は日本旅館へ泊つてみたいと申し出られ、自分ひとりで福岡に宿られ、蒲團の上に寢ね、味噌汁で朝食をとられた。そして「私ひとりで日本を旅行するならばどこでも斯う云ふ宿屋で泊りたい」と話されました。米食や日本料理は教授の口には餘りに不慣れであり、不適當であつたにも拘らず、習俗を知らうとする心から之を云はれたのだと私は思ひます。若し事情がゆるすならばもつと靜かにひとりでこのめづらしい國を觀察したいとは後までも抱かれた心もちでしたらう。どこか山登りをしてこの國の自然にも接したいとも云はれました。高野山へお連れしてはと云ふやうな話もありましたが、時日のなかつたことや、夫人にはそれが不可能であることなどからその儘に止みました。

教授はいつも接してゐた人たちに對して心おきない親しさを示されました。時に觸れて自分で戯談ばなしや警句を話して笑ひ興ぜられました。ホテルの食事に餘りに献立表から何かと選ばうとしてゐる人を見つけては「これは研究したつてわかないものの一つで籤を引くやうなものです。あんなにむだに頭をつかつては、お蔭であの人の食事はうま味を失ふでせう。自分はいつも妻に任せてゐる」と云はれ、私が同じものを注文すると「講演で我々ふたりはいつも組になるのだから食皿も同じにしてもいゝですね」と笑はれました。名古屋城内で襖の虎の繪を見て「經濟學者の顏のやうだ」と云はれたり、熱田神宮で手洗の淨水溜を見て「神聖の水は危險だ」と揶揄されたり、大阪で講演中途の休憩時間に忙がしく食事せれらて「もう少しいかゞですか」と山本氏の薦めるのに對し「歌ふ鳥にたくさんは食べません」と答へられたり、京都大學での午餐の折の話のなかで、「物理學者はきれいな方法で汚ないものを取り扱ひ、化學者は汚ないやりかたで純粹の物質を扱ふが、物理化學者はきたない方法できたないものを取り扱つてゐる」などと云はれたりしたのが、いま私の記憶に殘つてゐます。眞摯な一面にはさう云ふ明るい上品な笑ひが常にこもつてゐました。また機會があるとヴァイオリンを手にして私たちにもそれをよろこんで聞かされました。帝國ホテルの歡迎會席上でも之を奏されましたが、名古屋では醫科大學に新たに來られたミハエリス教授と共にホテ

ルの一室で合奏して午後の半日を樂まれました。夫人が「私の夫は物理學者にならないで音樂家になつても成功したにちがひない」と云はれ、「あれが餘りうま過ぎるので、自分はそれ以來樂器を手にするのを止めました」と云はれたりするやうに、教授はほんとうの藝術家の氣分に浸つていつも之を演奏されるのでした。

　教授は華美な歡迎會などは餘りによろこばれませんでした。靜かな休息の時間の方が遙かにいゝとさへ云はれました。アメリカ化された建築や喧ましい音樂なども最も好まれないものの一つでした。私がアメリカをまだ見ないと話しましたら、「あんな國にゆくものでは決してない。あそこはすべて金錢ばかりの一次元の世界です」などと答へられました。「只アメリカで採るべき處はデモクラチツシュな點だけである」とも云はれました。人情的に云つて瑞西や和蘭などは大層好まれるやうですが、獨逸はかなり嫌はれてゐました。教授を獨逸人として歡迎したり、また獨逸人仲間の會合が催されたときは、私たちを省りみて「また黒赤黄いろだ」と苦笑されました。教授は實際獨逸にゐることを餘りに快くは思つてゐられないやうです。「戰爭中でもさう自分たちには研究上の故障もなかつたけれど、往々食物の粗惡と心理上の不快に苦しめられたので、時々瑞西に歸つてゐた」と私に話されもしました。「自分の理論的研究に對する實驗をやつてもらはうと思つても、ベルリンの大學の實驗物理學教室と自分との間には、何の交渉をつけやうもない」と嘆ぜられたのを聞いて、私は教授の暗い心のかげに同情せずにはゐられませんでした。京都大學で偶ま木村教授の行つてゐられた實驗が教授の以前から考究せられてゐた問題に關聯してゐたのを見て、非常によろこばれたのも、かやうな事情からでした。「この結果を出したらぜひ私に報らせて下さい。それが私の知りたかつた最も重要なものですから」と幾たびそれを繰返されたか判りませんでした。

　教授はさう云ふ境遇のために心から戰爭を憎み、軍隊を嫌ひひたすらに平和と共助とを望んでゐられます。大きな塀をめぐらした兵營の傍を通つたり、神社の前庭に大砲や彈丸を陳つてあるのを見て、どんなに苦い氣もちをもたれたことでしたらう。政治や社會問題の具體的の意見を多く避けられた間にも、軍隊に對する問題が屢々私たちの耳に觸れました。

　物理學上の研究問題については最も熱心に私たちと論じ且つ教へられました。量子論は最も困難な問題であるが、ボールの理論は少しの疑もなく信ぜられると云はれました。電磁的質量と萬有引力との關係もいろいろ私から尋ねましたが、それはま

だ想像をゆるされない全く判らない問題であるとして、「神は想像をもつてではなく、理性をもつて仕事する」と云ふやうな言葉を引用されました。東京にゐられた頃、やはり私が以前から久しく考へてゐた電磁的エネルギー・テンソルの對稱性の問題について話しましたら、それに或る興味をもたれていろいろ考究せられ、汽車のなかや食事後の暇ある毎に始終之ついての意見を交換されました。私は教授のこの厚意に對して特別の感謝を捧げなければなりません。そして私たちは最後に數學的の計算に及びました。教授とお別れする際にはそれはまだ完成してはゐませんでしたが、私はいまその終極の結果を見とほし得ることを信じます。この解決がやがて出來あがつたなら私一個に取りてほんとに之れ以上の紀念はないことを感じます。

福岡の講演後に教授は數日を門司に送りて關門海峽の美くしい風光に心ゆくまで親しまれました。十二月二十九日教授夫妻を載せて去らうとする榛名丸は既にこの海峽のまんなかに碇泊してゐました。その日の朝、三井俱樂部の一室でクリスマス飾のある食卓を圍んで私たちは教授夫妻と最後に食事を共にしました。そして正午頃一つのランチを艤して本船にお送りしました。九州大學三宅、桑木兩教授も一諸に伴されてゐました。午後三時の出帆までは船のうへでお互に今までの名殘が惜まれました。歳晩の午後の曇り日が關門海峽にうすら寒い風を吹かせてゐるなかで、船室から甲板へと出ながら私たちは幾度別れの握手をかはしたことでしたらう。夫人の眼にはまづ涙が流れ落ちました。そのうちに教授ももう赤く眼を腫らせてゐられた。見送る人たちもみんな別れを惜しむ涙を誘ひ出されました。最後の握手をして私たちがランチへ降りてからは、教授夫妻は寒い甲板に立つて帽を振りハンケチを振られました。ランチが本船を半周して反對の側に來ると、船の上でも甲板を廻りてその側に出られました。そして手の動きは私たちのランチが遠く姿をかくすまで續きました。

私たちの敬愛するアインスタイン教授はかやうにしていま歸國の途に就かれました。ジヤワ、ペレスタイン、西班牙を經て獨逸に歸られる筈です。私たちが遠く教授を想うて懷しさに堪へない如く、恐らくは教授も日本の旅を思ひ出して多くの好感を保たれてゐることであらうと信じます。私はともかくも教授のなされた講演やその人格が私たちに與へた尠なからぬ賜ものに對してこゝに滿腔の感謝を云ひ表はさなければなりません。そして教授の將來の研究に等しく僥倖あらんことを希望して止みません。「敬愛する親しいアインスタイン教授よ。希はくは私たちさゝやかなるものに對しても、その懷かしい思出のなかの溫かいところを長く保つて教へ導いてください。」

この稿を終へるに際して私はもう一度、私たちに對してアインスタイン教授に面接する機會つくられた改造社の山本氏に同じを心もつ人たちに代りて謝意を述べたと思ひます。（完）

精神分析と群衆心理

米田庄太郎

（五）群集心理研究に於けるフロイド説の徹底的適用を試みたるマルチン氏の説及び其の一般評價的

群集心理の研究に於て、フロイド説の適用を試みんとせる人々は、既に少なくない様であるが、併し余の知る範域内に於ては、前節に指示せるマルチン氏ほど、徹底的に又詳しく之を試みたる人はないかと思ふ。それで此處には同氏の説の要旨を、前節に於て擧げし同氏の著「群集の動作」によりて、簡單に説述し、又夫れが群集心理研究の發達に、何物を貢献したかを指示したいと思ふ。

マルチン氏は先づ群集の概念を決定して、群集とは民衆或は集團、即ちあるがまゝの人々の何れの部類或は集合とも同じものでないが併し何れの集團或は團結に於ても、同時に人々に現はれ得る一定の心理的狀態であると述べて居る。同氏の考へる處では、人々が相共に現在し、且つ密接に接觸して居る處では直接に、又は一の編輯の媒介、一の黨派或は宗派新聞雜誌等によりて、一定の仕方にて相互に影響するときには間接に、人々が一緒に考へたら、或は行動する時に、時として現はれる特異な心理的狀態である。されぱマルチン氏の群集と云ふは、余輩の群集と稱するものよりは、或意味にては遙かに大なる範域を有するものである。余輩はさきに述べし如く、一定の場處に於て人々が一時的に相共に現在し、密接に接觸して居る場合に、其の間に一定の心理的狀態が現はれる時、かゝる心理的狀態にある人々の合體を、群集と云ふのである。然るにマルチン氏はかゝる心理的狀態其の物を、直ちに群集と稱し、而してかゝる心理的狀態が現はれる何處にも群集は存するものと考へるのである。併し余はさきに述べし如く、群集を精密なる科學的研究の

對象となさんとする場合には、之を此の如く散漫に見るのは穩當でないと考へるのである。群集心理狀態なるものは、余輩の云ふ意味の群集に於て現はれ、一の原本的心理狀態にして、夫れは余輩の云ふ意味の群集に於て、精密に科學的に研究される可きものである。而して群集以外の社會或は集團に於て、群集に於けると同樣な社會心理的狀態現はれる場合には、夫れは群集心理的心理狀態或は單に群集心理的狀態と稱せらる可きものであると思ふ。

マルチン氏は先づ群集の概念を、右に述べしが如くに決定し、夫より群集の本質を究明せんとして居るが、今同氏は同氏の云ふ意味の群集、即ち特定の事情の下で人々に同時に現はれる特異な心理狀態は、一の集團心ではないと論じて、ルボン氏を始め集團心の存在を主張する人々の見解に、大に反對して居る。今日社會學者の間に、集團心或は社會心の存在如何が、再び問題となりて、盛んに論されて居るから余も再び此の問題に就て愚見を發表したのであるが、(但し余はさきに「哲學研究」に於て、「集團心理現象の概念及び本質」と題する長論文を數回に亘りて發表し、其の中に集團意識に關して論述して居る)此處に之をなす餘白はないから、他の機會に讓ることとする。只此處に一言して置きたいのは、今日は一般に集團心或は社會心の存在を否定する人々が增しつゝある樣であるが、併し其等の人々の見解は、若し余のかねて唱へて居る意味の社會心(右にあげし「哲學研究」に於ける拙稿を見られたい)の存在をも、認めまいとするならば、夫れは確かに謬見であると思ふと云ふ、事である。

今マルチン氏は、氏が群集と稱する特定の心理狀態を、一の集團心と認めないとするならば、然らば之た如何なるものと見るのであるかと云ふに、氏はつまり群集とは、「一定の支配する或は統制する觀念が、直接の社會的圍境に於て、一時作用しなくなつたが故に可能となれる處の、抑壓されて居る衝動の解放である」と、解するのである。一般に或は正常的には人々の直接な社會的圍境に於ては、一定の統制的觀念が強く作用して居るが故に、一定の衝動は無意識の中に抑壓されて居るが、然るに特定の事情によりて、直接の社會的環境に一定の變化が生じ、其等の統制的觀念が一時作用しなくなると、其等の衝動は抑壓を脫して、或は解放されて、自由に發動してくるが、夫れが即ち群集の實相である。然らば右の如き直接の社會的圍境の變化は、如何にして生ずるかと云ふに、夫れはつまり「一定の禁止されたる事をなさんとする無意識的衝動が意識的な道德的承認を受くる情操として、同樣に假裝される人々が、相互に他を寬

恕する、或は相互に讓歩する結果」として生ずるものである。

然るに眞實な動機、即ち抑壓されたる無意識的な衝動が、右の如くに一般に假裝されると云ふことは、夢及び精神病の一の特質的現象にして、而して夫れは群集にありては、總ての人々の注意を抽象的及び普遍的觀念に固定することによりて起るものである。蓋し個人の注意が、自己の個人的觀念連合或は感情連合より轉じて、抽象的及び普遍的觀念に固定されると、其等の連合及び之れに伴なふ衝動は、無意識的に作用することが出來る樣になるからである。而して群集に於て、右の如くに總ての人々の注意が固定される抽象的觀念は是認されない主旨或は底意の象徴となり、偏執狂(パラノイア)の强迫觀念(オブセッションス)の如く、一の密接なる體系を作り、一全體として同一の方向に動かされる。即ち此等の觀念の强制的論理は、正常的には吾人をして、現實的なるものの限界内に、止まらしめる共等の社會的抑制を離れて、前進するのである。夫れよりして群集内に於て行動することと及び考へることは、一定の型に固定し、所謂儀式的となり、個人は多數の自働器が一緒に動く如く、一緒に動く、のである。

然るに今無意識的なるものは、社會的なるものによりて普通に抑壓される吾人の性質の部分から、主として成り立つものであるから、又夫れ故に此の抑壓力に對して、常に無意識的な或抵抗が存するから、要するに群集狀態は神經病の如く、逃避及び代償の一仕組(是れフロイド派の神經病の根本的概念であるである)であることゝなる。尙ほ又群集精神は、まさしく抑壓が最も大なる社會的形態に關して、即ち政治的、宗教的及び道德的事柄に於て、最とも普通に現はれることゝなるのである。

されば群集心は、「理性」を棄てた人々に於て、單に感情が過度に昂奮することを意味するだけのものでない。群集心は單に正常的心理狀態に於ける、感情の過度の昂奮より生ずるが如きものでない、夫れは或意味では精神病的な狀態にして、離魂病或は睡遊、强制的神經病、又偏執狂(パラノイア)とさへも、多くの要素を共有するものである。隨ふて吾人はフロイド派の神經病學精神病學の原理を、群集心理の研究に適用することになりて、始めて群集心理の眞相や意味を、明らかに理解することが出來るのである。

群集は其の存在に於て、一時的でも亦永續的でもあり得る。永續的群集は新聞雜誌の助けによりて、大なり小なりの度合に於て、殆んど各人の心理的習慣を決定するのである。個人は彼の社會的世界内に於て、恰かも大學の校庭に於ける人氣ある將人生の如くに取扱はれる。但し米國の大學に於ては、人氣ある

新入生は彼の入會に對して競爭する幾多の同胞會によりて、引張り凧となるのである。考へ得られるあらゆる「主義」及び「理想」主張する群集の群が、個人の周圍を徘徊して居て、絕へず彼等のプロパカンダを彼の耳に叫び込み、彼を嚇し又たらし、相互に押し合ひ、突き合ひ罵詈し、而して何人の眞の確信をも、表現するのではない處の論爭やヂレマに於て、彼等に味方すべく、總ての人々を否應なしに、强制せんとして居るのである

抑說余の知る範圍内に於て今日までの處で、群集心理の研究にフロイド說を、最と徹底的に適用したものと思はれる、マルチン氏の群集心理論の要旨は、以上述べしが如きものであるが、今余輩が之れに加へんとする批評は、先づ第一に群集の概念に關するものにして、同氏の群集の概念は先にも指摘して置いた如く、或意味ではあまりに大なるものである。併し又或意味ではあまりに小なるものである。夫れが余輩の云ふ群集意外のものにも跨つて居る點に於て、夫れはあまりに大きく、而して夫れが余輩の云ふ群集全體を含ます、主として余が情動群集と稱するものを意味するだけである點に於て、夫れはあまりに小さいのである。要するに同氏の群集と云ふは主として余の情動群集と稱するものの心理狀態を意味するだけである。併し又夫れと同樣な心理狀態が、情動群集と稱するもの以外の社會體に存在する場合にも、氏は之を群集と稱するのである。されば同氏の群集心理論は其の適用範域に於て、同氏が大に非難して居るに拘らず、ルボン氏の群集心理と大體上同樣なものにして、夫れは主として余の情動群集と稱するものの心理を究明するに止まるので、夫れを余の開明群集と稱するものは律動群集と稱するものや、又思慮群集或は共議群集と稱するものの全體に適用することは出來ないので、ルボン氏の群集心理論と同樣に、偏局なものであると云はねばならぬ。

次に注意す可きは、同氏は群集心理を根本的には、抑壓されたる願望或は衝動が解放されて、自由に發動すると云ふことによりて說明せんとすることである。而して此の點に於て、同氏の新しき貢獻が認められるのである。もつとも之れも同氏の創見とは云はれないので、既に之れに注目した人々がある。併し同氏ほど詳しく之を論述した人はまだない樣に思はれるのである。余も群集心理の研究に於ける、フロイド說の適用が齎らす最とも重要なる結果は、情動群集の心理狀態を、抑壓されたる衝動或は願望の解放によりて、說明することにあると信ずるのである。而して余は此の點を始めて最とも詳しく究明したものとして、マルチン氏の研究に大なる價値を認めんとするので

ある。併し夫れと同時に余は、假令只情動群集のみに於て見るも、夫れに於て高尚なる倫理的情操や藝術的情操の昂奮する場合、又夫れが獻身的な英雄的な行動をなす場合なぞは、之を只抑壓されたる衝動或は願望の解放のみによつて、說明することは出來まいと思はれる。高尚なる倫理的情操や藝術情操、又は獻身的英雄的動機は決して抑壓されて居るものでなく、却て之を養成し發動させる爲めに、教育其他のあらゆる方法が講ぜられて居るのである。しかも夫れは單獨なる個人の正常狀態に於ては、甚だ發動し難いものであるに拘らず、群集的個人にありては極端に走するまで發動し易いのである。されば群集心理の骨髓と直ちに、抑壓されたる衝動或は願望の解放と見ることは、其の見解に重要なる眞理が認められると同時に、夫れは決して完全なる見解、或は群集心理の骨髓の全體を、適當に闡明する見解とは云はれないと思ふ。

余は或種の情動群集は、確かに抑壓されたる衝動或は願望の解放を、其の骨髓となすものと思ふ。併し總ての情動群集はそうであるのでない。他の情動群集は日頃充分に體驗し或は實行せんと願望するもしかも正常的な個人的心理狀態に於ては、利害の顧慮や其の他の關係の顧慮によりて、到底充分に體驗し或は實行し得ない處の、高尚な、云はゞ超個人的感情や行動を群集の影響の下に於て充分に實現すると云ふことを、其の骨髓となすものであると思はれる、要するに夫れ夫れの時代に於て、時代を支配する諸種の觀念に反對する心理狀態或は行動を極端にまでも實現する群集がある、而して其等の群集の骨髓に確かに抑壓されたる衝動或は願望の解放自由發動であると認めらる可きである。マルチン氏の說はつまり此の種の群集の骨髓を、從來よりも一層深く闡明したものとして、大に重要視さるべきものである。併し其等の支配觀念の要求を、一般に正常的な個人的心理狀態が實現し得るよりも以上の度合に於て、或は極端に走するまでも實現する群集も亦存在する。而して此の種の群集の骨髓は、決して抑壓されたる衝動或は願望の解放、自由發動であると、認め得られないのみならず寧ろ其の正反對な事實、であると認められ可きである。此くてマルチン氏の說は、此の種の群集の心理を全く說明し得ないものであるのである。

然らば一切の情動群集を總觀して、其の一般的骨髓をなするものは何であるかと云へば、夫れはつまり人々が一定の場處に、一時的に密集する結果、個人の意識的人格が弱はり、又は消滅することであると云はねばならぬと思ふ。而して夫れよりして抑壓されたる衝動或は願望が、自由に發動してくることがあれば、又支配的觀念の要求が、超個人的に實現されてくるこ

とゝあるのである。それで群集心理の研究に於て、更に一歩進んだ問題は、人々が一定の場處に一時的に集すれば、如何にして又如何なる原因によつて、個人の意識的人格が弱はり、或は消滅するかと云ふ問題及び此の場合に如何なる條件によりて、時として抑壓されたる衝動或は願望が解放され、時としては支配的觀念の要求が、超個人的に實現されるかといふ問題である。然るにマルチン氏は個人の意識的人格の弱はること、或は消滅することには、全く注目して居ない、或は之を全く問題として居ない、それで同氏は直ちに如何なる條件の下で、抑壓されたる衝動或は願望が解放されるかを論究して居るのであるが、此の問題に就て同氏は如何に考へて居るかは、既にさきに述べし處によりて示して置いた。要するにマルチン氏はフロイド說を巧みに應用して興味深い說明を下して居る。而して夫れによりて、從來群集心理研究者のあまり注意して居なかつた或方面を、明らかにして居るのである。余は同氏の說明が巧妙なること、及び大に首肯する處あるを、確かに認める。併し夫れが果して全然眞實であるや否やは、吾人の更に熟考を要する問題である。

さきに述べし如く、マルチン氏に抑壓されたる衝動或は願望が解放される直接原因は、直接の社會的周境に於て、統制する觀念或は支配的觀念が、一時作用しなくなることであると認め、而して又其の原因は「一定の禁止されたる事をなさんとする無意識的衝動が意識的なる道德的承認を欠くる情緒として、同樣に假裝される人々が、相互に他を寬恕する或は相互に讓步する」ことであると論じて居る。是れは確かに群集的個人の心理の一方面を、深刻に剔抉せる見解である。併し此處に注意す可き更に深い一方面がある。文化の高まるにつれて、個人が無意識の中に押し込む處の「禁止されたる事をなさんとする無意識的衝動」即ち抑壓されたる衝動の數は大に增加するので、現代文化人の如きものの無意識中に押し込められて居る。抑壓されたる衝動の數は實に多大である可きである。併し其等の多數の衝動の何れのものも、常に同時に解放されんとするものでなく、一定の場合に於て特に解放されんことを要求するものは、一定の「禁止されたる事をなさんとする無意識的衝動」である。然らば一定の場合に於て、多數の無意識的衝動の中にて、特に一定のものが解放されんことを要求するのは、如何なる理由にあるか。マルチン氏は全く此の問題に注目して居ない樣であるが、余は此の問題は群集心理研究上特に重要視す可きものの一であると考へる。而して余は其の理由と云ふは、つまり個人に對して外部から與へられる一定の刺激即ち暗示であると考へるので

ある。一定の場合に、個人の無意識中に抑壓されて居る一定の衝動が、特に發動せんとするに至るは、つまり外部から與へられる一定の刺激或は暗示にあるのである。而して其の暗示を受け入れるものが、只己れ一人でなく、周圍の人々（空間的な意味でも亦心理的な意味でも）も之を受け入れて居ることを、各個人が相互に意識することによりて、此處に各個人が其の抑壓されたる衝動を自由に發動させんとする念が益々强まり來るのである。一定の刺激或は暗示と、之を一緒に受け入れて居ると云ふ相互的意識とが、即ちマルチル氏の云ふが如き狀態を生ずるのである。されば與へられたる刺激、及び其の刺激の受容の相互的意識を無視しては、マルチン氏の云ふが如き狀態の生ずる所以は、到底理解されるものでないのである。而して此の事はマルチン氏も「人々が相互に他を寛恕する或は相互に讓步する」と云ふ言葉の中に、既に暗に認めて居ると察せられるのである。更に同氏は「一定の禁ぜられたる事をなさんとする無意識的衝動」が、如何にして「意識的な道德的承認を受ける情操として、同樣に假裝される」かを說明するに當つて、夫れはつまり「群集に於ては現在する總ての人々の注意を、抽象的及び一般的觀念に固定することによりて起る」と云ふて居るが、其の人々の注意を固定する抽象的及び一致的觀念なるものは、如何に其等の人々に現はれるかと云へば、夫れはつまり外部から與へられる刺激或は暗示として現はれるので、而して其等の人々が相互に、他が其の抽象的及び一般的觀念に注意して居ることを意識することによりて、彼等の注意が一緒に固定されるのである。決して其の觀念が彼等に對して同時に、外部から與へられて居ないのに、彼等が各々獨立に自から同一の觀念に、同時に注意を固定するのではないのである。又抑壓されたる無意識的衝動の中の何れのものが、解放されて自由に發動してくるかは人々が注意を固定する抽象的及び一般的觀念の性質によりて決定されるので、決して其の觀念の如何に關せず、同時に總ての人々の心に、全く獨立に同樣な抑壓されたる衝動が、解放されてくるのではないのである。更にマルチン氏は群集内の個人は各々全く他とは獨立に、器械的に同樣に考へ、同樣に行動するので、群集的動作の一致は一定の統一的意識の作用によりて成立する統一ではなく、恰かも同一の多數の自働器が、同時に動くことによりて生ずる運轉の合致の如きものであると解して居るが、併し詳しく吟味すると、各群集人は相互に他の人々の感情や思想や行動に對して、甚だ鋭敏なる感覺を有し、一

互に他の態度を微妙に感受し、相互に他の感情、思想行動を意識して居るが爲めに、同時に同じ感情を感じ、同じ思想を抱き、同じ行動をするので、若し他が自分と異なれる感情を感じ、行動をなして居ることを意識する時は、彼等の一致は忽ち停止するか、惰性によりて多少持續したる後に、遂に停止するのである。要するに群集的感情、思想、行動等の一致は、特定の集團意識即ち心と心との特定の相互作用の結果として生ずる心的統一であるのである。

以上論述せる處によりて見ると、マルチン氏の群集心理論はフロイド説を應用して、從來群集心理學研究者のまだ注意せざりし方面即ち抑壓されたる無意識的衝動の解放及び自由發動の方面を闡明し、群集心理學研究の發達に一新貢獻をなして居るが、しかもフロイド心理學をあまりに偏狭なる個人心理學の意味に解して、心と心との相互作用及び與へられたる刺戟或は暗示の方面を殆んど看過し、又群集心理の根本的原因と思はれる、個人の意識的人格或は「檢閲者」の弱はること、又は消滅することに殆んど注意して居ないが爲めに、單に余が情動群集と稱するものだけに就て見るも、甚だ不滿足なる結果しか、齎らして居ないと思はれるのである。然るにフロイド自身が、最近の一著作に於て自から試みられたる群集心理論は、マルチン氏が試みたるとは異なれる方面に注目して居るので、吾人は大れによりて、群集心理及び其他の社會心理の研究に於けるフロイド説の應用は、決して單調なるものでなく、種々の方面に於て試み得され隨ふて又其の結果は、只之を一方面に就て試みる人々の研究によりて齎せられるよりは、一層豐富なるものであることが覺られるのである。

盲滅法論

——大杉氏に答ふ——

山川均

一

私は本誌の十一月號に、全國勞働組合聯合創立大會を傍聽した印象を記るし、この大會決裂の直接の導火線となつた合同主義と自由聯合主義とに就て、多少の批評を試みた。

この批評に對しては『社會的個人主義』を奉ぜられる大杉氏が『理想主義的現實主義』の勞働運動の立場から、翌十二月の本誌に於て駁論せられて居る。

大杉氏の社會的個人主義的批評と理想的現實主義的駁論に對しては、本誌の一月號でお答へをしたいと思ふたが、締切りに間に合はなかつた。彼れ是れするうちに事情は大分變つて來た創立大會決裂後三ヶ月を經過した今日となつては、有らゆる障害に打勝つてもう一度全國的總聯合の實現を試みようと云ふ新しい希望と機運とが、おのづから組合運動界に動き出すまでの形勢になつて來た。決裂から團結へ！。之が吾々の希望である。そして大杉氏の最も尊重せられる勞働階級の『氣分』がこれを指さして居るばかりでなく、勞働階級の常識は、明かに之を指し示して居る。此時、私の興味も亦た過去よりも未來にある。

斯ような形勢の下に、昨年の創立大會の出來事に關する議論を此の上蒸し返す事は、決して時機を得たことゝは思はれぬ。とは云ふものゝ日本に於ける理想主義的現實主義の勞働運動を代表し、殊に自由聯合主義の第一人者として當時の總聯合組織の運動にも參與せられた大杉氏の重要な批評に對して、苟めにも默殺に均しい態度を取ることは、私の忍び得ぬところである唯だ私が大杉氏の批評に答へるのは、寧ろ止むを得ざるに出づることであつて、決して『純理論』を弄ばんが爲めでないことも斷はつておく。

二

私に對する大杉氏の抗議の第一項は、私が大杉氏等の自由

合主義を『曲解』して居ると云ふことである。即ち私が、勝手に假想的の自由聯合主義を造り上げ、之に弓を引いて居るといふことである。序はつておくが、曲解の外にも誤解といふことがある。よし私が大杉氏等の自由聯合主義をわざ／＼曲解せぬまでも、理解力の足りない爲に、大杉氏等の理想的現實主義の勞働運動を誤解したといふことは、寧ろ有り勝のことであるそこで曲解であると誤解であるとを問はず、私が自由聯合主義の正體と信じてゐたところのものに對して、當の本人から、自分の正體はもつと違つて居ると云ふ抗議が出たのであるから、之は一も二もなく私の曲解乃至は誤解を陳謝して本人たる大杉氏の主張に從つて自由聯合主義を修正するの外はない。

そこで自由聯合主義者たる大杉氏自身が訂正せられたほん物の自由聯合主義とは第一には（一）私の曲解したように、『現在の組合』に執着するものではなくて現在の組合を整理して産業的に聯合しやうとするものである。第二には、（二）私の曲解し、たように、自由聯合とは『極めて緩やかな聯絡の機關を形造らうとする』ものではなくて『各組合の間を極めて密接な關係にした行動の一單位たらん事を欲してゐる』ものである。第三には、（三）自由聯合主義は、自由聯合を組織した各組合を各一個の人格とは認めるが『この各人格の絶對の自由や自治を主張しもしなければ、それを組合運動の至上の原則であり根本の精神であるとも主張しない』ものである。そこで要するに大杉氏の（四）『自由聯合と云ふのは、組合單獨の問題は自ら自由に解決しつゝ、各組合共通の問題は協力して解決しようと云ふのだ』といふ事に歸着する。

私の曲解に對して、大杉氏自身が斯く訂正を加へられた結果として、この修正された自由聯合主義は一體どんなものになつたらう。それは結局、反對側の主張する合同主義と大差の無いものになつたのである。私は合同主義の主張　既成組合の間に極く緩やかな聯絡の機關を形造ることを以て滿足しないで、鞏固な行動の一單位を造らうとする主張）か、更に大杉氏等の自由聯合主義といふ有力な援軍を得たことを喜ぶと同時に、私は之によつても合同主義の主張が、眞に勞働階級の現實の必要に根ざして居ると云ふ確信を強めることが出來る。

三

斯ように大杉氏によつて『純理の形で』示された自由聯合主義なるものは、畢竟、合同主義と大差の無いものである。之は只勞働階級の現實の必要が一つである以上は理想的現實主義を奉ずると現實的現實主義を奉ずるとを問はず、少くとも『純理の形で』だけでも、この現實の必要には背き得ぬことを物語つ

たものではあるまいか。

けれども此の『純理の形で』示された自由聯合主義を實際の上に反譯した場合には、殊に大杉氏の尊重せられる自由聯合『氣分』を以て之を實際に移した場合には、その結果は大杉氏の訂正せられたような自由聯合主義を實現するか、それとも私の曲解し誤解したような自由聯合主義を實現するかと云ふことは固より別問題である。

大杉氏によれば、自由聯合論は、合同主義と同じように、現在の組合を産業的に整理することを主張するものである。たゞ自由聯合主義は、この整理を合同によらないで自由聯合によつて實現しようとする。ところが現在日本の組合の實状を見ると例へば同じ鐵工または機械工の間にも、同じ地方に幾つもの組合がある。そして是等の同種類の組合は、勞働の場所――即ち工場――によつて分れて居るかと云ふと、必ずしもそうではない。又た鐵工乃至は機械工のうちの更に細かな職別で分れて居るかと云ふと、必ずしもそうでない。或る組合は、或る工場を本據として居るものもあり、又た或る組合は或る工場のみで組織せられて居るものもあるが、同一の産業又は職業に屬する多くの工場から、少しづゝの組合員を集めて成つた組合が少くない。之は組合の創草時代として止むを得ぬ成行きではあるが、組合の産業別の單位としても、職場別の單位としても、何づれから見ても不完全なものであるから、組合の單位として、決して執着すべきものでないことは無論である。大杉氏の自由聯合主義は、大杉氏の云はれて居る通り、斯ような組合の分れ方、即ち現在の組合の單位『飽くまでも執着するものではない』。即ち大杉氏の自由聯合主義は、是等の組合を産業的に整理する必要を認めて居るのである。ところが是等の組合を整理する方法はどうかと云ふと、大杉氏によれば、是等の組合單位の間に自由聯合を組織することである。即ち現在の組合單位を『飽くまでも』その儘に存しておいて、其間に自由聯合を形造るのである。斯ように大杉氏の自由聯合主義は、現在の不完全な組合單位に『飽くまでも執着するものではない』が、唯だ飽くまでも之を殘しておかうとするだけである！

勿論組合内の合同論者と雖も、あの時直ちに合同を斷行しようと云つた譯ではない。否な合同論者も過渡的方法としては、聯合を以て滿足したのである。唯だ彼等は、合同による完全な整理を究極の目標とする意味を、規約の上に現はそうと主張しただけである。ところが之は大杉氏の自由聯合主義に取つては、飽くまで許すべからざることであつた。大杉氏等に取つては、之は飽くまで、合同によつて整理してはならぬものであつた。

自由聯合か、然らされば決裂か！　大杉氏等に取つては、自由聯合といふ原則は、勞働階級の現實の必要以上に神聖なものであつたかのやうに思はれる。そして自由聯合の原則を『飽くまで』固執するといふことは、現在の組合單位の整理といふ問題に關係した範圍では、現在の組合單位に『飽くまでも』執着することを意味して居る。

斯ように『純理の形』では、現在の組合單位に『飽くまでも執着するものではない』ところの大杉氏の理想的現實主義は、これを現實的に現實な問題に移すと、却つて現在の組合單位に『飽くまでも執着する』こと丶なるのである。

そこで大杉氏によつて『純理の形で』示された誤解をも曲解をも交えぬ純眞な自由聯合主義――自由聯合主義の實體――自由聯合主義それ自體――が、如何に合同主義者の口吻と一致して居るかと云ふ事と、この純眞な自由聯合主義が現實に移されたもの――自由聯合主義の現象――が、私によつて曲解された謂ゆる自由聯合主義と如何によく一致して居るかと云ふ事とは全く別々の事だと云ふことを忘れてはならぬ。そこで私の落度は、大杉氏の自由聯合論を『現實主義的』にばかり見て、之を『理想主義的』に見なかつたといふ一事に歸着する。

□

大杉氏の自由聯合主義は、現在の組合單位を各々一つの人格と認めるが、その『絶對の自由や自治』を主張するものではない大杉氏の主張せられる自由と自治とは『絶對ではない、相對だ』とのことである。

昨年九月十日の準備委員會以來、問題の中心となつてゐたことは、大會から大會に至る間の執行機關たる理事の選出方法であつた。自由聯合論者の主張は、各組合から各々一名づ丶の理事を選出することであつた。然るに反對側（この時はまだ反對側の方では、合同主義といふ原則論で對峙してはゐなかつたと記憶する）では、それでは理事の人員が、現在既に六十名近くになり、尚增加する一方であるから、屢々會合することすら困難である。そこで理事は大會に於て十五名を選出すべしと主張した。之が創立大會に至るまで、問題の焦點となつてゐたのである。九月二十五日夜の懇談會には總同盟側の主張と機械聯合側の主張とを折衷した一種の妥協案が話題に上ぼつたが、自由聯合說を取る或る有力者は、個人の組合は各々一個の人格であるから、執行機關のうちにも、必ず直接に代表せらる可きものだと云ふ理論を以て、飽くまで妥協案に反對せられたと聞いて居

る。私が先きに、組合の『人格』に言なしたのは其爲めであつた。一體、常識から考へると、大會の決定を執行する爲めの理事會は、矢張り大會で選出するものが順當な方法らしく思はれる唯だ實際の運用上の便宜の爲めに、この順當の方法を用ひぬと言ふのなら聞こえて居る。ところが事實は反對である。全國に散在する五十名六十名の理事では、實際の運用に支障を來すことは明かである。或る有力な自由聯合論者は此點を質問されて結局、『手紙で意見を纏める』と答へられたといふ話がある。これほどの實際上の不便を忍んでまでも、言葉を換へて云へばそれだけ總聯合の活動力を犠牲にしてまでも、順當の選出方法以外の方法を固執しなければならぬ理由は何處にあつたらう。云ふまでもなく、自由聯合論者は各組合單位の『人格』の『自由と自治』とを、『絶對的』ではないまでも、『相對的』には極度に主張し、實際上の必要からではなくて、一個の理論として原則として之を要求してゐたのだからである。

よつぽど大杉氏の『純理論の形』では、決して『絶對的の自由と自治』ではない。純理論の上では絶對的なものはない。然しながら記憶しなければならぬ。既成組合單位の人格の自由と自治とを、この程度まで主張することは、大杉氏が總聯合に期待せられたこと——即ち『行動の一單位たらん事を欲してゐる』と云はれた其の期待を、實際上では、或ひは『絶對的』に不可能ならしめるといふことを記憶しなければならぬ。

五

大杉氏が『純理論の形』で示された自由聯合主義は、集中的の合同主義と同じやうに、有力な、『行動の一單位』を造ることを理想とするものでない。この理想主義的自由聯合主義の現實的方面は、果してどんなものだらう。

大杉氏によれば、日本の勞働階級には、自由聯合主義は『氣分』乃至は『腹の蟲』といふ幼蟲の形で存するばかりであつて、幸ひにして大杉氏の示されたやうな原則の形、理論の形ではまだ存在して居らぬといふことである。從つて私は、大杉氏の保證に信頼し、此點については日本の實際に觸れる必要はない。

然し組合内に於ける集中主義と聯合主義との爭は、必ずしも日本にのみ限つたことではない。殊に聯合主義の傳統の深いフランスでは、現に統一勞働總同盟の内部でも、無政府主義者は矢張り聯合主義を唱へて居る。しかし此の無政府主義的の氣分は昨年のサン、エチエンヌ大會に於ては、フランス勞働階級の常識によつて打ち勝たれたやうである。

競爭組合の分立對立を以て有名た英國でも、實際の必要と經

驗、殊に三角同盟の慘敗の教訓として、合同による組合の整理を主張する聲が爲に高まつて居る。然るに之に對しては、在來の組合に官僚的の地位を固めてゐる保守的な指導者が、聯合主義の立場から妨害を試みて居る。

斯ように他國の組合運動の内部にも、聯合主義の主張がある然し唯だの聯合主義からもう一歩進めて、特に『自由』聯合主義とまではつきりした原則は、組合運動の間では餘り流行して居らぬ。フランスの舊勞働總同盟の如きは、傳統的な聯合主義の主張が隨分強かつた。然し自由聯合主義とまでは行かなかつたものと見へ、其の組織は可なりに集中せられたところがあり又た其の理論家も組織の集中を誇りとして居つた。(十一月號の私の文中、セントラリゼーションとコンセントレーションの間違ひについて、大杉氏の教を煩はしたが、之は慥かに私の誤りである。當時、原稿を郵送した跡で氣がついたので、直ちに訂正を依頼したが訂正されてゐなかつた)。

そこで吾々が、他國の勞働組合運動のうちから學ぶことの出來るのは、遺憾ながら唯だの聯合主義の經驗であつて特に『自由』聯合主義の實驗ではないのである。然し唯だの聯合主義ですらも、其の結果は、大體に於いて『緩やかな』結合となる傾向のあることは爭はれぬ事實である。否な『緩やかな』結合の傾向を指して聯合主義と呼んで居ると云つても大過はない。

聯合主義が最もよく行はれたと思はれる組合の聯合體、言葉を換へて云へば、唯だの聯合主義が自由聯合主義に近い程度にまで實現せられたと思はれる組合の聯合體は、恐らく彼の國際勞働組合聯合(今のアムステルダム黄色インタナショナル)であらう。そして國際勞働組合聯合が、曾て『行動の一單位』とはならぬので、常に『緩やかな聯絡の機關』に終始したことは何人も否まぬところである。

これは大杉氏によれば、『何の役にも立たない物知りぶり』かも知らぬ。けれども大杉氏ほどの物知りが、他國の勞働階級が多くの犧牲を拂つて後進者に殘して呉れた經驗と事實とに對して、故らに『知らぬふり』をされるにも當るまい。

六

大杉氏の抗議の第二の綱目は、私が自由聯合主義を曲解集中主義(乃至は合同主義)に對する私の解釋が贋物だと云ふことである『山川に據れば集中とは一般組合員の×××意志と×とを最も正確に最も敏速に反映する』事だ。……それならば自由聯合論者の個人本位團體主義と少しも變りはない。』之が大杉氏の第二の抗議である。

そこで此點でも、大杉氏の自由聯合主義と私の集中主義とが少くとも「純理論の形」でだけは一致した譯である。大杉氏も私も各々其の自説の味方を得たことを喜ばねばならぬ。

ところが大杉氏は、此の一致に對して却つて立腹せられて居る之は怪しからぬ、自分の自由聯合主義と一致する以上は、山川の説明は集中主義のほん物の説明ではなくて、無政府主義からの借物に相違ない！

斷はつておくが、私の考は、此の問題に限らず大低は皆な借物である。私は殘念ながら、代表的の無産階級たる工業勞働者でない。從つて又た組合運動の當事者でもない。私の爲し得ることは、廣い意味での無産階級運動の一兵卒として希望を發言し得るだけである。そしてそれが爲には、勞働階級の實際の生活と鬪爭の經驗から生まれた考へに對しては、最も熱心に、最も謙遜に耳を傾けて居る積りである。從つて私の考へは、悉く勞働階級の實際の經驗が生み出した考への借物であると云はれても、何等の屈辱をも感じぬものである。

そこで勞働階級の實際の鬪爭の經驗から借りて來た私の考へによると、勞働階級の勝利に欠くべからざる條件は、『一般組合員の鬪爭の意志と力とを最も正確に最も敏速に反映する』組織を持つことである。そして同じく借物である私の考によると、斯ような組織は、集中主義乃至は合同主義によつて現實せられるものである。私に取つては、集中主義の説明が借物であるか否かが問題ではなくて、斯ような目的を達する手段は、勞働階級の勢力の集中であるか、それとも勢力の自由な聯合であるかと云ふことである。ところが大杉氏に取つての問題は、此の考への元祖本家は何處かと云ふことである。そして大杉氏によれば、其の本家製造元は云ふまでもなく無政府主義である。

序でに云つておくが、大杉氏によれば『一般組合員の×××意志と×とを最も正確に最も敏速に反映する事』は、即ち自由聯合主義の目標である。然るに此の目標の本家製造元は、大杉氏によれば無政府主義である。そこで大杉氏の本家爭は自由聯合主義といふ原則は、無政府主義の一手專賣の思想であつて、無政府主義者以外、何者と雖も濫りに口にするを許さぬといふことを、最も婉曲巧妙に主張せられたものに外ならぬ。

七

大杉氏の第三の抗議は、實際勞働者の間では、「まだ碌に出來てゐない自由聯合の理論」を、私が『理論屋の天才的の悪い手癖で勝手にでつちあげ』たといふことである。

然しながら昨年の總聯合の問題に就いて、『理論屋の天才的の

悪い手癖』を發揮した者が、實際何人であつたかは、少しく當時のいきさつを知る者に取つては、もう少し愼重に考へた上で決定すべきことではなかつたか。本論の冒頭にも述べた通り、私は今日となつて今更ら當時のいきさつなどを彼れ此れ云ふことを欲しない。けれども今また大杉氏から、現に容易ならぬ糾彈を蒙つて見れば、多少當時のいきさつに言及することも止むを得ぬ。

大杉氏によれば、自由聯合論はまだ理論や原則ではなくて、唯だ勞働階級の『氣分』である『腹の蟲』だつたと云ふことである。恐らく之は事實であらうと思ふ。ところが其れにも關らず大杉氏等（乃至は氣分的自由聯合主義者）は、單に氣分に過ぎないものを一個の理論であり原則であるかの如くして聯合問題に望まれた觀がある。例へば理事の選出方法にしても、自由聯合論者の方では組合は人格であるといふはつきりした理論と原則の上から、理事六十名説を主張せられて居る。ところが反對側の主張は、主として實際の運用上の理由に基づいてゐた。そこで集中主義乃至は合同主義なるものが一個の理論、一個の原則であつたか否かは暫らくおき、何人も集中的合同主義といふ原則を以つて總聯合に望んだ者はなかつたらうと思ふ。して見れば、勞働階級の實際には單に『氣分』として存した『腹の蟲』を一個の原則とし、一個の理論に『でつちあげ』この理論と原則とを以て總聯合を律しようとした理論家の天才は、抑つて自由聯合主義者ではあるまいか。現に總聯合の計畫に對して自由聯合主義者の立場を明かにした小冊子には、組合組織の原則として『自主的自由聯合』が主張せられて居る。そして直僞の程は知らぬか、此の小冊子、大杉氏の執筆されたものだと傳へられて居る。

斯ように總聯合の計畫に對して、先づ『自主的自由聯合主義』といふ原則を主張し、生まれんとする總聯合は、或る『氣分』ではなくて或る『理論』或る『原則』に基かねばならぬと主張したのは、自由聯合論の諸君あつた。

それのみではない。創立大會によつて總聯合が成立して居つたなら、自由聯合側からは、勞働總同盟の解體を要求する決議案を、直ちに大會に提出する手筈であつたと傳へられて居る。之は何を意味するであらうか。當時創立大會が決裂を見ないで幸ひに總聯合が成立して居たとしたならば、それは大體に於いて、緩やかな聯絡機關に近いものが出來上つてゐたに相違ないこれは總聯合の目的として掲げられた三つの項目を見ても明かである。そこで合同論者の究極の希望は、現在の組合を、合同主義によつて産業的に整理することにあつたにせよ、當面の問

題としては、事實上の聯合主義たる緩やかな全國的團結を實現することを以て滿足したのである。然るに自由聯合主義者は之を以て滿足しなかつた。諸君はこの緩やかな聯絡機關の成立を理由として、直ちに勞働總同盟の解體を要求したものである。之は明かに、自由聯合主義といふ理論と原則とを、直ちに日本組合全般の上に押し付けようとすることに外ならぬ。之が大杉氏の謂ゆる勞働者の『氣分』であらうか。それとも炯眼にも此の『氣分』を觀て取つて、『理論屋の天才的の惡い手癖で勝手に』自由聯合主義といふ理論に『でつちあげ』た者が、何處かにあつたのではなからうか。

八

私に對する大杉氏の最後の抗議は、私が主張したのは、勞働者の『氣分』を全く見ることが出來ないで、盲滅法論をやつたといふことである。

大杉氏によれば自由聯合は勞働者の『氣分』である。そして勞働階級の戰鬪力の集中を目的とする集中的合同主義は、勞働者の『氣分』に反して居るといふことである。私は實際日本の勞働階級の『氣分』が、果して大杉氏の言葉の通りであるか否かを疑ふものである。けれども假りに勞働階級の『氣分』は、炯眼な大杉氏の觀測の通りであると假定したならどうだらう。云ふまでもない、大杉氏は此の『氣分』に投じた自由聯合主義を主張せられて居る。けれども私の信ずるところによれば、斯やうな『氣分』は、決して勞働階級を勝利に導くものでない。否な勞働階級の勝利は、却つて此の『氣分』に反したことを必要として居るのである。從つて私は、一時此の『氣分』に反すが爲めに受容れられず、一時この『氣分』に迎合せぬ爲めに非難と嘲笑とを以て報ひられようとも、眞に勞働階級の勝利の爲めに必要なと信ずることは、寧ろ『氣分』の觀測などとには『盲滅法』に發言しなければならぬと思ふ。然し之は目先の見えぬ盲でなければ出來ないことかも知れぬ。

勿論私は、勞働階級の『氣分』を尊重せぬものではない。けれども其れと同時に、私はより多く勞働階級の常識に信頼するものである。勞働階級の『氣分』は、假りに自由聯合にあつたとしても、組織され集中された資本勢力と抗爭する現實の必要と、この必要を有りのまゝに理解する勞働階級に堅實な常識とは、必ずこの『氣分』に打ち勝つに相違ない。私は勞働階級の勝利を確信する。それ故に私は、勞働階級の常識が、何時かは斯ような『氣分』に打ち勝つことを確信するものである。

然しながら自由聯合といふ『氣分』は、果して大杉氏の

せられるように、多數組合勞働者の眞實の『氣分』であつたらうか。私は前にも此の疑ひを殘しておいた。そして再びこゝに此の疑問を提起せざるを得ぬ。今や組織され集中された資本の勢力は、到る所に攻擊的の態度に轉じてゐる。之に對抗する唯一の方法は、唯勞働階級の戰鬪力の集中である。この眼前の必要を前にして、勞働階級の間に却つて自由聯合の『氣分』が漲つて居るなどゝいふことは、到底常識を以つては考へることは出來ぬ。

總聯合決裂後三ケ月間に於ける實際の形勢は、今やこの疑問を裏づけて居る。成るほど自由聯合主義的の氣分、乃至は無政府主義的若しくは個人主義的の氣分は、可なりに强烈であつたに相違ない。けれども最近三ケ月間の實際の形勢を見ると、此の『氣分』は多數組合勞働者の『氣分』ではなくて、極めて少數な指導者間の『氣分』に過ぎなかつたことが、可なりに明白になつて來た。現に自由聯合主義の主張者と思はれてゐた組合の大多數が、創立大會に於ける代議員の行動に反對し、自由聯合論によつて創立大會を決裂せしめた代議員の行動を、越權として非難して居るところすらもある。また自由聯合主義の中堅であり牙城であると認められて居た組合の現在の形勢は、一體どうだらう。斯ような實際の形勢を正直に見る者には、自由聯合主義の主張は、可なり一般組合員の『氣分』を無視したものであり蹂躪したものではなかつたかと云ふ疑問すらも禁じ得ぬそして『純理論の形』では自由聯合を主張し、『個人の人格』のを强調した組合に於て、却つて少數者の專制が最も甚しく行はれてゐたのではないかといふ、好ましからぬ疑問すらも禁ずることが出來ぬ。

大杉氏はその抗議の結論として、私の自由聯合主義反對論は『勞働者氣分を金と見る事の出來なかつた盲滅法論』であり、『理論屋の天才的の惡い手癖で勝手にでつちあげて、それを勝手に推論して、曲藝をして見せた手品師論だ』と論斷し、『が此盲滅法論の手品師は、見事に發かれて、高座の上から叩き落されて了つた。こんどは目をあけてもう一度出直して來い』といふ貴重な教訓を與へられて居る。何が『盲滅法論』である、誰れか『理論屋の天才』であり、何處に手癖の惡い『手品』が隱くされて居り、どんなに『見事に其のたねが發かれて』何者か『高座から叩き落されて了つた』か。私は『目をあけて出直して來る』前に、大杉氏と共に目をつぶつて考へて見たいと思ふ。

九

總聯合問題に對する私の希望は、曾て『勞働週報』（第二十

三號、二十四號）に述べた通りである。即ち（一）私自身は、産業的に整理しやうと云ふ合同主義者である。けれども（二）差し當つては、組織の原則は第二として、多數の意見に基づいたものなら、緩やかな聯合でもよいから兎も角も總聯合の成立を希望したのである。しかし（三）創立大會が原則問題を導火線として決裂した以上は、蓋をする主義で成る可く此問題には觸れぬやうにして再び總聯合を纏めやうとするのは間違つて居る。此問題はどうせ一度は逢着する問題であるから、此際、愼重に眞面目に討論し研究すべできある。しかし原則上の問題は容易に決定するものではない。そこで（四）此の問題の決定するまで總聯合は見合せるかと云へば、決してそうでない。勞働階級の當面の必要は、それまで待つてゐることを許るさない。そこで私は、自由聯合論者も、合同論者も双方の意見に相違のあることを充分に理解し承知した上で、最も近い機會を捉へて、再び總聯合の計畫を進めることを希望したのである。

之れに對して十二月五日の同じ『週報』の紙上に、『シー生』と名乘る人が、『どうしたら團結が出來るか』と題して私の趣意を要約すると、「今度の總聯合が決裂したのは、根本組織に關する學說が相違したからである、從つて今後勞働者が團結するには、此の學說……を討論の上ハツキリ決議してからでなくてはだめだ』と云ふことにあると云ひ、山川君は『討論せよ議論せよ、サウすればキツトすぐ團結できる』と主張したと言いて居る。それだから――シー生は愈々シー生一流の團結の方法を教へて云ふ――それだから勞働者の團結を妨げて居るものは社會主義者である。彼等は勞働者の間に內爭の黴菌をふり撒いて歩るく傳染病者である、『傳染病者との交涉は危險である。』だからウツかりすると今に一網打盡に皆な血を吐く思ひをする。』だから『吾々に健康體な勞働者』は吾々の運動から、絕對に彼等を排斥し去ること、之れが勞働者の團結を實現する『第一』の方法である！

『週報』の紙上に私の書いた希望のうちに、總聯合の組織は原則上の問題を決定した上でなければ駄目だといふ意味に[illegible]れる唯だの一句でも有つたか無かつたかは、如何に不注意に讀まれた人にも明かであらうと思ふ。十一月と云へば、大抵の[illegible]狂ひは正氣に返へる陽氣である。『健康體な勞働者』と自稱するシー生の如き人でもよく〳〵まごついて來れば多少血迷ふものと見える。シー生は、社會主義者か勞働者でもない癖に、『自分の身の程も知らずやつて來るものがあつたら、ソレはキツト何かの目的野心があつてくるのだと思へば少しも間違ひな

間をい』と云つて居られるが、これで萬が一にも、シー生自身が勞働者でないことが分つたら、どう云ふ事になるのであらうか。

要するにあれだけの苦心をして社會主義運動と組合運動との離間中傷したり、『一網打盡』などをほのめかして、勞働者を威嚇することによつて組合運動が社會主義運動と接近し協力することを防止しようとするのは、大抵警察の廻はし者のすることである、少くとも資本家や政府や警察と同じ『何かの目的野心』のある者のすることゝ思へば『少くも間違ひない』のである。そこで私は、日本の『健康體な』ほんとの勞働者諸君の常識に信頼して、何等の辯明をもしなかつたのである。

一〇

けれども私は、此機會を以て、繰返して私の希望を述べておく。戰鬪力の集中か自由な聯合かといふことが、既に原則上の問題となつた以上は、どこまでも此の問題を研究し討論して、勞働階級が勝利を得る爲には、如何なる團體組織が必要であるかを見極めなければならぬ。けれども此の原則上の意見は、必ずしも百人が百人一致するものではない。そこで組合の組合たる質——組合が無産階級の政策と異るところ——は、意見の相異に拘らず階級的に團結することである。勿論それも程度の問題である。或る程度を越えた意見の相異があつては、一つの團體のうちに留まることは六ケ敷しい。けれ共其れと同時に、三尺の棒を二つに切つても兩端が出來る。若し意見の異るごとに分裂して居たら、組合は到底成り立たぬ。そこで組合は大體に於いて共通の階級的利害の下に、可なりの程度までは異つた意見を包容すべきものである。

それと同時に、組合の内部には、色々の意見が遠慮なく鬪はされて居つてこそ、初めてその團結が鞏固であり健全である證據である。吾々は此の討論の裡から、勞働階級の勝利の爲めに最も良い手段と方法とを見定めることが出來る。そして運動を指導するものは最早や人ではなくて、最も優れた手段と方法とが吾々の運動を導くやうになる。

自由聯合か合同かといふ問題も其通りである。吾々は決して研究と討論とを恐れることはない。唯だ私が勞働組合運動の爲めに衷心から希望するところは、若し組合員の多數が自由聯合論を可とするなら、合同論者は、少數として團體の規律に服することである。そして少數派は、總聯合の内部にあつて、自己の主張を多數派たらしめることに努めることである

然しながら之れは私の希望に止まらぬ。勞働階級の堅實な常識は、現に其後の形勢を此の方向に向はせて居る。自由聯合主義か集中主義かは、今尚ほ組合界に討論と研究とが續けられて居る。そしてそれにも拘らず、再び總聯合の促進せらるべき形勢は、時々刻々に進みつゝあるやうである。現實に當面して居る勞働階級の『氣分』は堅實である。そして勞働階級の常識は更に一層堅實である。

決裂から團結へ！

三・參名著

社會政策と階級鬪爭

十版

◇定價參圓九十錢◇送料廿一錢◇四六判◇

世界的の經濟學者としての博士最近業の大傑作勞働運動は今からが眞劍に入る、そしてその指導者も俄仕込では駄目だ、嶄然斯界に卓越した博士の本著は社會運動と勞銀制度の基調となす名著である。

廿一版

◇定價貳圓八十錢◇送料十九錢◇四六判◇

「資本主義は必然的宿命によつて崩壞するものではない、この儘に放擲する時は人生眞の厚性幸福は全くその爲に蹂躪せらるゝの外はない我々は人爲の政策を以てこれに對抗せねばならぬ」といふ立場より博士一流の卓論を以て本書は成る。

發行所 東京芝區愛宕下町 振替東京八四〇二 改造社

中村吉藏作

戲曲 錢屋五兵衛父子

定價壹圓五拾錢

◇送料十五錢
◇四六判上製

第六版

北越の俠商『錢屋五兵衛』父子は封建末期に於ける事業的天才の一巨人として無產階級の民衆との葛藤から胚まれて來た運命的な、又性格的な一悲壯劇を描いてそこに舊社會解體の一の豫兆としての、ブルジョアジーの崩壞を示さうとしたのが作者の意圖である。現代の思想と生活の潮流の或る方向への指標を、その中から發見する者もゐるであらう、又『白隱和尙』は嘗て幸四郞氏に依て『帝劇』に、『小山田庄左衛門』は延若氏に依て『浪花座』に初演せられ、共に成功したものである。

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四二〇〇

理學博士 石原純編著

（第十二版）

相對性理論の諸斷面

（第壹輯）

定價八十錢
送料書留十一錢

相對性理論の奥ぶかい内容を解り易く説明することは至難の事がらです。たくさんの世に行はれてゐる書物のなかには或は誤りて説き或はその眞髓に觸れないものもないではありません私は現時の諸大家の書いたものゝなかから、適當なる言葉を抽き出して之を隨處に綴り、一の相對性理論に對するいろ〳〵な解き方を照させて、その諸斷面を讀者のまへに擴げて見やうと思ひます。之れ等が最も信據すべきものであるばかりでなく又之を詳細に味ふときはそれぞれの諸家の面目特質をもその言葉に聞くことが出來る點に於て興味多いことであります。（著者）

（第十版）

空間及時間概念

（相對性理論の諸斷面 第貳輯）

定價九十錢
送料書留十一錢

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

理學博士 石原純著

増補 アインスタインと相對性理論

定價貳圓貳拾錢

送料十七錢

四六判上製

三十六版

ニュートン引力を否定して全科學界を革命せる「相對性理論」と、氏の人となりを知ることの出來る一番評判のよい書籍は本書です、著者が石原氏であることが何より本書の權威です、そして三十六版を重ねたことによつても本書の權威を推知できます、ア氏の著作案内も本書に收められてゐます、それに寫眞も七葉挿入されて光彩を添へてゐます。

アインスタイン氏及相對理論を知る最善の道しるべ

東京市芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二番

機械主義に對する抗議



バートランド・ラッセル

吾々が現に棲息してゐる時代と、在來の全ての時代との相異は、主として機械の發明に基いて居る。機械は滿足なピンを在來よりも遙かに容易に作り得ることが見出された。人間も亦機械によつて作られる筈で、機械製の生産物を好まぬ者は古い化石だとまで推論された。此見解は全ての工業的に進歩した國々の教育に益々重大な影響を與へるようになつた。これに伴隨する弊害は決して教育に局限せられてゐる譯ではないが、私が只今論じようとするのは、教育方面のことである。

私は、若し人間を機械に同化させようとする企が繼續するならば、白人種の中の精神生活にとつて眞に貴重なものは全て粉碎されてしまふのであらうと信ずる。機械は稱讃すべき奴隷ではあるが、吾々が其れを單なる奴隸にしてしまはぬ限り、吾々はその利益に浴することは出來まい。現在に於ては、機械は精神的にも物質的にも吾々の主人公たらんとし

て居る。吾々は此傾向に對して警戒する必要がある。特に世界の主要な民衆の教育がこの傾向を帶びてゐるに於ては猶更のことである。

教育制度が實現しようと努力する目的には、良き市民を作るか、良き人間を作るかといふ二つがある。廣く、そして哲學的に考へれば、是等の二つの目的は矛盾してゐないが、爲政者がさうしがちなさうに、これを狹く考へて見れば、此二つは甚しく矛盾杆格して居る。機械學者的な物の見方の滲み込んでゐる人は、良き人間を作るよりも、寧ろ良き市民を作らうとするであらうし、良き人間性と兩立せぬような、善き市民といふもの、概念を作るであらう。諸國の政府の考へてゐる良民の概念の中に私は三つの危險な謬見を見るのである。

第一に、各々の男女は、世界の市民でなく、或一つの國家のみの市民だと考へられてゐる。

第二に、國家又は社會はその中の或數人の市民の利益とは違つた、それを超越した利益をもつてゐると想像されて居る。

第三に、その利益といふものは、個人々々の心的資質によるものではなく、純然たる機械的手段によつて實現され得るものゝれのように考へられて居る。

是等の謬見のうち第一のもの、即ち國民主義は機械主義と斷ち難い關係をもつてゐるものではないが、工業主義が國民的に發達した方法によつて非常に强められたので、その結果、相互の關係は、論理上ではさうでなくとも、事實上大に密接なものとなつたのである。

勿論總ての公共的教育制度は、それ無くしては人間が近代社會に參與して自分の特徵を演ずることの出來ぬ、かの必要なる最小限度のものを與へることに基礎をおかねばならぬ。讀み書きや、算術などは誰でも出來なければならぬ。國家は次第に智識の最小限度を増加し、それはやがてかなりの程度のものに達しそうな見込がある。けれども私は、たとへ重要であるにもせよ、既に何人も當然の事と認めてゐる以上、この基礎について討議しようといふのではない。私は寧ろ意見の不一致が起り得る方の事柄を論じたいと思ふのである。

授業をしてゐる間に、校長は或心的習慣を叩き込む機會がある。意見の不一致が起るのは此處である。彼はいかなる心的習慣を教ふべきであるか。どんな種類のものを教へられる。ジエスウイツト教徒は、稱讃すべき授業を行つてゐる間に、教へ子達にカトリツク教會の宗義を無條件で受容れるように教へた。アメリカの小學校は子供達に向つて、徹頭徹尾アメリカ人となるように、即ちアメリカは神自身の國であり、アメリカの憲法は神聖な靈感を受けたものであり、アメリカの富豪は日曜學校流の徳行の標本であると信ずるように教へる。英國の小學校は、吾英帝國は偉大にして仁慈に富み、未だ曾てインドを壓迫し、又は支那に阿片を強ゐたることなく、アフリカに於ては常に人道的であること、且つ全てのドイツ人は兇惡であるといふことを教へる。ロシアの小學校は共産黨員は有徳で、無政府主義者は兇惡であること、ブルジョアは道を誤まつたものであること、社會革命はヨーロツパ中に迫つて居ること、全ての帝國主義は資本主義の結果であるから、共産黨の内部にはいかなる帝國主義も在り得ぬことを教へる。日本人は　ミカドは天照大神の後裔たる現人神におわしますこと、日本は地球の他の部分より早く造られたること、かるが故に支那人は、日本人が彼等に命ずるいかなる命令にも唯々諾々として服從する義務あるものであるといふことを教へる。私はこれに類する信條がウルゲー、パラゲー及びサン、マリノに於ても教へられてゐることを疑はない。即ち其各々は、特に天によつて惠まれ、隣國よりも遙かに高徳だと教へられてゐるに相異ない。要するに、君主政治の存在する所は何處でも、年少者をして益々欣然として殺人を犯さしめる目的のために　滑稽千萬な信念を強制しようとして讃背きの教授の獨占を利用するのである。是等の信念を助けるために、特殊の心的習慣も亦奬勵される。即ち輕信、盲目的偏見、及び集團的兇暴性がそれである。是等は全て原始人につきものゝ特徴であつて、教育はこれを緩和するものと期待されて居る。

世界の統治者達は美徳は虚僞は教へることによつてのみ教へることが出來、眞理を知る者は全て惡人であると在來常に信じ、今も又さう信じてゐる。私は絶對に且つ全然これを信じない。私は眞理に、對する愛はあらゆる眞の美徳の基礎であり、虚僞の上に築かれた美徳はたゞ害の外與へ得ぬものであると信ずる。恐らく私はいかなる場合にもこれを信條とするであらう。けれどもこれには現に幾らでも證據があるのである。國民主義はその絶好の例である。歷史を教へ

る時に用ゐる教科書は、世界中の總ての文部大臣によつて、愛國的偏見のために、故意に心あつて人を誤まるものであるといふことが知られて居る。單に教へられる歴史が虚僞であるのみならず、その虚僞がより多く戰爭を招來する種類のものでが眞に惡い點である。社會主義者は經濟的方面に於ける國際主義の重要なことを力説した。これは誠に尤もなことである。が教育方面の國際主義も、少くともそれと同じ位に重要である。若し總ての文明國の子供らが同じ歴史を教へられたならば、相異る國にも今日ほどに憎み合はず、いかなる國も武力に訴へさへすれば勝利を得るといふ確信を、今日ほどに抱きはしなかつたであらう。教科書は、歴史の教師の仕込み方を指導する教育の國際的中心によつて編まるべきである。現在行はれてゐる遣方は、自國の正義と權力とに對する各國民の信念を强め、隨つて各國民をして、更に欣然として戰爭に赴かしめるのである。それどころか、現在の不誠實な教育は、このために存在するようにまで思はれるのである。結局教育によつて行はれた全ての利益を打消すほどに此害惡は大きいのである。ロシア又は支那の文盲の農夫は國民主義者ではない。それは彼が自國民といふような大きな、又はそんなに抽象的なものを考へることが出來ないからである。自國が戰爭をしてゐる時には、彼は、それを以て厭々ながら命令に遵ふといふよりほかに自分には關係のない政府の仕事だと考へてゐる。ロシアや支那が、英國やフランスやドイツほどに他國に害を加へ得ないのはこの理由による。若しロシアや支那が西洋諸國が普及させたような小學教育を發達させることが出來たならば、此二國はその大人口に對して、最近の大戰を可能にしたような盲目的愛國心を期待することが出來る。それが起つた時には西歐の小國民の運命は悲慘なものであらう。マクベスのように、彼等は一旦教へられると、發明者へ立歸つたこれを促す血なまぐさい教へを教へたのである。若し教育が作り話の代りに事實を教へることを目的とし、又は教育家が少年少女を、單に偶然彼等が居住してゐる特定の地理的區域の市民としてのみならず、未來の世界市民として考へることが出來たならば、國民主義が益々勢を加へるために吾々の前に横はる無數の慘禍は避け得られるのである。

勿論現代の好戰的な國民主義の全部を虚僞の教育に歸することは公平でない。自己の集團に對する忠誠、その集團の、實際又は假想的な功業に對する誇負、及び競爭的集團に對する敵意はすべて、人間の本能的作用の一部分である。

在來教育の行うた全てのことは、此本能に訴へてそれを一定の方向に向けることばかりであつた。教育を指導する人人自身その影響を受けてゐるので、自己の正しいと信ずることに對して、意識的に又は故意に背かうとはしないのである。彼等にして、本能に服從した結果として西洋文明が崩壞に瀕してゐることを覺つたならば、彼等は此場合にも他の場合と同じく、教育は粗野な本能を、結果に對する合理的な先見によつて統制し、且つ世界の生活を妨害する代りに助成するために、本能的激情の訓練を目的とすべきであるといふことを併するに至るであらう。首級獵獲者の蒙昧社會では大抵の者が人殺しであり、時にはその男性的武勇の證據として、少くとも一個の首級を擧げない限りは、輿論が結婚を許さぬことすらあるに引換へ、現在に於ては、私的生活では滅多に人殺しをする者はない。蒙昧社會では私人的人殺しの本能を强めるためにあらゆることが行はれるが、吾々の間では、特に兇暴な人々の場合の外、これは十分に抑壓されてゐる。けれども公共的殺人、即ち戰爭に關して吾々の社會で採られる方針は、首級獵獲者が私人的人殺しに關して採る方針と、全然軌を一にして居る。吾々をして私人的人殺しの本能に打克たしめたのと同じ方法は、同じ本能が好戰熱となつて現れた場合にも亦、各々をしてそれに打克たしめるであらう。小さな本能の種子を育てゝ、遂にそれを國民的武裝及び國際的猜疑の大樹にしてしまふ現在の方法の代りに、かういふ方法を教育上に用ゐなければならぬのである。

人類はすべて一家族であつて、國民別は下らぬ愚擧であるといふ感情は、教育さへその眞の目的に向けられたならば、普通の少年少女の中に容易に起し得るものである。人類の地質學的及び生物學的先行者から始まつて、人間の進步を常に、多くの國民が貢獻した單一な運動として取扱つてゐるウエルスの世界史のような書物は、エヂンコトやトラフアルガーや、レキシントンやサラトガに關する偏狹な愛國的教訓よりも遙かに廣い、そして慈仁な物の觀方を養ふものである。何等かの憎惡の對象をもつことは、吾々のあらゆる本能を適宜に働かすために必要であるかも知れない。そこで吾々は、若し人間が他國に於ける隣人を憎むことを防止せねばならぬとすれば、何等かの他の非人間的な憎惡の對象を見出さねばならぬ。人は精神錯亂者のように、物を憎むことも出來れば、無智や疾病を憎むことも出來る。是等のものを憎むことは有利であるし、多少の象徵主義によつて、それは吾々の憎惡に對する本能的欲求を滿たすことも出來

る、然るに他の人間の集團を憎むことは害あつて益なく、且つ教育が虚言と抑壓との手段によつてさういふ憎惡を注ぎ込むことを目的とするのは奇怪千萬なことである。けれども支那以外の大國民の場合には皆なそれが行はれて居る。そして支那をこれをやらぬ許りに侮蔑し嘲罵されてゐるのである。

次に私は、私の見る所では、機械主義が吾々の教育に對して奬勵したと思はれる第二の謬見を論ずる手段となる。それは國家又は社會は一全體であつて、個人の中に存在する所の利益とは異る種類の利益を有し得るものであり、この集合的利益は個人の中に體現されてゐる利益より多少高いものだと想像する所の謬見である。この信念が、私が『僞政者の虚僞』と呼ばうとしてゐるものを構成してゐるのである。個人は、或性質を有する社會の中に棲息する時のみ、最もよく人生を樂しむことの出來るものだといふ想像は、勿論決して虚僞ではない。私はロビンソン・クルーソーが(例へば)ペリクルス時代のアゼンス人と同じ位によい生活をすることが出來たといふことを云ふつもりではない。(恐らくペリクルス時代は實際には現代よりも少しも優れた時代ではなかつたかも知れないが、それがよい時代だと想像することとは當つて居り、私はこの假說を說明の都合上受容れることにする。私が攻撃してゐる虚僞は、或種の社會が共市民の生活上の利益の手段にすぎぬといふような見え透いた平凡な事實ではなくて、個人の生活のあらゆる利益の決算をして見た上で、擬人せられたる全體として見た國家又は社會に屬する利益があるといふ、全然異つた立言なのである。此信條はヘーゲルによつて說かれ、英國のヘーゲル學徒によつて採用せられた。これには精緻な論理的基礎があるが、私は、既に度々述べたような理由によつて、それは全然間違つてゐると信じてゐる。目下の場合、私が檢討しようと思ふのは、その前提ではなくて、その結果である。

國家又は社會は、單にそれ自身として特殊の價値を有するものだといふ此學說と受容れるものは、彼等の學說を指して『有機的』社會觀と呼んでゐる。動物の肉體の各部分が全體の生命に奉仕して居るように、共同の目的に奉仕する相關的部分をもつてゐるといふ意味では、多かれ少かれ社會が有機的であるといふことは分り切つた事實である。此事實が明白であるために、人々は、單に社會の有機的性質を主張するに過ぎないと稱する意見を、十分討究もせずに受容れ

る。けれども今こゝで問題としてゐる社會學者達は、彼等特有の哲學的な意味で『有機的』といふ言葉を用ゐてゐるのである。彼等は、社會は、多かれ少かれ協同して働く相關的個人が、單に數多く集つたものではなくて、社會それ自身の生命をもつ單一な全體であるといふのである。彼等は云ふ、人は自己の頭腦、腕、又は足の親指に專屬せず、自己全體に屬するよいものを樂しむことが出來る。それと同じように國家は、個々の市民の生活には見出されないよいものを持つてゐる、と。そして彼等は一般に、市民たる者の最高の職分は、人體の種々の機關の最高職分が人間の生命に奉仕することであるように、國家に奉仕することであると主張する。かようにして國家に對する吾々の義務は、隣人に對する義務よりも一層緊急なものであり、國家の利益は、その大多數の市民に危害を加へるような方法によつてまでも追求されねばならぬと考へられるのである。

實際上に於ては、此見解は貴族的な、機械的な社會の擁護をするようになつてゐる。『國家の利益』は、實際上、『政治家の利益』である。私はこれを大ざつぱな意味で云つてゐるのではない。『政治家の利益』といふ言葉によつて、私はその富、又は慣例的に自己中心主義の人々の目的となつてゐるどんな物をも指す譯ではない。是等のものは、勿論、その中に含まれてゐるには相異ないが、高尚な人物はこれらに對して自ら警戒するであらう。人々がさほど警戒せず、また無意識的に服從しがちな他のより微妙な利己主義の形式がある。國家について考へる習慣をもつ人は、或種の國家を瞑想することに快樂を見出し、殆ど必然にさういふ國家がよいと考へるようになる。爲政家的氣質をもつ人は、非常に多くの行政機關があり、キチンとした制度があり、總ての人が、恰も機械の齒車のように受持の場所をもつてゐる國家を瞑想して喜ぶ。さういふ國家は、異る氣質の人々、例へば藝術家にとつては堪へ難いものであらう。けれどもさういふ人々は、その氣質のために政治家や官吏や產業の船長とはならないであらう。かように餘り一般的ではない或一種の氣質のみが、實際上、それ自ら『國家の利益』と考へることを確立するようになるのである。此種の氣質は、『國家の利益といふことに信がおかれてゐる限りは、その趣味を——それらは擬人せられたる國家の趣味など想像されてゐるから、——社會に强制する自由があると感ずるであらう。これは高尚な人々をおせつかいで苦しめ、藝術や思想や、人生

の單純なる享樂を徐々に粉粹することを意味する。

彼等の所謂『有機的國家觀』を主張する人々は、彼等の信ずる所は、機械主義の反對であると常に想像して居る。これは最も奇妙な謬想である。機械は、單一な有用の結果を生み出すために協働する各部分をもつて居り、且つ其等の諸部分が單獨では役に立たぬといふ意味では、本質的に有機的である。機械は動物ほどに完全な有機體の例は示してゐない。が、吾々は機械を造ることは出來るが、人間を作ることは出來ない。隨つて吾々が社會を有機的に作れと云はれる場合には、社會を生きた動物に作り上げる方法を知らぬ限り、吾々は必然に機械から想像上の標本を引出して來る外ないのである。鐵道の如き大企業に於ける巨大な組織の勞働を必要とし、商業上の必要から、もつと單純な時代よりも遙かに人間を他人に依賴せしめるようにした機的產業過程ほどに、社會を有機的ならしめたものはないのである。斯様に機械主義は、偶體的な機械の形で『國家の利益』といふ信念に奉仕し、その代りにその信念に對しては、いかなる形を採るべきかを命ずるのである。國家の利益は、有用な貨物か毒ガスか、何を生産するかを問はず、出來得る限り多量の機械をもつことであるようになつた。

マルクスの弟子として、マルクスがヘーゲルの中から採つた說を採つたボリシエウイキが、市民の利益に反對した國家の利益の最も熱心な信奉者であることを認めるのは興味あることである。彼等——私は利己的でなくて公共心に富む人々のことを云つてゐるのである——の目的は、その中に棲まねばならぬ人々に幸福を齎すや否やの問題とは全然沒交渉に、彼等がそれ自ら善だと信じてゐる或一定の社會の型を作らうとするに在る。(彼等自身はその事實を意識しないが)、彼等の目ざす社會は、官吏の寡頭政治の中によい地位を占めてゐる精力的な爲政者には幸福を齎すであらうが、他の何人にも幸福を齎すものでないことを、人は氣づかずにはゐられない。これと同じようにカイゼルやユンケルは、ドイツ人の利益に反した『ドイツの利益』を求めたが、偶然にもドイツ人の考へてゐた『ドイツの利益』は、カイゼルやユンケルの考へと符合してゐたのである。一層痛切な例を擧げれば、英帝國で光榮に浴してゐる人々は、—— 勿論自己の趣味に適するような帝國の種類を瞑想して見る快樂をもち、英帝國を統治する人々以外の——全ての英國民がそのた

めに苦しむことには平氣なのである。アメリカの産業界及び財界の覇者や、一般統治者達についても、同じことを云ふことが出來よう。かような人々は全て、爲政者の虚僞に對して自ら細心翼々として警戒せぬ限り、識らず知らずの間に、彼等自身の利益を獲得することゝなるやうな、偏頗な公共的利益の概念をもつようになるであらう。

この意見が有害であるのは、單に不公正だといふばかりではない。その有害なのは（私が第三に擧げた點である）普通の爲政者的氣質によつて尊重せられる第二位の、機械的な貨物の性質である。世界の大藝術家、大思想家、及び大宗教家は全つたく違つた標準をもつてゐた。彼等は個人を尊重した。彼等は自發的衝動を讃へた。彼等は外面的な機械主義に適合するように強ゐられず、人が内部から生活するものとして善い生活といふものを考へた。彼等は人間を支配者の手細工の材料にしようとはせず、彼等をして各々その善と信ずることを、法律や輿論にお構ひなしに。追求するように、精神的に自由ならしめようとした。これがキリストの教であり、佛陀の教であり、老子の教であつた。この個人の尊重といふことは、今一つの形でシエークスピアの中にも現はれ、ガリレオの審問に對する反抗の中にも現れて居る。人間生活に於けるあらゆる善いものは、或種の自尊と獨立不羈に依つて存在するものである。外部からの壓迫に、自己の生きる目的を命令されることに甘んずる者は、奴隷以上のものではあり得ない。

近代の國家的教育は、主として便宜な市民を産出することに在る。然るに全ての自發的傾向は制度と杆格するが故にそれは自發を奬勵する勇氣はない。國家的教育の中には、劃一主義、個人的判斷の抑壓、支配者に對して從順であり、『敵』に對して兇猛な人民の産出等に傾むく傾向がある。萬一吾々の文明が大戰爭のために破滅を免れるとしても　精神的奴隷を産出しようとする、かような國家教育の傾向にして遮止せられざる限り、それは藝術や思想の中のあらゆる貴重なものを殺し、遂には人間の情愛をさへ殺すであらう。そしてそれは必然に、自發性の死んだ所には存在し得ない人生の悅びをも殺すであらう。是等の害惡は政治の形式から來たのでなく、政治が餘りに強烈な所から來るのであるからデモクラシーが、それ自身、これに對する救治法を提供するものであると考へてはならない。何處でも政治が非常に強烈である所では、有効な權力は官吏の手に握られ、稀な例外を除くの外、官吏は常に機械主義を歡迎するものである。

多數者も亦、少數者と全然同じように壓制的になる。そして何等かの新しい善いことのために闘ふ人々が、多數者であることは殆どない。個人的創發心を働かされるだけの餘地、非劃一的なることは、進歩の本質的條件であつて、これ無くしては社會は急速に固定してしまふのである。未來に於て吾々を脅かす懸崖は、特權階級によつて行はれるそれでなくて、政治や行政を好む精力的な民衆の行ふそれである。以前には、さういふ民衆の力はホンの僅かなものであつたが今では工場主義とその結果としての戰爭の破壞性とによつて、國家の權力は、人類の歴史が始まつて以來例のないほど強大なものとなつてゐる。若し世界中に跨がる唯一つの國家があつたならば、その危險はやはり存在するにしても、それと闘ふことが容易であらう。けれども今では數多くの國家の存在するのお蔭で、すべての大國家の主たる目的は、戰爭に於ける勝利であり、國家の巨大な權力は主としてこの目的に捧げられてゐるのである。個人的創意を保存することによつて此目的に奉仕することは出來ない。かようにして普通の男女を機械的な奴隷にする傾向は戰爭準備の必要によつて、甚しく認められてゐる。世界中のあらゆる強國に於ける是等の傾向が教育に及ぼす有害な影響は、いかに力說しても足りないのである。

私は論を進めてゐる間に、教育の問題から脫線してしまつたと思はれるであらう。けれども教育の制度は、それを確立する社會の理想を體現するものであつて、理想の改良によつて急激に改良をすることの出來るものではない。若し私が教師の訓練を左右し得るのであつたならば、私が特に教師に深く印象するだらうと思ふことが二つある。

第一には、人間の公共的義務は、或國民又は或階級といふが如き附屬的集團に對してゞはなく、人類全體に對するものであること。

第二には、善良な男女の社會――即ち自由に、けれども他人を害したり、壓迫したりすることなしに生きる男女の社會たること。

第一の點については、私はもし科學が、引つゞいて新しい破壞の道具を發明して、同時に行はれる倫理上の進歩に阻まれることがなかつたならば、吾々の文明がどんな慘禍に當面せねばならぬかを明かにしよう。この危險を覺つてゐる者

は多いが新しい戰爭の準備をしてゐる政治上及び社會上の力から離れようとする者は少く、また愛國主義は——その普通一般の形に於ては——近代人の犯し得る最惡の惡德だといふ事實に潔く當面する者も少い。是等の事柄を知らせることは、全ての教育家の仕事の一部分である。教育家は公平な判斷、非個人的な眞理の探求、及び政黨の標語に對する不信任を教へようと努めねばならぬ。彼は亦、相對峙する集團又は國民に屬する人々は特に兇惡だと信じ易い自然的傾向をも阻止しようと努めねばならぬ。巧妙な宣傳の感化の下に、道德的公憤に對する吾々の衝動は、吾々の主人が吾々に憎ませたいと思ふ者を憎むために利用せられ、その結果としての憎惡の力の下に、吾々は自分らの憎むでゐる相手の公憤を挑發するようなことをする。公憤は世界の害毒の泉源となつた。人間の不完全さを處分する方法としては、刑罰は最善のものではない。そして刑罰を行ふ權利を主張するよりも、なるべく人を責めまいとする者は少いのである。現在に於ては、吾々は敵の罪は知つてゐるが、自已の罪は知らない。かようにして公憤は單に相互の敵意を增大させるにすぎない。例へばアメリカ人は、日本人には十人中の九人にまで知られてゐない、日本が朝鮮で犯した慘虐を知つてゐる。一方、日本人は、アメリカ人自身よりも遙かによく、アメリカに於ける黑人の亂刑について云はれる限りの最も暗黑な方面を知つてゐる。かようにして憎惡は双方の側で激しくされ、然もこの害惡を阻止するにはどうしたらよいかといふことについては、どちらでも何も行はれてゐない。犯罪人に對する公憤は滅多に役に立つことはない。役に立つのは犧牲者に對する憐憫であり、且つ犧牲者を出すのは必ずしも吾々の敵のみではないといふ事實を承認することである。けれども私は、教育上に於ては所謂人道主義的な議論よりも、世界の異る部分々々の相互の關係を教へることが、より有益であらうと考へる。吾々は自己を破滅に陷れずに敵を破滅させることは出來ず、且つ世界が現在の人口を維持しようといふならば、國民同士の間の敵意はもはや繼續し得ぬことを見、且つ教へることの方が容易である。

　第二の點、即ち個人の自由といふ點については、吾々が保留せんとする自由は、經濟的又は物質的ではなくて、精神的な、靈的なものであるから、これは特に教育家の問題である。工業主義は、人生の物質的方面に關しては、人々が巨大な組織の中に協同することを必要ならしめた。社會が凡ての勞働能力ある成人から、彼もしくは彼女が消費するだけ

に相當した生産的勞働の量を求めるのは正しいことである、此必要なる勞働の最も少量に關しては、未來に於ては在來運な少數者が樂しんで來たほどの自由のないことは避け難いとだと思はれる。けれども若し吾々にして戰爭や軍備や廣告や、商業的競爭の浪費を廢止し得たならば、吾々は全て、一日四時間の勞働で安樂に暮せる筈である。其餘の吾々の時間は自由でなければならぬ。そして教育は、吾々が自由に使用し得る二十時間を賢く使ふように、吾々を準備させなければならぬ。未來に於ては、過去と同じように、社會主義や共産主義のいかなる形式が行はれようとも、全ての最善の仕事は有志によつて、何等の報酬を受けず、内部からの衝動によつて爲されることを吾々は期待せねばならぬ。萬人の機會は均等となるので、さういふ仕事が在來よりも遙かに多くなる望みがある。けれども若し國家が、その學校で統一ある計畫に隨つて年少者の心をこね上げる仕事に着手したならば、さういふ仕事は跡を斷つであらう。官僚の徒にとつては不便であることも、思想の自由は極度に奬勵しなければならぬ。志願による教師——特に幼年時代がすぎた後には——のために道を開かねばならぬ。其等は單に生活のためでなく、教へむと欲するがために教へる人々である。

人生の必需品の供給以外のことには、すべて個人主義個人的創意及び多樣の變化が行はれねばならぬ。自由に對する戰ひは單なる現在の經濟組織の變更によつてかち得ることは出來ない。それは官吏の專制に絶えず反抗し、精神的自由こそは、あらゆるよいものゝ中で最善のものであるといふことを絶えず心に留めることによつてのみ得られるのである。機械主義にはその持場がある。その持場とは人生の物質的方面であり、それなくしては吾々が生活し得ぬ衣食住の供給である。けれどもそれは人生を生き甲斐あるものにするもの、即ち藝術や思想や友情や戀愛や、單なる享樂に關與することは許されない。是等のものは自由を——單なる外面的自由でなく——吾々の理智や感情の自由を要求する。かういふ自由は現代の學校、及び社會改革家の計畫の中に、一向尊重されてゐない。この自由は純然たる物質的目的が幅を利かしてゐるために失はれさうな危險に瀕してゐる。けれどもいかなる組織の完成を以てしても、これが喪失を償ふことは出來ない。吾々が、人はパンのみにて生くる能はずといふことを記憶せぬ限り、これが失はれて行くことを防ぎ得るものはないのである。

Mechanism has its place: its place is the material side of life, the provision of the food and clothes and houses without which we cannot live. But it has no place in what makes life worth preserving, in art and thought, in friendship and love, or in simple enjoyment. These things demand freedom—not only outward freedom, but freedom in our minds and hearts. Such freedom is too little respect in our schools and in the schemes of our economic reformers. It is in danger of being lost through the tyranny of purely material aims. But no perfection of organization can ever compensate for its loss; and nothing can prevent its loss unless we can remember that man cannot live by bread alone.

enemies, but not our own sins, thus indignation produce merely an increase of mutual enmity. Americans, for example, know the atrocities of which Japan has been guilty in Korea, which are unknown to nine Japanese out of ten; Japanese, on the other hand, know the worst that is to be said about the lynching of negroes in America far better than Americans do. Thus hatred is stimulated on both sides, and nothing is done on either side to check the evils. Indignation against the criminal is seldom useful; what is useful is compassion for the victim, and willingness to face the fact that it is not only our enemies who make victims. I think, however, that in education it would be more useful to dwell upon the interconnection of different parts of the world than upon what may be called humanitarian arguments. It is easy to see and to teach that we cannot ruin our enemies without ruining ourselves, and that, from mere self-preservation, enmities between nations cannot continue if the world is to maintain its present population.

As to the second point—the freedom of the individual—this is quite peculiarly a matter for the educator, because the freedom that we can hope to preserve is rather mental and spiritual than economic or material. Industrialism has made it necessary that, in what concerns the material side of life, men should co-operate in vast organizations. It is just that the community should exact from every able-bodied adult an amount of productive work corresponding to what he or she consumes. It seems inevitable that, as regards this necessary minimum of labour, there shall be less freedom in future than has been enjoyed hitherto by the fortunate minority. But if we could abolish wars and armaments and advertisement and the waste of commercial competition, we could all subsist comfortable on four hours' work a day. The rest of our time ought to be free, and education ought to prepare us for an intelligent use of the twenty hours a day during which we should be left to our own initiative. In the future, as in the past, whatever form of socialism or communism may be instituted, we must expect that all the best work will be done voluntarily, without reward, owing to an impulse from within. Given equal opportunity for all we may hope that there will be much more of such work than there has hitherto been. But there will be none at all if the State, in its schools, sets to work to mould the minds of the young according to a uniform plan. There must be the utmost encouragement to freedom of thought, when it is inconvenient to bureaucrats. There must be opportunities for voluntary teachers—especially after childhood is past—who will teach because they wish to do so, and not merely for a livelihood.

In everything that lies outside the provision of the necessaries of life, there must be individualism, personal initiative, variety. The fight for freedom is not to be won by any mere change in our economic system. It is to be won only by a constant resistance to the tyranny of officials, and a constant realization that mental freedom is the most precious of all goods.

essential conditions of progress, without them, society must rapidly become stereotyped. The tyranny which threatens us in the future is not so much that of any privileged class, as that of the energetic people who like politics and administration. Formerly, the power of such people was very limited; now, owing to industrialism and the consequent destructiveness of wars, the power of the State is enormously greater than ever before in the history of mankind. If there were only one world-wide State, the danger would still exist, but would be easier to combat. Owing, however, to the existence of many States, the main purpose of every great State is success in war, and it is to this end that the immense power of the State is chiefly devoted. This end is not served by the preservation of individual initiative, and thus the tendencies to a mechanical enslavement of ordinary men and women are enormously strengthened by the need of preparing for war. It is impossible to exaggerate the harmful influence of these tendencies upon education in all the leading countries of the world.

It may be thought that I have strayed rather far from the subject of education in the course of these remarks. But a system of education embodies the ideals of the society which establishes it, and cannot be radically reformed except by a reform of ideals. If I had to direct the training of teachers, there are two things that I should specially impress upon them:

First, that a man's public duty is towards mankind as a whole, not towards any subordinate group such as a nation or class;

Secondly, that a good community is a community of good men and women—of men and women, that is to say, who live freely but not destructively or oppressively.

As to the first point, I should try to bring about a realization of the disaster which faces our civilization if science invents continually new means of destruction without being counter-acted by a simultaneous ethical advance. Many people see the danger, but few are willing to dissociate themselves from the governmental and popular forces which are making for new wars, and few are willing to face the fact that patriotism, in its commoner forms, is the worst vice of which a modern man can be guilty. To bring a realization of these things should be part of the business of every educator; he should try to teach impartiality of judgment, the habit of searching for impersonal truth, and distrust of party catchwords. He should try also to counteract the natural tendency to believe that men belonging to opposing groups or nations are specially wicked. Under the influence of skilful propaganda, our impulse to moral indignation is exploited to make us hate those whom our masters wish us to hate; and under the influence of the resulting hatred, we do things which rouse the moral indignation of those whom we hate. Thus moral indignation has become a source evil in the world. Punishment is seldom the best way to deal with men's imperfections, and there is hardly anyone so blameless as to have a right to administer it. As things stand we know the sins of our

larly the Kaiser and Junkers sought the good of "Germany," as opposed to the good of Germans; but it happened that the good of "Germany," as they conceived it, coincided with that of the Kaiser and the Junkers. And to come nearer home, those who glory in the British Empire are willing that for its sake all its citizens should suffer—excepting, of course, those who govern it, who will have the pleasure of contemplating the sort of Empire that suits their tastes. One might say the same of the industrial and financial magnates in America, and of governing persons generally. All such persons, unless they are very much on their guard against the administrators fallacy, will have a conception of the public good which is unconsciously biassed so as to secure their own good.

It is not merely the injustice of this view that constitutes its harmfulness; it as still more (which was my third point) the second-rate and mechanical quality of the goods valued by the ordinary administrative temperament. The great artists, the great thinkers, and the great religious teachers of the world have had quite other standards; they have valued the individual, they have praised spontaneous impulse, they have conceived the good life as one lived from within, not forced into conformity to an external mechanism. They have not sought to make men convenient material for the manipulations of rulers, but to make them spiritually free to pursue what they believed to be good, and regardless of law and public opinion. This was the teaching of Christ, of Buddha, of Lao-Tze; in another form, the same emphasis on the individual is to be found in Shakespeare, and in Galileo's resistance to the Inquisition. All that is best in human life depends upon a certain kind of self-respect, of self determination; a man who has allowed outside pressure to dictate the ends for which he shall live can never be more than a slave.

Our modern State education is mainly designed to produce convenient citizens, and therefore dare not encourage spontaneity, since all spontaneity interferes with system. There is a tendency to uniformity, to the suppression of private judgment, to the production of populations which are tame towards their rulers and ferocious towards "the enemy". Even if our civilization escapes destruction in great wars, this tendency of State education to produce mental slavery will, if it is not checked, kill out everything of value in the way of art and thought and even ultimately of human affection. And it inevitably kills the joy of life, which cannot exist where spontaneity is dead.

It must not be supposed that democracy, by itself, offers any cure for these evils, which come from the intensity of government and are independent of its form. Wherever there is great intensity of government, effective power is in the hands of officials, and the bias of officials (apart from rare exceptions) is always towards mechanism. A majority may be quite as oppressive as a minority; and the champions of any new good thing will hardly ever be a majority. Room for individual initiative, absence of uniformity, are

contemplating a certain kind of State, and almost inevitably falls into the habit of thinking that this kind of State is good. A man of administrative temperament finds pleasure in contemplating a State in which there is a great deal of administration, where there is a tidy system, and every person has his place as a cog in the machinery. Such a State will be intolerable to men of different temperament, for instance to artists. But such men, just because of their temperament, will not become politicians or civil servants or captains of industry. Thus one kind of temperament, and that not a very common one, is, in practice, alone concerned in establishing what it considers the "good of the State." This kind of temperament, so long as the "good of the State" is believed in, will feel free to force its tastes upon the community, since they are supposed to be the tastes of the personified State. This means a persecution of decent people by busy-bodies, and a gradual crushing out of art and thought and simple enjoyment of life.

Men who advocate what they call the "organic" view of the State always imagine that what they believe is an antithesis to mechanism. This is a most curious delusion. A machine is essentially organic, in the sense that it has parts which co-operate to produce a single useful result, and that these separate parts have no value on their own account. A machine may not be so perfect an example of an organism as an animal is, but we can make machines and we cannot make animals. Therefore when we are exhorted to make society "organic", it is from machinery that we shall necessarily derive our imagination models since we do not know how to make society a living animal. Moreover, nothing has done so much to make communities organic as the introduction of mechanical industrial processes, which have necessitated the co-operation of vast organizations in great enterprises such as railways, and have made men, through the need of commerce, far more dependent on other men than they were in simpler times. Thus mechanism, in the concrete form of machinery, ministers to the belief in the "good of the State," and in turn dictates the form which that belief is to take. The good of the State consists in having as much machinery as possible, regardless of what it produces, whether useful commodities or poison gases.

It is interesting to note that the Bolsheviks, who, as disciples of Marx, have retained what Marx retained of Hegel's teaching, are among the most ardent believers in the good of the State as opposed to the good of the citizens. Their aim—I speak of those who are public-spirited and not self-seeking—is to produce a certain type of society, which they believe to be good in itself, quite regardless of the question whether it will bring happiness to those who have to live in it. One cannot but observe (though they themselves are unconscious of the fact) that the society they aim at would bring happiness to vigorous administrators having a good position in the official hierarchy, probably to no one else. Simi-

munity having certain qualities; I do not suggest that Robinson Crusoe could have as good an existence as (say) an Athenian citizen in the age of Pericles. (Perhaps the age of Pericles was really no better than our own, but it is correct to suppose that it was good, and I accept the supposition for the sake of illustration.) The fallacy that I am attacking is not the obvious truism that certain kinds of communities are a means to good things in the lives of their citizens, but the quite different proposition that, when account has been taken of all the good things in individual lives, there remains something good or bad belonging to the State or community as a personified entity. This doctrine was preached by Hegel, and adopted by his British disciples. It has an elaborate logical foundation, which I believe to be wholly erroneous, for reasons which I have often set forth. On the present occasion, it is its consequences, not its premises, that I wish to examine.

Those who accept this theory of the peculiar value attaching to States or communities as such call their theory the "organic" view of society. This name is somewhat misleading, for it is of course an obvious truism that a society is more or less organic, in the sense that it has interrelated parts which minister to common ends as the parts of an animal's body minister to the life of the whole. The obviousness of this fact makes people willing to accept without much scrutiny a view which says that it is only asserting the organic nature of society. But in fact the sociologists in question use the word "organic" in a peculiar philosophical sense of their own. They mean that a society is a single entitly with a life of its own, not merely a number of more or less co-operating interrelated persons. They would argue that a person enjoys good things which belong neither to his head nor to his arms nor to his great toe, but to him as a single whole, and that, in like manner the State enjoys good things which are not to be found in the lives of single citizens. And they generally contend also that the highest function of the citizens is to minister to the life of the State, just as the highest function of the various organs of a man's body is to minister to the life of the man. Thus our duty to the State becomes something more imperative than our duty to our neighbour, and the good of the State might conceivable have to be pursued by measures involving injury to the great majority of its citizens.

In practice, this view leads to the advocacy of an aristocratic and mechanical society. "The good of the State" is, in practice, "the good of the Statesman." I do not mean this in a crude sense; by the "good of the Statesman" I do not mean merely his wealth, or any of the things which conventionally constitute the aims of self-interested people. These things may, of course, be involved, but a high-minded man will be on his guard against them. There are other subtler forms of selfishness against which men are much less on their guard, and to which they are likely to succumb unconsciously. A man who is in the habit of thinking about the State finds pleasure in

others, education ought to aim at the control of crude instinct by a rational provision of consequences, and at the training of instinctive passions so as to help rather than hinder the life of the world. At present, in private life, very few of us are murderers, though in a savage community of head-hunters most men are, and sometimes public opinion does not allow a man to marry until he can produce at least one head as a proof of his manly prowess. In such communities, everything is done to strengthen the instinct towards private homicide, which among ourselves is successfully repressed except in unusually violent people. But as regards public homicide, in war, the line taken among ourselves is exactly analogous to that which head-hunters take as regards private homicide. The methods which have enabled us to overcome the instinct of private murder would enable us to overcome the same instinct when it takes the form of love of war. Such methods ought to be used in education, instead of the present methods, which nourish the little seed of instinct until it grows into the vast tree of national armament and international suspicion.

The feeling that mankind are all one family, and that the division into nations is a trivial folly, could very easily be produced in the average boy or girl if education were directed to that end. A book like Well's history of the world, which begins with the geological and biological antecedents of the human species and treats human progress always as a single movement to which many nations have contributed, is likely to produce a far broader and more humane outlook than chauvinistic teaching about Agincourt and Trafalgar, or Lexington and Saratoga. Perhaps it may be necessary to the due exercise of all our instincts to have some object of hatred. In the middle ages, the Devil could be hated without harm to human beings; but in our time few people have any vivid belief in his extence, in spite of the war and the peace. We must therefore find some other non-human object of hatred, if men are to be prevented from hating their neighbours in other countries. One might hate matter, like the Manichaeans, or ignorance, or disease. To hate these things would do good; and by a little symbolism it could be made to satisfy our instinctive craving for hatred. But to hate other groups of human beings can only do harm, and it is monstrous that education should aim at instilling such hatred by means of lies and suppressions. Yet such is the case in every one of the great nations, except China, which is bullied and despised in consequence.

I come now to the second error which, as I think, mechanism has encouraged in our education: the error of imagining that the State, or the community as a whole, is capable of some different kind of good from that which exists in individuals, and that this collective good is somehow higher than that which is realized in individuals. This belief constitutes what I should propose to call the "administrator's fallacy." It is, of course, by no means a fallacy to suppose that an individual can only enjoy the best life when he lives in a com-

an article of faith, but in fact there is abundant evidence of it. The case of nationalism is admirable as an illustration. The text-books out of which history is taught are known by every Education Minister in the world to be deliberately and intentionally misleading owing to patriotic bias. It is not merely that the history taught is false, the really bad thing is that its falsehood is of a sort to make wars more likely. Much is said by socialists, very justly, about the importance of internationalism in the economic sphere; but internationalism in the educational sphere is at least as important. If children in all civilised countries were taught the same history different countries would hate each other less, and no country would feel so confident of victory in an appeal to arms. Text-books ought to be drawn up by an international authority, which should direct the training of historical teachers. The present practice increases each nation's belief in its own righteousness and power and therefore its willingness to go to war. Indeed this appears to be the reason for which the present mendacious teaching exists. So great is this evil that it may well be found, in the end, to outweigh all the good that is done by instruction. The illiterate peasant in Russia or China is not a nationalist, because he cannot realise anything so large or abstract as his nation; when his country is at war, he regards it as an affair of the government in which his part is limited to reluctantly obeying orders. This is the reason why Russia and China cannot do so much harm to other countries as is done by England or France, or was done by Germany. Of Russia and China develop elementary education on the lines which Western nations have made familiar, they will be able to rely upon their vast populations for the degree of patriotic blindness which made the late war possible; and when that happens the little nations of Western Europe will be sorry that, like Macbeth, they taught

> Bloody instructions, which being
> taught return
> To plague the inventor.

All the accumulation of horror which lies before us through the growing virulence of nationalism would be prevented if education aimed at teaching facts instead of fictions, or if education authorities could conceive of boys and girls as future citizens of the world, not only of the particular geographical area in which they happen to live.

It would of course be unfair to put down the whole pugnacious nationalism of our time to faulty education. Loyalty to one's group, pride in its achievements (real or imaginary), and hostility to rival groups, are all part of the instinctive apparatus of man. All that has been done by education is to appeal to this instinct, and to direct it into a certain channel. The men who direct education are themselves subject to it, and do not consciously or deliberately go against what they believe to be right. It is quite possible that, when they come to realize the imminent collapse of western civilization as a result of their yielding to instinct, they may come to understand that, in this respect as in many

mechanism, but has been enormously strengthened by the way in which industrialism has been developed nationally, so that the connection is very close in fact, if not in logic.

Of course the basis of any public educational system must be the imparting of that necessary minimum without which a man cannot play his part in a modern community. It is necessary that everybody should be able to read and write, add up a column of figures, and so on. As time goes on, the State increases the minimum of knowlege, which may come gradually to be quite considerable. But I am not concerned to discuss this basis, important as it is, since it may be taken as agreed. I am concerned rather to discuss those things as to which disagreement is possible.

In the course of instruction, a schoolmaster has the opportunity to instil certain mental habits. It is here that disagreement begins; what mental habits shall he teach? There are all sorts of possibilities. Jesuits, in the process of giving admirable instruction, taught their pupils to accept unquestioningly the dogmas of the Catholic Church. American elementary schools teach the children to become 100% Americans, i.e. to believe that America is God's own country, its constitution divinely inspired, and its millionaires models of Sunday-school virtue. English elementary schools teach that our Empire is great and beneficent, that it has never oppressed India or forced opium on China, that it has been invariable humanitarian in Africa, and that all Germans are wicked. Russian elementary schools teach that communists are virtuous, anarchists wicked, and the *bourgeois* misguided; that the social revolution is imminent throughout Europe; and that there cannot be any imperialism in the communist party because all imperialism is due to capitalism. The Japanese teach that the Mikado is a divine beings descended from the Sun Goddess; that Japan was created earlier than other parts of the earth; and that it is therefore the duty of the Chinese to submit meekly to whatever commands the Japanese may lay upon them. I have no doubt that similar doctorines are taught in Uruguay, Paraguay and San Marino — each of which is specially favoured by Heaven, and vastly more virtuous than its neighbours. In short, wherever a sovereign government exists it uses its monopoly of the teaching of writing and reading to force upon the young a set of ridiculous beliefs of which the purpose is to increase their willingness to commit homicide. And for the sake of these beliefs, mental habits of a peculiar kind are also encouraged: credulity, blind prejudice, and group ferocity all of them characteristics natural to primitive man, which education might have been expected to soften.

The governors of the world believe, and have always believed, that virtue can only be taught by teaching falsehood, and that any man who knew the truth would be wicked. I disbelieve this, absolutely and entirely. I believe that love of truth is the basis of all real virtue, and that virtues based upon lies can only do harm. Perhaps I should in any case believe this as

Freedom in Education.

A Protest Against Mechanism.

By Bertrand Russel.

The difference between the age in which we live and all previous ages is mainly due to the invention of machinery. It has been found that machines will make satisfactory pins much more easily than they could be made before. It has been inferred that human beings also should be made by machinery, and that those who do not like the machine-made product are old fossils, who have no place in the modern world. This view is influencing education increasingly in all industrially advanced countries. The evils which it entails are by no means confined to education, but it is the educational aspects that I propose to deal with on this occasion.

I believe that every thing really valuable in the life of the mind will be crushed out among the white races if the attempt to assimilate men to machines continues. Machines are admirable servants, but until we have made them *mere* servants we shall not reap the benefit of their services. At present they threaten to become our masters, spiritually and materially. Against this tendency it is very necessary to be on our guard, particulary as it shows itself in the education to which the leading democracies of the world are subjected.

There are two aims which an educational system may endeavour to realize: to make good citizens, or to make good human beings. Conceived broadly and philosophically, these two aims do not conflict; but conceived narrowly, as administrators are likely to conceive them, they conflict very seriously. The man who is imbued with the mechanistic outlook will try to make good citizens rather than good men, and will conceive good citizenship in a way which almost excludes good humanity. In the notion of good citizenship as conceived by governments I see three disastrous errors:

First, each man or women is conceived as the citizen of a single State, not of the world;

Secondly, the State or the community is supposed to have a good other and higher than that of its several citizens;

Thirdly, the good is conceived as something which can be realized by purely mechanical means, not as something dependent upon the mental quality of individuals.

The first of these errors, namely nationalism, has no intrinsic connection with

眞に民衆の政治たらしむるには

民衆政治を超越して

長谷川如是閑

政治が民衆の爲でなければならないと云ふのは、決して近代の思想ではなく、何ちらかと云へば寧ろ古代的思想である。ギリシヤの思想にも、ローマの思想にも、ゲルマン系の思想にも、東洋系の思想にもそれがあつた。

之は思想の發達以後に發生したことではなく、思想以前の事實に發程してゐるのである。原始的に政治が持つてゐた形式から政治と民衆とは必然に結び付いてゐたのである。卽ちギリシヤの種族國家の形式は、國家思想が先に出來てさう云ふ國家が發達したのでは無く、思想以前の國家事實がさうであつたのである。ゲルマン民族の全員の政治とも云ふべき會議的の政治も思想と沒交渉にその以前から成り立つてゐた事實である。故に政治の民衆的發達は極めて原始的事實なのである。

斯様の原始的事實が專政政治に依つて破られたについては色々な觀察があるが、その原因は何んであるにかゝはらず兎に角專政政治は民衆の政治に較ぶれば後發的である。そして如何なる場合に於ても一時的であつた。一時的と云つても千年や二千年は續いたこともあるし又は百年も續かなかつた例もあるが兎に角、それは必ず民衆的勢力で破られた。新しい專政々治が前の專政々治を打ち破る場合にも民衆の力を借りないでは成し得なかつた。それ程政治と云ふものは民衆の上に組立てられてゐた。それは元來政治が民衆の生存の爲めの制度だからである。

政治の、制度としての本質から大規模に專政を打ち破つたのが所謂る近代的民衆政治である。それは近代の交通の發達に伴つて、世界的事實として現れたから歴史的に重大の現象となつ

たのである。然し性質上それは必ずしも近代的のものではない。從つて思想としても古代思想の中に屢々見出された所のものなのである。

政治は斯樣にして本來民衆的のものであつたと云ふが、然も政治に於ける民衆と云ふものは、右の古典的の意味に於ては甚だ局限されたものであつた。人民と云ふ言葉は、西洋では所謂市民の意味であつて、或る特權を持つた人間に限られてゐたのである。市民はギリシャの都市國家の人民から出た名稱であるが、何處の國の人民でも、此の意味の市民としての特權を持つものだけ人民であつて、此の特權を持たないものはその範圍外に置かれてゐた。從つて、文明の發達した後は、人民となるには權利の爲めの爭ひを必要とした。ローマの貴族政治に對して、人民が權利を爭つたのと同じ爭ひをしなければならなかつた。そのことは、人民と云ふものは一種の特權者たることを現した事實である。

これは何處から起つたことであるかと云ふに、元來人民なるものは一般に奴隷の使用に依つてその生產的生活を全うすることを得た一階級であつたと云ふことから起つたのである。即ち民衆的と云ふと、階級を無視した平等觀念であるが如くに思はれてゐるけれども實は、それは既に人民と云ふ一特權階級のことだつたのである。

此の意味は近代に於いても決して違つてはゐない。近代に起つた民衆の政治と云ふのも畢竟市民と云ふ特權階級の要求に外ならないのである。民衆の政治と云ふことは、それ故に彼等が考へてゐるやうな、平等博愛に立脚してゐるものではない。彼等は彼等の特權が專政者に依つて奪はれたことに對して反抗したのである。そして結局勝利を得たのであるが、その勝利は彼自からに依る特權の支配を建設したのである。近代のデモクラシーは、矢張り特權階級の支配であつたのは當然のことに過ぎない。

だから、民衆の政治を持ち來すと云ふことは、何れの國に於いても特權階級の支配を持ち來すことであつたのである。然し之は政治の原始的事實に一致してゐることであつて、元來政治と云ふことが始めに云つたやうに奴隷の生產に依賴する市民の支配形式であつた當然の結果に過ぎない。日本でも、傳說に依ると八百萬の神々が神集ひに集つたと云ふことであるが、これは確かにゲルマン系の全員の政治を思ひ出させる事實である。即ち民衆が合議に依る政治を行つた意味に取れる。然もその集つたのは神々であつて、人間を除外してゐたと云ふことは、その

民衆の政治が被征服者（生產階級）を除外した特權階級の集合であつたことを思はせる。政治と民衆との關係は各國共此の日本のそれと違つたものではないのである。

政治を民衆化すると云ふことは古代に於いても近代に於いても、そんな風に矢張り階級の支配を建設することであるから、その効果は、今迄の歴史が繰返した興亡の事例を反復するに過ぎないことになるのである。

そこで近代の生活が此の形式で異常の發達を遂げた結果、行き詰りの運命に到達したと云ふのは、過去の貴族階級の專政々治が行き詰りに到達したのと、ちつとも變つた現象ではないのである。

斯樣な行詰りに對して何時も必ず繰り返さるゝのは、專政的傾向の復活である。ギリシヤならば必ずタイラントが現れる。それは明君であつて民衆政治の腐敗を矯正したのである。今日にも又同じ傾向がある。今日のタイラントは個人的ではなく階級的であるが、兎に角、優越者の特權にもとづいてその支配を堅めやうとするのである。その優越は或ひは經濟力であり、或は武力であり、或は智力であるが然し根柢に於いて近代的條件に立脚した勢力即ち經濟的優越にもとづいてゐるのである。伊太利のファシスチでも腕力的であるやうだが、實は經濟的優越階級の代表者に外ならない。フランスの軍國政治も資本國たる餘儀なさからであつて、經濟的根據に立つてゐるのである。獨逸の民衆政治が資本家の手に歸したのも同じである。ロシアの專政々治は資本家的優越の上には立つてゐないが生產階級の優越の上に立つてゐるのであつて、その根柢は經濟的である。何れにしても所謂民衆的政治に代るに專政的傾向を以つてしゐる傾があるのである。

然し乍ら斯樣な反動的傾向そのものが即ち民衆の政治そのものに外ならないのである。昔から民衆の政治と云へば特權階級の政治であつたこと、前述の如くであつて、今日の專政的傾向が、特權階級を代表してゐるのと何の變りもないのである。

民衆の政治と云ふものはさう云ふものである。だから人々が「民衆の政治」と云ふ時に自分達の特權を根柢に置いてゐるのは心理上の事實である。此の意味で民衆の政治が實現されたところで、社會的に大した變革が起り得る筈はない、一つの階級に代る他の階級の支配と云ふことで歴史の復習である。

然らば此の因習的の繰返しが現代人の要求であるかと云ふに決してさうではない。現代的要求は此の因習的繰り返しに對する對策から成り立つてゐる。それは長い間の歴史が全く除外し

てゐた人間を歴史の圏内に導き入れやうとする運動である。即ち市民と云ふ限られた特權階級の權利要求ではなく何等の特權のない奴隷階級の社會的生活要求である。

だからその要求には今迄の市民の權利要求が目的にしたものを目的としてゐない。詳言すればそれは、支配を要求するのではなく、生活を要求するものである。だから自己の政治を要求するのではなく自己の社會的生活の充實を要求してゐるのである。尤も市民の要求も勿論彼等の社會的生活の充實を求めるのであつたが、然し彼等は支配の形式に於いてでなければそれが求められないと云ふ組織の上に立脚してゐた。即ち、彼等は政治の支配樣式に目的を置いて觀念的にそれを必然の精神要求としてしまつてゐた。言ひ換れば彼等は精神的に「支配」をなければ生活の最高目的を摑んだとは思はなかつた。それが奴隷の生産に立脚した生活組織の社會構成の上に立つた人間の必然の運命である。

之に反して社會生活そのものの缺乏の爲めに、絶えず窮迫を感じてゐた階級の要求は、第一目的が社會生活そのものゝ充實にあるべきは當然である。然してそれを充す手段として政治も要求され、腕力も要求され、智力も要求されるけれども決して政治的支配、腕力的支配、智的支配……そんなものを究極の精神的要求としてゐるのではない。そこが所謂民衆の政治と現代の社會的要求との食ひ違ふ所以である。

汝選むこと勿れ

室伏高信

政治を民衆化することは不可能なことだ。民衆化すると云ふのはデマゴオグの言葉だ。政治は本來民衆的なものではない。反民衆的なものだ。政治と民衆とは相容れるものではない。デモクラシイとは永い間政治の形體だと考へられてきた。この位ひ間違つたことはない。プラトオ、アリストオトル以來そういふ風に考へられてきた。しかしデモクラシイと云ふものはまだ

嘗つて政治の組織として現はれたことはない。プラトオは政治の形體を王制と貴族制とデモクラシイとに分けた。デモクラシイとは多數の支配と云ふ意味であつた。しかし多數は嘗つて支配したことはなかつた。多數は何時でも支配されてきた。ギリシヤでもロオマでも近代ブルジョア國でも若しくは共産ロシヤでも多數は常に踏みつけられてきた。人間に智慧がついておだてたりだましたりしなくては云ふことをきかなくなつた時にデモクラシイと云ふ聲が出てきた。そこには人間的なほんとうの聲がある。自由が世界觀の中心問題であるように、政治や、社會問題の中心問題である事はこの點からでなくては了解ができないのだ。デモクラシイは魂の聲なのだ。だから不朽の聲なのだ。だから政治に組上げることは不可能なのだ。Reich der Seeleであつて Mechanik des Geistes ではないのだ。多數とか少數とか云ふこととはかゝわりがないのだ。二二天作の五では理解ができないのだ。科學のような算盤問題ではないのだ。算盤をいくらはぢいても分らないように算盤を知らなくても悟得することができるのだ。それを學者や政治家や野心家が昔からデモクラシイを政治の形體だといふてきた。多數の支配だと云ふてきた。この位ひ欺瞞的なことはないのだ。デモクラシイは支配ではない。支配の逆なのだ。反支配なのだ。多數の支配と云ふ言葉からして自家撞着ではないか。多數が支配者だと假定せよ。支配の必要がどこにあるのか。だまつてゐればいゝではないか。多數の意思が一致したら、もうどうしなくてもいゝではないか。手を拱いてゐれば萬事が解決するではないか。多數が金持だと假定せよ。大多數が金持で少數が貧乏だと假定せよ。貧乏人が尊敬されて金持が馬鹿にされる。皆が貧乏にならうとする。金持とは何か。紙幣だ。金貨だ。ダイヤモンドだ。人工寶石だ。足に豆のできる細い靴だ。夏の暑さにでも羽織を着る人だ。窮屈を我慢してフロツクやシルクハツトを着てゐる人だ。そんな人が多數になつたら幾ら金持の頭が悪くても貧乏人の羨やましさを悟るであらう。つく〴〵貧乏になりたくなるだらう。多數の人が支配者となつた時は支配のなくなつた時だ。世の中は逆に立つてゐることはできないのだ。多數が支配せよと云ふことは世の中が逆に立つと云ふことなのだ。でアリストオトルはデモクラシイを全體の支配だと云ふた。彼は「全體」を崇拜した。「全體としての人民」を神だと考へた。全體としての人民の支配、ポリテイを政治の理想だと考へた。それが可能だとも考へた。王制は不可能だと云ふた。後の政治學者はプラトオやアリストオトルを尊敬してきた。馬鹿々々しいことだ。全體としての人民の支配とは何か。そんな人民がありうるか。楠正成・

乃木希典、村野常右衛門、ムツソリニと言ふ愛國の人民は實在する。大杉榮、堺利彥、山川均、レニン、トロツキイと云ふ非愛國の人民は實在する。しかし楠正成と大杉榮とを如何ように加減乘除しようとも全體としての人民は出てゐない。

$(大杉榮-楠正成=〇、\frac{村野常右衛門+ムツソリニ}{堺利彥+レーニン}=〇)$

加減乘除で出てくるのは零ばかりだ。「全體としての人民」とは零のことなのだ。零が支配することは有りえないことだ。零の支配となつた時は無支配の時だ。「全體としての人民」が支配することは無支配と云ふことだ。昔からたゞの一同だつて一日だつて「全體としての人民」が支配したことなぞはありはしない。ポリテイの存在したことはないのだ。アリストオトルはノンセンスをいふたのだ。支配は何時でも一部が他の一部を征服する事だ。平家でなければ源氏だ。豐臣でなければ德川だ　村野常右衛門でなければ堺利彥だ。その一部の支配者とは一部の少數者と云ふ意味だ。政友會が支配すると云ふのは政友會が少數だからだ。頭のよくない人から見ると政友會は多數黨だから支配すると云ふ風に見える。學校でそう敎へてゐる。吉野作造の政治學がそう敎へてゐるのだ　欺瞞はいゝ可減で止めるがいゝ。政友會が國民の多數だと假定せよ。政友會が誰れを支配するのか。支配の相手がどこにあるか。憲政會を支配するのか。三木武吉の野次を支配するのか。政友會は憲政會を支配するの團體なのか國民を支配する團體なのか。政友會が若しほんとうに國民の多數の團體だとしたら政友會は腦病になつて轉覆する。日本の國家がひつくり返つて政友會が上から下へ落ちる。支配者から被支配者になる。その途端に憲政會が上になる。支配者になる。三木武吉が政友會に號令する。今日はブルジョア階級が支配階級だと云ふ。それはブルジョアが少數だからだ。多數になつたら支配されるのだ。プロレタリヤは多數だから支配すると云ふのは欺瞞だ、共産黨宣言ではプロレタリヤの運動が「非常の多數人」の運動だと云ふてゐる。國によつてはその通りであるかも知れぬ。それが革命運動である間はそうなのかも知れない。被支配階級であるからだ。しかし革命後はそうは行かない。レニンがクレムリン宮殿の居心地のいゝ椅子による。各國のボルシエヴヰキが崇拜する。ロオマの奴隷がシイザアを崇拜したようにプロレリリヤがレニンを崇拜する、革命までは誰もレニンの名を知らなかつた。知つてゐる人も何微はしてゐなかつた。レニンがクレムリンに坐つてから各國からの巡禮が始まつた。レニン病者や、小役人になりたい人や、役人と結托して革命のどさくさまぎれに一儲けしようとする連中がロシヤではどし

〳〵共産黨に入つた。それでも共産黨員は六十萬を出はしなかつた。今では三十五萬といはれてゐる。プロレタリヤが天下をとつてから「プロレタリヤ」は三十五萬となつた。あとのものは半プロレタリヤ、ブルジョア、反革命。ウランゲル、コルチヤク、デニキン、セミヨノフ、ケレンスキイ、ウンドゾウイバイタアである。それが一億五百萬からある。プロレタリヤが三十五萬でブルジョア、半ブルジョア、半革命が一億五百萬である。こゝにおいて「プロレタリヤ」は支配者である、プロレタリヤの支配が可能である。ロシヤが轉覆しなくてすむのはこのためだ。革命の聲が八釜しくてしかもロシヤに眞に革命のないのはこのためだ。日本が縱令ボルシエヴヰキの仲間入りをするようになつても同じことだ。堺利彦がレニンになつて見たところで堺利彦が多數であるからではないのだ。今の堺利彦が原稿書きでやつとのことと三杯の飯を食べてるのは彼が少數だからではないのだ。彼が多數だからだ。こゝにほんとうのデモクラシイがあるのだ。若し堺利彦が少數になつたらその時は彼が支配する時なのだ。その時は社會主義者の堺利彦がタイラントの堺利彦となつた時だ。人間の從屬慾は限りを知らない。愚ろかな社會主義者は堺利彦を支配者にしようと考へる。彼をタイラントにしようとしてゐる愚者なのだ。愚ろかな官憲はまた堺利彦を少數にしようとしていろ〳〵の迫害をやつてゐる。少數にすることは支配者にする事だ。愚者中の愚者が堺利彦に斬りつけたと云ふことだ。堺利彦を英雄にしようとする企だ。偶像崇拜を止めよ。堺利彦は本來は平凡人だ。平凡人だから堺利彦なのだ。平凡人だからベタアなのだ。英雄はもう澤山だ。英雄傳の製造のためにわれ〳〵はこの地上に生れてきたのではないのだ。レニン、トロツキイ、ブハリン、ラデック、ヂノヴヰエフ、山川均、堺利彦、山川菊榮、荒畑寒村、ボルシエヴヰキはこれだけあれば澤山だ。これ以上ではクレムリン宮殿に入りきれないではないか。クレムリン宮殿に入りきれる人は少數だ。故に支配する人だ。入りきれない人は多數だ。故に支配される人だ。今日のラヂカリストの目はクレムリンを見つめてゐる。夢遊病者が人の心臟を睨むでゐるようにデマゴオグは人の弱點を覗ふ。宣傳の藥はまわり過ぎた。クレムリン宮殿の收容力を考へて見るがいゝ。レニンは當代の政治家である。遙々と尋ねて行つた巡禮者には握手もしてやらう。「國賓」の待遇もしようたゞそれだけだ。そして「今日は國務多忙だ。ゲノリセンよ、アウフビイダアゼエエン！」

人間の詭辯は限りを知らない。自己制限と云ふ理論が考出された。デモクラシイは人民の自己制限、自己支配だと云ふて

とが眞面目に論じられる、「全體としての人民」が支配するためにはSelbstherrschaft,Selbstbeschränkungがなくてはならないこととなる。しかし自己制限とは何か。學生が下宿屋の四疊半の壁に日課表を貼りつける。起床六時、八時登校、午後十時まで勉強。これが自己制限なのだ。克己的デモクラシイなのだ。今日日課表を壁に貼る。明日は忘れてゐる。明後日は剝ぎとつてそこに裸體畫を掛ける。これが自己制限なのだ。自己制限は自己撤廢なのだ。瞬間であつて持續ではない。また若しほんとうに自己制限ができるものと假定せよ。持續的に可能だと假定せよ。鋏が自己の一本の鋏をもつて他の一本の鋏を切りとつたと假定せよ。それは自己制限なのだ。そして自殺なのだ。自己制限は自殺なのだ。デモクラシイではなくて自殺なのだ。自己支配とは何か。內的支配なのだ。靈の支配なのだ。外的の何ものでもないのだ。從つて無支配なのだ。

四年ほど前に「哲學評論」でラスキの「多元國家」を讀むだことがあつた。アングロ・サクソンらしい實際的なユトピヤだ。しかも權力分立論の範圍を出でてはゐない。われ〳〵は橋造りから法王職へと跡を辿ることができるように、モンテスキユウからラスキまで跡を辿ることができるであらう。マエツの職分原理のことは他日詳細に意見を述べる機會もあるであらう。私たちはこゝに最も進歩した社會的政治學を見ることができるであらう。しかもそは遂に一つの微妙なメキヤニックである

政治を民衆化することは不可能である。政治は本來非民衆的である。民衆は本來非政治的である。政治の理想は民衆政治ではない。それは王制である。王制は政治の極致である。王制が不可能だと云ふ位ひ誤謬はない。アリストオトルは間違だ。王制ほど可能なものはない。歷史を、見るがいゝ。歷史は王制の歷史である。デモクラシイには歷史はない。デモクラシイは內的である。故に永遠である。眞のデモクラットは永遠人である。歷史人ではない。歷史は嘗て王制の歷史ではなかつたことはない。ネロからレニンに至るまで歷史は王制の歷史である。ネロだけが王ではない。ネロだけがタイラントではない。レニンも王である。レニンもタイラントである。吉野作造先生の政治學を習つた人は無論私の見方を笑ふであらう。レニンは選擧された人だと云ふであらう。如何にもその通りだ。ナポレオン三世のことを思へ。彼も選擧されたのだ。ルイ十四世のことを思へ。神に選まれた王なのだ。藪內治郎作のことを思へ、彼も選まれた、國民の選良なのだ。ロシヤでは嘗つてザアが神に選まれた。革命はリユオフを選むだ。やがてケレンスキイを選むだ。またやがてレニンを選むだ。「選民」は到るところに滿ちてゐる。選

むこと勿れ。人間の歴史は撰むだ歴史である。故に專制の歴史である。しかもほんとうに選まれた人がないようにほんとうに撰むだ人民もない。「選まれた王は」王ではない。ゴドウヰンがこういふた。汝、選むこと勿れ、選むことは自己喪失であるからである。汝、英雄崇拜を止めよ、自己冒瀆であるからである。自己を凝視せよ。仰いで星の靜に移り行くのを見よ。客觀は停滯である。主觀は Demogorgon である。そしてルソウの言葉を考へて見よ。主權は讓渡することはできない。讓渡した瞬間に主權は失はれたのであると。

如何にして民衆の政治たらしめるを得るか

堀江歸一

現代の政治に對する不滿

若しも日本現在の政治が常に民衆の爲めに行はれて居り、民衆の利益と云ふことが政治の第一の着眼點と爲つて、民衆をして其生活を樂ましめるを得る狀態であつたならば、私共は默して已むのみであるが、何分にも我國現在の政治に對しては、私の如き國民の一員として、常に大なる不平を感じ、不滿を覺へざるを得ざる次第であつて、就中不平不滿の大なるものとしては、政治が一部分階級の利害に偏私して、民衆の利害を蹂躙して、顧みない一事を擧げるに躊躇しない。勞働問題とか、稅制問題とか、物價問題とか、小作爭議問題とか云ふものは、何れも我國に於て民衆の利害に重大なる關係を持つものであつて、其解決の如何は幾十萬又は幾百萬の民生を支配するとも云ひ得られるであらうが、之を解決するに就て、政府に何か確乎たる信念があり、而して其信念は民衆の利害を尊重する方に動いたと見る可きかと云へば、私の今日まで實見した所では、政府は少

くの場合を通じて、斯る問題に臨んで、之を解決する誠意を持たない、時に之に手を觸れることがあるとしても、有産者階級の利益を發揚するに傾いて、無産者側の利害に就ては一顧だも拂はれない有様である。如何なる人が如何なる人々を集めて、内閣を組織した所で、此點に於ては、何十年の間を通じて、少しも異なる所を見なかつたのである。

藩閥軍閥官僚の内閣

從來我國に於て内閣の組織されるや、組織者の人物、其閲歴又は其内閣の基礎とする勢力の如何に依つて、藩閥内閣とか、軍閥内閣とか、官僚内閣とか種々の名稱を付けられた、是等名稱は何れも其内閣の特徴を最も簡單なる言葉の内に現はしたものであつて、内閣の首腦を以つて任ずる者は斯る名稱の如何に拘はらず、國家全般の利害に着目して、經綸を行うと考へても其見識に足らない所があつたり、又其人を圍繞する乾兒門下生の利己的行動に掣肘されたりして、自然一部の階級とか、出身者とかに偏私する政治を行はざるを得ざるに至つた。即ち藩閥内閣の下に於ては、薩長二藩の出身者又は之に準ずる者でなければ、政治の要局に當らしめないような關門が築かれたり、軍閥内閣であれば、軍人の偏見を以つて、國政の方針を左右し、軍國主義や、侵略政策の下に、軍人の活躍する天地を廣くすることの外に、何事をも知らなかつたり、官僚内閣であれば、官僚として單に若干の功勞を積んだ者が鰻上りに國務に鞅掌し、經綸の見る可きものを現はさず、而して一方に官僚と云ふ狹い境涯に居る者だけが官界の門戸を厳に閉鎖して、系統經歴の異なつた者の干與することを許さなかつたりして、爲めに幾多の情弊は政治なり、一般社會なりの到る所に發生し、人をして是等形式の政治の不可なることを實體的に感ぜしめるに至つた。

政黨内閣は如何

我國に於て識者階級に屬する人々が殆ど無條件に政黨内閣を謳歌し、遠くは民選議院に關する建白以來、又近くは明治二十二年の憲法發布翌二十三年の帝國議會開設以來、政黨内閣の成立と云ふことが國民多數の政治的理想と爲つたのも、要するに從來行はれた藩閥、官僚軍閥の其れ〳〵を基礎とした内閣の政治上に暴露した弊害を頭に刻み付けられた結果に外ならなかつた。我國に政黨内閣の組織されたのは、何時を以つて、其嚆矢とす可きであらうか。明治三十一年大隈板垣兩氏の聯立内閣も其以後政友會を基礎として組織された伊藤西園寺山本の諸内閣も、憲政會を基礎とした大隈内閣も或は政黨内閣に近いものと

云へるかも知れないが、最も之に近いものとしては、原内閣なり、高橋内閣なりを以つて、然りとすることを至當とする。固より是等の内閣に於ても、外務大臣が政黨外の人であつたり、陸海軍大臣が政黨に加入することを許されざる現役軍人であつたりしたことは、政黨内閣に不純の分子を混入した次第であつたが、他の諸大臣は何れも政黨出身者であり、殊に首相たるものは入つては内閣の首班であり、出でゝは一黨の總裁であつたことの如き、自ら政黨内閣の要件を備へたものと認められるであらう。

然らば斯る政黨内閣の組織された結果として、民衆の利益は果して如何なる點まで、保護され、又發揚されたであらう。私は今爰に原高橋兩内閣に依つて行はれた秕政を繰返すの煩に堪へない。然し其全體に就て見れば、私が屢々多くの場合に臨んで、公表した通り、極端なる全權者擁護を眼目とする政治が兩内閣に依つて行はれることを憚らざる次第であつて、財政上に於ては極度まで放漫なる方針を取り、經費を膨脹させて、之を民間に撒布して、積極主義を實行するものであると稱したり、經濟上に於ては、通貨膨脹の勢を助成して、物價の騰貴を刺戟し、經濟社會に人爲的好景氣を誘致し、世間を擧げて、投機財倖に狂奔せしめるに至つたりしたことは、今日尚ほ吾人の記憶に新なる所である。而して斯る經濟財政策は何人に利益を與へたか、原高橋兩内閣なり、政友會なりに接近する政治的商人をして浮雲の如き利益を漁するに至らしめたであらう、又政友會をして多くの地方に種々の利益を供へることに依つて、政治上の權勢を張らしめるを得たであらう。然も是等の利益たる、一般民衆には何等の關する所なきものである。啻に相關せざるばかりではない、右の如き誤まつた經濟財政策の行はれて、憚る所を知らなかつた結果、大正九年三月の恐慌に次いで、其後の不景氣を招き、其勢が次第に深刻と爲り、惡化に惡化を重ね、今日に及んで、未だ景氣挽回の端緒を開かないのは、要するに原高橋兩内閣に於ける經濟的秕政の齎した結果である。而して好景氣時代に望外の利益を占めて、政友會内閣に謳歌した虚業家の如きも、不景氣の加はるに隨つて、旣に收めた利益を盡く吐き出して、尚ほ足らない位の損失を蒙つては、今日依然政友會を讃美する勇氣を持つかどうか、私の疑を懷かざるを得ざる所である。

政黨内閣亦可ならず

斯く原高橋兩内閣に依つて、演出された最近の事例から判斷すると、私共は單に政黨内閣であると云ふの故を以つて、政治

を通じて、民衆の利益が保護され、發揚されるものとは考ふるを得ない。藩閥内閣や、軍閥内閣時代に比較すれば、今日は國民一般の知識が上進して居るので、同じく私利を漁するにしても、餘程巧智を極めるに至つた譯であるが、其れであつても尙ほ政友會内閣時代に暴露した滿鐵、阿片其他の不正事件なり、其前に醸された各種投機的事業に對する政黨員の醜關係の如きは、如何なる辯を以つてしても、其國民一般の利益を傷ける結果を生じたのは、掩ふ可からざる所であつて、而して斯る所業は一政黨に屬する一部對數者に不正不義の利益を與へて、國民を其犧牲とするものであることを知つたならば、私は所謂政黨内閣なるものに些の信用だも拂ふを得ざるに至るのである。

然しながら斯の如く政黨内閣が理想的好結果を生じないのは、政黨と民衆とが同一體と爲らない故であつて、若しも英吉利や亞米利などの家庭に於て屢々見るが如く、夫が統一黨なり共和黨なりの援助者であれば、妻は却つて自由黨なり、民主黨なりの贊成者であるが如く、國民の政治的趣嚮が二大政黨の分野に盡されたならば、政黨も自ら民衆の利害を代表するやうに爲るであらうし、又斯く民衆をして政治上に趣味を持たせるには普通選擧制を實行し、婦人にも選擧權を與へることを急務とすると云ふ說が起るであらう。私も此說に對しては、大體に於て、贊成を表する。然しながら普通選擧の實行だけで、直に政治の民衆化なり、又は民衆化された政治なりが行はれるものとしたならば、其れは聊か性急の斷案たる譏を免かれない。普通選擧其ものが一ツの政治的教育であることは、固より論を俟たない所であるが、政治をして民衆の利害に一致せしめるには、普通選擧の外に、之も相並んで、左に揭げる施設の行はれることを必要と考へる。

如何にして民衆政治を實現する

第一は政治の公開であつて、從來政府に依つて愚に付かない事柄まで秘密に付せられて居た事件事情を廣く民衆に向つて、知らしめ、民衆をして適當の批判を下さしめること、

第二は近頃革新俱樂部所屬の代議士に依つて行はれるが如く、機會ある毎に、政治家自ら國民の面前に立つて、政治上の所信抱負を開陳する、其場所の如きは、會堂である、劇場寄席であること、大道であるとを選ばざること、

第三は總選擧に於ける戶別訪問を禁止し、演說一天張りに依つて、勝敗を決せしめること。

第四は新聞紙に眞面目なる政治的記事を豐富にし、又現代の問題に對する批評說明を正確にし、同時に代價を低廉にして、

以つて民衆の政治的好讀物たらしめること。

第五は政黨其他の團體に於て、廉價なる出版物に依つて黨、又は團體の意見を公衆に周知せしめる方法を取ること。

第六は政治家にして公人である以上は、彼に對する公衆の社會的制裁の嚴峻である可きは勿論であつて、或る理由の下に一政黨から除名された政治家が唯以前の古巣に歸りたい、又歸したいと云ふ感情を除いて、何の理據を持たずして、復黨するやうなる曖昧なる進止の行はれた場合には、民衆は公人としての彼等の運命を閉塞する位の手段に出ること。

第七、政權と金權とは出來るだけ之を分離して金權者階級をして、政治上に權力を逞うするに至らしめる弊を絶つこと。

第八華族をして其華族である故を以つて、政治上に特殊の地位又は權力を擁せしめないこと。

以上の數項が實行されたとして、直に政治をして民衆に同化させ、眞實民衆の利益を保護し、發揚する政治の行はれるに至ることを望み得ないであらう。然しながら政治と民衆との餘りに隔け離れて、政治は一部專門者流に壟斷され、民衆は全然其圈外に立つように爲つたに就ては、自ら據る所ありとしなければならず、而して上記數項の改革の如き、政治と民衆との間に何時となしに築かれるに至つた溝渠を除き去る效果の沒す可からざるものゝあることは、私の信ずる所である。而して是等の諸點に就て、何等法制上の改善も、又改良に關する實際的運動も行はれず、議會には民意を代表しない、又國民の利害關係と沒交渉なる政黨が跋扈して、常に民衆の希望や、利益に背馳した政治が相次いで現はれて居つたならば、或は民衆の間に議會政策を否認する聲を聞くに至りはしないであらうか。私の將來を慮るのは、實に此一事であつて、斯る點から考へても、我國民が政治をして合理的に行はしめるようにし、又之を行はしめる爲めに政治に對する公正なる批判者たり、嚴肅なる判斷者たる立場に居らなければならぬと信ずるのである。

議會見物

小牧近江

議會が始まつた。開院早々議長不信任といふ有様だから、またごたごたが續くことだらう。反對黨は議長不信任だといつてゐるが、國民は議會そのものを不信任だといつてゐる。誰れも今の議會を民衆の議會だと思つてゐるものはない。肝心の代議士の中にだつて、腹の底を洗つて見ると、議會なぞはつまらぬものだと思つてゐる人も一人二人ではあるまい。やれ、政界革新だの、やれ小作人問題がどうのといつて見ても、結局、普通選擧すらどうにも出來ない連中に何が大したことが出來るもんか。

政友會も、憲政會も、革新俱樂部も、犬も猫も、この頃の政治家が、農村農村といふことが一つの通り言葉になつてゐる。そして、そのいつてゐることが頗る非常に振つてゐる。冷靜に讀んで見ると、これらの人びとの言は煽動的字句でないものでもないやうだ。その一つの例として、小川平吉氏は、

「予は農村振興の第一義は農村自分自身の反求、内省、自覺自奮である。個人でも團體でも、自覺自奮は何時にても向上發展の第一要件たる論を待たない」

とそういつてゐる。たしかに名論である。

しかるに、他の一面にだて、仲小路廉氏の談なるものをひろい讀みすると次ぎの名言を發見する。いはく、

「凡そ生きるといふ事は、人間に深刻な關係を待つてゐるものはない。個人に於てもその通りである。如何にしても人間は生きねばならぬ。」

と、これも全くその通りである。如何にしても人は生きねばならぬ」といふ仲小路氏、生きることを第一條件として居られる仲小路氏はそんなことは一切無視してゐる他の政治家に比してさすがに見どころが異つてゐる。僕らは、黨派のために生きるとか、乃至、また、直接間接に、資本主義のために生きるといふことはしばしば聞くところであるが、日本の政治家の口か

ら、「人間が如何にしても生きねばならぬといふ」ことをあまり多く聞いたためしがない。

そこで、僕は仲小路氏の生きるといふこと、小川平吉氏の自覺自奮といふことをくつつけて考へて見る。今の世の中にあつて、人間がほんとうに生きるといふことに自覺自奮した場合、その人間の怒りは何處に持つて行かねばならぬだらうか。それらの人たちの頭にも政友會も憲政會も革新俱樂部も議會も何にもない筈である。虐げられたる農民に向つて、自覺せよ、自奮せよといふ奮勵の言葉は、とりも直さず火を點ぜよと同一の說法である。考へれば考へるほど、おそろしい煽動である。もしも、今日にしてかの有名な殺人的過激法案なるものが存在しありせば、かかる危險なる言を弄する者は第何條の適用を見たことであつたらうか。

とは、じようだんである。あの政治家らは農村に革命氣分を漂うすどころか、どうして、どうして軍縮以來、與黨も反對黨もいらく軍縮それを氣にしてゐるやうである。アメリカに對す彼らのおそれは政友會も憲政會もアメリカを假裝敵國としてゐることに於てブルジョア議員には何ら變りがないのである。

十二月廿四日の貴族院各派交涉委員會招待晚餐會に於て、無所屬議員黑岡帶力氏は海軍次官に向つて次ぎの質問をしてゐる、

「現在の我國海軍力においては將來を憂慎する必要がないか」

と。

これに對し、井出次官は、

「なるほど、日本軍艦の隻數は少ないが、廿七ノット半の速力を有する軍艦があるのは日本ばかりである。またドックにしても米國の太平洋岸のそれよりも日本の方が完備してゐる」

と答へてゐる。これで、アメリカを假裝敵國としてゐぬといはれぬだらうか。

また、衆議院に於てもそうである。

十二月廿六日の憲政會所屬議員招待會で陸相になしたにところの質問應答なるものを見ても、如何にアメリカを問題にしてゐるかがわかる。

鵜澤宇八氏——廢兵院の待遇の薄きことは列國にも見ざる處であらう。米國の兵の强いのはその優待の結果ではあるまいか

大津淳一郎氏——予の知る所では米國平時の兵員は卅萬人であるに云々

山梨陸相——米國の戰時兵員は百五十萬人で云々

大津淳一郎氏——戰時に際しては米國の如く國民軍を募り

するために教育を振興しては如何云々

さつと、そういつた具合である。以上は新聞紙上に傳へらるるところの質問應答であるが、その他彼らのこと、だからどんな際どい話にたち入つてゐるかわからない。これでもアメリカを假裝敵國としてゐるといへないだらうか。危險なことである。軍縮軍縮を叫びながら内心この通りである。永井柳太郎氏のいふいはゆる「事實に於ては特權階級の代表機關に過ぎぬ」ところの我が國の上下兩院の頭には戰爭といふことしかない。それの準備しかないのである。その意味で陸軍大臣も反對黨議員も同一である。それほどアメリカにいらいらしてゐる點に於て同一である。資本主義乃至侵略主義の對立は遂に戰爭である。これは必然的なことである。殺さるるものはプロレタリアである。殺すものは永井柳太郎氏のいふ「特權階級の代表機關である」××××るのだ。

議會の新人と稱せられ、また、自らそれを以て任ずるところの永井柳太郎氏によれば日本の政黨中、その政綱　政策を發表して居るのは、政友會、憲政會、革新倶樂部の三つに過ぎぬ。しかも、その何れもは、或は東洋平和の保障とか、國際聯盟の完成に努むとか、或は國民生活の安定を圖るとか、勞働問題の解決を期すとか、頗る漠然雲を摑むが如きことをいふ點に於て共通してゐるとのことである。

僕は最近、政界から失脚してゐるところのわが父に、現在の日本の政界はどうであるかとたづねて見た。父はそれに答るのに。

「まづ零だ、零だ、その意味は〇だ」

もしも、日本の政黨に價するものがあるとしたら、それは〇といふ黃金の光であるのみだらうか。

そこで、既成政黨の革新を標榜して成立た團體がある。革新倶樂部である。これとても、革新の名は新らしいけれどもそれを組織する分子の多く不遇、不滿、乃至はまた、頭の古いことに於て他の政黨と何ら擇ぶところがない分子の寄合である。ケレンスキー一味の妖怪であつて、しかも、來る可き××××にとつて、以上の障害物である。その革新倶樂部の唯一の生命はロシア承認であるらしい。はや、その下準備か犬養毅氏は大要「世界の大勢は平和と自由に動いてゐるのだから日本は今後進展して行くには必ずこの大勢を了解して平和を促進せしむる原動力として努力を拂はなくてはならぬ。日本がその原動力となるにはまづ日本に接近した地方の平和をはかつて上で進まなく

てはならぬ。第一に勞農露國であるが、革命當時にありては眞に亂禁狼藉のあり樣でこれでは到底國內の平和が維持出來ないものの如くに見受けられたが……隣國との關係、世界に對する關係にしたところで革命當時のあり樣とは非常の變化を來たし更に進んでこれと條約を結んで通商を開始するに至るであらう。必ず近き將來斯くなるものと思惟せられる。」

と、僕くから見れば犬養老の如き政治家が五年後の今日やつとロシアの眞價をわかつたといふことは政治家としてはあまりに先見の明のないやうにも見えるが、さすがそういふだけい〻。

そうなると、中野正剛氏は多少むきになつて、

「我輩は誰よりも早く、社會主義者よりも早く、ボリセヰキ革命當初からレニン政府の承認を提唱したのだ。」

と、型の如く威張られるかも知れないが、それだけは確かに偉らい。しかし、政治家の生命は人より早くいつたいはないことそれだけで足るものではない。中野正剛氏に於ては進んで今少しく議會の壇上で氏の提唱を徹底してもらひたかつた。議會は開かれた。又しても、中野正剛氏が、社會主義者へは與へられないところ、――壇上で無言であつたならば、氏のロシア承認も當てにならないのである。

日本の議會は文字通り○である。僕らはそれに信賴をもたぬ。がしかし、ひとつ民衆のために成し得るところのものがある。それはロシアの一日も早き承認である。だが、それとてもロシアを支那化――されしないことは確かたが――する野心からであつたら更に兩國民を不幸にするものである。

僕らは時々、日本の議會に××議員といふものがあつたらと思ふことがある。その意味は決して、鈴木文治氏や永井柳太郎氏らが思つてゐるやうに、××××より議會主義が、理想であるといふのではない。また、今の政黨には勞働問題や社會問題を解決することを主眼とする政黨がないから、勞働黨乃至社會黨が出現して始めて政界が革新されるものだなどと思つてゐるのと大分異ふ。××××にあることには變りがない。×××××××あらしむるための議會侵入である。ブルジョア議會そのものを直接否定するための議會侵入である ×××××より發言をし得るための議會侵入である。××××のための議會侵入である。一個の名利のための議會主義ではない。一個人の雄辯のための議會主義ではない。黨則を遵守し黨の絕體的言論の監視のもとに、黨の代辯者としての資格に於ての〻の議會占領である。しかし、これとても時と場合によるのタクチックであつて、黨略の如何によつて決せらるゝのである もし、それ、×××の議會戰術に於ては、改良主義の議會政策と自らはつきりした區別があるのである。（一二・一・一五）

無産階級から観た政治の『民衆化』

山川均

一

『民衆』といふ言葉が近時の流行語となつたやうに、『政治の民衆化』は、最も進歩的な綱領であるかの如く聞えて來た。『政治の民衆化』を主張する進歩主義者は、今日の政治は民衆の生活――殊に民衆の經濟生活と沒交渉なことを指摘して、政治を民衆の生活に觸れしめよと主張する。

けれども民衆の生活――殊に民衆の經濟生活に觸れない政治が有り得るであらうか。現在の内閣は政黨を基礎とせぬ。この點に於ては、民衆の生活と最も沒交渉な政府と見做されて居るかも知れぬ。然しながら加藤内閣が本年の議會に提出しようとしてゐる議案のうち、一つの項目たりとも、民衆の生活――殊に民衆の經濟生活に觸れないでやむものがあるであらうか。加藤内閣が本年の議會に提出しようとする十三億五千萬圓の豫算（その四割弱は軍事費である）のうちの一錢一厘と雖も、究極は民衆の生活に觸れないものがあるであらうか。殊に加藤内閣が成立したのは、軍備縮少の事業を全うする爲だと云ふことであつた。この陸海軍（殊に海軍縮少）の縮少及び整理の爲に節約せられた本年度の經濟費は約一億五千萬圓であつた。ところが其の半額は、軍器の充實などゝいふ名目の下に、事實上は軍備擴張の費用として元の穴に引込まれ、實際に節約せられて殘つたのは約七千萬圓である。この七千萬圓は一體どうなるのか。この七千萬圓に對して、何と云つても第一に優先的の要求權を持つて居るものは、直接軍縮によつて職業を失つた失業勞働者である。そして第二には、軍事上の必要の爲に不自然に膨脹して居つた産業の勞働者――、直接軍縮の結果として失業し

たいまでも、其の影響によつて失業し、若くは勞働條件の低下を見た勞働者こそ、この七千萬圓に對して優先的の要求權を持つものである。ところが申譯の解雇手當以外、政府の豫算案には、是等の勞働者に加へた損害を償ふ爲の經費は、唯だの一厘も計上されては居らぬ。そして七千萬圓の中の三千萬圓は、教育費補助の名目の下に、主として地方の有產階級に與へられ、二千萬圓は事實上の營業稅輕減となつて、都會の商工階級に與へられて居る。そこで本年の議會は、外の事は暫らく別としても、勞働階級の生活を犧牲にして節約した七千萬圓も、勞働者の手から奪つて永久に有產階級に與へる爲のおごそかな儀式であると云ふてよい。之が果して、民衆の生活と沒交涉な政治であらうか。

本年の議會には、小作爭議に對して地主を保護する爲の、小作爭議調停法案が出る。勞働運動と農民運動とを徹底的に鎭壓する爲め、過激社會取締法案が出る。之が果して、民衆の生活に觸れない政治であらうか。事實は反對であつて、民衆の生活に觸れ過ぎるほど强く觸れて居る政治である。それは民衆の生活に觸れることを以て滿足しないで、民衆の生活に致命的の打擊を與へ、民衆の生活の急所を捉える政治である。

勞働者の生活に觸れない資本家の搾取があり得るように、民衆の生活に觸れない資本家階級の政治はあり得ない。所謂る民衆の生活と沒交涉なと云はれる政治ほど、實は民衆の生活に觸れて居る政治である、觸れようとする政治である。此の意味に於ては、ブルジョア獨裁政治こそ、最も强く民衆の生活に觸れた政治であると云ふことが出來る。

二

今日、政治の「民衆化」を綱領とするとしてゐる進步主義者は、要するに日本の政治を、もつと民衆の生活に觸れさせてやらうと云ふのである。ところが政治の眞實の「民衆化」とは、單に政治を民衆の生活に觸れしめることではなくて、既に民衆の生活に觸れて居り、然かも辛辣に觸れてゐる政治の力を、反對の方向に發動させることである。即ち今日までは、ブルジョアジーの政治が、遠慮假借もなく無產階級の生活に觸れてゐた。眞實の意味での政治の民衆化とは、無產階級の政治を、ブルジョアジーの生活に觸れしめるとである。然かも殘酷に、辛辣に、有力に觸れしめることである。之がほんとの「政治の民衆化」であり、唯一の「政治の民衆化」であつて、之を外にして政治の民衆化は無いのである。今日政治の民衆化を叫んでゐる民衆の親切な友人諸君には、斯ような政治の民衆化を實現す

る用意があるであらうか。

之に反して、諸君の『民衆化』とは、單に政治を民衆の生活に觸れしめると云ふ意味なら、之は今更ら諸君の親切努力を待つまでもない。ブルジョアジーの政治は、既に無產階級の生活に觸れてゐる。唯だに觸れて居るばかりでなく、多年の××に××××××××れた民衆の生活に、殘酷に觸れて居る。

それぱかりではない。資本主義の發達に伴ふて、階級の對立が鮮明になればなるほど、支配階級の政治は民衆の生活に觸れ、民衆の生活に喰ひ込んで來る。少くとも觀念の上だけでは階級的利害を超越し、階級鬪爭よりも一段高い所にある何物かを代表してゐる積りの少數者（假へば官僚）が政治の實權を握つてゐた時代には、政治が民衆の生活に觸れる觸れ方は、今日よりも露骨ではあつても、今日ほど深刻ではなかつた。然るに經濟上の支配者たる階級の利害が、直ちに政治の上に直射し直譯せられるやうになればなるほど――言葉を換へて云へば、經上の支配階級が、政治上の支配階級たる地位を固めて來れば來るほど――其の政治は、直接に民衆の生活に觸れて來た。そしてそれと同時に、政治は經濟を凝集したものであり、政治上の支配は經濟上の支配の總括であることは、既に明白になつて來た。

その結果は、民衆の政治的自覺となり、無產階級の政治的行動となる。一切の經濟上の鬪爭は、斯くて政治上の鬪爭に戰線を擴ろげて來るのである。

三

ブルジョアジーの政治が、民衆の生活に銳利に觸れた所では、必ず民衆の政治的行動が起つて來る。そして民衆の政治的行動は、大體に於いて、政治の民衆化を指して進むものではあるが、精密に見れば、其のうちには全然出發點が違ひ、全然異つた目標を目指す二つの政治運動のあることを見逃がしてはならぬ。

第一には、政治の民衆化は、現在のブルジョアジーの政治機關によつて、また現在のブルジョアジー政治機關の枠の中に實現することが出來るといふ考へから出發する政治運動である。

この考へによれば、政治を民衆化することは、現在のブルジョアジー政治組織と政治機關のうちに、出來るだけ民衆が這込んでゆきさへすればよい。そして這入り込んで往つた程度だけ、それだけ政治は、民衆の生活に差し向けられた力ではなくなつて來る。そして之が積り積つた時、ブルジョアジーの政治組織と政治機關とは、その原形のまゝで、そつくり其儘、民衆

化された政治の組織となり機關となるのである。

斯ように第一の政治運動は、現在の政治の肯定から出發する。そして民衆が現在に順應することによつて、現在の政治を民衆に順應させようとする。即ちこの政治運動は、ブルジョアの政治を肯定する政治運動であり、改良を目的とする政治運動であり、眞實の意味で、無産階級の政治によつてブルジョアジーの生活に觸れようとする意味での政治の『民衆化』ではなくて、寧ろブルジョアジーの政治支配に對する、無産階級の政治的順應であると云つてよい。

之と全く正反對に、ブルジョアジーの政治の否定から出發する第二の政治運動のあることを忘れてはならぬ。この二つの政治運動は、同じく民衆の政治運動であり、同じく無産階級の政治運動であつて、當面の要求や運動の方法には、時として相似寄つたものはあつても、其の本質と目的とは全く異つて居る。前者は、ブルジョアジーの政治機關（例へば議會）に這入り込むことによつて、議會政治を民衆化し、議會を『民衆化した政治』の機關にすることが出來ると主張するに反して、後者は、ブルジョアジーの政治組織と政治機關とは、畢竟『民衆化』することは出來ぬと主張する。そこで此の立場から假りに民衆が議會に這入るとしても、

そして何づれの方法を取るべきかは、無産階級の政治を以てブルジョアの政治に對立せしめる上に、何づれの方法が、より有効であるかによつて定まるものである。

そこで此の第二の政治運動は、ブルジョアの政治を消極的に否定するばかりでなく、積極的に否定——對抗——するものである。即ち無産階級の政治を以て、ブルジョアジーの政治に對立するものである、無産階級の生活に觸れることを目的としてゐるブルジョアの政治に對して、ブルジョアジーの生活に觸れることを目的とする無産階級の政治を以て對立するものである。言葉を換へて云へば、眞實の意味に於ける政治の『民衆化』を以て、ブルジョアー獨裁に對立するものに外ならぬ。

日本でも、現に政治の『民衆化』を掲げる政治家が現はれて居る。民衆は政治的に動きかけて來た。この時に於て——特に此時に於て、吾々は無産階級の政治運動には、全く出發點を異にし、全く到着點も異にした二つの運動…………

…………………………………………

…………………………………………

…………………………………………

…………………………………………である。

僧正イングそのほか

――『惡魔の宗教』に就て言ふ――



厨川白村

一

『讀賣』の第三面に、さきごろ連載されてゐた『滯英雜記』を、わたくしは深い興味を以て讀んだ。筆者の長梧子とは何人であるかを私は全く知らないが、英國に於ける見聞感想の雜錄として、少しも理屈張らないで平淡な日常生活を叙し、そこに明確な批評を下して行く其筆致は、さながら長の旅路から歸つた教養ある友の爐邊の閑話をでも聽くやうで、新聞紙上の讀み物として近頃上乘のものであつた。すらすらと書き流して行くあの筆使ひにも、特に英吉利の國語文章に親しみの深い人でなければ出來ないと思はれる好い所があつたのは、殊にうれしかつた。

その後の方の部分にＷ・Ｒ・Ｉ・と題して、セント・ポオルのイング僧正の事が出てゐた（讀賣新聞昨年十二月十日及び二十一日參照）。英國現代の宗教界思想界に於けるこの勇敢な戰士、――身は顯要の僧職にありながら、侃々諤々、因襲的なる寺院宗教に痛撃を加へて全國の僧侶をして顏色を失はしめたのみか、その高邁の識見と暢達の筆とは遂に勞働問題優種學（ユウゼニツクス）などの批判にも及んで、一代の耳目を聳動した。ラツセルやショオやウエルズの名は邦人の間に喧傳されてゐるが、是等の人々とは全く異つた純粹の宗教家としての立場から、社會主義や民主々義（デモクラシイ）に忌憚なき痛烈な批判を下してゐるこの哲人イングの名は、邦人未だ多く傳へざる所であつた。それがあの『滞英雜記』の筆者によつて語られ紹介せられた事をも、私は喜ばしいと思つた。

イングが最近の著『直言論集（アウトスポウクン・エッセイズ）』第二篇の卷頭に、先づ「信仰の告白（コンフエッシオ・フイデイ）」をのべ、更に在來の國家觀を評し、文明を論じヴィクトリア朝を回顧するところ、その獅子吼は恐らくセント・ポオル寺の鐘の聲よりも、より深くより強く、時人の胸奥に響くであらう。イングが最初先づ盛名を馳するに至つたのは、今から二十四年前の著『基督教神秘思想（クリスチアン・ミスチシズム）』である事は言ふ迄もないが、イングは決して普通の意味で云ふ神秘主義の論者ではなく、國家社會の時事を慨しては、痛烈骨を刺し精鋭さながら利刄のごとき筆を以て社會批評生活批評を試みつゝある一個の哲人であり、また明晰な批判者思想家として見られるべきだ。その思想が今の所謂新思想と全く方向を異にしてゐる事は、まことに長梧子の言はれた通りで、彼は飽くまでも宗門の見地に立てる改造論者であり愛國主義者であり、戰後英國社會の墮落と風紀の頽廢とに對する最も熱心な攻撃者である。率直なるその言葉、大膽なる其態度、さながら日本の昔の禪門の高僧を想はしめる者がある。今の社會主義萬能説に反抗する勇敢なる一個の貴族的思想家として、劍橋牛津大學（ケンブリッヂ・オクスフォード）の講堂に立ち、『エディンバラ評論』『ヒッバアト誌』に筆を執り、さてはまた僧服を纏うて寺院の教壇に説教するとき、淵博なる宗學の知識は言ふ迄も

なく、その最も得意とせる希臘羅馬古典の學殖は、かれが飽くまでも獨創的天才的なる識見と相俟つて、いまの歐洲の思想界に全く特異なる燦たる一異彩として輝きつゝあるのだ。もとより渾沌たる現代のごとき社會が、炯眼炬のごとき斯くの如き豫言者の目に映ずるとき、それがカアライル一流の熱烈な憤激となつて現はれざる限りは、必ずや憂欝なる慨世の悲調となつて叫ばれざるを得ない。わたくしは此イングが、英國公衆のため動もすれば「陰氣な僧正」と呼ばれるのを聞いて、恰も昔の豫言者エレミアが「泣き悲しめるエレミア」と名づけられたのを聞くと同じ沈痛悲壯の感に打たれざるを得ない。かれの生れは千八百六十年だと聞くから、今すでに六十才を越した老齢の新人である。かつて劍橋大學の神學講座を擔任し、また宗論を以てカンタベリの大僧正をはじめ、全英國の僧侶を向ふに廻して論戰し、『信仰と智識』『英國神秘家の研究』『宗教に於ける眞と僞』『信仰』『教會と時代』などの名著によつて、英吉利の思想界を震撼した頃の英邁の氣は、今に至つてなほ毫も衰へては居ない。わたくしが嚢に雜誌『改造』の十一月號に掲げた『惡魔の宗教』の拙稿のうちに、この僧正の名を舉げて、日本の宗教界にも、もし僧侶の力による「思想善導」などを言ふならば、せめて此イング僧正ほどの人が……と云つた所以は、まことに正直なところを語つたのであつた。

表題からして Outspoken といふイングの著『直言論集』の第二篇の方は最近の出版で、是は既に長梧子の紹介があつた通りだが、その第一篇の方は三年前に出た。時あたかも平和克復後、間もなき頃のこととて、此一卷の論集は英國の思想界を震撼した。殊に卷中の、基督教の將來、愛國心、出産律、英國人種の將來などを論じた諸篇は云ふまでもなくはじめて此書に於て公けにされた卷頭の一篇『吾等が現在の不滿』は最も多く世論を湧かしめた。民本主義を駁するに六箇條の理由を舉げ、勞働運動の非なるを說くあたり、論旨はもとより私どもの一致し難い所ではあるが、その堂々たる態度と率直大膽なる立言とに至つては英國の宗教界この人あるを見て、誰しも敬重の念を禁ずるを得ないであらう。

警句に富めるその雄勁の文體も亦た確かに讀者を惹きつける大きな力であつた。例へば、

「コンスタンティン大帝のもとに教會と國家との間に最初の協約（コンコルダト）あつてより、教團としての宗教はすべて失敗であつた。」（同書三〇頁）

「近世の都會居住者は神も有たなければ、惡魔も有たない。畏れなく感謝なく恐怖なくして、生く。」（同書二〇頁）

「人事のうち若し一つの大丈夫な概括論ありとすれば、そは、革命は常に自滅を招くと云ふ事である。狂熱の徒は今まで幾たびか「第一年」を宣言した。しかし如何なる革命時代も「第二十五年」を數へた事はない。」（同書第一頁）

すべてが恁う云つた調子で、彼は極めて露骨に所謂近代思想なる者に反抗するが、さりとて教會や國家や社會に對する彼の見解は極めて自由なもので、その思想はその文體と共に、清新潑溂の趣を失はない。「今や新しき暗黑の時代は來らむとす」と叫びながら、また、わが子孫が如何にして人生の行路を歩むべきやを刮目して待たむと云つて、最後の望みを失はない所なども、さすがは信念の人である事を想はしめる。かの徒に保守頑冥の說をなして時代の推運を妨ぐる者とは、固より同一視すべきではない。

二

しかし私は玆でイング其人に就て語らうとするのみが目的ではない。さきの長梧子の『滯英雜記』の一節に、左の語があつたから、わたくしは英語英文學の學習者として一言したいのである。長梧子は云ふ、

『そして彼（インジ）の書くものは宗教的のものが多いので、殊に新しいものでなければ流行しない日本では、數へるほどしか讀者を持つて居ないらしい。英國通の某文學博士がインジをイングと發音してゐた處などを見ても、凡そ想像出來る』（讀賣新聞大正十一年二月二十一日、一六四三九號、第三面）

この一「英國通の某」とは、果して何人を指したのか、私は知らない。しかし、さきにも言つたやうに、「改造」誌上の拙稿『惡魔の宗教』の第二十四頁に於て明かに、わたくしは確信を以てイングと書いて置いた。インヂとは言はなかつた。長椅子にして若し之を誤謬なりと速斷し、更に進んで日本の讀書界の智識の程度をまでも疑はれるならば、英語發音問題のやかましい昨今、わたくしとしては一言なきを得ない。殊にまた、一外國語の精確なる素養をさへも怠りたがら、西歐近時の思潮を論じ西人の名を擧げて大言放語せるわかき批評家の群がれる今の文壇に、飽くまでも細心精緻の學風を重んぜんとする者が、英吉利言語學上特に重大な意義を有する語の一例たる Inge の音に就て言ふ事は、必ずしも徒爲ではないと信ずるからである。かつて或學者が本居宣長の名をノブナガと讀んで日本固有思想なる者を論じ、嗤笑を招いたと云ふ話があるが、イングの發音を誤つて今の英國宗教界に就て語つた者ありと云ひ、はては夫れによつて日本の讀書界をも評價せられるならば、いささか恐縮――とでも云ふのだらうか、ちよと困りもするし、また滑稽にも見えるからである。

INGEと云ふ名前は、もと〳〵古代のアングロ・サクソン語から出た由緒の正しい純粹な英語である。(私はここで教室の講釋のやうな事を云ふ事も出來ないし、また活版所の不便をおもうて聲音學の音標文字を用ゐる事も避けるから不正確な假名を以て發音を表はしておく。)その語尾のEは、斯ういふ言葉の常として、古い形の名殘をとどめてゐる遺物に過ぎない。今さら中期英語(ミッヅル・イングリッシュ)の昔にさかのぼり、チヨオサアなぞにある此無音と有音の語尾のEに就て論じなくとも近代英語(モダアン・イングリッシュ)に於ては、此語尾の古いEは殆どすべて脫落しつつあるのだ。だから此イングと同一語、同一發音の名前で語尾を省略してINGと綴つてゐる英人さへもあるのだ。英語の綴字は、少しも發音を表示しては居ない。(殊に姓氏の綴りと云へば亂暴なもので、沙翁(シエクスピア)の名の綴りの事は誰でも知つてる話だが、二三世紀前までは、人々が多く無學な爲にお浮

の坊さんが頼まれて、よい加減な綴字を書いてやつたのだ。だからイング僧正の名の場合も、Eの無いのと同じやうに發音する方が、學問上、正しいのである。獨り此僧正の名ばかりではない。近年小説界で知られてゐる作家に、チャアルズ・イング CHARLES INGE と云ふ同姓の人が別にあるが、それなぞもイングと云ふが正しい讀み方なのである。現に倫敦大學のジオンズ教授の『英語發音辭典』には、明かにイングと云ふ發音を示してゐるではないか。

しかしながら今日普通の英人中には、僧正の名をインジと云つてゐる者も多いのは事實だ。ことに亂暴な無學な發音を平氣でする米人などになると、十中八九人まではインジと云つてゐる。それは綴字の表面をだけ見て發音するから生ずる誤謬だ。もとより名前なぞは實用の符號に過ぎないから、當人ですら誤り呼ばれても平氣でゐる。「神谷」と云ふ私の友人が、カミヤと呼ばれてもカミタニと呼ばれても返事をしてゐる。どちらだつてわかれば可いので、その名の當人にすら、かのルウズエルトの名の發音のやうに、屢々疑問を生ずるのだ。しかし苟くも英文の研究に從事してる者としては、此古代英語そのままの名を自分の著書や文章のなかに書くとき、明かに正しくない百姓よみ流の發音の方を筆にのぼす事は、何としても忍び難い事である。

この古代の遺物であるEを今日わざ〳〵語尾に附して、それが舊家の名である事を示して置くなぞは、いかにも英吉利人の保守的氣風の一端を表はしてゐるから面白い。かのオスカ・ワイルドの Wilde も、Wild と云ふ普通の姓と同じものだ。Clarke といふ名も、Eの有るのと無いのと語源發音すこしも異ならない。なほイングの場合と同一のGEの他の例を考へて見ると、さきに印度總督であつた Hardinge の如き、よく日本の新聞の海外電報などには、ハアディンヂと書いてあるが、あれなぞは立派な百姓よみである。今の米國大統領の名を、誰もハアディンヂとは云はないではないか。またかの愛蘭の戯曲家シング Synge の名に至つては、英國に於ても時々疑問とせられてゐたが、かのモリス・ブル

ヂヨアの大著『シング傳』の脚註によつて、この名が或韻文のなかで いごに といふ語と押韻せられてゐる事によつて、シンジではなく、シングの方が正しいと云ふ事が明かになつた。

この類の事は一些事のやうに見えながら、實は長椅子のやうな立派な文章のなかに、かのごとき數行の文句が目に附は、美人の頬べたに、ちよと墨が附いてゐるやうで可笑しいと思つたから注意しておく。

階級藝術とか文藝思潮とか云ふやうた事は重大た問題には相違たいが、それ等は物を識らなくても、理屈の附けよう次第で、粗大の論はどちらにでも成る。動もすれば水掛論に終つたり漫罵に了つたりするのが常だ。しかし僕ら云ふ言語の問題なぞは、そこに歴史の事實もあり、動かすべからざる文獻學上の論據もある。素人のごまかし論なぞで、有耶無耶に葬る事の不可能なるものである。私が特に此一節を書いた所以だ。

外國の歴史や古典や國語に就て、孜々として嚴密の研究を怠らざる者にして、はじめて異邦の思潮や藝術を語り得べきは、今さら言ふまでもないが、近ごろ出來る外國文學の飜譯書などを時々見ると、實は憚りあつて、ここに言ひにくい話だが、なかには隨分と亂暴極まる物が續出してゐる。これ位の事が解らなくて、又こんな文句ぐらゐを誤譯してゐるやうで、どうして、かの大言壯語をなし得る者かと呆れ果てるやうな例さへ見受けられる。なほ夫れのみではたい細心精緻の溯源的學術的研究なぞを目して、腐儒衒學者流の閑事業として之を輕んじ、はては獨り自ら天才氣取りか何かで、物を識らない事を手柄にするやうな惡風をさへも今の青年の間にみとめる。わたくしは率直に之を言ふのだが、斯くのごときは、恰も學問の出來ない學生が自己の無努力と不勉强とに功能をつけたり、はてはその不勉强を誇りにする負惜みと同じ意味の墮落である。智識や學藝の事には、ブルジョアもプロレテリアンも何も、あつた者ではない。無智無識とか物を知らないとか云ふ事は、要するに人として耻かしい事なのである。たとへばわかり切つた平明な事實が

書いてあるのを目して、衒學的だなぞと評してゐる者がある。私どもは猥に他を衒學的なぞと罵るに先だつて、まづ自らの無知無學を恥ぢねばならぬ。

是等のことは固よりかの長楫子の『滞英雜記』のごときすぐれた文章とは何の關係もない話であるが、文壇の近事を慨して思はず筆が辷つたのである。その筆が辷つた序に、わたくしは、拙稿『惡魔の宗教』に就て、玆にまた一二附言しておかう。――之こそ、どうでもよい事かも知れないが。

三

わたくしはあの拙稿のうちに、宗教の重んずべき事を明言しておいた。佛陀や基督によつて說かれたる教が、太陽の如くに貴く難有い事をも疑はないと言つて置いた。唯だ過去殊に現在の宗教屋――因襲的なる寺院教會を金城鐵壁とたのめる職業的宗教家の僞せる言動が、動もすれば其教祖や祖師の意に反し、殊に現代の新しき理想と背馳せること甚しきを指摘したのであつた。昔の聖者はいふ、「依法不依人」と宗教その者は難有いが、これが俗惡醜劣なる傳道者の手と口とによつて、如何に屢々惡魔化せられつつあるやを語つたのであつた。これを手短に云へば、宗教そのものは貴いが、宗教屋の言動には非難すべき點が多いと云ふのである。事理は極めて簡單にして明瞭だ。現に眞面目な多くの宗教信者は私の言に贊成して吳れられたが、若し眞に德たかく心淨き聖僧にして、あの『惡魔の宗教』を讀んだならば、恐らくは微笑をたゝえて言ふであらう『みな分り切つた事實だ、この通りの事を今日の宗教家は僞てゐるのだ。今さら言ふほどの珍しい話でも何でもない。わたくしなぞには何の痛痒をも感じない文字である』と。

しかし自ら顧みてやましき卑俗の傳道者なぞは、あの拙文を讀んでも恐らくは多少の反感を抱いた事であらう。まこ

とにお氣の毒であつた。しかしさう云ふ人たちは、ぐず〳〵云ふひまに、少しく自ら省みるが可からう。悪作を描いたと言はれて、眞赤になつて怒り出すやうな者には、とかく悪黨が多い。善人は我不關焉で、空うそぶいてゐる。

わたくしが、かの『悪魔の宗教』の一篇に於て言はむとしたところは、上に云つたやうに極めて簡單明瞭であるにも拘はらず、宗教その者を攻撃してゐるかの如くに誤解したもの（たとへば『早稲田文學』の木村某氏『新精神』の記者ら）のあつたのは、表題が「悪魔の宗教家」としてなかつたからだと、或友人が注意した。しかし私のエッセイは、たとひ極めて拙いながらも、自分としては藝術品として、一言一句の末にも、わたくしの生命の律動を表現しようと努力してゐる。あの表題に「家」の一言を加へるとき、その一句全體の聲調は破壊されて了ふではないか。『悪魔の宗教クワ、』そんな私の心の耳に逆するやうな音律の一行と雖も一句といへども斷じて私は之を筆に上ぼす事は出來ない。何か理窟をでも論ずる爲の實用の文句ならばいざ知らず苟くも散文の詩として emotional logic を根柢とせるエッセイに於て、耳に逆ふが如き一言半句と雖も之を容るるの餘地はない。況んや表題に於てをやだ。

そも〳〵エッセイとは如何なる意味の藝術的創作なりや。此事に就てはいくたびか私は說いて置いた。一口にエッセイと云つても、近頃の學徒が設けた分類法で云へば、種類は甚だ多くなるが、私の云ふ所は必ずしもラムやスティヴンスンの書いたやうな personal essay とか familiar essay とかの類をのみ云ふのではない。それらが純然たる散文の抒情詩である位は誰でも知つてゐる事だが、私の言ふのは、かの J. C. Shairp がカアライルを目して「散文の詩人」と云つてる場合と同じ意味に於て云ふのである。英國の此近代の豫言者が英雄を論じ佛蘭西革命を說き『衣服哲學』を語るとき、それがみな立派な詩であつて、彼の警拔なる思想を警拔の文辭に托した藝術的創作である事に氣附かざる者のごときは、斷じて他人の文章を許するの資格なき者である。もとより何も是はカアライルと限つたわけではない。古くは

プラトオンの哲理を聞く前に、先づその『フエドラス』冒頭の雄麗なる叙景の筆を見よ。『レパブリック』のここかしこに散見せる壯麗の文辭を見よ。之を近世で云へば、ジエレミ・テイラアやトマズ・ブラウンの稀世の名文は云ふ迄もなく、エドマンド・バアクの『佛蘭西革命論』中、かのマリ・アントアネットを叙したる條の如き、あれをしも殺風景な實用の「論文」なぞと同視するものあらば、よほど頭が何うかしてゐるのである。二十世紀の現代の文學は散文が全盛を極めてゐる時代だから、この種の藝術的創作としてのエッセイは、云ふまでもなく汗牛充棟だ。

みづから「憤激は詩を作る」Fa i i dign io v rs m と言つて、思ひ切つた毒舌惡罵を詩にしたのは晩年のジユヴナルであつた。遠き昔のホレス以來、近くは十八世紀文學に至るまで、歐洲文學で云ふ「サタイア」と名の附く種類の詩歌は、皆ことごとく冷嘲熱罵の喧嘩腰の文字であつた。或者は狂犬のごとく、或者は毒蛇のごとく、また或者はブルドッグのごとくに敵に喰ひ附く極めて『非紳士的』（牧師なにがしの語を借る）なる詩歌であつた。いまは既に時勢が變化した。むかしの劇詩が散文戯曲となり、叙事詩が小說と變ずると共に、この種の「サタイア」の詩歌も亦た、今日すでに多くの種類の散文のエッセイとなつて、辯難攻擊はおろか、皮肉冷罵の文藝作品となりつつある事に氣附かないのであるか。

昔の「サタイア」の文學には隨分毒々しい人身攻擊が多かつた。しかし此種類の物は當時に於ても矢張り上乘の作品とは見られなかつた事は言ふまでもない。その憤りが私憤ではなくして、飽くまでも義憤公憤であらねばならぬ事は勿論だ。今日に於ては、單にエッセイの類のみではなく、戯曲に於てもバアナアド・ショウの作品のごとき、その辛辣痛烈を極めた皮肉や嘲罵を除けば、果して何が殘るであらう。

東京の或る新聞の記事によれば、牧師なにがしなる者、わたくしの『惡魔の宗教』の數句を引用して「非紳士的の暴

言」とか云つたさうだ。いつたい、文章を批評するのに非紳士的の文章とは如何なる意味ぞ。ホレスやジュベナルの古き「サタイア」は問はず、ドライデンやポオプの作品を目して、紳士的非紳士的とか云へば、それで批評とか辯駁とかに成つてゐると思ふのか。再び問はう、紳士的の文章とは、昔の美辭麗句とやらを聯ねて、あの好んで教會に出入りする美しいお孃さんを見るが如きお上品な文章を云ふのであるか。更に三たび問はう。牧師ならば、せめて聖書の二三頁ぐらゐは讀んでゐるだらう。基督がパリサイの徒を罵るとき如何なる言葉を用ひたかを思へ。『蛇まむしの類よ』。かのパラブルを借りメタフオアを用ゐ、言語の藝術によつて其思想を力づよく表現しようとした詩人基督をも爾らは「非紳士的」なりと云はうとするのか。今の職業的宗教家によつて與へらるるものが往々にして惡魔の殘飯であり、佛道の事業が祖師の意に反したる株券募集に類する事多しと私が言つたとき、それは聖書に散見せる多くの所謂「毒舌」なる者に比して、遙に手ぬるく遙にお上品なる者である事を知らないのか。『立正觀抄』の結語に於て『禪は天魔外道の法』なりと喝破したとき、豫言者日蓮を目して「非紳士的」なりと云ふ事を得べきか。

いつたい紳士道とは如何なるものぞ。その本家本元の英吉利に於て、むかし處女王朝の文學時代にサア・フイリツプシドニイ等のお上品ぶりに源を發し、後に淸教徒(ピュリタン)の道德觀の時代を過ぎて、さきのヴイクトオリア朝に入つては大陸の人たちが所謂「英吉利の僞善(ブリティシュ・カント)」とまで成りさがつたもの。現代の思想上に於ては、さながら日本の武士道のごときものである。武士道を以て今日の詩を論じ基督式の『暴言』を批評せんとする牧師もまた滑稽なるかな。

しかしさうばかり云つた者でもない。或所では、私の『惡魔の宗教』を反駁するとか云ふ看板を辻々に掲げて、廣告までして與れたさうだ。門前雀羅を張れる教會のために、私のあの一篇の拙文が人寄せの種に役立つたとすれば、まさに幸慶の至りである。呵々。

『讀賣』の紙上で、一評者は私の『惡魔の宗教』を評して、道行論文だと云つた。笑つてその冷評を甘受しよう。あの一篇のうちに私の言はんと欲した所は事理一貫して極めて明白である。そして主旨とする所は、かの最後の結文一行に於て述べた通りだ。しかし若しこの道行論文といふ惡罵が、私のエッセイが解決を示してゐないと云ふ意味ならば先づ問はう、人生そのものに解決があるか。生れてから最後の死に到るまで、人間の生活その者が旣に立派な道行きに過ぎぬではないか。沙翁の如きイブセンの如き曠世の天才と雖も、その作品には何等の解決を示しては居ないではないか、生きたる此事實を見よ。唯ださう云つて沙翁もイブセンも、そつぽを向いてゐる。文藝の作品は、夫れが戯曲だらうがエッセイだらうが何だらうが、會社設立の趣意書や宣傳勸誘のビラのやうに、手取り早いおちや結論や解決なぞを出すと限つたものではない。この事に關しては旣に拙著『近代の戀愛觀』の最後の一章に、「宣傳と創作」との別を明かにして之を述べた。ただエッセイが、必ずや最後に於て何等かの結論に到達せざるべからずと考ふるが如き人々のために、わたくしは、最近に世を去つたメネル女史の論集（エッセイ）に與へられた『アゼニアム』記者の評語を、茲に引用して置かう。

"The meditations to which we are invited may be generally inconclusive, but conclusions are not what we seek. We read rather for the deftly turned phrases and the fancies by the way.—*The Athenaeum* No. 4277. (Oct. 16.1909.)

これは即ち道行論文の極端なるものの味ひを云つたのである。

みづから顧みて淺學菲才のおのれなりとも知らずに、かの大家とやら云ふ半者孫を氣取つて、その尊大ぶりや雅量振りを衒ふが如き痴態を、私は生涯學びたくないと思ふ。如何にくだらない批評に對しても、氣が向けば、私は何時でも筆を呵して此種の文を草し、之に應酬するの勞を辭する者ではない。

（了）

ソウエート文壇の近況

昇曙夢

一、ソウエート文壇の二大收穫

最近のロシヤ新聞は世界の文壇を驚かすべき一大事實を報告して居る。それはドストエーフスキイの未刊行の原稿が幾種となく新たに發見されたことである。それにはいろ〳〵曲折した話がある。

一兩年前グルヂヤ政府軍とアレキセーエフ軍との間に衝突があつて、アレキセーエフ軍がソチイから退却した時のことである。或るグルヂヤ士官の手にドストエーフスキイの未刊行の原稿が入つた。而もそれはドストエーフスキイ未亡人の許に久しく保管されて、折角公刊の準備をしてゐたものである。この事がチフリスに傳はつた時は、まだソチイ正面の戰鬪は止んでゐなかつた。地方新聞は俄かに騷ぎ出した。グルヂヤ作家同盟は政府に委員を派して、卽刻原稿所有者の搜索に着手すること、そして特別委員をソチイに派遣することを歎願した。ロシヤソヴエート共和國も矢張り同じ方法を採つたが、不思議にもこの話は其後間もなく立消えの姿となつて有耶無耶に葬られて了つた。所が昨年の末チフリスに於けるドストエーフスキイ紀念祭の時に再び原稿の問題が持ち上つた。グルヂヤ共和國の教育人民委員カンデラーキに對していろ〳〵な人物からドストエーフスキイ原稿の發覺に就いての申出があつた。それがまた何れもその代償として多額の金額を要求したのである。そこでロシヤ共和國の文務當局ルナチヤールスキイ及びボクローフスキイとの交渉が始まり、その結果カンデラーキは代償を拂つても差支ないとの承諾を得た。が、折角のロシヤ共和國政府の干渉も水泡に歸して了つた。といふのは、文豪の原稿所持者は今度も亦發見されなかつたのである。或はコンスタンチノーポリで發見されたと云ひ、或はバトウムで發覺したと云ひ、或は又オズルゲツキスキイ郡の或る田舎で發見したと云ひ、噂こばかりが高くて實物は遂々上らなかつたのである。斯くしてまた幾月か過ぎた。其後事件はグルヂヤの非常委員會に移されたが、依然として

何の手掛りもなく其儘になつてゐた、所が最近に至つて、是等の原稿がムガロブリシユウイリなる者によつて、裏コーカサス地方委員會の手に渡され、可なり大きな價格で買ひ取られた。そこで早速委員會を組織して、原稿の眞否を調査することになつた。同委員會の報告に據れば、久しくソチイに住んでゐた文豪の未亡人は、この地方が戰亂の巷となるに及んで急いでソチイを立退かなければならなかつた。その際未亡人は自分の大切な記錄類をソチイの人々に托して避難したのであるが、近頃に至つて其等の人々に此の記錄をチフリスに持つて來たのである。

委員會は調査の結果、ドストエーフスキイと未亡人との手蹟に違ひないといふ確信に到達した。そしてそれは譯なく確められた。同時に委員會は新たに發見されたドストエーフスキイの手紙も夫人の日記も回想錄も未亡人の大切な秘藏品として今日まで未刊行のものであるといふこと、また其等を書いた同じ筆蹟が未亡人自身の手に相違ないといふことが分つた。

是等の記錄の歷史的價値は素より偉大であるが、更に是等の原稿は記錄としての歷史的價値の外、大文豪の哲學的發見の寶庫として、また彼の生涯の幾多の事件と其内的方面とを說明する資料として、重要の意義を持つて居る。せい、是等の事實に基き、委員會は斯う斷定して居る。「我々の手によつて調査せる文書は、ドストエーフスキイ自身と、彼の生涯の最後の十四年間の最も近き證明者(未亡人を指す)とから直接に出たものとして、ドストエーフスキイの生活と彼の藝術とを說明するために最も重要なる價値を有つて居る。而も彼の死後四十餘年を經て初めて世に現はれたものである」と。そして委員會は原稿の詳細な目錄を編纂して居るが、玆には煩を避けてその主なるものだけを擧げておく。それは次の通りである。

小說『未成年者』の草稿。文豪の手紙。手紙の寫(その中には夫人に宛てたものだけでも、一八六四年から八〇年までの間に百六十四通ある)。夫人の日記。夫人の『回想錄』(その中にはトルストイとの談話やマルクスのことなども記憶されて居る。)其他文豪自身の書いた諸種の手紙や請願や住所などの寫が主なるものである。

是等の原稿はその後間もなくモスクヴアに移送され、新たに國立出版所の特別委員會の調査に附した上、その一部はこの冬に發表されることになつて居る。

同じくドストエーフスキイの未刊行原稿に就いて、他の文學新聞は以上記したのと稍異つた事實を傳へて居る。それに據ると、モスクヴアの中央記錄保存所に於て、教育人民委員ルナチヤールスキイ、次長ポクローラスキイを初め、コーガン、サク

ーリン、フリチエ、グリヴエンコ、アクサーノフ、オリシヤンスキイ其他立合の上で、ドストエーフスキイ未亡人の所有に屬する箱を開けて見た。するとその中には綺麗に保存されたいろいろな原稿の間にまざつて、ドストエーフスキイが夫人やトルストイに宛てた手紙や、彼の日記や、小説『惡靈』、『罪と罰』、『未成年者』の中の或る貴重な章や斷篇が澤山入つてゐて、而もそれが皆今日まで未刊行のまゝに殘されたものであると。前の報道とは幾分異つて居るが、恐らく同じ事實を別樣に傳へたものだらうと思はれる。何れにしてもソウエツト文壇の一大收穫に違ひない。

ドストエーフスキイの原稿の發見と相前後して、シンビルスク縣の縣教育部ではツルゲーニエフの手紙を新たに發見したと傳へられて居る。是等の手紙は一八七六年から八五年に至る間に、ツルゲーニエフが巴里からロシヤの社會評論家達と往復した手紙で、彼の社會的人生觀を特質づける貴重な材料となつて居る。是等の手紙は文壇では全く紛失したものと締めてゐただけに、その發見は非常な喜びでなければならぬ。で、中央記錄保存所では早速之を逐次刊行することに決定して、その事を出版委員會に托した。そしてその賣上高は全部シンビルスク縣の飢民救恤に向けることになつてゐる。

二、赤白詩人の一芝居

赤色モスクヴア文壇の一方の重鎭として最近有名な革命詩人エセーニンが世界的舞踊家イサドラ・ダンカン女史と結婚して、去る五月飛行機でベルリンへ新婚旅行を試みたことは既に我が新紙上にも見えたやうであるが、奇拔なのは空中飛行の新婚旅行でなく、寧ろベルリン着後に於ける出來事であつた。

ベルリンには豫てロシヤの亡命文學者や美術家の自助機關として、本國同樣『藝術の家』といふ倶樂部のやうなものを組織して、其所では時々講演會や音樂會や展覽會などが亡命藝術家達によつて開かれて居る。五月十二日の例會には、恰度新夫人ダンカン女史と一緒にソウエート・ロシヤから飛行機で飛んで來たばかりの珍客革命詩人エセーニンが出席するといふので、好奇心を唆られたためか、出席者の數も平常よりは多數に上つた。この日のプログラムは例に依て夜の十二時まで續いた。作家や詩人達は各自の作品を朗讀した。アレキセイ・トルストイは此頃反革命陰謀の嫌疑を受けて例の非常委員會のために銃殺された詩人グミリヨフの追懷談をして聽衆に非常な感動を與へた。やがて夜半十二時となつて、待たれた革命詩人エセーニンは新夫人イサドラ・ダンカン、詩人クシコフ、其他數名の若い人々を同伴して威勢よく乘り込んで來た。會衆は拍手喝采し

て、この赤い一行を迎えた。けれども本來が革命詩人と反革命詩人との寄合であるから、無事に濟む譯がない。入場匆々拍手ぐらゐの歡迎では不足に思つたイサドラ・ダンカン女史は、突然會衆に向つて『インターナショナル』の合唱を要求した。その要求に應じて、會衆中の若い少數の人達は『インターナショナル』の歌を吁鳴り出した。それからが大變な騷ぎで、口笛を吹くやら、「退れ！」、「引摺り出せ！」と怒鳴るやら、會場は忽ち嵐のやうな光景に變じた。そして會衆は「インターナショナル」を歌つた方の組と歌はない方の組と二派に分れて、暫らくは激論が絕えなかつた。が仲に立つ人があつて、それも漸く靜まると、珍寄エセーニンは椅子の上に立上つて、會衆を見下しながら、『我々は口笛ぐらゐでは一向驚きませんよ、ロシヤでは四本指で口笛を吹くことに慣れてゐますからね』と、皮肉を言つたり、『だが、私は此所へ來て、まるで故國に居るやうな感じがします』と宥めたり、散々會衆を飜弄したあとで、愈々自分の革命詩の朗讀に移つた。今度こそはと期待しながら會衆は我慢して聽いて居ると、赤い詩人はその詩の中で、『彼は惡漢の國から來たものである、彼が若し詩人でなかつたら、彼は無賴漢か泥棒かになつたであらう……』といふやうなことを嘲りに述發するので、會場はまたも嵐のやうな騷ぎになつて、結局侮辱された會衆の一部は席を蹴立てゝ立去つたといふ。何所へ行つても、ロシヤ人は矢張りロシヤ人らしい無邪氣な芝居を演つて居ると見える。

三、ロシヤ青年藝術家の聯盟

同じアンチ・ボリシエウイズムの藝術家の中にも新舊の差別は爭はれないもので、近頃ベルリンではロシヤの若い作家と美術家と音樂者との協會が『ウエレチエノ』（紡錘の意）といふ名稱の下に組織された。この協會は凡ゆる政黨政派を超越した純藝術家の聯盟であつて、ロシヤ藝術を健全なる道程の上に確立することを共の目的として居る。そして協會と共鳴する舊い文豪等の權威ある藝術に依據しつゝ同時に若い藝術家の加盟を促して居る。この積極的使命を標榜しつゝ、『ウエレチエノ』協會は一方には藝術界に於ける虛僞の舊思潮や新思潮と戰ふと同時に、他方にはロシヤ詩の荒廢して行く傾向や藝術の本質を害ふ所の技巧やに對して戰つて居る。今日までにこの協會に入會した者は外國に避難して居る約百名のロシヤ藝術家で、その中には作家も畫家も音樂者もある。目下巴里に滯在中の文學者團即ちクープリン、ブーニン、アムフイテアトロフ、テツフイ夫人其他とも交渉中である。バルカン半島（ソフイヤ）とチエホスロワキヤとには支部を設けることになつて居る。また革命のた

めに兩方に裂かれたロシヤ文學者の聯絡を保つ意味に於て、作家スリヨズキンとピリニヤクとを介して、ロシヤに殘つて居る文學者とも交渉を開始して居る。

協會の機關として、去る六月の末には文藝雑誌『ウエレチエノ』が創刊され、それにはブーニン、アムフイテアトロフ、テツフイ夫人、ドロズドフ、ベリヤーエフ、其他の在外ロシヤ文學者が執筆して居る。その外に協會員は會の主義信仰を闡明し、宣傳するために毎月月報を發行し、また公開講演を催ふして居る。そして是等の組織的計畫を實施するために、協會は評議員を選んだが、その選に當つた者はドロズドフ（議長）ゴールヌイ、アレキセーエン、アムフイテアトロフ、ロシモフ、ピオトローッスキイ、チヨールヌイ等である。つひでに協會のアドレスを附記しておく。

Berlin, Potsdamer strasse 436. bei Laminaki. teb. Nollendorf 22—83.

四、ソウエート文壇の東方研究熱

ロシヤに於て東方諸國の文學に對する興味の勃興し出したのは帝政時代からのことであるが、最近に至つてこの傾向は益々盛んになつて居る。勞農政府の出版部長の要職を占めて居る詩人ブリユーソフの編輯の下に立派な『アルメニヤ詩人集』が發行されたのは有名な話であるが、それに續いて學士院會員コルシユの翻譯に係る『十世紀及十一世紀に於けるペルシヤ抒情詩』が出版され、その中にはペルシヤの有名な詩人アウイツエンヌ、ケイヤム、ゼリヤレツチン等の外、ペルシヤの詩聖と言はるゝカリーズと其の不朽の名篇とが完全に收められてゐる。この二種の詩集はロシヤ文壇に、驚異と奇蹟とに充ちた新しい世界を開いた。そして是等の東方藝術はその艶麗な形象と深い獨特な内容とを以てロシヤ人を魅惑せずにはおかなかつた。その次に現はれたのが、學士院會員オリデンブルグの翻譯に係る『印度のお伽噺』と、バリモントの翻譯に成れるコリダスの戯曲と『アスウアゴツシユ』とである。其後更にアルメニヤ新詩壇の巨星シルソンダデ、シヤンタ、ガツフイ等の創作の翻譯が續々と出て居る。有名なタゴールの作も是迄に大分翻譯されて居るが、近くまたこの印度哲人の哲學的内容を有する六種の講演が、コオボーフスキイの翻譯によつて『個人性』といふ標題の下に『ペトログラード』社から出ることになつて居る。」斯様にメウエート文壇の東方文學に對する興味は驚くほど盛んであるが、それが印度までに限られて、極東の日本や支那の文學に及んでゐないのは物足りない氣がする。

五、ゴーリキイの公開狀

最近ゴーリキイはソウエート政府と意見の衝突を來して絶縁したといふ風說が、頻りに傳へられて居るが、それに就いてゴーリキイは去る九月の末新聞『ナカヌーニエ』紙上に公開狀を發表して、自己の態度を表明して居る。この公開狀は簡單ではあるが、從來區々に傳へられて居るソエウート政府とゴーリキイとインテリゲンツイヤ（智識階級）との三角關係に就いて正當の理解を得るために、絶好の資料と信ずるから、次にその全文を譯出しておく。

『近頃私がソウエート政府に對する從來の態度を變へたといふ風說が專ら傳へられて居る。で、この機會に於て私は次のことを表明しておく必要を認める。

ソウエート政府は私に取つては、ロシヤ民衆の懶惰性を征服することの出來る唯一の力であり、またこの民衆の精力（エネルギー）を、ヨり多く公平にし合理的なる新らしい生活樣式の創造に向つて激勵し得る唯一の力である。ロシアの苦しい經驗は全世界のプロレタリアートに取つては、彼等の政治的自覺の發達を速めつゝ、今迄にない偉大なる教訓的價値を持つて居ると信ずる。けれども私は自分の精神の本質に於て、智識階級に對するソウエート政府の態度に贊成することが出來ない。この態度は誤つて居るものと私は考へる。たとへロシヤ智識階級の間に於ける分裂は、その凡ての國術によつて、政治的に免かれ難い現象と認られては居るものゝ、然しソウエート政府の彼等に對する態度は決して正當ではない。と言つて、それがために私は決して智識階級間の確執を正當なもの、理由あるものとは思はない。私は智力ある社會の反抗が如何に偉大なるものかを知つて居る。私から觀れば智識階級の分裂は、實質に於て同一なる精力を、いろ／＼な速度を有する若干の部分に分割するやうなものである。然るにこの精力の共通目的は、實生活に對して積極的意識的關係を民衆のうちに鼓舞することである。彼等のうちに合理的運動を構成することである。民衆の無政府的壞滅を豫防することである。この目的は、若し智的精力を粉碎しなかつたら、比較的容易に且つ迅速に達しられたであらう。學者と技術家とは、レーニン、トロツキイ、クラシン、ルイコフ及び其他の偉大なる革命指導者等と同じく、矢張り新らしい生活樣式の創造者である。この地上に於て、理智の人々は、我々が彼等の價値を尊重しない權利を持つほど、それ程多くは居ない。最後に私は信ずる、聰明にして正直なる人々に取つて、『民衆の幸福』といふ語は決して空言でなく、彼等の一生中の眞面目な事業である。是等の人々は、自分達の目的の唯一であることを互ひに理解するまで、語り合ふことが出來るだらう。そして有識階級者

が特に貴重なる價値を獲得した今日、彼等は互ひに滅ぼし合ふやうなことはなからうと信ずる。——ゴーリキイ——』

六、シャリヤーピンの米國巡業

シャリヤーピンがロシヤは勿論世界聲樂界の第一人者として、また第一流の方オペラ俳優として、ソウエート政府に重用されて居ることは、誰も知らない者はないくらゐである。そのシャリヤーピンは今回ニューヨークの劇場と契約が成立して、米國に巡業することになつた。そして一二ケ月前家族と共にロシヤを出發して、ロンドンに暫らく足を留めて靜養中であつたが、今頃はニューヨークに着いて、その偉大な體軀と美しいバスとでヤンキーを熱狂させて居る筈である。契約に據ると、シャリヤーピンは十五回以上出演することになつて居る。其外に特に彼のために準備された大きな舞台に活動俳優としても出演しなければならぬ。そして一回の出演に對して四千ドルづゝ受けることになつて居る。曾て伊太利の有名な聲樂家カルソーが「メトロポリタン・オペラ」座で一晩二千五百ドルの報酬を受けたのに比べると非常な優遇である。流石はソウエート・ロシヤの國寶だけあつて偉い。米國巡業のつひでに、我が帝劇あたりで招聘したら、アンナ・パーヴロワやゴドーフスキイ以上の人氣を博することは受合だが、一回千ドルではちよつと手が出

せないだらう。

七、ソログープ夫人の自殺

小說家ソログープの妻チエボタレーフスカヤ女史は矢張り閨秀作家の一人であるが、ソウエート・ロシヤから外國へ避難しようとしたその前日になつて、不思議にも急に行衛不明になつた。で、ソログープの食卓の傍には暫らくの間何時歸つて來るか分らない夫人のために毎日ちやんと食器を揃へておいたといふことであるが、最近の報道に據ると、哀れにも彼女は生活難の餘り自殺したといふことが分つた。生活難と言へば、有名な老小說家ニエミローウイチ・ダンチエンコがまだペトログラードに居た頃(今はベルリンに亡命中)、食ふに困つた彼は今まで手放したことのない貴重な藏書を賣拂つて、『文學者の家』(文學者の相互扶助機關)で一杯のスープに代へたといふ話があり、また一時反革命陰謀の嫌疑で惱まされたタガンツエフ老人は非哀と窮迫との餘り、矢張り「文學者の家」へ來て、一杯の紅茶と一片のパンとをロハで惠んで呉れと歎願したといふことが傳へられて居る。ロシヤ文學者の悲慘な生活が想ひやられる。

(十一月三十日)

生活と藝術

石丸梧平

□

現代人は、如何なる問題に對しても先づ生活と云ふ事を根底として考へるやうになつた。政治經濟は無論のこと、宗教も哲學も、單なる空想や學究ではなく、人間生活と云ふことを何よりもその出發點としてゐることだ。人間を描くべき藝術が、その人間生活を重要視しない理由がない。

□

菊池寛氏は先頃の新潮に「藝術作品の內容的價値」を論じ、その最後の行に生活第一、藝術第二と斷言してゐる。また最近しきりに主張せらるゝところの階級文學なるものも、所詮はこの生活の革新を叫ぶ新人の聲に外ならない。

斯くの如き傾向に對して私は元より喜びを禁じ得ない一人である。

私が最近數年間に書いた文藝批評や感想も、畢竟この生活といふ事の高調に過ぎないからである。私はかの藝術至上主義者の作品に對して、幾度か不滿を述べて來た。それからまた、人道主義の一部に對しても、その生活味の稀薄さを述べて來た。それは、私共の要求する藝術なるものが、趣味や遊戲や空想ではなく眞に我々が生きんとする力そのものであるからである。

□

この理由によつて現文壇に、所謂生活的傾向の著しくなつたことを喜んだ私は、最近それ等に對して多少の注意を拂つた。そして幾篇かの論文と作品とを仔細に檢討した。ところが、私は、そこに思はざる不滿に遭遇したのである。それが、私の要求する藝術と、餘りにも異るものであることを知つて少からざる失望を禁じ得なかつたのである。

□

その最大の理由は、それ等の人々が、生活と云ふことを、あまりにも固定的に考へて居ると云ふことである。限りたく流動せる人間の生活を描くべき藝術が、そこには單なる概念の遊戲

であつたり、主義の爲めの論理であつたりすることだからである。私どもの生活、ほんとうに生きようとする生命力が、さうした生活態度の藝術家によつて果して描かれ得るものだらうか。いや、それが藝術と云ふ名であつてもなくても好い。彼等は藝術と云ふ名を侮蔑して居る。そして何よりもこの人生の改造に呼びかけて居る。さうだ、藝術の爲めの藝術などと云ふ名にかくれて、單なる趣味に墮して居る一派の文藝家に挑戰すべく、寧ろ藝術と云ふ名をさへも惜まうとする彼等の心持は、私にもよくわかる。しかしながら、そこにはまた、彼等の大きい缺陷を曝露して居るのではないか。

□

「腹の空いて居る時、私は、たゞむやみに腹が立つてならない。そして何か適當な食事を取ることによつて、胃の腑が滿ちた時には、すぐにも眠くなる習慣がある。」と或る人が言つた。

ある主義によつて、この人生を解決せんとする人々は、或はこの、空腹の時の心理狀態に居るのではないか。空腹の時には食を求めることが、何よりも急であることを、私も同感だ。だが、率直にたゞ食を求めよそしてそれに關聯する或る制度の改造を叫べ。その叫びによつて人間の平等が呼び返されることは必要だ。――だが、それを固定した主義とすることの愚に醒めよ。

生活的價値と云ふことは、一人の人間が生きて行くうちに、一つの體驗として、內部的に痛感さるべきものだ。決して概念として外在的に存在さるべきものではない。人間の生活と云ふものが、さうした主義や思想によつて生き得ることだと信ずるのは まだほんとうの人生を知らぬものの空想だ。人間の生活は決してさうした智識的のものでもなく、論理的のものでもない。人間の存在は、無論精神と肉體との總合であるから、主義も思想もおのづから湧くものではあるが、たゞ空腹の時に食を求める主義を作つたやうな、さうした主義が、その主義でおしすゝめて行つた論理上の解決が、人間生活の全部であると考へるのは果して正しいか。

□

藝術とは何ぞや――と云ふ問題さへも、昔から多くの人々によつて繰り返し討究されて居る。そして非藝術現象に對しての價値の標準も、或は美に、或は眞に、或は善に、幾度か變遷して來た。所謂美學と云ふものが其等の問題を研究すべきではあるが、結局不變の標準と云ふ樣なものは決定されて居ない。所詮はさうした標準が固定さるべきものではない。人間が根本であつて、その人間が要求する所が、即ち其人にとつての最も價

値あるもの、偉いものたることは當然ではないか。

近く日本の文藝界の例を擧げて考へても、それは直ぐわかることである。自然主義が「眞」を叫びながら、あらゆるものに反抗して、力強く現はれて來たのは、そこに生るべき眞の意味があつたのである。本當の生きた人間の、なさねばならなかつた意義を私たちは自然主義の運動の中に見ることが出來るのである。既に歳月を經た今日から冷かに眺める時は、そこには單なる主義の殼があるばかりである。然し乍らそれが眞に「内」から動いた生きた運動であることを思ふ時に、私はそれを尊重せざるを得ない。即ちその時代には、自然主義の奉ずる「眞」が價値批評の唯一の標準であつたのである。

その後人道主義の運動が漸次盛になつて來た。而して「愛」と云ふことが藝術家の價値を批評する標準となつた。そこにも私は當然の道路を見ることが出來る。自然主義が其當時に於て最も價値ある運動であつたと同じく、既に自然主義の目ざした幾つかのものが達せられた以上は、更に他の不滿なものに向つての新しい運動が生れたことは、決して怪しむに足らないのである。それは時代精神ともいはるべきものであらう。この新しい時代精神が、舊時代に醸された古い空氣、それは新時代にとつては常に不合理なる空氣だが、それ等を破壞して新しい社會を建設しようとする運動となるのである。

階級文學の運動なども、確にこの意味に於ける時代精神である。そして、かくの如き新時代の精神が、我々の生活を一層正しいものにして行くであらうことは、私にも信じられる。だが、ここに最も注意すべき事は、我々の人生は結局單なる時代精神のみで生きるものではないと云ふことである。一人の人間の本當に生きる道は、何といつても個性だ。眞に自覺した個性によつて裏づけられない場合には、それは單に淺薄なる流行であり、そしてその主義なるものは、個人の生活にとつては、不必要なる殼となるのだ。要するに、一人の人間の生命生活への道、結局我々のたゞ一つの生活であり、同時に藝術なのである。單に自然主義よりは理想主義の方がよいとか、理想主義よりは何々主義の方が優れて居るとか云ふことを、何等の内容もなく概念的に云ふ人は愚だ。凡ては堰くにせかれぬ「個性」の發露でなければならぬ。さうした要求から生れたものにして初めて意味あるものである。

この點――各人の個性の堰くに堰かれぬ進路――さうしたものを「主義」と名づくるならば各人皆、「主義」があると云ふことが出來るであらう。

で、今日の階級文學の主張も、結局は　かの自然主義の運動と同樣の意味に於て、價値があり得るのだ。自然主義の精神は、現實の底を飽くまでも掘り起し、暴露することによつて、今日まで、多くの人間が自己の本性をさへもごまかし、たゞ美しく糊塗して居た。その安易な生活に對しての一大鐵槌であつた。そこにはまだ何等の建設的精神はなかつたけれども、人間性が持つて居る多くの醜惡なものを　さながらに見せることが出來た　人々は、これまであまりに氣づかなかつたさうしたものを明かに示されることによつて　ともかくも新なる發見をしたのである。この發見は決して無駄ではなかつた　次の時代に來るものは　少くともこの發見を根底として何ものかを建設しようとした　そして確に何かを築いて行つた。

私どもの生活は、かくの如くにして一層深められ、創造されて行く　私どもは、當時に於ける自然主義の運動の有意義であることを認める如く、今日のプロレタリアの運動が　生活革新の新人の聲として確かに有意義のものであることを認めざるを得ない。

□

今日の社會に於て、ブルジョア的精神がどれほど有害なるものであるかは今更言ふまでもない。ブルジョア的精神を破壊し　眞に自覺したる人間としてのプロレタリアの精神に生きんことは、今日に於ては、何より必要なことである　だが貧乏主義は御免だ　私はもつと全的に人間性そのものを肯定せざるを得ない。眞のプロレタリアの精神に生きることは望ましいが、しかし人間の精神生活を裏付けない唯物的改造主義には同感することが出來ない。

「プロレタリアとは貧乏人と云ふ意味ですか」と、私にきいた一青年があつた。

さうだ　ブルジョアとは有產階級　プロレタリアとは無產階級――單に唯物的社會問題の上からのみこの言葉の內容を考へるならば　その青年の解釋は正しいと言はねばならぬ。だがプロレタリアとは單なる貧乏人と解されて、プロレタリア自身は滿足であるか。現代の生活が惡いのは社會組織が惡いのだといふ――それはよい。だが人間生活としての「自己」に何等の反省もなく、たゞ社會組織の改造をのみ叫ぶ人々は、その社會が終局にどんなものになればいいといふのだ。また、なり得ると思ふのだ　私は今日社會組織の惡いと云ふ事には同感である。そして、それを少しでもよくして行かうと云ふ事にも同感だ。しかし私には固定した終局がない。ましてや或る一つの社會組織を實現することが、人間生活の最後のユートピヤを

齎らすものだとは考へられない。もしさういふユートピヤを考へて居る人があつたら、それは單なる概念だ。論理上の解決に過ぎないのだ。もつと〲人間生活の眞相を知らなければならない。

人間生活とは所詮は慾望の連續だ。食を求め、性慾の對象を求め——その二つを根本慾望としてそこから派生する無數の慾望を人間は持つてゐる。そして生活とは所詮はその連續に過ぎないのだ。何人がこの慾望を絶ち切つて所謂聖者の生活に入ると斷言し得るのだ。

かう言つたからとて、私は煩惱の生活を全然是認してゐるものではない。所詮は斷ち切る事の出來ない煩惱ではあるが、余りにも狹い利己主義の生活が、我々の人類生活をどれほど不幸に陥れて居るか！ かの資本主義者といはれるもの丶多くは、この煩惱生活の極端なる主張者とも見るべく、そしてその派生活に成功したものであらう。ここに於てか種々なる社會改革の運動が起つたのである。プロレタリアの運動も無論その一つに違ひない。しかし乍ら、彼等は、彼自身が眞に聖者となることによつて、所謂資本家を打つべき資格があるであらうか。

私は決してブルジョアの精神を是認してゐるのではない、それからまたプロレタリアなるものが、眞に聖者でないからとてブルジョアを打つべき資格がないと言ふのではない。

可愛いい自分自身に對してさへも、余りにも辛くなり得ない自分を打ちのめしたい氣さへ起る。階級打破の聲は自覺した人間の聲としてどこまでも當然である。

二

我々の理想は無論、全人類の平等にある。けれども人間生活が所詮は慾望の連續である以上、その打破し改造された平等なる世界が、いつまで續くであらうか。果して彼等の理想とするユートピヤが永遠に存在し得るだらうか。斷じて不可能だ。世界の革命の歴史が最も明かにそれを示してゐる。その點に於ては、煩惱の人間生活が、固定したユートピヤを持つことは、全然絶望であると言はねばならぬ。

だが、絶望であるからとて、不合理なるものを是認することは出來ない。私共は常にその不合理なるものと戰はねばならぬ。それが自分自身の心のうちにある不合理であつても、或はまた社會のうちにある不合理であつても。

さうした努力によつて不合理なる自己と不合理なる社會とは、幾度も〲革命を繰りかへされるであらう。聖者になり切れない人間、煩惱的生活の人間にとつては、それより外に道はない。

この意味に於て、私は、社會主義の運動にもある程度の意義を認める。私は社會主義の運動が必ずしも人類最高理想を實現するものだとは思はない。さうしたユートピヤの實現し得ないことは歴史もまた示してゐる。だが社會主義の提唱する理想に、人間生活の上に確に反省すべき一つの事實である。つまりは社會主義なるものが、人間生活の最後のユートピヤを作り得るがために意義があるのではなくて、その過程の上に意義があるのだ。

□

プロレタリアの精神も、この意味に於て有意義である。自然主義も人道主義も同じく人間生活の歩みである。人間の醜惡なることを曝露しただけで、人間に何の幸福があらう。愛は人間生活の最高理想であることを提唱されたとて、愛し得ない場合のある人間性の事實をどうしてよいか。よきも惡しきも如何なる問題が提唱されたとて、人間生活が直ちにその提唱に合致し安心し得られるものではない。また、生命とは、かくの如き固定した世界に見出さるべきものではないのである。所詮は主義は、その人にとつて、一の理想であらう。だが、如何なる主義を掲げても人間生活なるものが、所詮は生長する生命生活である以上、たゞ一つの固定した主義理想が、一人の人間の生涯の生活を保障さるべきものではない。

□

加藤一夫氏がその夫人に去られた事によつて、初めて、彼がこれまで意識しなかつた本當の愛を知つたと云ふことは、決して笑ふべき事ではない。彼が主義の人卽ち智識の人としてよりも、本當の人間生活に目醒めたといふ事に對して、むしろ祝福すべき事である。虛無主義者としての彼が、その去つた夫人に對して、愛を感じた。そこには、單なる虛無でなく人間生活が鮮かに開展されたのだ。そこには、主義の人としての彼はこわれたが、人間としての彼の存在は一層明かになつた。

□

ある青年が私に對してこんな事を訊いた——それは私が加藤氏のあの事件に對して、そこにこそ加藤氏が、初めて人間として生き、藝術家としてより偉大なるものになり得た事を述べたのに對しての質問である。

「加藤氏がその主義まで亡して、夫人に對する愛を感じたからとて、その夫人が歸つて來なければ何の利益もないではありませんか。さうした事が、より大なる藝術家となり得るのであつたら、藝術と云ふものは、人生にとつては餘りにつまらないものではありませんか。」と。彼は何と云つてもまだ若い。その青年がかねてから藝術至上主義の創作を罵倒してゐる事は私にも

わかつて居たが、さりとて彼は餘りにも端的な功利主義者であつた。彼は、加藤氏の後悔せる或る文章を見て、夫人がすぐにも歸つて來ることを、かくの如き文章を立派な藝術作品と考へたのであらうか。私は藝術至上主義の作品を排するとともに、かくの如き狭義の、人生のための藝術を排するものである。

　加藤氏の告白を讀んだ夫人は更らに彼女の悲しみを深めたであらう。加藤氏に愛がないと感じたからこそ、絶望の餘り新なる愛人を得、そしてその愛人のもとに走つたのである。だが、加藤氏に今は、新しい愛の目醒めがあつた事を知つたとき、彼女はその殘しておいた愛兒のことを思ひ出すにつけても、再び加藤氏のもとに歸りたいと云ふ心が動いたかも知れない。けれども今はさう簡單に歸らるべきものではなかつた。彼女が新に得た愛人との關係は、今は決して簡單なものではなかつたからである。置き去りにした愛兒と加藤氏を思ふにつけて、かの女の悲しみは更に新になつたと共に、新なる愛人に對する愛は更に強かつたに違ひない。斯くの如くして加藤氏も、それから去つて行つた夫人も、共に悲痛の底に沈んで行つたであらう。そこには主義だとか、理想の問題ではない。さうしたものは早くも亡びてしまつて、血みどろな人間生活があるばかりである。かの青年が言つたやうに、二人の生活が復舊する事によつてのみ、人間生活がよいのではない。私どもの所謂藝術とは、そこには如何に主義が亡びようとも、理想が挫かれようとも、この悲痛なる體驗によつて、加藤氏そのものが更に深い人間生活を味ひ、そこから一層强い生命力を汲み取り得るであらうところの體驗そのもののうちにあるのである。所詮は藝術は主義でもなく、單なる理想でもない。生命生活への體驗である。

□

　私は社會主義の運動や階級文學の主張に對して、ある程度の價値を認める。だが、人間生活の本當のものは、さうした主義や理想に止るものではないといつた。そして一つの生命生活への無限の進展、人間生活のより深い體驗こそ、一人の人間を更らに新らしく生かすべき唯一の道であると言つた。――私の藝術の世界とは即ちそこにあるのである。この意味に於て、私は菊池寛氏の生活態度と藝術に對して甚だしく不滿を感ずるものである。

　菊池氏が彼の論文「文藝作品の内容的價値」のうちに「生活第一、藝術第二」と叫んでゐるのは、如何にも藝術至上主義者に對する挑戰であり、その點は私もまた同感するところだが、その生活に對する理解が、かくの如き態度であつては、氏の人間生活に對する體驗も甚だ心細い。――菊池氏の藝術と生

氏の藝術觀に對する批評は私は改めてするつもりである、ここには以上述べ來つた私の論旨を進めて行くが爲めに、たゞ二三の問題を檢討するだけに止めておく

菊池氏に言ふ。「文藝作品の題材の中には作家がその藝術的表現の脚杖に觸れないうちから、燦として輝く人生の寶石がある。又「[illegible]先生の性格は、漱石氏の藝術とは、別個の存在である。」と、

私は今、菊池氏の藝術觀を根本的に批評するだけの紙面を持たない。だが、單にこの一節を讀むだけでも、その藝術觀並びに人間としての氏の、生活態度が如何に固定的のものであり、觀念的のものであるかが窺はれるのだ。

「ある」とはどういふ事だか、それを何よりも考へなければならぬ。氏のこの言葉によつて見れば、氏は「ある」と云ふことは、どこまでも客觀的自然的の存在であつて、それを見る人間とは全然別個のものだと考へて居るらしい。

だが、きゝたい。では菊池氏はさう云ふ存在をどうして知ることが出來たか。――知ると云ふことに既に菊池氏自身の精神の働きではないか。その働きを外にして、どんな事件でもが、菊池氏の意識のなかに入つて來ないではないか。卑近な例だが、猫に小判と云ふことがある。假りに、小判は尊いものだとしても、猫にはその價値がわからないのだ。これは決して功利的價値のみに就て云ふのではない。一般の價値の問題だ。また、同じ高嶺の月を見ても、見る人の心々によつて、嬉しいとも見え、悲しいとも見えるのではないか。「作家がその藝術的表現の脚杖を觸れない裡から燦として輝く人生の寶石がある」と斷言して居る菊池氏の言はあまりにも無謀である。「燦として輝く」と云ふ形容詞は誰れがつけたのか。さう云ふ形容詞を使用すべく感じたのは誰れが感じたのか、人間に感じない寶石と云ふものが、凡そこの世の中にあるだらうか。

なるほど或る點までは、科學の世界が、客觀的の存在を證明して居る。「太陽は西から出るものだ、これは私の主觀だ。」と云つても、今の世ではたゞ狂人としか思はれないであらう。だが、人間の精神生活はさうした科學的のものとは全然異なるのである。月を見て悲しいと思つた人があるからとて、「それはいけない、月ほど喜ばしいものはないのだ」と云つたやうに斷言することが出來るだらうか。「月」の科學的研究は自(おのづか)らある。人間の精神的感激と「月」の科學的存在とはおのづから別でなければならぬ。菊池氏は、藝術と云ふやうなものに對してさへ、その科學的存在を强いようとするのであるか。それとも又「[illegible]先生」や耶馬溪の坊さんは科學的存在だと斷言し得る勇氣があ

るか。

いや、同じ「舊先生」やそのお坊さんなども、心理學者又は生理學者がその研究對象として取扱ふ場合、そしてそこに或る一つの科學的存在を發見したと云ふことは出來る。しかし、藝術の實在と科學の存在とは自ら別である。

いや、その科學的事實でさへ私には永久不變なものだとは思はれない。かの相對律は、萬有引力の法則とは反對の傾向ではないか。――既に科學的眞理さへもかくの如くである。この世界の何處に、事實は事實だなどと言ひ切ることの出來るものがあるか。結局は一人の人間がしかく感ずることの外に「實在」はないと云ふことになるのである。

私の藝術創作の根本態度は「一人の人間の彼自身の眞」を描くことである。このことは私が四年前、東京へ出て以後の最初の創作集を出した時の序文にも明かに書いておいた

一人の人間の主觀、生命そのものは、即ち宇宙の實在とも云へるのである。元よりその實在は固定したものではない。生命にはどこまでも生長がある。ベルグソンの主張した實在の進化に私は同感である。

そこで菊池氏の言葉を更に吟味しよう、「藝術家が手を觸れないさきから輝く人生の實石がある」のではなくて、見識ある藝術家が手を觸れたから、心を寄せたから、その實石が見出されたのだ。愚鈍な猫が見たのではその實石は見出されない筈だ。或る事件を見て感動したのは、事件それ自身の力ではなくて、感動した人の心が動いたのだ。しかもその感動はその人の體驗の如何によつて一層深められるのだ。即ち材料だけに藝術的價値があるのではなく、感動するところに（或はまたしないところに）その人の生活があり、同時に藝術的見識があるのだ。菊池氏が耶馬溪案內記を見て感動したところに、その感動の程度に、氏の、人として、また藝術家としての見識が窺はれるのだ。苟も世の中の事象を藝術作品として取り入れるにあたつて、最初から（藝術家の心と別個に獨立して）輝いて居る實石がある筈がない。藝術家はどんな材料から創作をしようとも、その藝術的價値を發揮し得るのだ。その材料をどんな風に生かすかと云ふところに作家の見識と手腕とがあるのだ。その見識こそ同時にその人の生活である。

藝術家は、どんな事象からでも創作の材料は取り得るのだが、さりとてどんなことをでも出鱈目に書くと云ふのでは決してない。そこには自ら整理がある。自己の生命を通して、藝術的價値の判斷を通して、そこに初めて手を下すのである。そこ

にこそ作家の最大の問題がある。その藝術家にして、何等の深い體驗がなく、人生に對する高い見識がなく、眞の生命が動いて居ないならば、その作家の手を下すものは、極めてつまらないものになるであらう。さき頃或る批評家が、現代作家の多くの作品を評して「實生活の紙屑」と云つたのは面白い言葉である。平凡なる作家が心を動かすものは即ちこの紙屑ぐらゐのものである。材料のうちに最初から寶石と紙屑があるのではない。寶石は勝れた作家の心のうちにあるのだ。生活のうちにあるのだ。

□

以上菊池氏の論文を通して氏の藝術に對する態度を眺めるとき、おのづから氏の生活態度が窺はれるやうな氣がする。要するに菊池氏が彼自身の生活をよくし、その體驗から出發して彼の藝術を創作せんとするのではなくて、彼が單にその讀書や見聞から一寸した思ひつきによつて、それを戯曲や小説にしようとする傾向のあることを示すものではないか。氏の好んで描くテーマものは遺憾なくこの事實を證明してゐる。

□

菊池氏の作にはこのテーマものの外に自叙傳系のものがある、そこにも氏が主張する所謂生活的價値らしいものが多分に描かれてゐる。即ち人と人との實生活の交渉、氏が道徳的價値と考へるらしいものが多い。だが、それ等の作の殆んど全部が、やはり此のテーマものに於ける缺點と同じく、そのうちに描かれてゐる人生は、單にその作の主人公自身のエゴイズムだけしかあらはれて居ない。それはある程度まで讀者を引きずつて行くだけの興味はある。けれどもその一篇の作を讀み終つたあとに感じられるその藝術の價値（氏の言葉を借りて言へば生活的價値或は道徳的價値）の不滿は、これは作者が、その全人生にまで透徹する理解に缺き、また廣い視野を持たないからである。その主人公が、自己の利害關係の立場からのみ、相手の人物を惡んだり褒めたりするそのまゝの狹義の道徳を、作者自身も一緒になつて是認してゐるからである。主人公がどんなに小さい人間でも、それは無論惡くはない。概念描寫を避けて先づ「一人の人間の眞」を具體的に描かうとする私の態度は、無論作中の人物に好惡はない。だが藝術作品として最も大切なことは、それを描く作者の態度だ、作者の批判の目の深さだ。

菊池氏に限らず、凡そ自叙傳系のものを書く場合には、それを藝術作品となすには作者は、そこに十分の用意がなければならぬ。そこに描かるべき主人公は、作者自身であるがため、作家にとつて、作中の主人公に對する批判の目がにぶり勝ちにな

る。その主人公即ち作者自身を突きはなして見、その人物の行爲に對して、鋭い批判を與へることは、甚だしく困難になる。ある一つの行爲に對する道德的批判を下すべき場合に於ても、作者は知ず〳〵のうちに自己辯護に陷つてゐる。かうなると其作は既に藝術として價値のないものたることは云ふ迄もない。私は今、自己辯護に陷ると言つた。だが、それは必ずしも自己辯護をしようと考へない場合さへも、そこに描かれたる主人公と作者とが餘りに近いが故に、作者はその主人公を批判する餘地を有しないのである。自叙傳系の小說が、多くは、その事實の上に興味はあり乍ら、藝術作品としては多大の不滿を讀者に與へるのは、これがためである。だが、もし、その自叙傳的の作が、藝術作品として成功してゐる場合には、それが單に作品としての成功ばかりでなく、その作者は、人間として確かに一段の進境をなしたと云へるのである。——その他に就ての詳細論は略するが、凡そ藝術作品とその作者の生活とは、かくの如く密接である。作家の人格の大小がその作品の大小を決定するのは自明の理であると云はねばならぬ。

〔二〕

私は今、菊池氏の自叙傳ものが、常にその主人公と作者の批判の目とが、餘りに近くて、藝術作品としては甚だしく不滿なものであると言つた。しかし乍らこれは單に菊池氏のみに云はるべき問題ではなくて、他の多くの作家（私自身をも含めて）にも共通なる缺點である。たゞそれが菊地氏に於て、特に目立つのは、それは菊池氏が創作する藝術が、他の作家より一層多くの生活味を描かれてゐるからだと云ひ得る。即ち菊池氏自ら「生活第一、藝術第二」と云つてゐるだけに、そこに描かるべきものは、單なる文章の修辭や技巧に興味を持つのではなくて、どこまでも、氏の所謂生活的價値に突進して行かうとする點にあるのである。かくの如き理由によつて、菊池氏の作には往々その缺陷を露骨に見せてしまふことがないではない。が、作の成功、不成功は別問題として、私は、菊池氏が、所謂その生活的價値を、その作品の中に色濃く盛らうとする態度を頼もしく思ふのである。菊池氏の作に比べると同じくこの自叙傳風の作をなす場合でも、或る作家の如きは、たゞそこに描かれた過去の自己、その過去の生活の思ひ出から、ある抒情味にひたるばかりで、何等の積極的色彩、生活的反省を出し得ないものがある。即ち世の讀者をして、菊池氏の作品に多くの興味を持たしめる所以である。——現代人は、一創作のうちに單なる抒情味を求めて滿足するほどの閑人ではない。彼等は、もつと〳〵生きる道を求めて居る。

□

それが藝術の名であらうとも、それが哲學の名によつてなされようとも、そんなことは問題ではない。現代人は、たゞほんとうに生きたいのだ。ひたすら生きる道を求めて居るのだ。而して私は、その生きるべき道は、唯一の藝術の世界にしかないと云ひたい。――その私の藝術觀、それを更に詳しく論じたいが、與へられた紙面がもうつきた。他の機會を待つより仕方がない。しかし、慧敏なる讀者には、以上に述べた私の論旨が、何を意味して居るかは、ほゞ察せられたことと思ふ。

追加―菊池氏の文藝作品の內容的價値問題

私の論文「生活と藝術」のうちに、私は菊池氏の藝術及生活に對する態度を批評して置いたが、あの論文中に引用したのは、氏が新潮の七月號に揭げた「文藝作品の內容的價値」のうちから採つたのである。ところが今日はからずも新潮の九月號に於て、同氏が同じ問題を再論してゐるのを讀んだ。そしてこの「再論」の中には更に的確に氏の態度を見るに足るものがあつたのでそれについて追加する。

菊池氏はいふ「內容的價値とは何であるか。私は作家の藝術的表現が、もつと人生に對して有効な意義のある素材の上に動いて貰ひたいといふのである。もつと、我々の人生に密接の關係のある素材の上に動いて貰ひたいと云ふのである。藝術家が如何に觀、いかに心を動かす、それは藝術的表現の大部分である。が、私は、「何に就て」と云ふ事をもつと重要に考へたいのである。私はストリンドが軒に巢を張るささがにの蜘蛛の振舞をどんなに觀、どんなに感じたか、それについて彼の心がどんなに動いたかが、どんなに完全な形式をとつてあらはれたとしても、それだけでは滿足しないといふのである。（中略）私の所謂內容的價値、生活的價値がないと云ふのである。」

詳細は前の論文に讓るが、ここで尤も重要なことを一つ言ひたい。それは菊池氏が以上の論文に於て「何に就て」觀、如何に心を動かすかといふことを力說してゐるその「何に就て」である。菊池氏の言はんとするところは、藝術家が如何に鋭く見、如何に敏感に心を動かしても、軒に巢を張るささがにの蜘蛛の振舞を描いたのは何等の內容的價値、生活的價値がないと云ふのだ。けれども、抑々さういふ風な考へ方が既に概念的なのだ。つまり材料のうちに「藝術の魔杖の觸れない先から寶石」と紙屑とがあるのだと考へる、それが即ち概念的なのだ。

私はここで一寸した例を擧げて見よう、たとへば火鉢に鐵瓶がかけてある。それがよく熱して湯氣が立ち、蓋さへも動いてゐる。——さうした素材は菊池氏にとつては、何等生活的價値のないものだと言ふであらう。無論それは寶石ではあるまい。だが、ソツト氏にとつては、それは蒸氣力を發明する機緣であつたのである。鐵瓶から發散する蒸氣が生活的價値なしと、どうして斷言することが出來るのだ。それは決して科學上の發明のみに關して云ふのではない。私の所謂人間生命主義の藝術に於ても同樣に重要な問題なのだ。菊池氏がその素材の上に價値がないと思ふのは、生活上の「寶石」をただ概念的に求めようとする缺陷から來るのではないか。

なほ一つ菊池氏が藝術に對する誤解の一例を擧げて見よう。それは、鐵瓶の湯氣を眺めた時に、それに對する藝術家の態度と云ふことを、單にその湯氣のあがる形や鐵瓶の色や恰好や、さうしたものを微細に描寫するそのことが、藝術だとでも考へてゐるのではないか。さうしたものを藝術だと考へてゐる日本現代の藝術家はなるほど澤山ある。菊池氏がさうした藝術家に不滿を抱くの余り、この素材の問題を持ち出し、その生活的價値を高調するのは現代日本の藝術界に對して一警鐘であることは十分認める。そこに菊池氏に對する同感が私にもあるが、それにしても、その生活的といふことを、單なる概念で探し出さうとする態度は、まだ徹底したものとは云ひ得ない。生活的價値を高調する菊池氏の三省すべき點ではないか。

新刊紹介

□**最近米國の眞相**　（後藤武雄著）　時事新報に通信した一部を輯錄したものである。（二圓八十錢、三田書房發行）

□**西洋文化の裏表**　（關伊右衛門著）　著者が外遊中の所感を述べたもの。（二圓四十錢、周文社發行）

□**眞心**　（中村星湖譯）　フロオベエルの作を譯したものである。（一圓三十錢、白水社發行）

□**自我の黎明へ**　（廣瀬又一譯）　簡易生活の著者として有名なワグナーの原著を譯したものである。（一圓三十錢、極光社發行）

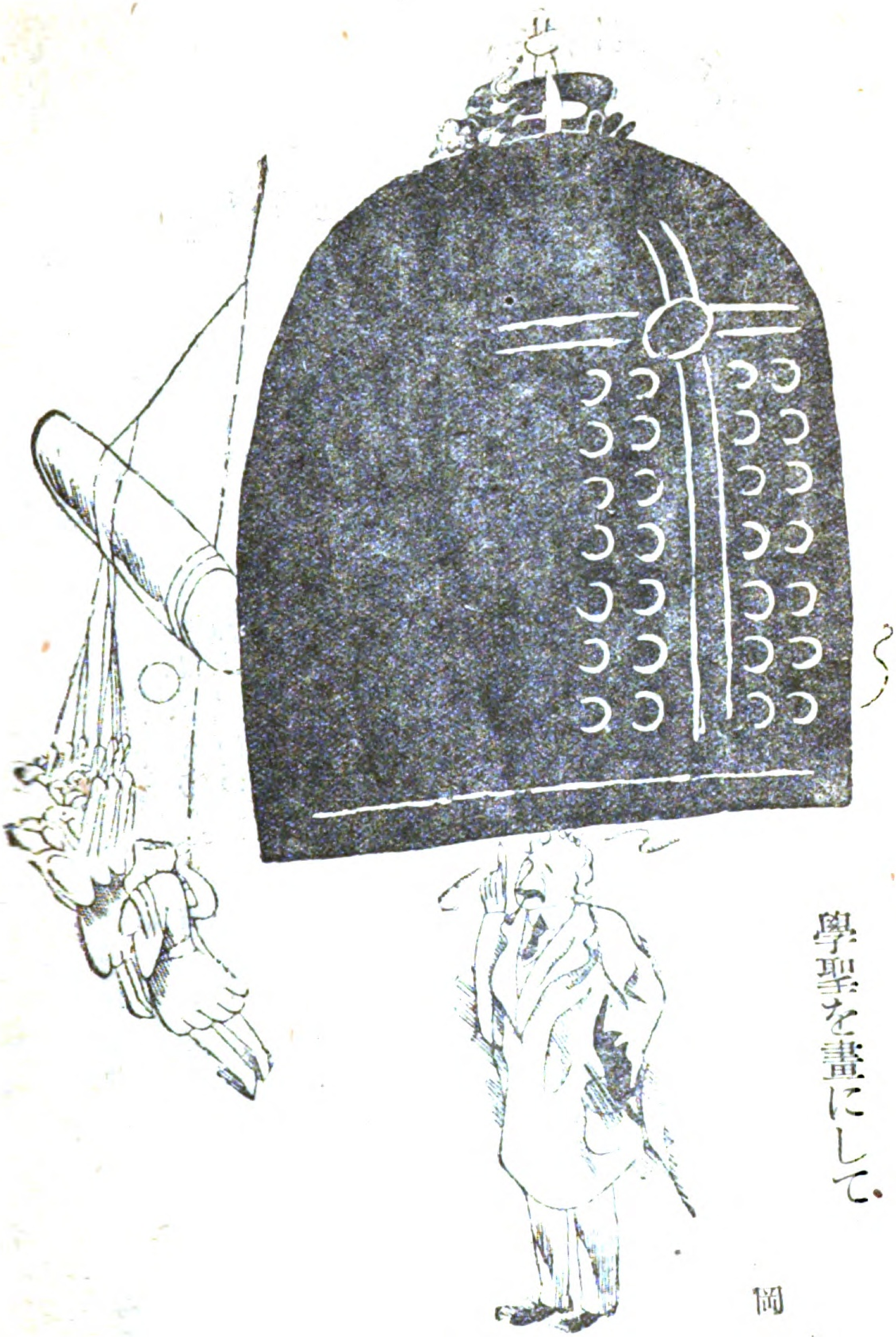
□**外　爲替換算法**　（玉水千市、柳樂健三共著）　（二圓、寶學館發行）

□**佛教の現代的意義**　（遠山諦觀著）　親鸞の眞精神生活の原理を解し易く說いたもの。（一圓、新潮社發行）

□**本邦輸出入品詳解**　（坂口武之助著）　（二圓七拾錢、東洋經濟新報社發行）

□**英語小發音學**　（岡倉由三郎著）　發音學について一般知識を普及するための著書である。（一圓二十錢、研究社發行）

□**レオナルドの手記**　（市橋善之助譯）　人生、自然、藝術、幻想に分ちてレオナルドの作を譯したもの。（二圓十錢、叢文閣發行）



學聖を畫にして

岡本一平

京都智恩院ではアインスタイン博士の爲めに普段撞かぬ巨鐘を撞いて見せる。博士の聰きようが面白い。撞く巨鐘の眞下に入つて立つ。そして鳴る鐘の眞中には却つてその音が聞えぬ道理を味つて居る。坊さん達はあの世の學問は深いけれどとの世の學問の物理にはうとくて居らせられる。故に博士の振舞を解せぬ顔だ。



同じく智恩院の鶯張りの廊下に博士は立つ。木と木と擦れ合つて木の出す音と思へぬ微妙な響に博士は捉へられる。子供のやうになつて廊下を踏む。同伴の石原博士も眞面目な顔をして助手を勤める。鶯の音を踏み出し乍ら「K_1に對してK_2はだね」旅行中にも研究をやめぬ相對性原理の商[illegible]を始めた。一種の美觀。



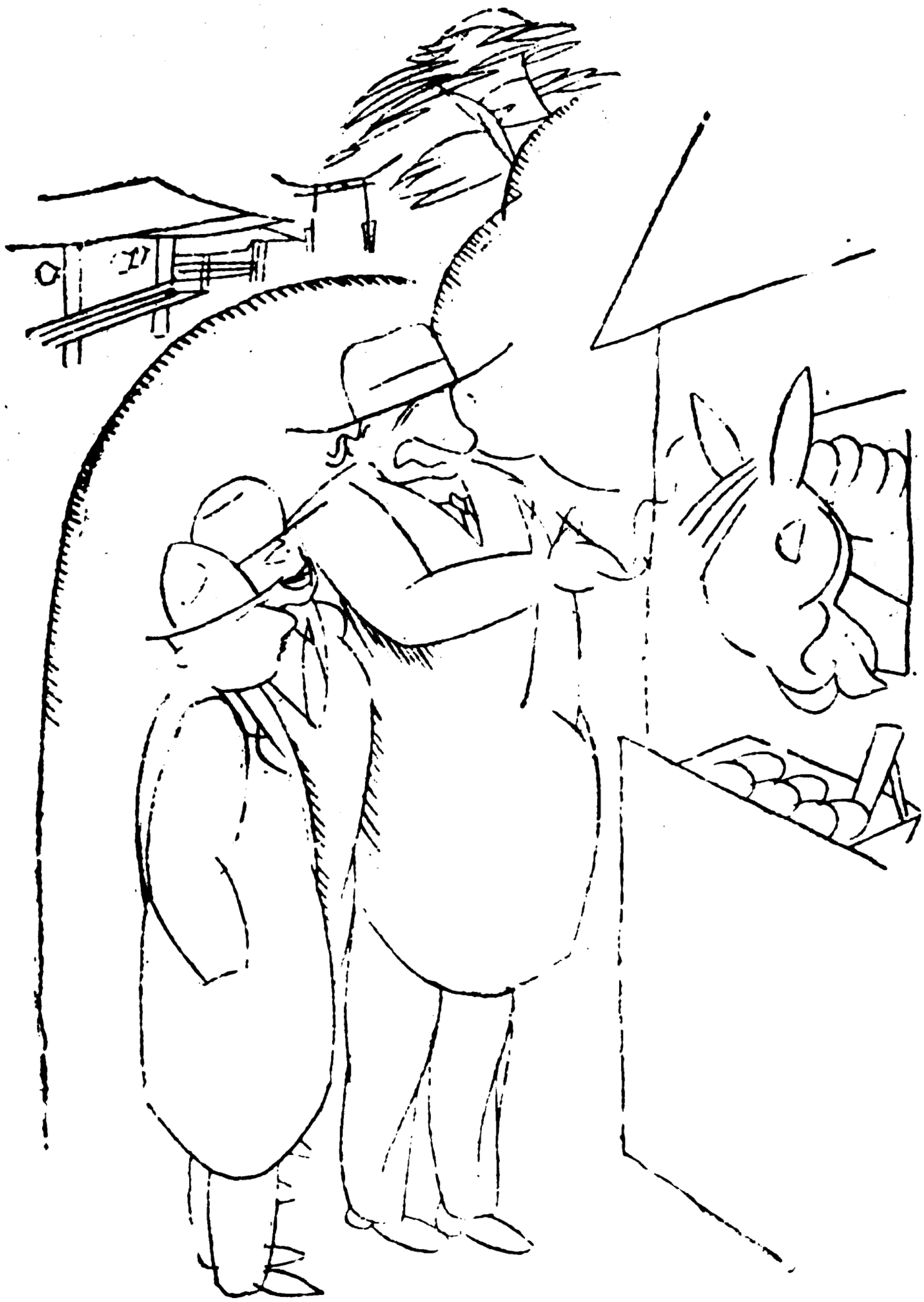
三

博士は奈良に遊ぶ。春日神社の神鹿の中でお叩頭を覺えてるのがある。パンを乞ふて博士にもお叩頭をする。之に對して博士もお叩頭をする。そのお叩頭の態度を觀ると博士が日本の貴顯紳士達に向つてしたお叩頭も身體を曲げる角度なり、敬意の持ちようなりが少しも變つて居ない。



四

博士は安藝の宮島へ來た。散歩。宮島の子供が奴凧（やっこだこ）を揚げてるのに凧をめんくらはして居る。博士が糸目を直してやった。うまく揚つた。今度は風が來ぬ。子供は再、博士の方をみた。博士でも風だけは如何ともし難い。博士は氣の毒そうな顔をした。



五

神社の神馬(しんめ)が型の如く豆皿を前に並べ格子から首を出して居る。博士曰く『神馬は自分の神聖な任務を自覚して居るだらうか。食慾のみだらう。坊さんといふものと同じだね』



六

博士は嫌(いや)な顔をした事は無い相だ。ところがする事がある。それは夫人に好きな煙草を身體に毒だとて嗜(たし)なめられる時だ。たゞの嫌な顔ではない。少し相手を馬鹿にしたような少し反抗するやうな少し空惚(そらとぼ)けるやうた而して根本の基調は矢張り嫌な顔だ。予はこのやゝこしい表情を出す爲めに三十八枚描き損じをした。三十九枚目のこれも首尾よくとは申しきれぬ。

——（學究を當にして）——



七

ホテルの食事には夫人がいつも献立の注文役なのだ。ところが今日は頭痛がして出席出來ぬ。博士が代つて注文するとて献立表を前に置き『責任の壓迫の下に　を感ずる』と先づ力（りき）んで見せた。われ等は笑つた。博士に喰べさして貰ふと鳥が先に川たり魚が後に出たり頗る危險だ。そして自分は、下等だといつて夫人に禁（と）められて居る馬鈴薯（ポテトー）を喰べて居る。（食卓の拝婦人は博士夫人にまず介添役稲垣氏の夫人）



八

稲垣氏の室へ博士が來て四方山の話し。博士は愛玩のパイプの掃除許りしてる。予は一拶を呈する『先生は吸ふ爲めに煙草を吸ふのか、詰める爲めに煙草を吸ふのか判らない』すると博士が『目的は吸ふのにあるが、結果は詰まる爲になるのだね。人生も亦斯の如し、別けて結婚の上に於て』といつた。掃除がすむと今度は『家庭工業』だといつて靴の底の破れ革をナイフで剝がしては火に燻べる。臭くて困る。幾變禁めてもにや〳〵笑ひ乍らこつちの顏を見ては燻べる。博士にはあまのぢやくなところがある。

南歐の空（二）

吉江喬松

四月下旬のほがらかな南歐の空は、ナポリ灣の上になだやかな、自在な、靜かな、輝く穹窿を築いて、その基底に横はる、市街を、丘陵を、地中海を、さらに、ゆるやかに煙をあげてゐるヴェスヴィオをまでも、青色の薄絹の日の光もて包んでゐる。

澄んだ空氣の柔かさ、黄橙の果樹の高い薫り、蜜蜂の羽音、蒼ぐろき橄欖の樹林の下に寄する海波の白銀の頭、そして、丘の上へと肩をすぼめ合ふやうにして、次第に高く、樹林の間を背伸びするやうに立ち重なつてゐる人家、人げすくなき眞晝坂を、聖マルテノの寺院の廻廊から見おろせば、南國の光りと、氣分とはこゝに凝つて動かざる溫き靜けさをつくり出したやうである。

不意に、その靜けき中空へ、鐘の音が響き渡る　匂はしき空氣をどよもして、丘の麓より、中腹より、頂きより、正午をつぐる十寺廿寺の鐘の音が、空中に響きを交はす。いままで鐘樓の屋根に羽を休めてゐた無數の燕が、その響とともに、空中にまひ立ちひるがへり、音の波と、光の波とをくゞつて中空に亂舞する。人影のない石の廻廊へ、白い圓柱の立ちつゞく間へ、その音波は、空氣の微動となつて、奥深くまで消え込んで行く。と、その奥まつた密室の戸が開いて、裾長くまとうた黒衣をさばいて足早やに、廻廊をめぐつて行く祈禱僧等の姿が、一人また一人と、現はれて消えて行く。

三人の旅人は、一人の案内者につれられて、その寺院の中庭へ來て立つてゐた。明るさが庭々の隅々までを照らして、花草の地に落す影をもくつきりと浮びいださせ、噴水のむせぶ音にも影が漂ひ、四月の空は、この廻廊に取りこめられたる中庭のうちに、永久の光りと、永久の靜けさとを植えつけてゐるやうである。

ナポリを訪問する日本の旅客にとつて、何より都合よき便宜を與へてくれるのはアントニオである、彼はホテル付きの案内者を職業としてゐるが、忠實で、勇敢で、慧敏で、特に日本人

には非常な好意を持つてゐる。彼の手帖には、種々な日本人の署名がなされてゐる。彼は殆ど有ゆる國語をあやつる。彼の妻は長い病氣で、ヒステリイになつてゐるので、彼の生活は苦しいが、そんなことはけぶりにも見せない。一錢でも餘分の金を貪らうとはしない。彼には如何なる日本人でも、一切の金を托して間違ひがない。自分の金錢でも彼以上に精密に計算は出來ない。彼は日本人にとつて、指導者であり、保護者であり、看護人である。伊太利人の日本好きを彼一人が具體化してゐるやうである。喧騒なナポリの市街は彼一人の手で美化されるやうである。

我々を導いたのもこのアントニオである。彼は到る處に質素な簡淨なレストランを、休息所を見出して呉れる。ウェスヴィオの煙をまともに望み、遙の水平線上にカプリの島の見えかくれする丘の上のレストランで我々は晝食をとることゝした

ナポリに於て、丘の上に立つことは、この市街の頂上に立つことである。そして斷え間なき煙をもて人を威嚇してゐるヴェスヴィオに向ふことは、安全の地にゐて自然力と對立することである。幾度びか示めされた、山岳の激怒もこの市街には、その勢を伸ばすことは出來なかつた。深い、極めて深い海を前にして、丘に據つて建てられてゐるこの市街は、一つの城のやうなものである。この周壁のない城郭に據つて、人々は海波を脫れ、山岳の壓迫を脫れてゐるのである。從つて、ナポリの市街くらゐ人々の累集してゐる伊太利の都市は他にない。避難者、籠城者の密集のやうなものである。

細長い街路、それを横切る小路は、海濱へ走るか、丘陵へ登るかである。そして、その街路の兩側に立つてゐる黑い狹い家々には、皆な鐵のバルコンがついてゐて、その欄干には衣服が、リンネンが日に曝らされ、海風に吹かれてゐる。それが印度人の用ふる吊團扇（パンカ）のやうに街路の上にひるがへる。そして、その街路には無數のナポリタンが喧騒を極めてゐる。

實際、ナポリは路上に生活してゐる人々がある。ことに卑賤へ下れば、下るほど、殆ど終生を戶外で送つてゐる人々がある。アラビヤ人は馬背を家とし、そこで育ち、そこで生活する。エスキモオ人は雪の中に生れ、雪の中に死んで行く。ナポリタンは街路に生れ路上を住家とする。戶の內外の區別のない人々が多い。しかも路上で赤裸々の生活を營み、肉體を露出し、原始人に見る如き相貌を備えた多くの人々がある。くぼんだ眼、曲つた四肢、もつれた頭髮、それ等を一かたまりにして、わめいてゐる。——支那の大都會の舊城內へはいつたやうな感じである。そして、急激な雜を脫して、一ヶ處へ集りて來

た人々の群れのやうな感じを與える。城中へ累集した避難民の一團の如き感じを覺える。

丘を下つて市の中心へはいれば、伊太利第一の喧騒は都市の面影は一層はつきりして來る。人々の騷ぎと、鞭の響きと、馬の嘶き聲と、でこぼこした鋪石路の上を走る車輪の音と、ことに、ポルタ、カピアナへ行けば、市の糧食の集散地たる市場へ出る。大都市の物質生命を掌握してゐる市場の光景は、いづこに於てもさうであるが、騷がしさと、亂雜と、一種の緊張、物凄さがある。――巴里の中央市場を朝早く目撃した人には、その恐ろしさばかりの騷きと、亂雜の中のおのづからなる秩序、運行とが四百萬市民のその日その日の生命を掌りつゝある眞劍な光景を終生忘れられないであらう如く、ナポリのポルタ・カピェアナでは、この市の五十萬の人口を養ふ可き物資の分配場、籠城者の食糧配布場が喧騷そのものゝ如く眼前に展開せらるゝのを見るのである。併し、この海市たるナポリの市場は、他の都市の市場とは異つて、全く、海底へでも下つたやうである。有ゆる貝類、有ゆる魚屬が集められ、投げ出され、積み重ねられ、海膽や、帆立貝や、雜魚が、幾百となき籠に盛られ積まれ、いま水中から引き上げて來たばかりの潑溂たる魚類、海草の中に巨軀を横たへて眠つてゐるやうな怪魚、それ等が滑りくねりおどり、跳ね廻り、その中を頭髮を亂した女がわめき散らし、半裸の男が馳け廻る。そして、その中を南國の四月の太陽が蒸し付け、反照し、強い臭氣が、一面の空氣をどろ／＼にしてゐる。海の水が僅に引いて、底をあらはしたばかりの光景である。而して、これは毎日、終年、休むときなく繰り返される光景であり、これなしでは、五十萬の人間が生活し得ざる動力場である。此處こそは眞の意味での海と陸との接觸點、人間と自然力との交錯點である。海中へくゞつた人間と、陸上へ持ち來たされた魚屬との雜住處陸上に住む人間の命の供給場である。そして、更に四時間の急行列車をもつて、羅馬の古都へ鮮魚を輸送する源泉地である。

ポンペエの廢墟に見る如く、今日のナポリの市街は、この市場ばかりでなく、總ての場處に於て、街路が極めて狹い。街上がただちに店屋の一部を構成してゐる。路上がたゞちに屋内である。歩道の敷石は、晝間は女どもの腰掛けて話し合ふ席であり、夜間は、屋外住者の枕に用ひらる。商賈が路上でなされ路の眞中で野菜賣は計器をかけ、油揚げが煙をたて、さらに、行人の頭の上に、マカロニが兩側から旗のやうにかけ連ねられる。これ等は古代羅馬の巷路の光景であり、ポンペエ市の有様でもあり、そして、今日ナポリに於て保存せられてゐる舊い

風俗である。即ちナポリに於ては、近代都市の中に、最も停き都會の光景が生きて動いてゐるのである。羅馬は遺蹟として、廢墟として、建築物として古代の面影を保存し、ポンペエは古代都市の構造模型としてその全部を保留し、ナポリは、古代の生活、古代人の風習、古代人、そのものを生きたまゝで保存し、その生活を繼續してゐるのである。

中歐の旅行者等は、ナポリへ來ては必ずこの古代風な、原始的な生活を見て愕く、そして、野蠻(サオウアジュ)だとか、文明のいまだ到らぬ一角であるとかいふ。英國の文藝批評家、アサシモンヅの如きその一人である。彼は言ふ。ナポリでは、街路であらうが、劇場であらうが、カツフエであらうが、到る處で、この全じ生活の粗暴さ、この全じ非文明の姿が見られる。隅々、路上で二人のナポリタンの出逢ふのを見掛ける。彼等は、路上でも、高い音をたてゝキッスをする。でなければ、大抵の場合、彼等は握手はしない、首肯(うなづ)き合ひもしない、帽子もとらない。ただ凝(ち)つと睨み合ふばかりである。その習慣を知らない間は、互に烈しい敵意でも持つてゐるのだと思ふけれど、實は、この睨み合ひが非常な親密な表示である。ナポリタン等がゼエスチュアをする時は、顔全體を動かし、指全體を用ふる。その代り、彼等がそれをしない時は いかにもぎごちない、――サンタ・ルユチアででも、また、ストラダ デル・ボルトオででも、更に、埠頭場の上ででも見掛けるこれ等の人々は、動物のやうに恥を知らない。その顔をよく視るがよい、その大きな暗い眼に、動物の無理解な視力を見出すであらう。古代と幼稚時代とが、此處では、如何なる他の場處に於けるよりも恐ろしく現はれてゐる。どうにも仕方ない、そして肉體的な破廉恥狀態に陷る人間生活の始めと終りとは、自然そのものゝ殘酷性をもつて強調せられて居ると。

けれど、この古代原始の生活狀態の中にこそ、いまだ開かれざる人間力が籠められてゐるのかも知れぬ、強さと、眞面目と、情熱と、それが素直な、端的な表現となり、グロテスクな姿となり、粗暴な振舞ひとなり、肩巾の廣い、殆ど四角なほどの體軀(からだ)つきとなり、喧騷となり、口論となるのかも知れぬ。兎に角北部伊太利に於てミラノが最も繁盛であり、殷賑であり、活潑の溢れてゐるに對して、古都市の羅馬を中間 於て、南方伊太利の氣風を具體し、權化して、最も喧騷な都市としてナポリはその特色を發揮してゐるのである。

此處は哲學者、美學者、クロチエの現住地であり、下位春吉氏が日本を紹介するために努力して居らるゝ處である が、我々の行つた時は、下位氏はダヌンチオの幕下へ行つて居て不

であつたゝめ、クロチエに面會する機會を持つことが出來なかつたのは殘念であつた。

ナポリの美術館は、美術そのものよりは、古代生活を知るためにつくられてゐるがごときものである。ポンペエに於て古代都市の全景を見る人は、此處の美術館に於て、その內的生活の表示を知ることが出來る。ナルシッスが跳る姿のサィテルが海神が、シィタレエドが、メルキュルが更にセネクやディオニゾスやの胸像が、そのかみの生活を物語り、その他エルキュラノオムやポンペエから掘り出した幾つかの銅像は時の力、自然の力を免にも角にも脱れた人間力の形見として此處に飾られてゐる。ポンペエから掘り集められた奇怪な造形物は、南方古代人の生活の一部を有力に語るものであり、ポンペエと、ナポリの美術館と、そして現在のナポリタンの生活と、三者を取り蒐めて思考の中へ入れて見れば、古代生活の再現連續が、現に我々の眼前に於て行はれつゝあるのを知るであらう。いな、ナポリそのものが、生きてゐる、騷がしい、ミュゼそのものゝ如き感じを與えるのである。鋭い、熱狂的な、南方情緒、シモンヅの所謂「マンドリンとナイフとの南方情緒（サウザンセンティメンタリティ）」の生きたミュゼそれがナポリである。そして、他の都市に見るやうに博物館がたゞ歷史の遺物を蒐集、配列してある寧ろ死物の連續の如きものではなく、此處では、外部の都市の生活と、ミュゼの內部とは生命が通つてゐる。人々はミュゼの內部に於て過去の姿を、そして街路に於てその生動發現を見ることが出來る。ナポリタンにとつては、此處のミュゼは大きな祭壇の如きものであり、祖先の廟の如きものであり、しかも現在生活へ生きた傳統の呼吸を常に通はせ、むしろ現在生活を鼓吹してゐるやうなものである。

この喧騷、この狹路、この古代的生活、この丘陵へ登る迷路の如き市街、海中へ沈む如き魚屋市場、過去と現在との呼吸の通ふ博物館、丘上の寺院、中腹及び各處に散在する幾多の會堂、海水につゞく水族館、ナポリ王國の舊王城、その圓塔、直立してゐるこの石壁、それ等を包む四月の日は、更に遠く、ミゼエヌ岬とソラント岬とに包まるゝナポリ灣の上へ、とろ〳〵した輝く溶光となつてふり注ぎ、空一面は、海水と照り合つて、上下二重の廣大な鏡面は、ヴェスヴィオの金山とその噴煙とをなかに包んで、晴やかな、眩るめく、光の世界を現出すると、喧騷好きなナポリタンの上へ午睡を持ち來たすのである。午睡は南方人にとつて必須な日常事である。ことに、夏季になれば、學校の兒童にすらこの午睡の時間が供せられる。南方の自然は眞夜中すぎまで人々を活動せしむる代りに、眞晝の中間に、總ての人をして休息に入らしめる。市街が靜寂になり、役所も、公共

場も閉ざされ、一時の假死狀態になる。たゞその一時の死都の上に勢を振ふものは、眞夏の太陽であり、この人間の休止狀態を見て、遠くから嘲笑を投げてゐるのは、永久休みなき巨人、ヴェスヴィオである。

朗らかな空一面に流れ敷く陽光の中に、立ちのぼり溶けて行くヴェスヴィオの煙、火山特有ななだらかな形狀、嘗て、エルキュラノオム、とポンペエの兩市を埋めつくして、幾多の生靈を灰と土とに歸せしめた怒れる自然は、いまや、悠然たる姿をして、深きナポリの海と、その岸の丘陵上へ逃げ登るやうにしてゐるナポリの都市とを見おろして、不斷の威嚇、無言の壓迫を人間生活の上へ加へてゐる。この沈默の威壓、この爽麗な相貌が、人をして美と嘆賞と、無意識の崇敬の情とを喚起せしむるのである。ナポリはこの威壓者を前に、人間の良港たらしむるには餘りに底深き海を側に抱いて、喧噪と假死との狀態を日夜くりかへしつゝ行くのである。

海岸を傳うて、この活火山の上に沈み行く夕陽を眺めやると、薔薇色の巾廣き雲が山頂近くに漂ひ、やがて、日の光が山の背後より亂射して、その雲を一時に眞紅に輝かし、立ちのぼる煙を紫に變ずる。それも暫くにして、刻々に光の亂射は薄れ行き、一片、二片の落ち雲が山の頂より少し下をめぐつて、天上より反映する光に薄紅をぼかし出し、やがて、その額の卷絹が乳白に褪める頃となると、空一面は、光から固有の領土を恢復して、うるほひある深き藍青の紫だつた南歐獨特の色を浮ばせて來る。もうその時は、山頂を繞つて暗い影がうづまき、ほのかな鼠銀色の煙がその暗影のなかに溶け込んで行く。

海岸のオテルの窓に波の音が響いて來て、四月の夕風は南國の暖氣を水上から運んで來る。海港の夕べは悲しく旅情をそゝつて、マンドリンや、ギタルやを奏しながら、夜曲を唄ひつゝ流し行く物乞ひの哀れな聲が、かすかな波の音とまじり合つて、埠頭を漂ふ。赤い火をかゝげた船が警笛をならしつゝ港内へはいつて來る。この地のホテルで旅死した日本の畫家があつた。彼こそはこの南國の異境の土に眠る唯一の日本人であらう。巴里でその人の畫作の展覽會が催されるはづになつてゐる中に死んでしまつて、その運びにもならないで了つた。おそらく、病床で送つた夕暮ごとに、彼はこの海港の悲しさをしみ〴〵身に感じたに異ひない。

ナポリとポンペエとの間は廿四キロメートル、凡そ六里ほどである。汽車も自動車の便もある。海岸沿ひの白い砂岸のたつこの途を眞面目に海風を受けつゝ自動車を走らせて行けば、四

月の日は照りながらも、冷たさを感ぜえる。八キロ米突ばかりでレジナの小都市に達する。此處にはエルキュラノオムの廢墟が在る。古代此都市は羅馬の殖民地として最も繁榮を誇つてゐた一つであつた。そしてヴェスヴィオの溶岩の冷却した上に建てられてゐたのであるが、紀元七十九年の噴火のために、ポンペエ、バタビアの都市と共に熱灰の中に埋沒せられて了つた。その後に更に繰り返された噴火のために、エルキュラノオムの名は全く地中に沈み、地上からさへ全く忘られてしまつてゐた。然るに、千七百十一年、即ち十八世紀の初めに到つて、エルブフ公が建築用の大理石をレジナの地中から掘り出させてゐた間、偶然、エルキュラノオムの劇場へ掘りあてた。それより數回の發掘を經て、この古代劇場は一萬人の觀客を入るゝに足るものであつたことが示され、その劇場の圓柱、青銅像が次第に天日の下に曝らし出さるゝやうになつて來た。この都市の發掘された有ゆる藝術品は全くナポリの美術館に納められてゐる。

更に十六キロメエトルを走れば、ポンペエの廢墟の入口に達する。世には、默々として四周から押し寄せて來る砂漠の無言の歩みの下に埋められたる中央亞細亞に於ける如き都市もあらう。また、海波に卷かれ、若しくは水中に陷沒して、全く跡方もなくなつた都市もあるであらう。けれど、ポンペエの如く、熱砂と灰との厚い層に包まれて、しかも眞夏の白晝を、全市が地上から姿を隱し、その後殆ど千八百年間も地中に埋められてゐたことゝで、再びその原型を白日の下に曝らし出さるゝにいたる如きは悲慘である。自然の力が徐々に人工都市を浸蝕して行く變を人々は寂びと呼ぶ、そして、人が見捨てた過去の建築物を自然が己が領土の一部として抱擁するなかに、無言の時の力を人に讀もうとする。けれど、突然の爆發が、殷賑を極むる都市を埋めつくして、徒らに自然の暴威の跡の明かなのを見せらるゝと、何等かの特殊な運命をその都市のみが持つてゞもゐたかの如き感じを抱かせられ、自然の懲罰か何かを當然受く可き宿命をもつてゞもゐたかの如き思を起させらるゝものである。

ポンペエはこの全滅の憂き日に逢ふ紀元七十九年よりは十六年前、同じ六十三年に大地震のためにその大部分が破壞されたけれど、この前兆的の出來事にもこりずまに、都市はこの十六年の間に全き美觀を立て直してゐたのであつた。若し自然の懲罰があるならば、この最初の警告に顧慮しなかつた人間の無智に對してゞあらう。自然はその威嚴を傷けられた時にのみ、激怒し、復讐する。そして無智な人間を根柢的に懾伏せしめようとする。けれど、怒るときは傷つけられ、怨をなして遠退く人

間も、また暫くの間に、この恐怖を忘れて、いつの間にか自然の懐を犯さうとする。この自然と人間の争ひ、征服被征服の跡をヴェズヴィオとポンペエとは最も有力に示してゐるのである。――我々は北フランスを荒らした獨逸人の通過の跡を、南部イタリアの火山の麓に於て照らして見るのである。同じく傷ましき戦跡である。たゞその戦争が意識無意識の區別こそあれ、暴威の振はれた姿は同じである。

この火山の爆發と、都市の埋沒は、白晝に行はれたが故に、その住民の大部分は脱れ出ることが出來たらしい。今日化石の如きものとなつて殘さるゝ遺骸の如き、白い灰の堆積となつて四五の人の集つてゐた姿を示すものゝ如きはその住民の極にて少部分であつたらしいとの事である。その脱れ出た人々はまた取つて返えして、その後、今日に於て見る如き厚い地層でまだ覆はれなかつた自分等の居住から、或は飛ばされ、砕かれてはゐても、手近に役立つ家具類や、貴重な品にそれ〴〵取り出して、立ちのいたものらしいとの類推である。けれど、その後、全市が影も形も見えぬまでに地中に埋められて、何の物音一つ立てるではなく、一日にして、殷賑の都市は、永久沈默の姿に變じて、默々として地中に眠り入つてしまつたのであつた。

十六世紀の末に、この埋沒市の地下を穿つて水路が通せられ、十八世紀の中葉にはその一部が發掘せられ、十九世紀の半ば以後到つて初めて組織立つた發掘が行はれ、それが今日もなほつゞきつゝあるのである。大戰のために一時中止せられてゐたのが、戰後徐々に着手せられつゝあるのである。

八つの拱門を備へ、二重の高い壁で圍まれ狹けれど眞直ぐな街路、殆ど同じ構造で建てられた家々の櫛比してゐた都市、議政場、圓形劇場、法廷、獄舎、富者の家々、墓場への路、門外の墓場整然たる古代文明の典型を見せる、所謂「玩具の都市」が春光の照りつける下に、當時のまゝの姿を露出してゐるのである。たゞ木造の部分のみが燒け、玻璃は溶け、石と煉瓦とのみが立ち殘り、舗石路の上の車の轍の痕も、街路の角の石の井戸側の摺りへらされたのさへそのまゝに殘つてゐる。步道とては極めて狹く、一人の人の步くだけくらゐの巾しかなく、行き逢ふものは、抱き合ふやうにしてでも道をゆづらなければ通れさうにはない。特殊な家の閉されてゐるのを、番人に頼んで開けてもらひ、中へはいれば、大方の家は、中央に小さな庭を置いて、其處には水盤や、小さな像などを持ち、その前方を訪問客を迎へる客間に當て、その後方を、家族の住ひに向けてある。食堂、居間、寢室、湯殿、それ等の部屋々々の壁上の畫すらも、薄れて居れど、色彩を保つて、そのまゝに見ることが出來る。日の光

りは中庭へ落ちて、家の奥まつた密室の中まで反射を送り、つひ昨日まで人が住んでゐたもの丶如き明るさを見せてゐる。

非然たる巷路の跡に日が照り、日の當るところに僅かな土を見出せば小草が芽をのばし、二千年近く地中に埋もれてゐようが、ゐまいが、大自然から見れば殆ど一瞬間の眠りのごとく、大きな爆發となつて現はるゝのも、密かき草の葉先きとなつて伸びて行くのも同じ一つの力の現はれである。——古代劇場の石階の上へ腰を卸ろして、我々三人とアントニオとは四月の陽光を啜し浴びて凝つとしてゐた。物音一つなき靜寂が四邊を領して、久振りで、日の目を見た地面からは、かげろふが立ちのぼり、青光に輝く空の永久の謎は、また冷たい皮肉な微笑を上から投げかけて、海の上へ、廢墟の眞上へ、さらに、ヴェズヴィオのなだらかな双肩をすべつて、八方に、その光の領土をひろげてゐた。自然に對して爭ふな、この朗かな陽光を直に身に感じて、小草の葉先きの伸びるやうに我々の命を伸ばして行け、我々がまた自然力の一部を受けて、現はしてゐるのである、ポンペエの市はその自然力の內部の發生を享樂してゐた間に外部から來た自然力の壓倒を受けて、一時は潰滅したのであつた。

個人の死とても同じことである。たゞその遺骸が木乃伊となつて殘されるか、如何かといふだけの別であつて、偶然にもポンペエは都市の木乃伊として我々の眼前に殘された丈けで、この木乃伊とならぬ刻々の都市の死は世界の到る處で演ぜられてゐるのである。たゞ我々はこのポンペエの廢墟へ來て、丁度地球の斷層面に對して立つやうに、大きな自然の力、時の力のまざ〱と刻み出されてゐるのを感ずるのである。この自然の力、時の力の歩み行くあとを、それに從つてとめて行くのが研究者であり、その力を瞬間にして身に感ずるのが詩人である。

シモンヅは、「その時、急に、案內者や遊覽者から離れて、空虛な街路へ身を入れて御覧なさい。君は、この不滅の死の恐ろしい影像に囚はるゝのを感ずるでもあらう。これに對しては、地獄の傳說が信じ得べきものとなるであらう。死によつてたゞ[illegible]ら、物質破壞の絆より脫することの如何に難いかゞ解るからである」(シモンズ著「都市」——ネエプルス)といつてゐるが、物質の不滅とは自然力の永續性を意味し、死とは個人生命の破壞を語るものである。

我々が紀念に撮つた寫眞の中に、この木乃伊都市の議政廳の

一部と、人間と、ヴェスヴィオの煙と、南伊の空とがおさめられた。其處を出て再び街路の上を歩いて來ると、何處でも見らるゝアメリカ人の遊覽者が三々伍々隊をなして通つて行くのが見られた。悠然たる姿をして、青空へ煙を吐いてゐるヴェスヴィオへは電車が通つてゐて、登ることも容易である。が、この廢墟で十分の疲勞を覺えた我々は、またポルタ・マリナ、即ち海の方へ向いた巷門から出て、我々をまつてゐた自動車の方へ歸つて來た。そして、遊覽者のために出來てゐる小さなレストランで食事をして、「ポンペヱ最後の日」の話しなどを語り合つて再び車上の人となつた。

ナポリ發の急行列車はまた我々を羅馬の古都へ連れ歸つた。若葉に注ぐ雨が羅馬の街々の蒼き砂塵を取りしづめて、靜寂を味はしむるには十分であつた。「羅馬は海のやうである、その中へ幾つの世界が沈められてゐる。そして、その鋪石道は波立つてゐる」。馬車はその歴史の浪の上を、小艇のやうに搖れながら走つて行く。南方の光の空の下から、この古都の雨に曇つた重い空のもとで歸つて來ると、僅かに寂しさに引きしめらるゝ心持を味はずにはゐられなかつた。蒼い巨大な建物を洗ふ雨、鋪石の間へ小流れをつくる雨、舊い大地へ浸みこんで行く雨、旅人の心のなかへも、マロニエの若葉をつたつて降り注ぐ。

灰色が、今日は、全市を包んで、空には一羽の燕すら羽をひるがえさない。しとしとと、なごめるやうに、鎮めるやうに、細やかに無數な雨の手は、黑づんだ古代建築物の殘骸を撫で、近代の眞白な記念物の上を走る。この雨の中を、我々は故郷へでも歸つたやうな心ちで何處ともなく歩き廻つた。

人及び藝術家としてのレオナルド・ダ・ウィンチ

板垣鷹穗

(一)ルネサンス文化の大勢とレオナルド――(二)レオナルドの生涯――(三)レオナルドの性格――(四)代表作としての「晩餐」――(五)レオナルドの運命――(六)科學的研究の概觀――參考書

一、ルネサンス文化の大勢とレオナルド

ローマ帝政の荒々しい迫害に慄く小羊の群のやうなクリスト教徒は、コンスタンチン大帝の世になつてから、地下の狭苦しい、陰氣なカタコンベを出て、地上に堂々と寺院を建設するやうになつた。最初は、彼等の仇敵なるローマ帝政の遺物――バジリカや公衆浴場――の建築様式を、そのまゝ寺院や洗禮堂に用ひた。然し、寺院の様式は、教會の所有する權力の象徴であつた。――十世紀頃には、どツしりした規模の大きいロマネスクの伽藍が建設されるやうになつた。そして終に、天を指して聳え立つゴティックの寺院が限りなく造營され、其塔の高さを競ふ頃には、教會の權力もいやが上に増して居た。中世の政治史は、法王と皇帝との權力爭ひの歴史である。

然し、此の永い、冬の日のやうに單調な出來事にも、カタストローフは終に來た。歐洲の天地を震はした數回の十字軍は、中世史に總ての結末をつけてしまツた。軍費の濫出に諸侯は疲れ、法王の威信は地におちた。そして富裕な商業都市が、あらゆる權力を其手におさめてしまツた。近世の文化は此等の商業都市に生れる。

中世期を一貫する精神文化の基調なるクリスト教思想は、トーマス・アクイノを産み、ダンテを産むだ。十四世紀の初頭を飾るダンテは、中世文化の創造にかゝる最後の、――そして、同時に極めて偉大な――作品であツた。然し、それから僅かに

半世紀程經ッた十四世紀の後半期には、近世文化の最初の現はれなるペトラルカが出て居る、

ラテン文學を熱愛したペトラルカは、「古學の復興」を試みた第一人者である。ペトラルカが初めてローマの地を踏んだとき彼の心は、恰も、永年の流罪が終ッてなつかしい故郷に歸ッて來た者の心に似て居た。ローマは、彼にとッて、常々知人によッて語られ、夢にくりかへされた故郷のやうに親しかッた　時の破壞に委ねられたローマ盛代の遺蹟からたち昇る、光榮ある過去の大精神は、限りない感激を彼の心に與へた。

ペトラルカは、スコラ哲學の血の氣のない辯證を嫌ッた。彼の求めたものは、豐かな、多面的な、人生の具體的な姿であッた　山川の美しさを、如實の相に於て讃えることを知ッた「最初の一人」は彼であッた。――ルネサンス文化の最初の開拓者なる此ペトラルカの後に出て、當時の絢爛な文化を其多面的な姿のまゝ、豐かに自らの人格の内に、實現し得た天才がレオナルド・ダ・ウインチである。

レオナルドの生涯は、恰も、全ルネサンス文化の縮圖のごとく、イタリーの國土に榮えた當代文化の諸相は、悉く彼一人の行跡の中に見出される　ウィンチの小村に生れクルーの城中に沒したレオナルドの長い生涯――其生涯の區劃して居る期間内はまた、西洋文化史にとッても極めて多忙な時期であった。

一四五二年から一五一九年まで――此レオナルドの生涯と時を同じうして、何れ程な大事件が文化史の上で起ッて居たか？十五世紀の初頭を飾る美術家達を保護し、プラトン學苑を創設し圖書館を建設したコジモ・デ・メディチは一四六四年まで世にあッた　コジモの後を繼ぐロレンツォは、一四九二年まで、詩人達の群に取りまかれつゝフィレンツェの都を支配して居た。ルネサンスの文化とメディチ家の名とは切りはなし難い程に、彼等の與へた影響は大きかッた。

そしてまた、從來、權威のあッた世界觀を、其根柢からくつがえしてしまうやうな事件が、やはり此時代に起ッてゐる。新に地動説を唱導して危險視され驚嘆されたコペルニクスは、一四七三年に生れて一五四三年に世を去ッた。コロンブスとアメリゴ・ベスプッチとの新大陸發見は一四九二年から始まる。ガリエンスの試みた最初の世界週航は、一五一九年から一五二二年にかけての事である。なほ、宗教改革の大立物たるマルチン・ルーテルの生れたのが一四八三年で、ウルリヒ・ツウィングリの宗教改革運動は一五一八年に行はれた。

文化史にとつて之程に多忙なルネサンスの時代は、然し、イタリーの國土の最も亂れて居た時期である。風光の美しさを今

る全土には、支配權を弄ぶ成り上り者の諸侯、雇兵の長、領土の回復をはかるローマ法王、獲物を覗ふ外國君主等が渦を卷いて戰つて居た。そして到るところに、虐殺、陰謀、反逆、簒奪等がくりかへされた。祈禱の折りにも、戰略を呟くユリウス二世、自が子を毒し、牛馬の交合を興ずる淫亂なアレクサンドル六世、自が宮廷に野犬を飼つて罪人を咬み殺さしめたジアン・マリア・ビスコンテイ、ローマの街を夜毎にさまよつて貴人達を殺したチエザーレ・ボルジア、雇兵の長達を手毬のやうに弄ぶフイリポ・マリア・ビスコンテイ、——亂麻の如きイタリーの政治界には、此等の恐るべき人物が限りなく輩出した。社會上の均合の破れた、革命の時のやうな有樣が、當時のイタリーにあつては常の狀態にすぎなかつた。

然し不思議なことに、近世初頭のモニユメンタールな文化の發現は、此くの如く亂れきつた社會の内に養はれた。支配者の氣まぐれは文士、學者を優遇し、美術家を愛護した。政治の紊亂は文化の自由な發達をさまたげなかつた。宗教と政事との獨裁權が、藝術を僕婢の如く虐げたり、形式主義に陷れたりするよりは遙かにましであつた。——ルネサンス時代の文化が、個性的に思ひ／＼な發展を遂げ得たことに就ては、むしろ反つて、政治上の紊亂に感謝しなければならぬかも知れない。

かゝる事情の下に生れたルネサンスの文化は、それ故に極めて雜多である。到底、定義することは出來ない。若し強いて定義しやうとすれば、常に半面の事實を見遁がさなければならない。例外だらけになつてしまう。ルネサンス文化を形作つて居る要素の中には、傳統的なものと新規なもの、世俗的なものと宗教的なもの、眞摯なものと皮相的なもの——此等總てが平等に含まれて居る。

かゝる雜多な文化の中で、とりわけ目醒しい發展を遂げたのは云ふまでもなく造形美術であつた。宗教の桎梏から解放された美術家は、何よりも先づ觀察の自由さを悅んだ。人體の實感的な肉付は元より、藝用解剖も行はれ、遠近法の術も發達した。觀察の自由を得ると共に、彼等はまた表現の自由さを悅んだ。「一瞥の淫な瞬すら受けぬ聖淨な乙女」らしい聖母や酒場の女に似た聖母が描かれた。少年のやうにはにかむ聖ジエオルジヤ百姓然たるクリストも居た。第三に藝術家は、題材の選擇を自由にすることが出來た。聖像畫家も時にはウエヌスを描き、「汚れざる受胎」と「白鳥に身を任すレダ」とが同時に描かれた。——これが十五世紀時代の有樣である。十五世紀の末期に人となり先輩者の努力を總合して之を統一し、醇化し、限りなく豐かな才能の力に依つて、ルネサンス最盛期の指導者となつたのがレ

オナルド・ダ・ヴィンチである。

二、レオナルドの生涯

一四五二年、アルノ河に近いヴィンチの小村に生れたレオナルドは、公證人セル・ピエロと農民の娘カタリナとの私生兒であつた。彼は幼年時代を祖父の所有して居た田園で送つた。自然は子供の心に生き〱した感銘を與へた。彼は生れつき素描が好きだつた。父のセル・ピエロは、レオナルドが十四のとき、其の子の素描を持つてヴェロキオを訪ねた。當時フィレンツェの都で最も榮えて居たのはヴェロキオのアトリエであつたが、少年の素描に感心した此大家は直ちにレオナルドを弟子にした。

藝術の豐かなフィレンツェの都はレオナルドを順當に養つた。彼は間もなく一人前の畫家となり「お告」や「ヒエロニムス」や「三王の禮拜」等を描いた。然し此頃から既に彼の多面的な才能は顯れて居た。一四八一年ミラノ侯に差出した自薦狀によれば、彼は、土木工業の術にも達し、運河工事や軍器の製作までも爲し得る自信を持つて居た。

三十歳のときレオナルドはミラノに移つた。此處ではミラノ侯ロドヴィコ・スフォルツァの宮廷技術家として重く用ひられた。名譽心の強い、計劃好きな、教養のある、贅澤なロドヴィコは、樣々の依託を彼に與へた。畫家としてのレオナルドは、「岩間の聖母」や「晩餐」を描いたが、彼の最も努力して居たのはフランチェスコ・スフォルツァの騎馬像である。然し、幸運の傾き始めたミラノ侯の事情は、此像の鑄造を許さなかつた。かゝる純藝術的な仕事以外に、レオナルドは、此頃なほ、ミラノ本寺の建設や、宮殿の建築、並びに、都市計劃、運河設計の類から軍器の製作にまで關係し、數學、自然科學の研究にも耽つて居た。

一四九九年、ロドヴィコが失脚し、ミラノの支配權が佛王の手に握られると共に、レオナルドもミラノを去つてフィレンツェに移つた。そして翌年、ロマニアに赴き、チェザーレ・ボルジアの宮廷技術家となり、更にローマに行き、再びフィレンツェに戻つた。「モナリザ」や「アンギアリの戰」等は此時の作である

一五〇六年、彼は再びミラノに赴いたが、此地にレオナルドを留めやうとする佛王と、仕事を依賴して居たフィレンツェの政府とは、レオナルドを奪ひ合つた。レオナルドは然し、時折りフィレンツェを訪れた丈で、多くはミラノに住み、「聖アンナ」や「ヨハネ」の完成を急いだ。しかるに政治上の混亂は再びミラノから彼を追つた。佛軍の引上げた後に、ロドヴィコの世

嗣のマッシミリアノが此地を取りもどした。レオナルドは一五一三年法王レオ十世の命を受けてローマに赴いたが、二年を經て、佛軍のミラノ再侵と共に此地に歸つた。

然し此大藝術家を永く所有しやうと考へた佛王フランソア一世は、莫大な年金を約し、ロアール河畔なるクルー城中に住心地のよい住居を與へて彼を佛國に招いた。佛國に於けるレオナルドの晩年も、やはり仕事に充たされて居たが、王は殊に此大人物との會談を悅んだ。レオナルドは一五一九年の五月に世を去つた。彼に從つて各地をめぐつて居た忠實な弟子フランチェスコ・メルチは、師匠の遺品をたづさへて故鄕に歸つた。

三、レオナルドの性格

レオナルドの風貌を寫した二枚の素描が現在殘つて居る。共に老年の容貌で、一枚は自畫像であり、他の一枚は弟子の筆に成つたものらしい。此處に面白いことは、此二枚の肖像畫に表はされたレオナルドの性格が、恰も正反對の印象を與へて居ることである。

彼の弟子や崇拜者達は、師匠の顏に、穩やかな親しさと明らかな才智とを見出した。眼は靜かに物を觀察して居る。額は明らかな輪廓を描き、品の良い鼻の下には、さかしく唇が結ばれて居る。頰から顎にかけて形のよくととのつた髭が下り、柔かい髮は美しい波を描いてたれ掛つて居る――總てが品の良い老人の顏である。生涯の豐かな經驗には何等の苦々しさもない。世の中を觀る深い洞察が、優れた才智を養つて來たらしくみえる。既にバザリもレオナルドに就ては、容姿の美しさと教養の貴さとを極力稱讃して居る。

バザリは然し「美術家列傳」の初版に於て次のやうな稱讃さへも惜しまなかつた。

「神は、往々にして、最高の人間性のみならず、神性そのものすら體現する人物を造る。」

此言葉を以て、バザリは、レオナルドを人間以上の被造物であると讃えた。――弟子の手に描かれたレオナルドの肖像は神の如き「彼」であつた。

然るにレオナルドが自分を觀る目は全く異ふ。永年の苦鬪にきざまれた額の深い皺、休みない研究者の瞳、落ちくぼむ眼窩にたれかゝる皮、頑な決意を示す鼻と口――。此等は皆時の流れに刻まれた失望と悩みとの紀念である。

弟子の觀る圓滿完全な温容の背後には、レオナルド自らのみの知る苦々しさが潜むで居る。彼の事業と知識とは堪へ難い苦難の賜物である。休みない彼の生涯は常に新なる斷念と、復た

蘇り來る要求との、果しない爭鬪に充たされて居た。世界は、レオナルドにとツて征服すべきものであり、新に創造すべきものであツた。自然を彼は描く丈では滿足しなかツた。彼の理性と研究欲とは、自然の秘めて居るあらゆる神秘を發かずには置かなかツた。かゝる性格は、レオナルドを藝術家としてばかりでなく、學者とせずには置かなかツた。彼は藝術家として、既に、前代未聞の行跡を殘し、後に來るべき者のために廣い道を開きつゝも、なほ其上に、哲學者として、自然科學者として、工學家として、新しい認識と新しい方法とを見出し、後代の指導者となツて居る。しかも彼の行跡の全般には、極めて明瞭な彼の「個性」が印されて居る。

元來、文化の高潮期には、いつの時代にでも、二種の相異なる大人格が、並存して現はれるのが常である。ギリシヤ哲學の最盛期にはプラトンとアリストテレスとが相對し、十九世紀に於ける獨逸文化の隆興期では、シルレルとゲーテ、フイヒテとヘーゲルが對立して居る。同じやうな對立は伊太利ルネサンスの最盛期にも現はれた。ミケランジエロとレオナルドとの對立がそれである。

ミケランジエロに取ツては建設と云ふことが一切であツた。大理石の發掘を監督しながら、岩壁一面に巨人の像を彫りたいと夢想して居た。ミケランジエロは、システイナ禮拜堂の大天井畫を僅か四年半で描き上げてしまツた。モナリサの肖像に三年かゝツたと云はれるレオナルドとは甚しい相異である。

レオナルドはミケランジエロと反對に、建設そのものを目的としない。建設しつゝ自己の精神を養ふことが目的なのである。畫を描くのは、完成された一枚の畫を作らんがためではない。畫を描きながら自己の洞察力を養ひ、自然の神秘を會得せんがためである。神秘を會得すれば彼の目的は終る。畫を完成させることなどは何うでもよくなる。換言すれば製作は研究心を滿足させる手段にすぎない。與へられた製作の依頼は、皆、藝術上の諸問題を解決する唯の機會に過ぎない。それ故、往々にして、研究心が滿足されれば製作の興味がなくなる。彼が時として仕事を中絶するのは皆この理由によるのである。此處に彼の性格の著しい特質がある。

藝術製作の目的が既に此の如くであるから、製作にたづさわる態度も、亦同樣な色彩を帶びて居る。何事も究めつくさなければ筆を下さない彼の作品には、缺點がない代りに彼は多作することが出來ない。考へながら取りかゝる彼の仕事は遲い。材料と經驗とを出來る丈集め、テクニックの細かい調査をとげてからでなければ製作をはじめない。製作をはじめても意に滿たな

けれは一筆も下さない。幾日の間一筆も下さずに畫面を觀察して居ることもまれではない。――此樣な製作振りを見てレオナルドを氣まぐれだと云ふならば甚しい誤解である。彼の仕事が遲いのは仕事の正確さを貴ぶからだ。遲いながら少しづゝ仕上げて行つた結果は「完全」其物である。才にまかせて槌を振ふミケランジェロとはまるで違ふ。

しかしかゝる製作の間にも、物の奥底を支配して居る理法を求めて止まない彼の態度は、美しい現れの表面丈を觀ない。必ず其背後に分け入つて、美しさを與へて居る理法を求める。均合、藝用解剖、遠近法、表出法等の研究は、かゝる態度から生れて來る。レオナルドの書き殘した畫論は此貴い紀念である。

しかも、更に、レオナルドの製作を豐にする彼の性癖として、彼特有の强い好奇心がある。創造主の手に成つた自然界の微かなる現象も充分に彼の注意を誘つた。花、虫の類から禽獸に至るまで、あらゆるものが彼の注目を受けた。自然界の現象ばかりではない。――街を歩む女の目新しい髮の結び方や談笑する人々の表情まで、悉く彼には觀察すべきものであつた。

此等の性癖は其深い研究心と相俟つて、何れ程に彼の製作を養つたらう。彼の作品が、一樣に氣品のある深みを持つて居ると同時に、如何なる題材も同樣に巧みに表現され得たと云ふことは、レオナルドの個性が與へ得た貴重な賜物であつたと云はねばならぬ。岩窟に坐して御子をいつくしむ聖母の面持は、溢るゝ如き慈愛に輝いて居る。砂を卷き陣を亂すアンギアリの戰ひに、軍旗を奪ひ合ふ騎士と咬み合ふ軍馬とは、怒りと憎しみとに燃え立つて居る。クリストの言葉に靜けさを破られた晩餐の間は、恰も壯大なフーゲを聽くが如く、モナリサの瞳みには限りない魅力が潜むで居る ――然し、戰士の熱情を描き、女の美しさを描くレオナルドは、また、數學の研究や飛行器の發明に夜を明かすレオナルドであつた。自然の奥底に潜む美を感受し、自己の創造に再現することにかけて、誰よりも優れて居たレオナルドは、然し美に醉つてしまう人ではなかつた。何處までも彼は觀察者の態度を棄てなかつた。何人にも追跡することを許さぬレオナルドの偉大さは此處から來て居る。ローマに來てシスティナ禮拜堂に足を踏み入れたとき、レオナルドは何んな氣持で天井を仰いだらう？ ミケランジェロの筆になる巨人の群は、レオナルドを壓倒し得たであらうか？――恐らく、そんなことは無かつたらう。彼はミケランジェロの筆力には感服したかも知れない。然し彼自身の所有して居る大切な或物が、ミケランジェロの繪に缺けて居ることを、決して見逃しはしなかつたらう。

四、代表作としての「晩餐」

一四九四年と云ふ年はレオナルドにとつて思出の多い年であつた。彼の携はつて居たミラノ本寺の塔は既に出來上つた。岩間の聖母は完成して居た。フランチェスコ・スフォルツァの騎馬像も、鑄造に取りかゝるまでになつて居た。そして、レオナルドの保護者なるロドウェコ・スフォルツァは既にミラノの實權を掌握し、佛王の援助を得て、伊太利の霸權を其手に收めやうとして居た。サンタ・マリア・デレ・グラチエの僧院に「晩餐」を描くべき依託が、レオナルドに與へられたのは恰も此時である。

僧院の食堂に「晩餐」の壁畫を用ふることは、ジョット以來の慣しである。フラ・アンジェリコも、アンドレア・デル・カスタニョも、ドメニコ・ギルランダイヨもやはり同樣な製作を試みた。「晩餐の倜」と云へば云ふまでもない。クリストがユダの反逆に會つてユダヤ人の手に陷る前日、使徒達と共に晩餐の食卓をかこみながら、自らの運命を使徒達に告げる。——聖書に物語られた此事件を描くことである。十五世紀を通じて才能のある畫家の多くは此物語を描いて居る。然し、かかる至難な試みが成功したことは一度もなかつた。カスタニョは。使徒の姿に自由な態度を與へはしたが、其有樣は全體として千變一律である。鑄像の如く一人々々が坐について居る丈で相互の連絡は少しもない。ギルランダイヨの作は一四八〇年に完成したものであるが、卓を取りまく集團には何等の中心もない。物を食しつゝ會話する有樣丈ではあまりに單調である。畫面にまとまりも出來ないし少しの緊張味も與へられない。何うすればまとまッた畫になるか？　此問題を解き得る作家は一人もなかッた。

レオナルドの「晩餐」はギルランダイヨの製作におくるゝこと僅かに十七年、十五世紀の當に暮れんとする一四九七年に完成した。然し、此畫には既に先進者のぎごちなさが無い。簡潔な拔け目のない構圖の統一法、戲曲的な緊張味、豐かな個性の發露、氣高い嚴肅さ、——此等は唯「神々しい」と云ふより外ない。此畫を前にしては、十五世紀時代の諸作も兒戲に等しく思はれる。

奥行の深い長方形の室の前面に食卓がある。室の背面は三個の窓となり、窓を通して夕暮の景色がみえる。沈み行く太陽は山の彼方に沒せんとして餘光を投げて居る。其輝きは、卓の中央に坐すクリストの頭を背後より照し、恰も救世主の頭上をめぐる聖輪のやうにみえる。クリストの面持は神々しい靜けさに浸ッて居る。固く結ばれた唇からは、たッた今恐ろしい豫言——

—汝等の一人我を賣らん——が洩れたばかりである。豫言は晩餐の親しみを破ツて使徒達の心をかき亂した。クリストの兩側に坐して居る十二人の使徒は愕然として主の周りに渦を卷く。——レオナルドの描いたのは此瞬間の有樣である

主の左側（畫面に向ツて）に、年若いヨハネは手を組み合せて主の身の上にかゝるべき避け難い運命を思ひ惱んで居る。卓の上に半身を乘り出して居るユダは、慄きつゝも直ちに反抗の身がまへをする。ペテロは、ユダの背後からヨハネの肩をたゝいて、主を賣る者の名を主に問はしめる。然し、餘る片手に持つナイフは自からユダの脇腹に近いて行く、年老いたアンドレアスは單純な心に唯恐愕の樣を示す。小ヤコブは手をのべてペテロを制し、バルトロメオスは席を蹴ツて立ち上り中央を凝視して居る。

クリストの右側（畫面に向ツて）に坐す大ヤコブは、ユダの態度に驚いて兩手を擴げて居る。トーマスは其背後から指を立ててユダをいましめ、胸に掌をあてて立上ツて居るフィリッポスは——主よ、我は主を賣りし者に非ず——と叫むで居る。マテウスは兩腕を中央に向つてのべ、何事かシモンに語つて居るタデウスはシモンに首をよせて私語き、シモンは落付いた態度で卓の端に坐して居る。

使徒等の樣はとり〴〵であるが、總ては良く彼等の性格に應じて居る 全面に演劇的な緊張味はあるが、何處までも落付いた氣品が保たれて居る 兩手を展いて正面をむくクリストの兩側には、各々三人宛二組の群をなして使徒が分れて居る。卓は畫面の前緣をなし、壁にたれ下る織物と三個の窓とは、畫面の背景を引きしめるに役立つ。そして更に——透視法の消失點がクリストの眼に置かれてある結果——畫面に含まれて居る主要な直線は、總てクリストの首に向つて集まつて行く。

技巧と理論と思想との調和が、これ程巧みに遂せられたことはこれまでにも無かつた。深さと美しさとが此畫に於ける程融合し得た事もこれまでに無かつた。ルネサンス美術の偉大な使命は、此畫なくしては到底理解することが出來ぬ。

然しレオナルドは、何うして此の神の創造のやうに巧みな大作を描き得たであらうか？——此畫の生ひ立ちをしばらく辿つて、製作に費された天才の勞作の程を偲ばねばならない。

既に述べたやうに、レオナルドが直接「晩餐」に取りかゝつたのは、完成する三年前のことに過ぎない。然し、彼が「晩餐」の解決に心を向けてからは、既に永い年月が經つて居た。レオナルドが「晩餐」を研究し始めた最初の痕跡は、一四七八年まで溯ることが出來るから、此時から數へても、完成まで、優に

二十年の年月を經過して居ることが解る。レオナルドは二十年以來折りにふれつゝ「晩餐」の解決を考案して居た。其有樣は最も代表的な赤墨の素描を始め、數人の使徒、クリストの半身等を描いた素描や、使徒の首、腕、手、衣の類を試みた素描、其折りの簡單なおぼえ書き等から推察することが出來る。此等の研究より推察するに、レオナルドの努力は如何にも執念に不斷であつた。パザリ等が輕卒に考へたやうに氣まぐれなものでは決してなかつた。至難な題材に、完全な解決が與へられるまでは何處までも苦心した。——しかも彼の努力が、如何にも徐々と、極めて僅かづゝ報いられて、終に、最後の動かすことの出來ぬ完全さに到達して行つた其經過には、何とも云へぬ貴さがある。人類の營みの最高の努力を、最も純粹な姿に具體化してみるやうな嚴肅さと氣高さとがある。やや拙い、なほ前代の傳統に束縛されて居る初期の試みは、完成した壁畫を知る人の心に限りない尊敬の念を呼起す。「晩餐」の壁畫は、才能にまかせて一氣呵成に描き上げた唯の才人の筆ではない。努力其物の貴い象徴である。

晩餐の經過に關しては、レオナルドと時を同じうして居た人々が興味深い物語りを殘して居る。

ジアンバテイスタ・ジラルディは云ふ——彼（レオナルド）が一人の人物を描かうとする場合には先づ其人となりを調べる。地位が高いか平民であるか、快活か眞面目か、內氣か開けはなしの性分か、年とつて居るか若いか、急性か落付いて居るか、善良か奸惡か——と云ふ風に。それ等の事がきまると、目指した人物の居さうな場所を求め、容貌、態度、習慣、動作等を觀察する。目的通りなモデルが目付かると、常々腰につけて居る寫生帳にスケッチを取る。かやうな方法を　思ひ通りの姿がはつきり把めるまで何度でもくり返す——。

晩餐の製作に耽るレオナルドの仕事振りに就てバンデルロの語るところによれば、レオナルドは、時として、早朝から足場に上り、食事も取らずに夕暮まで書きつゞけることがある。然し、また時としては、數日の間、全く畫面には手を觸れず、一二時間を畫の前ですごし、靜かに觀察して歸ることもある。また或時には、騎馬像に用ひるモデルの置いてあるコルテ・ヹキアから、直接、僧院に來て足場に上り、一刷毛二刷毛を加へて、直ちに立去ることもある。この事實は、レオナルドの心の休みないことを示して居る。

最後に、ジラルディは興味深い一ツの物語りを傳へて居る。——出來かゝツた晩餐の壁畫には、何時まで經つてもクリストの首とユダの首とが殘されて居た。我慢しきれなくなつた

は、ミラノ侯に此事を告げて、レオナルドを急かすやうに願つた。レオナルドは答へて「私は少くとも、一日二時間づゝを此畫の製作に用ひて居ります」と云つた。レオナルドが一年間程殆ど畫面に手を下さないことに就て、更に、僧侶がせめると、レオナルドは下のやうに答へた。――坊主に繪を描く事が解るでせうか？　私が製作に行かないといふ坊主共の言葉が、何うして正しいでせう。私が毎日、朝と夕に、惡者共や犯罪者の群つて居るボルゲットに行つて、ユダを表はすのに適した顏を求めて居るのは一年も前からの事です。然し、また、ユダに相當する顏を見出しません。見付かりさへすれば、何事をおいても其日の内に書き上げてしまうでせう。若し、何うしても見付からなかつたら、私にこんな難題を持ちかける坊主の顏を借用するばかりです。きつと此顏なら良くユダに似合ふでせう。――此言葉を聽いてミラノ侯は笑つた。然し氣の毒な院主は、再びレオナルドを急がせるやうなことを爲なかつた。――

ジラルディやラマッツォの物語りは、唯の物語りにすぎない。何れ程の事實が含まれて居るか、それは解らない。然し、此處には、レオナルドの性格を躍如たらしむる何物かゞある。そして「晩餐」のために費された彼の努力を知るためには興味深い紀念である。

三、レオナルドの運命

ルネサンス美術の最も貴重な紀念であるレオナルドの「晩餐」は、然し、極めて不幸な運命を授かつて生れた。遲作なレオナルドは、早い手際を要するフレスコを使ふことが出來なかつた。彼は自己の考案に基いてテンペラ繪具を壁畫に用ひたが、「晩餐」の悲しむべき運命は此處に胚胎して居る。壁畫は、出來上つてから二十年位經つか經たぬに既に剝落し始めた。壁の背後は厨になつて居るが、此處から來る濕氣もやはり畫をそこなつた。其後、食堂は、一時乾草の納屋になつたが、此頃から繪具は埃のやうに細かくなつて落ちはじめた。保存の方法は何度となく試みられた。然し此畫の潰滅は不可抗的である。人類文化の歴史にとつて、ゆかしい思出となるべき「晩餐」の現狀は、既に影の如く淡く、到底觀賞には堪え難い。

然し、不幸な運命を授かつて居たのは「晩餐」丈に限らなかつた。僅かにモナリサの肖像を除く全部の作品が、殆ど同一の運命に會つて居る。構圖の壯大な點にかけて「晩餐」をもしのぎ、レオナルドの作品中最大の傑作と成り得たかも知れないアンギアリの戰は、終に部分的な習作以上に出來なかつた。殊に其中心となるべき軍旗を奪ひ合ふ騎士の圖は、僅かにルーベン

スの摸寫が面影をつたへて居る丈である。砂を卷き陣を亂して相戰ふ全景に至つては、想像の助けに俟たねばならない。ルネサンスの彫刻界に一新時期を劃し得た筈の騎馬像は、モデル以上に出來なかつた。ミラノ侯の運命の傾きかけた事を知つたレオナルドは、侯に鑄造の費用を求めなかつた。モデルは風雨にさらされて荒廢に歸した。そして終に、ガスコン射手等の慰みの的となり、跡片もなく消滅してしまつた。優雅な「岩間の聖母」も二枚模寫に面影を留めて居る丈で、アンナの像も自筆のカルトーンと模寫とを殘して居るのみである。初期の作なる「お告」でも「三王の禮拜」でも、運命はやはり同じであつた。ヒエロニムスの像に至つては、物好きなカルディナールが古道具屋から見出したときには、一部分切り取つたまゝ箱の蓋になつて居た。バッコス、ヨハネ、レダ、其他何枚かの肖像畫は弟子達の筆に名殘を留めて居るにすぎない。——造形美術の歴史上に二度と出現したことのない此大天才の紀念が、之程までに痛ましい狀態になつてしまつたことは、神の如き樂聖ベートーフエンに聽力が奪はれた事と同じく、歎げきつくされぬ悲しい運命である。

然し、それにも拘はらず、吾々は此處に悅ばしい慰めを見出すことが出來る。くり返して云ふが、彼の生涯は、製作其物を殘すための生涯ではなかつた。レオナルド自身の偉大な人格を養ふための生涯であつた。人格を養ふ手段なる多くの製作は潰滅して傳はらない。然し彼の殘した自らの人格は、それ自身、一個の讃えやうもない美事な作品として吾々の所有に歸し、過去に營まれた文化的努力の最も光輝ある現れとして、人類の誇りとなり、汲めども盡きぬ泉となつて、文化にたづさわる者の心を、永遠に勵まして止まないであらう。

數千年を通ずる人類の事業は、創造の意志に基いて營まれて來た。創造の意志は、然し、それ自ら、既に具體的な永遠の實在である。事業の最も純粹なる姿は、かゝる意志の働き其物である。レオナルドが殘した行跡は其量に於て僅かであるかも知れない。然し其行跡の奥に脈を打つ創造の意志は偉大である。

時を得顏に振舞ふラフアエルの豪奢な行列は、道を避けて寂しく立つレオナルドに、埃を浴せながら過ぎて行く。誇りがなラフアエルは、馬上から、慇懃な態度でレオナルドに會釋する。レオナルドは恥かし氣に眼を伏せてしまう。——かうした、メレシュコフスキーの物語りのやうな出來事が、ローマの街で曾て起つたかも知れない。然し「祭りの日の子供」として、短い生涯を幸福に、怜悧に渡つて行つたラフアエルは地上の譽こそレオナルドの上であつたかも知れぬが、天國の坐席は遙かにレ

ナルドの下にある。一と通りの才人にすぎないラフアエルは、レオナルドの受けた貰い苦しみを知らなかつた。――レオナルドの努力は同時にレオナルドの才能であつた。レオナルドに對して吾等の感ずる溫かい懷しみは此處から來て居る。

五、科學的研究の概觀

自然科學の研究に生涯の一定期間を專用せしむることは、レオナルドのあまり爲なかつたところである。最初、彼がミラノに滯在して居た頃には光學の研究に耽つて居たが、それは、當時彼の企圖して居た繪畫の基礎的理論を建設する上に必要な準備だつたからで、同様な目的から、二度目の滯在中には主として解剖學を研究して居た。然し、一般的に云へば、彼は生涯を通じて科學的研究に親しむで居た。青年時代に好んだあらゆる自然現象の觀察は、研究の材料を集めるに役立つた。中年時代を主として藝術上の製作に暮した後、彼は老年期に入つてから、科學的研究、殊に數學的自然科學の敍述に心を潛めた。そして特に驚嘆に價する彼の性癖は一つの研究を執念に繼續して、常に、最も深い根本の原理を探つて行くことと、一つの研究から見出された結果を出來る丈利用して、包括力の廣い結論に導いて行かうとすることとである。かゝる眞摯なるレオナルドの態度は科學者としての彼の地位を偉大にし、當代一流の大家として近世自然科學の始祖たる資格を彼に與へて居る。殊に、一般の狀態が、單なる修辭的辨證に傾いて居た當時にあつては、レオナルドの建設的な努力は殊に稱讚に價する。科學的研究と、藝術的製作との間に存する密接なる關係――彼の偉大な精神の內に棲む思想の全內容は、具體的な姿を取らんがために、二樣の形式を選んだ。科學的研究と藝術的創造とがこれである。しかも其內容の豐かな點にかけては、恐らく人類の爲遂げ得る最高の限度に到達したものであつて、彼程に多面的な精神的勞作の發露が、唯一個の人格から流れ出て居る事實に至つては、文化史上恐らく唯一の場合と云へやう。

スコラ哲學風の辨證を嫌つて、直接、自然の現象を觀察した彼は、數學を以て一般科學の基礎と見做して居た。不完全な當代の研究機關にも拘らず、洞察の鋭い探究は重要な成果を彼に許した。解剖學の研究に一新時期を劃した彼は、天文學に於ても地動説の先驅者となつた。其他、物理學一般の諸問題をはじめ、光學、音響學、力學、等は元より、地質學、形態學、生活現象の研究に至るまで、悉くレオナルドの注目を受けた。なほ、水力學、航空法の研究や兵器の考察にまでも彼の努力は及んで居る。

彼の本質を洞察することなくして、徒に、彼の從事して居た

仕事の端くれのみを見る者には、レオナルドの努力が單なる氣まぐれにみえ、物好きな、或は、罪深い徒事に思はれたことは止むを得ない。然し、彼の行跡の全範圍を——極めて微かなる現はれに至るまで——追跡するならば、レオナルドを人の世に送つた創造主の眞意の、何處に存するかを明らかに理解し得るであらう。萬衆の奥底に潛むで居る大なる理法を求むること——レオナルドの限りない勞作の焦點は此處にあつた。

× × × ×

よく用ひられたる一日の後に安き眠りが續くごとく、よく用ひられたる一の生涯は悦ばしき死を克ち得ん。

（レオナルドの手記より）

本文はレオナルド・ダ・ウインチを評論した一つの試みである。それ故、美術史上の特に專門的な考察——主として様式上の問題——は畧すことにした。然しウオーター・ペーターのやうな散漫には陷らないことを希望する。本文を草するにあたつて、私の參考にしたのは、ザイドリッツ、ウヱルフリン、ソルミ、マントイフエル諸氏の著書である。特に尊敬すべきザイドリッツの根本的なる研究には負ふところが極めて多い。なほ、レオナルドを正しく理解する簡單な著書としては、上記、マントイフエルの小著とグロナウの英譯本とが最も適當である。セイユの著書もしば〳〵引用されて居るのを見出す。ついでに附記して置くが、通俗になつて居るミユンツの著書は、稍時代おくれの感があり、メレシユコフスキーの小說に描かれたレオナルドには、作者のセンチメンタリズムがあまりに多く混入して居るやうに思ふ。

階級文藝に對する私の態度

階級文藝に對して

久米正雄

問題は自ら二つに分れる。

第一。眞の「階級文藝」と云ふものがあるならば、――階級文學の定義は知らぬが、此場合極めて常識的に考へて、第四階級的意識を以て、階級闘爭に關聯する所多き作品、乃至、第四階級の生活を描ける作品と目して――それに對してお前は如何なる態度を取るか。

云ふ迄もなく、「眞に」さう云ふ作家の、「眞の」さう云ふ作品には、認賞と敬意を拂ふに吝なるものではない。

プロレタリアの心理なるものが、決してブルジョアに分らぬとか、階級文學の主題は、ブルジョア的觀賞家には全然分らぬ、とか云ふのは、遂に似而非プロレタリア作家が、自己の表現不足を辯護する爲に、強辯を恣にするものであつて、若し藝術至上主義が、彼らの云ふ如く、全く「迷信」であるとすれば、更にそれ以上の妄信であり、獨斷である。私は決して、プロレタリアの心理が吾々に分らぬとは信じない。反對者ならば反對者として假りに敵ならば敵なるだけ、眞にさう云ふもの丶立派な表現に接したならば、感銘度が深いに違ひない。たとへそれが快感でないにしても。殊に藝術觀賞の場合に於ては、屢々不快なるものであつても、感銘度が深ければ快感に變ずる。其意味で私は藝術に「國境」がないと共に、「階級」はないと信ずる。私は藝術上のインターナショナルを奉ずるものである。

繰り返して言ふ。眞の「階級文藝」出でよ。私は双手を擧げて歡迎する。既成文壇に於ける、渺たる吾々の位置なぞの如き、掃蕩さる丶と否とは、問ふところではない。階級文藝でなくとも、實力ある新作家の出現は、たとへそれが寧ろ貴族的な傾向を持つてゐるとしても、掃蕩すべきものを掃蕩する。さう云ふ新作家に對して、吾々は尊敬をこそ持て、何の今更の恐怖と拜威とを感ずるものぞ。吾々は假りに、さう云ふ眞のプロレタリア作家に、生田長江が云ふ所の、「退位」を強ひられるとしても、其時になつて見苦しく惡びれたりしない丈の覺悟はある。さあ來い、たゞしモッブ共の出鱈目な氣まぐれで、封殺されたりなぞはしないぞ。

第二。現在の、所謂「階級文學」に對しては、云ふ迄もなく感服しない。普通の水準を以てして、幾らか有望だと思ふ人もないではないが、一二の低劣論客、三四の贋物作家に對しては、唾棄したい氣もちをさへ感ずる。それは吾々がブルヂョア的氣持を持つてゐるからではない。眞のプロレタリアから見ても必ず、同じ感じを持つに違ひないと思ふ。持たないとすれば、プロレタリアは自ら恥ぢるがいゝ。而してさう云ふ屑であればあるだけ、センセーショナルな事を云つて、自他をあやまつてゐる。もうプロレタリア運動も、鳥渡看板だけ赤く塗つてさへあれば、悉く味方と思はねばならぬ程、味方に饑ゑて居る譯でもなからう。尤も洗ひたて丶見れば、殆んど眞のプロレタリアは居まい。そして假に一二居ると見れば、其人々は一個のプロレタリアではあつても、プロレタリア文學者ではなかつたりする。

要するに、現存の、自ら呼號する「階級文

學」は、一種の似而非階級文學であつて、恐らくは後から眞のものが現はれるにしても、靴の紐を解く資格さへあるまい。自分は文學の健全なる發達、合理的な革命の見致からして、心ある人々は、現存の所謂ブルヂョア文學に對するよりも、より以上の義憤を、是ら似而非階級文學の喧噪に對して持つであらう事を、知己を待つ心で信じてゐる。

敢て云ふ。現下の社會組織の下に於ては、有ゆるものは商品となるとかや。彼らの錦の御旗たる所謂反抗精神さへ、彼らに依つて立派に商品化された。この賣りものゝ階級文學よ！　私は此の賣らるゝ正義を見る毎に、自分の「微苦笑」の殼より飛び出して、賣られた喧嘩なら買ひたいとさへ思ふ。が、吾々は靜まらなければならない。そんなところへ無駄な勢力を濫費するよりは、右するにしても左するにしても、或る力を用ゐて戰ふべき時期が必ず來るから、其時の用に備へなければならない。其時こそ眞に、プロレタリアとブルヂョアの分れる時だ。眞物と贋物の分れる時だ。

今、取亂してはならない。靜に自分の畑のものを、培ひ育てなければならない。

最後に、自分自身の藝術的立場を一言するならば、自分も自分の所産せる藝術の結果として、何らかの形式に於て、社會革命の階級戰には參加したい希望は持つてゐる。それには、自分は今迄の環境と教養との關係から自分自身が見聞して來たブルヂョア文明の、爛熟狀態乃至は頽廢狀態を、徒らに攻擊的に走つて正鵠を失ふ事なく、内部から如實に描き出したいと思つてゐる。そしてそれが自ら、間接に現代社會組織の欠陷を暗示し得れば、自分の職分は足ると思つてゐる。併し、それにしても、今、發つて置かなければならないのは、公平な觀察と表現の力だ。先づ靜に、そして惑はされずに進む外ない。(大正十二年の書初に)

プロレタリヤの世になつて初めて眞のプロレタリヤ文藝生る

菊池寛

同じ問題について、他の雜誌でも答へたから、重複するところは避けて、所謂プロレタリヤ文藝に對する私の疑問を二三擧げて置かう。

一、プロレタリヤ文藝と云ふけれども、現在のプロレタリヤに、文藝を鑑賞する餘裕と力とが、あるだらうか。現在の虐げられたる第四階級には、文藝を鑑賞する餘裕なんかは決して無いのだ。彼等を現在の奴隸のやうな狀態に捨てゝ置きながら、文藝丈を與へて、それが何になるだらう。彼等の最も要求する所のものは、人間らしい生活だ。その日、その日の充分なるパンだ。いな、彼等の腰に纏つてゐる鐵鎖を斷つことだ。眞にプロレタリヤを思ふ紅眼鐵腸の士ならば、小説や評論など生やさしい事をやつてゐるよりも、爆彈を手にして、街頭に立つことが第一の急務ではないかしら。空腹と不幸とにもがいてゐるプロレタリヤに、小説などを與へて何になるのだ。彼等が「よしてくれ！　小説どころの騷ぎぢやないんだ！」と叫んだら、世の所謂プロレタリヤ文學者は、何と答へるだらう。眞に社會改造の熱血が、胸にほとばしつてゐるなら、小説などは、まだるつこくて書いて居られないと思ふのだ。

一、所謂プロレタリヤ文藝が、眞のプロレタリヤの要求でないことは前述の通りだ。プロレタリヤの要求でなくして、所謂プロレタリヤ文學者の主觀的の要求なのだ。が、現在のプロレタリヤ文學者達が、果して純眞のプロレタリヤかしら。その大部分は、私達と同じやうに、ブルジョアの學校教育を受け、ブル

ジョアの家庭に育つた人が多いやうだ。いかに、口に反抗的精神のお題目を呼號しても、彼等の血管には悲しいかなブルジョアの血が流れてゐるのだ。彼等が、どんなにもがいてもブルジョア社會の垢を洗ひ落すことが出來ないのは、私達と同じだらう。尤も、プロレタリヤ作家の中には、勞働者出身と云ふ人も居るやうだ。が、一旦勞働をしてゐたと云ふことが、果してプロレタリヤの資格だらうか。勞働から足を洗つて、文藝に進まうと云ふことは、筋肉勞働を欣ぶロシヤの勞農新人などとは少し違つて居るやうに私には思はれるのだ。

一、前述の意味で、所謂プロレタリヤ文藝は讀者の點から云つても、作者の點から云つても、眞のプロレタリヤ文藝だとは、決して思へないのだ。社會改造主張の文藝だとか、プロレタリヤ崇拜の文學だとか云ふべきものだらう。眞のプロレタリヤ文藝は、現在のブルジョア社會が倒壞しプロレタリヤの世になつてから、起るべきものだ。そのときに起つても遲くはないのだ。プロレタリヤの腰に、鎖が付いてゐるのに、小說などを與へて何になるのだ。啓蒙だとか宣傳のためならば、文藝以外に手取早い方法はいくらでもあるのだ。

一、既成文壇が頽廢し行きつまつてゐることは、自他共に認めるところだ。たゞ、プロレタリヤなる錦旗のもとに、未熟な藝術や、不合理な藝術觀などの横行することを恐れるのだ。速製の赤大根的作家や評論家の跋扈を苦々しく思ふ丈だ。文藝的に云つても、菩薩十年の士である宮島資夫君や、内藤辰雄君や、新井紀一君などが、もつと華々しく認められることは、欣ばしいことだと思ふ。

主觀同時に現實

加藤一夫

創作に從事するとき、何よりも私は、私の主觀を重要視します。作家のうちの或るものは、藝術の創作に從事するには、自分のうちに何等の主觀をもつて居てはならない、自分の思想や感情を、全く白紙のやうなものにして居なければならぬと主張するものがありますが、私にはそんな事は考へられません。何となれば、藝術は寫眞ではないからであります。もし哲學上の認識論に於いて、模寫說が通用しないものならば、同樣に藝術に於いても單なる寫實論が通用しないのは云ふまでもありません。人生や社會に、どんなショッキングなる事件が起つたとしても、また起り得るとしても、それを感じ、それを觀察し、それを解剖して、さて、それを一つの藝術品に創作しようとする心的過程に於いて、私達の主觀が強烈に作用するのは當然であります。私が自然や人生や社會の諸象に對して、今までのブルジョア作家達のやうな觀察を下し得ないのも、また彼等と同樣の感情に支配し得られないのも、これは決して或る成心を抱いて居るからではなく、私としてはこれより外に仕方のない事なのであります。しかし、同時にまた、さうは云つても、たゞ自分の經驗して來た苦しい勞働の經驗や、貧乏の惱ましさや、それから、勞働者らしい口吻を眞似、無暗味に强がりを云つて見たり、我まゝを云ふばかりでもつて、プロレタリア作家だと自任する程私は獨りよがりではないつもりです。今日のプロレタリア作家には、餘りに單純な唯物史觀的概念しか持ち合はせて居ない樣に私には思はれます。こんな有樣では、ブルジョア文藝破壞の潮流が押しよせて居る時代には、元氣があつて喜ばれるかも知れないが、一年も經つと、直ちにその單調さに飽き〳〵されて來るに相違ありません。もつと眼を大きな社會人生にそゝがねばなりません。そして今日の如き社會に於ける自我が、どんなにその環境に在つて喘ぎ苦しみ自己を生かさうとするかと云ふ、生きた個人の感情が表はれ

ねばなりません。表現派の文藝論なんかは、プロレタリアにもブルジョアにも適用する議論であるから、主觀を强調する表現派の創作態度のもとにブルジョアも新しい運動の蓑衣を裝ふ事も出來ますが、しかしダヾイストのやうなせつぱつまつた心情は今日の如き社會に於いてのみ表はれ得るものだと私は思ひます。しかし私は何もダヾイズムを主張するものではありません。たゞ本當の意味のダヾイストの心情やその藝術には、强烈に主觀が表はれて居るのを心よく思ふばかりです。生はんかな强がりの藝術や、社會主義理論の解説のやうな小説よりは、遙かに人情の至心にしむ込む事を感ずるのです。

兎に角私は、プロレタリア的思想感情のもとに藝術を創作します。さうした主觀を强烈に表現したいと願つて居ます。

しかし斯う云つたからとて私は、或る理想をもつて藝術を創作しようとするのではありません。理想が社會人生を革命しない樣に、理想が藝術の本質を構成するものではありません。私は私の主觀を强烈に表現し、私自身の苦惱を語りたいとは思ひますが、私の理想で捏ね上げられた世界を藝術の上でのみ創作しようとは考へません。さうした藝術は眞實を缺いたものです。もし理想の社會が私の藝術の上で創造されるものなら、私の自我が、その世界で苦しむも悲しむも努力する事もしないかも知れません。私が藝術に熱愛を感じるのは、私が現實の社會で苦しむで居る事や努力を──即ち私の感情や意志を──私の藝術の上に投映する事が出來るからです。だから私は、現實は飽くまでも現實として殘しておきます。そしてその現實の中に、私の主觀を强烈に表白したいと思ふのです。

そして此の創作的熱意はやがて、私の活動を、單なる紙上の創作のみに限らず、自ら街頭に立つたり、陣營の一兵卒として鬪かつたりする事にも向ける事になります。私に於いては生活も一つの藝術であります。社會運動も一つの藝術的術動であります。

それの生産とそれの消費關係に就いて知ること

内藤辰雄

元來藝術は人間が人生に於いて發見したあらゆる約束──宇宙と個人との約束──社會と個人との約束──國家と個人との約束──家族と個人との約束の拘束に對する人間の生命の謀叛でありまして、その生命とするところのものは（美）と（自由）にあります。……それは獨自性の放射によつて成るものでありますから藝術は飽迄も個人的のものでなくてはなりません。それは（美）と（自由）に奉仕するものでありますから飽迄も貴族的のものでなくてはなりません。藝術が個人的のものであり、貴族的のものである、といふ内藤はケシからん、プロレタリアートの風上にも置けないといふプロレタリア作家があるか知れませんが、さう思ふ者は實際運動をやつたらいいのです。凡そ藝術の民主化位無意味なものはありません。それが單に藝術の一切の作品を國民的所有に歸せようといふのでしたら私は双手を擧げ、目に多年の泪をタメテ贊成いたしますが、日本現在の民主化作家の多くは、狂信的の態度をもつて、藝術そのものを何人にも理解される迄にせうと考へてゐるのである。無意味も甚だしい。藝術家が藝術にでなく、政治的偶然の要求、其他人間が發見した一切の約束の拘束が呈出する要求に奉仕してゐる間は藝術は生れません。そこに生れるものは無意味な勞働と、無意味な商品と、これを見習ふ小僧と位のものです。何故なら破壞の無いところに創造があらう筈なく、作家が民衆の理解のレベル迄降る時、

こに民衆の向上を意圖する民衆的作家の使命があらう筈がありません。民主化とは藝術の一切の作品を、少數の特權階級の所有からモギ離して、これを一般國民の所有にしようといふ實際運動者の口吻以外には無意義です。して見ればこのような無反省、無理解、：：而して幼稚なる民衆藝術論をなす者に藝術家が無いといふのは明々白々のことであります。今日の所謂プロレタリア作家といはれてゐる連中が、僅かにその一二名を除けば悉、プロレタリア小說工場原稿製造機械係の職工であつて藝術家ではないといふのは、藝術がどんなものであるかを知らぬところから發生してゐるのであります。彼等のどこに獨創がありますか　彼等のどこに貴族性がありますか!?：：表現がありますか!?　といふものも彼等が思想にとらはれ、形式にとらはれ、安價なる再現慾にとらはれ、ウスッペラな名譽慾にとらはれて、自分が發見したあらゆる法則の拘束に對して、痛切に自分の生命が謀叛を感ぜないにも拘らず筆を取るからなのです。さうして困つたことにはこのような大バカ者に限つて、それを具現するに特種な個性を持つてゐない。自然から惠まれた精神の貴族性をも持つて居らず、美しき物に對する敏感性をも持つてゐない。だからして私はよく誰にでも向つて、現在の所謂プロレタリア作家なるものは、その一二名を除く他、斷じて藝術家ではないといふものであるが、集るの凡庸なる批評家はどういふものかカラ騷ぎをしてゐるのであります：：プロレタリア作家が多く出れば社會が革命に向つて脈搏を早めるとでもいつたように：：しかし安神してゐて貰ひたい！：：そこに勞働を厭ひ、無爲徒食し、大言壯語して、何にもないプロレタリア藝術家志望のための青年が簇出して、藝術の權威を冒瀆する位のものであります。

といふと、藝術は富と閑暇を所有する階級人の洗練された特種の感覺品性思想を持つてゐなくては創れないように聽へますが、しかし、それが如何に洗練された特種の感情や、感覺や趣味や哲學からなる物であつても、何等社會的の意味をなさぬものであつては――――一般民衆に反感され、憎惡される位のものであります、よし、民衆がそれを理解し、觀照する能力を持つに到つても、民衆はそれを拒否するでせう、民衆の自覺に正比例して社會的の意味をなさぬ藝術は亡ぶべきです。何故なら直接の生產者が彼等であつて見れば彼等はこんな藝術の生產者には米を與へなくなるでせうから：：だから民衆の悅びとなるような藝術を作るのを厭ふ藝術家は自ら米を作ると一緒に詩を作ればいいのです。しかしこの場合に一つのミソが殘されてゐます。それは特種な感情や感覺を持つ民衆藝術家にあつては、それが如何に高踏的態度を採つて誇らうとも、民衆は：：やがて小數から大衆――彼のゐたところまで追付いて行くでせうから：：米と詩とが交換されないこともないといふことでございます。

藝術家であれば、常に美しきものへの到達のために國民の眞先きに步むべきです自分は米を食つて生きてゐる人間であるといふことを考へながら、而して米は農夫が作るといふことを考へながら：：しかし群衆の行列の最後の一人と肩を並べる氣なら、誰か代つてその先頭に立つ者が出來るであらう。すべてには階級ならぬ段階があるのです：私の藝術創作の態度をいつて見れば　勞働階級の智識者を目標に置いてゐます。といひますのは、私自身の生命の謀叛が、勞働階級の智識者の生命の謀叛と共通するからであります。

しかしながら元來人間生命の謀叛なるものは人間が何かの拘束を受ける場合に發生するものでありますから、より良き藝術的生命を保たうとしてゐる私は、何物の拘束にも從ひません。もつと嚴密にいへば、私自身の拘束さへ私の藝術には加へられないものでありま

す。私の作品が藝術である以上は。

――技巧ばかりでは駄目だ、い丶氣持が創作品になくてはならぬとか、作家は作家である前に先づ立派な人間でなくてはならぬとか、創作してはいけないとか、原稿商人となつてはいけないとかいふことは熟知のことですからここではいひませぬ。で私はここに私のモットウとするところを述べてお答へをすませます――私が文壇に出たいのは生活の方便のため――藝術創作に從ふのは神に近づかんがため――社會運動に加はるのは社會の一員であるため……。

新しい革命の爲めに

吉田紘二郎

プロレタリア對ブルジュアの鬪爭現象が文壇に現はれて來たことは、今日ばかりのことではない。すでにたとへば英吉利文學史上に於いても、千七百七八十年代にはスコツトランドに於いては農民の子ロバート、バアンスがあの炎のやうな郷土愛と、仲間愛とを持つて農民のためにプロレタリアの革命歌をうたつてゐる。さらにさかのぼつて十四世紀ごろのことを考へて見ると、こゝにも今日と同じ現象があつた。あの百年戰爭の結果は英國をして經濟的にも非常な窮境に陷れた。國民はフランスとの戰に倦いた。國民は重稅に疲れた。富者と貧者とのはげしい階級鬪爭が起つて來た。その際にはジョン、ボウルのやうな庶民のための主義者が生まれて來た。到る處に、ブルジュアとプロレタリアの反目が惹き起されて來た。

スコツトランドの田舍の小作人の子で、貧しい、身分の卑しい稅吏であつたバアンスが農民の言葉を以て、農民の訴へを、苦しみを悲しみを、喜びを、憤りをうたつた時は、ロンドンの文壇の人たちは花やかな大陸文學の美酒に醉つてゐたのであつた。かれ等は革命の炎が北方の一農民の手に握られてゐることを氣付かなかつた。革命の炬火は最も人間らしい、原始人的な生ぶな人たちの手によつて點火せられなければならぬ。

この數年來の日本の文壇にも十八世紀のロンドンの文壇に似た都會人的なブルジュア的な空氣があまりに濃く漂ふてゐた。思ひ上つた風潮がたしかに、あり過ぎた。プロレタリアの文學が聲を大きくして來たといふことは、文壇のために來なければならぬあらしが來たとみるべきである。その結果は文壇に新らしい力を與へ、新らしい命や光りを與へるにちがひない。眠つてゐる者を鞭打ち、怠惰なる者を叱咤するにちがひない。過去の偶像が破壞せられ、新らしき眞實の物が頭を擡げて來るにちがひない。私はこの意味で今年の文壇がもつと〳〵眞實の意味のプロレタリアの作品を生むことを希望する。

無論いつの時代にもほんものとまやかし物はある。所謂今日のプロレタリア藝術の中にも隨分名ばかりの物もある。裝だけは新らしいが、中味はブルジュア的なものもある。ブルジュア的でないとしてもちつとも新味を持たない物がある。つとめてプロレタリアがらうとする物がある。今日、ロシヤの工場で歌はれてゐる純粹のプロレタリアたちの詩は極めてのび〳〵した明るいものであるといふやうな話を私は聽いたことがある。かれ等はあの工場のベルトや、フライ●ホイールの唸り聲や、ステイム●ハムマアの地ゆるぎにも新しい生命創造の交響樂を感じてゐるといふことである。かれ等の詩は男性的であり、太い、力強い線を以て作られた素朴な、潑溂たるものであるらしい。

今日の日本の社會狀態は、或ひはツルゲネーフやゴーゴリたちのインテリゲンチヤの惱みの時代、××の準備時代までしか來てゐないのかも知れない。隨つて日本の所謂プロレタリア文學にはまだインテリゲンチヤ的な弱

みさや、弱さや、躊躇がありはしないか。過去の文學の幽靈が附き纏うてはゐないか。

　私たちが待ち望むプロレタリアの藝術は、今までの藝術が持つことができなかつたほどの原始人的な純な憤りの姿である。同時に人間的な、仲間的な親しみの聲である。不正、不合理、惡に對する原始人的な率直な大膽な非打算的な憤りと、人間に對する兄弟的な親しみを持つことのできる大きな純朴なプロレタリアの藝術を私は望む。

　エゴイステツクな者、打算的な者は誰であらうと、ほんとうなプロレタリアの藝術を生むことはできない。プロレタリアの藝術を生む者はイヷアンの馬鹿でなければならぬ。

革命藝術の要求

藤井眞澄

　藝術は美を創造するてだてである。美とは自己生命が思ふまゝに自由に擴張存續した場合の、滿足感を云ふ。美的生活！それが我々生命の、全的な、そして最後の目的である。ところがそれはなか／＼遂げられない。そこで、生命の要求は、必然に藝術作用を起してこゝに美的作品を生むのである。

　飢えたる者がうまいめしに出合つた時、惚合つた男女が抱擁する時、そこには藝術作品を生む必要はない。それ自身が、生命の滿足感であり、美的生活であるからだ。だが、是れが拒まれた時「あれがほしい！」と生命は叫ぶ。この「あれがほしい！」が藝術なのだ。遮ぎられ抑へられた生命が、藝術作品を生んで、それによつて一種の美的生活を爲すのである。藝術作品に接して生ずる美の恍惚は、不滿の生命の沈澱物を洗流し淨化するのである。そこで藝術品とは、結局、抑壓生命の、潜在意識の、不平心理の、昇華に外ならなくなるのである。

　要之、藝術は其作家の生命の流れの、一種特別なる擴張存續道である。即ちそれは作家の生んだ子供にほかならない。從つて其作品には其作者の血が通つてゐなくてはならない。血を通はすことはなか／＼むつかしい。それには作者自身の生命に對する强き觀照力と、鋭き緊張力を必要とする。この間の消息を語るものに、明治維新が生んだ革命畫家狩野芳崖の有名な言葉がある。

　『手に操る所の筆は一の器具にあらずして、自家の肉體と同じからざるべからず。その内外機熟して筆正さに紙に落ちむとする時、傍に人あり、刀をもて筆を切斷するに其切口より血淋漓として迸り出づるにあらば、始めて畫をつくるべきなり』

　作者が其制作をなさんとする場合の意氣は、正さに斯くの如きであらねばならぬ。更らにこの場合に於ける作者内心の生みの努力と、其出來上がつた作物を公表しようとする時に感想を語るものとして、近代思想の開祖イプセンの言語がある。彼れは或作品中の革命家をして斯く云はしめてゐる。

　「魂の抜けたやうな筆耕屋の仕事を思ふと、何時も堪らない位ゐ反感が起る。それに俺が俺自身の思想を純潔なまゝに、さうして俺獨りで享樂することが出來る時に、何でそれを或る形式に表はして、瀆す必要があらう？、然し今はそれを犧牲にするのだ。それは自分の愛娘を新夫の手に渡す母親のやうな感がする。だが、俺の思想を犧牲に供する――「民衆解放」の神の祭に犧牲として捧げるのだ」

　愛娘を新夫の手に渡す母親の感とは、よく云つてゐると思ふ。但しこの間の消息は賣文賣名のほかなき、日本の多くの似藝術家共には分らぬ氣持であらう。

　さて最後に、今日我々人間生命の擴張存續を邪魔するものはなんであるか？　疾雷風雨や猛獸毒　などは昔の事であつたが、今日では、先づ自分自身の中に惡質遺傳があり、外的生物として病菌類があり、共同生活に於て

不合理なる經濟組織がある。つまりこの三つが、我々の生命の自由——美的生活を障害するのである。そこで、我々の生命は必然に、この三つの邪魔物に向つて鬪爭を起すのだ。この場合に生起する藝術に於ては、自分の惡質遺傳に對する治療、病菌に對抗する健康體經濟組織に對する改造——この三つのものが其本質內容を成すのである。之を綜合して云へば、今後の藝術は一切鬪爭の美、一切革命の藝術と云ふ事になる。

それは自己完成の爲めか、或は社會革命の爲めか、藝術ではない。藝術品を創造する事その事が、自己完成の努力であり、社會革命それ自身なのである。それは美的恍惚感であると共に、其美の魅力は一切革命の源動力なのである。藝術創造卽ち自己完成、自己完成卽社會革命——それが我々の要求し主張する革命藝術である。

今日及び將來の作家は、少くともそれだけの自覺と決心を以て、其藝術作品を創造して貰ひたい。

藝術作品に對する作家の態度

新井紀一

鍍金はいつか剝がれるものだ。人道主義の鍍金、宗教家の鍍金、社會主義の鍍金、プロレタリヤの鍍金——と、から數へ立てたらきりがない。で、今の文壇——と、さう狹く限らなくともいゝ、少なくとも讀書階級で廣く讀まれてるものゝ中には既にその鍍金の剝げかゝつてるのが可なり眼に着く。聖者の如く求道者の如く振舞つてる者、愛を賣物とする者——と、これも數へたてたら限りがない。鴉は鴉のまゝで見る方がどんなにいゝか知れない。それが孔雀の羽根を拾つて來て自分の汚なさを隱さうなんかと心がけると、とんだ醜態だ。社會主義文學者だつてさうだ。プロレタリヤ文學者だつてさうだ。彼等の中には贋物が充滿してゐる。まだ鍍金したばかりだからいゝ。が、その壽命もこゝ一二年だと思ふと、彼等が今得意で喇叭を吹いてる圖が如何にも悲慘だ。ところで自分の事を云ふ。

新井紀一は眞鍮であるかも知れない。鐵であるかも知れない。が、今のところ何の鍍金もして居らぬ。さうして、今にして思へば幸ひであるブルヂョアの教育も受けなければ從つて智識も貰はなかつた。物質的にも精神的にも裸體で生れたまゝ今日まで裸體で育つて來た。その眞掛値なしの純眞プロレタリアとでも申さうか。これこそ實に私が喇叭でもつて叫んでも恥づかしくない事實である。

ところで私は抑々の小說を書き始めた時から——その時分はまだ衰へたりと雖も自然派、人道派・氣鋭の技巧派の全盛時代であつた——私はプロレタリアの意識をもつて彼等ブルヂョア藝術を全的に認めない立場に立つて自分の藝術を書いて來た。プロレタリアの持つ思想、感情、生活を描いて來た。終始一貫して今日に至つた。これは私が藝術を作する限り永久に變らない態度であらう。

人はよく云ふ。ブルヂョア藝術家を目の敵にして彼等の撲滅を叫號企劃するなんか抑々末の末である。彼等はブルヂョアでも何んでもありやしない。そんな暇があるなら實行運動に出て實際のブルヂョアを仆せ——と。併し、である。ブルヂョアとプロレタリアと何れが正しい生活であるかを考へたものならばその正しい生活に就くのが當然ではないか。その正しい生活——それが今非常な壓迫虐遇を受けてゐる。併かも益々酷くなる——を擁護主張するのが當然でないか。藝術は何れの階級に對しても決して局外ではない。彼等の生活感情を支配する力である。ブロヂョア藝術を撲滅するのは、ブロヂョアの生活上の指針を破壞する事である。彼等の眼を潰すものである。何んでも末の末の事であるか。プロ

タリア藝術はプロレタリアをして益々自己の正しさを覺らせるのだらう。不義に對する憎しみを燃え立たせるだらう。

私は只、私のプロレタリアの一人である事に安心して、今後も今まで通り何の附燒刄も渡金も使ふことなしに、腹の底から湧いて來る物を書いて行かう。そこに出來上つたものこそ眞實のプロレタリア藝術であり、プロレタリアの藝術である事に自信を持つて。

時代おくれの考。
——知られざる二作家——

佐藤春夫

今から旅に出るところでゆつくりしたことは書いてゐられませんが、一口に申し上げますと、新興の文藝運動に對して小生は案外——と諸君は思はれるでせう——同感を持つてゐるつもりです。健康な潑溂たる美の創生でせう。私も亦それに渇仰しますね。

階級意識といふものに對して私は一向無頓着です。こんな事を言へば、前述の事と理屈が合はなくなるかも知れませんがそれでも兩方とも本當を言つてゐるつもりです。私は金持もさう羨々しくはない代りに、貧乏人もさう大して氣の毒にも感じられません。さういふことも人生の重大な一面でせうが外にも天地がある氣がするからです。私はどうやら性根からのブルジョアらしいのです。これはどうも宿命的な事でどうにもしがたい氣がします。——こんな宿命的などといふ考からしてどうやらブルジョアらしいですね。本當のよき新時代が來て自分などが役に立たなくなつたら、潔よくさよならです。——せめてはさう言ふ時代の夜明けをはつきり見とどけて死にたいものです。——或は實際は、我々の國の藝術にもさういふ太陽が立派に昇つて來てゐるのに、私が未だ氣つかずに居るのであるとすれば、私のブルジョア藝術觀はよくよく膏肓に入つてゐるのでせう。

今までに私が見たうちでは私は、この間發狂した高橋新吉君の小説——あの時は私にも本當に解るとは云へないが——と、それから未だ世に現はれない作家諏訪三郎君の作品とを見て相當に感心しました。所謂プロレタリア文學かどうかは知りませんが、何れもさういふ階級を描いたものです。高橋君のはひどく頽廢的ですが、諏訪君のはずつと健實です。——この二人の作品が世に出ることがあつたら、私のこの方面の文學に對する理解の程度も或はわかつてくるでせう。

半鐘潰して大砲に

中西伊之助

一昨年の「改造」の新年號を買つて、新聞だよりを見ると、「新人の大作を歡迎する、但し、大家の推薦はお斷りする。情實は閥を作るからだ」と、頗る僕の氣に入つたことが書いてあつた。そこでその文句に惚れこんで一つその「新人の大作」を大に書いて、買つて貰ふつもりで、例の「赭土」を一氣に千三百枚ばかり書きあげた。それが丁度その年の二月の末であつた。で、その原稿を同社へかつぎ込んだわけだ。なにしろ前年の冬に監獄から出て來た僕はとてももらどこの資本家も雇つてはくれないし、學者でも思想家でもない僕は、妙な論文を書いてみたところが、買手のないことはわかつてゐる。——尤も、僕は下らぬ飜譯ものでごまかしてゐるそんな連中より少しは理論もできると信じてゐたが——そこで一面には面白くて、一面には思想宣傳に最も都合のいゝ小説を書いて、その上に當分のしのぎをつける一擧三得のつもりで、その「大作」を改造社へ持ち込んだ。それまでには、僕は今の文壇にどんな風が吹き廻してゐるか、さつぱり知らない。ただ牢の中にゐ

た時、堺利彦老がショウなどの脚本集を差入れて下すつたばかりであつた。しかし、それ以前や、それから牢の中でも、北歐ものが好きだつたので少しばかりは讀んでゐた、けれど日本の愚にもつかぬ小說などはどうでもよかつたのだ。僕の小說が葬られようが、惡口を云はれようが、一向差支へはないと思つてゐた。——尤も認められて、ほめられれば、心持は惡くはない——ただ改造社が出版してくれて、僕が飯が食へて、プロレタリでも、ブルジョアでも結構、それを買つてくれて、なるほどと得心、共鳴して、僕等の陣黨に投じてくれれば、それに越した幸はないと思つてゐた。曾て、ガルスウージイが「正義」を發表して後に、監獄の規則が改正されたと云ふことをきいて、僕はかなり感心したが、僕は自分の小說で監獄の撤廢されるやうな世の中ができさせたいものだとも思つてゐる。だから、僕は小說家にならうとも、藝術家にならうとも思つてゐなかつた。——今もやつぱりその通り——むしろ僕の小說の如きは、從來の日本の作品から見れば、外道で、異端であるかもしれない。日本の從來の小說的價値を標準に純藝術品としての仲間入りは、こちらから御めん蒙りたい。

今までの僕の知つてゐる文學者の中でも、僕は二葉亭四迷が一ばん好きだ。あの人はいつも小說なんか書くのをもの足らなく思つていらいらしてゐたやうだが、壯圖を懷いてロシアに行つて、歸途、印度洋で客死した。今になつて、あの人の心持が、僕にははつきり解る。あの雅號は、クタバツテシメイと云ふのださうだ。

最近、「改造」に「留置場の一隅にて」を發表して、現下のプロレタリア運動に深い暗示を與えた作品として僕を敬服させた江口渙君は、「讀賣」で、僕の「赭土」を、藝術、非藝術、半々だと云つた。これはその通りだ。正道なところ、僕もその見當であれを書いた。だからと云つて、大杉榮君が、「新潮」で云つたやうに、中の人物を決して理想化してはゐない。これはよくあれを讀んで呉れたら解るのだが、一方の主人公の樋島久吉がさうだと云ふならば、それはまだ大杉君がプロレタリアの拔くべからざるブルジョアジイへの叛逆心と潔僻心を理解する素質がないのだ。幼少の時から飽くほど虐げられて來た。二十四五時代の純なプロレタリア青年の心を理解することができないのだ。あの主人公は、たとへ餓死しても、どんな理由があつても、暮夜ひそかに權力階級にぜにを貰ひに行くやうな心は持ち合せがなかつたのだ。話がつい横道に外れた。とにかく、僕はあの「赭土」にしても、それから今度改造社から發表した「汝等の背後より」でも、北歐文學あたりの實質から考へたら、立派な藝術品だと思つてゐる。尤も今度のは、だいぶ作風は變へたつもりだ。

日本の維新當時には、大砲を作るために、お寺の半鐘まで取り下したと云ふ話を聞いた。僕等プロレタリアは、今そんな忙しい氣分になつてゐる。たいていそこらで、作の態度もわかるだらうと思ふ。

あらゆる至上主義に好意と尊敬とを持つ

芥川龍之介

文藝は俗に思はるる程、政治と緣なきものにあらず。寧ろ文藝の特色は政治にも緣のあり得るところに存在すとも云ふを得べし。プロレタリアの文藝と云ふものもこの頃やつと始まりしは反つて遲すぎる位なり。Crainquebille の世に出でしは今よりざつと二十年前なれば、遲すぎる位と云ふことは決して僕の誇張ならず。

其又プロレタリアの文藝、——でも何でもよし、政治的色彩める文藝と云へば、兎角輕視を買ひ易けれど、パルナスの頂上へ達する途も東京市中の道路と同様、必しも藝術至上主義者の滿足を買ふやうには出來て居らず。古來の雄篇と云ふ中には、實は種種なる政治的理由にその聲價の一半を負うてゐるものも澤山あり。もし嘘と思ふ人はユウゴオの人氣を考ふべし。それも面倒と思ふ人は山陽の評判を考ふべし。日本外史を有名にせしは詩人たり歷史家たる山陽よりも、尊王家たる山陽に依りしにあらずや。して見ればプロレタリアの文藝家の中にも、第二の山陽やユウゴオを得ること、必しもなしと云ふべからず。

勿論藝術至上主義者は政治的理由を待つて後、文名を後代に傳ふるは恥辱たりと云ふなるべし。僕はこの種の藝術至上主義者に尊敬と好意とを有するものなり。(ひとり藝術至上主義者に限らず、僕はあらゆる至上主義者、——たとへばマッサアヂ至上主義者にも好意と尊敬とを有するを常とす。)されどかのユウゴオの如く、或はわが山陽の如く、蒼生と悲喜を同うするは輕蔑すべきことなりや否や。僕は如何に考ふるも、彫蟲の末技に誇るよりは高等なることを信ずるものなり。

唯僕の望むところはプロレタリアたるとブルジョアたるとを問はず、精神の自由を失はざることなり。敵のイゴイズムを看破すると共に、味方のイゴイズムをも看破することなり。こは何人も絶對的にはなし能はざるところなるべし。されど不可能なること とにあらず。プロレタリアは悉善玉、ブルジョアは悉惡玉とせば、天下はまことに簡單なり。簡單なるには相違なけれど、——否、日本の文壇も自然主義の洗禮は受けし筈なり。誰か又賢明なる諸公に自明の理を云云せんや。

人類は進步するものなりや否や、多少の疑問なき能はず。僕は四道將軍とシベリア派遣軍の將軍諸公といづれが進步せ る人間なりや、常に判斷に苦しむものなり。されどたとひ遲遲たるにせよ。進步せざるにもあらざる如し。よし又進步せずとするも、將來は進步せしめざるべからず。この故に僕は何ものよりも精神の自由を尊重するなり。獨乙國民は——或は歐羅巴洲民は、——更に又或は人類はベルネに負ふところなきにあらず。されどゲエテに負ふところは實に數倍のみにあらざるべし。しかもベルネはゲエテを罵るに、民衆の幸福を顧みざる冷血動物を以てしたり。

(但し僕を咎むるにゲエテを氣取るものと[illegible]ること勿れ。僕はゲエテのみたらず、多數の前人を氣取るものなり。)

されどプロレタリアの文藝至上主義者はプロレタリアの文藝以外に、人類の進步に役立つべき文藝なしと云ふかも知れず。もし然りとせば片意地なる僕は爾の文藝に關する限り「どうだか」と諸公に答ふるあるのみ。唯幸ひに記憶せよ。僕はあらゆる至上主義者——たとへばマッサアヂ至上主義者にも尊敬と好意とを有することを。

萬國通信欄

本月より萬國通信欄を設けた、あらゆる世界の出來事を、そして信用ある特派員若くは社友が責任を以つて讀者のために執筆するのである、今後の通信欄がいかに異彩ある記事を掲げそして讀者の思想上その他に裨補する所があるか、刮目していて下さい。

在露通信第一

ペテログラードホテル
ユーロッパコン　　片山潜

『入露以來度々何か御誌に對して通信を爲るようにとの御申傳へでしたが、始終仕事が忙がしいので、御誌の御希望に應じたいとは思ひながらも實に今迄失禮しました、在露既に十ケ月餘になりますが其間二度も旅行を致しました三、四月には獨逸國へ、六、七月には遠東共和國チタへ、其他チョイ〳〵短かに旅行を致しましたので實は常に仕事に追はれてるような次第で責任を充したいとは思ひながら今日になりました、で第一信を斯多忙に書くことの出來ます理由から申上げたいと思ひます、無論兼ねてから御社に對して御通報致したいと思ふた其事柄は僕一身に關係のない赤裸々の露國の事情でありました、又今後御報致す事柄も其です。只是は始めてゞありますし、又何うして今日此處で之を差上げるようになつたかも申上ぐる事は適當かと存じます。

僕は一昨日（十一月三日）モスコウを出發致し他の數百名の各國代表者（第三インタナショナル第四大會への）と共に昨朝當ペトログラードに赤衛軍に祝砲を以つて迎へられた今朝は赤衛軍の觀兵式に參列するので我々の同宿ホテルユーロッパの出口に行きました、すると、第三インタナショナル會長のヂノヴヒーフ氏とラデック氏が僕は徒歩行列で行くのではない、クララ、チェトキン夫人と自動車で行くのだと云つて自動車に乘せられて先づ革命で斃れた人々の墓に詣で其式を終りましたが降雨が強いのでクララ夫人は歸りたいと云ふので僕も一所に歸りましたが十二時半此から四時半迄は僕の儲けた時間で此第一信を書く所です、無論大會の模樣等は之を爲す人々もありませう、ケーブに報道もあることゝ存じます、僕は兼ねて御報知を致して見たいと思つて居りました露國の現狀に關する事を斷片的ではありますが御知らせ致したいと思ひます。』

勞農露國新經濟政策に關して何時ぞや友人に托して送りました一文で御承諾の事と存じますが新經濟政策實行の内容は日々に實現されつゝある各事業各方面から愈々益々頻繁に報道され其如何に露州勞農國民等が活動しつゝあるかゞ分りますので我々經濟及社會問題の研究生に取つては極めて趣味ある事のみであり又研究を深くする必要あるものと存じます。

勞農露國の新經濟政策は全く歷史が始まつて以來殊に近世產業史上の始めての試みでありますので露國に於ても學者連中が熱心に其日々集つて來る材料を以つて研究されて居ります、ブカーリン氏の如きもマーキシストの

錚々たるものとして之が學說建設に忙がしくあります氏は卽ち新經濟政策の解釋を與ふる資格ある人士の一人として認められて居ります。

露國新經濟政策は資本家側の解釋に依ると勞農露國が共產主義政策の應用に失敗して行き詰つたから採用したのでレニン等は資本主義に逆戾りを爲る、爲しつゝあるので結局勞農露國は資本主義に降參せるものなりと、上記の解釋は眞に然う信じて爲す者も有りませう又故意に若かく爲すものもありませうが、今日迄資本家側の爲した新經濟政策實行の報告なるものは一を知つて十は更なり二も知らぬ底のものです。

勞農露國が建設さるゝと同時に無產階級獨裁政治はボルシエヴイキ內閣の許に實現したと同時にレニン氏の演說、ソヴエツト、マツト、ウヲークの題下に米國で發行された小册子にも又勞働規則へも私有工場主との關係を認むる如く子供の後見人・之が扶助規定にも貧富と財產有無とを認めて居る如くに漸進的に共產主義の實現を豫期したのですが、此ボルシエヴイキの政策をサボターヂしたものは當時の露國資本家工業家や銀行家等であつた、故に勞農露國政府は土地國有以外に銀行及諸產業の國有を斷行するに至つた譯です、之が斷行をして緊急務上の必要ならしめた事柄は反動革命運動等の蜂起と其反革命軍の攻擊と之が應援の全資本國政府の干涉と攻擊及經濟的封鎖等はボルシエヴイキ政府をして防衛の爲めに軍事的共產主義政策の斷行と之が極力維持に全國力を集注するの外他に策なき境遇に陷らしめたのである。

抑も勞農露國が新經濟政策を採用するに至つた理由は他にあらず、露國現在及び將來に取つて絕對必要であり、又たあつたからである、無產階級獨裁政治開始以來而かも必要上軍事的共產主義政策の實行以來農民から多大の要求のみをして來た、農民の必要なる農具や製造品は殆んど之れを與へずして彼等の產出する農產物、牛、鳥、羊、豚等一切を取り上げた、之に代るにルーブル紙幣を與へ此ルーブルでは農民は何物も得られない、物資が全く缺乏してゐたから．此等多大の負擔と犧牲とは農民はよく耐忍して來た、無論の事無知の農民共も斯う考へて其考へ通りを或る程度迄行つた、其は、作つても又發成しても此の農產物と家畜は政府が取り上げる、寧ろ自分等の必要なもののみを生產すればよい、我々の必要品丈けは取り上げないからと是れ無知の農民には最もの事だ又反革命家で深く隱れて居る農民等を政府反對に時々裡に導いたものも少なくない、舊資本家階級に屬し依然として此階級に感化されて居るもの等は右の態度で出たので、之が結果は何であるか、さなきだに革命と繼續せる內亂との爲めに多くは不能となれる產業機關の爲め生產の大激減となつたのである、勞農露國今日の急務は生產の增加物資豐富に在るので、之が目的を急速に達する急場の手段、絕對的必要手段としては今日實行せる新經濟政策以外に方法なきことを認めて若かく實行したので、其定見は少しも誤まらざりし事は實施後の事實の證明する處である。

新經濟政策の實行は少しも誤りではなく又之が實施が資本家主義に逆戾りでもなく、資本主義の採用事物が實に共產主義實行に對する最良の手段である、新經濟政策實行の爲めにボルシエヴイキ政府は少しも弱くならず却つて大に强固になつた農民と勞働者との關係が一層親密となつたことと又農民とボルシエヴイキ政府とが、充分の諒解がついて益々農民からの政府後援が濃厚になつたこと等卽ち新經濟政策の實行の明かなる結果である　又新經濟政策は無產階級獨裁下に倘迄資本主義の商工業方法を利用するので、所謂資本家國に於ける資本主義の應用之が活動と勞　露國に於て、資本主義の實施とは大に其趣きを異に

する處がある、無論の事、私有財產制度も或る制限の下に認められて居る、公私及私間の契約實行の神聖等も認められて居る其處には資本主義國の私有財產制、公私間の契約履行の確實等に些の相違はない、只相違の要點は無產階級獨裁政治で之が政府はボルシエヴイキ黨政府であると云ふ點である、ボルシエヴイキ政府が革命政府で革命當時ケレンスキ政府の爲した事や又帝政時代の階級や權利を全廢したから信用が出來ないと云へばそれ迄で總べての革命政府も日本の千八百六十八年の維新の封建の諸權利を一掃破壞したるが如きも舊政府の爲した事を破棄するのである少なくとも五ケ年革命政府を維持して反革命軍外敵や內亂に打勝つて來たボルシエヴイキ政府は革命政府として信用すべきである、又多くの國は之を信頼して英國を始めとして通商を開始して居る露獨通商條約は其の最もなものでる資本主義採用の上に於て勞農露國の環境が他の資本主義國とは全く異つて居るのである。

然るに之が相違は實際に於ては資本家活動の上に於て又其結果に於て異らず、豫想に違はず、露國に於ける製造品も生產品も非常に增加して居る、僕は斯等の事實を悉く數字を以つて證明し得るが其は他日に讓つて玆には最近日本に於て多大の注意を拂はれて居る露國饑饉救濟事情に關して其大體の現狀を報道したい。

露國救濟事業は資本家側の方から云へば一段落を告げた譯だ、其は露國本年の麥作は豐作であつた、食料は出來た、只是だけの事で大饑饉の後始末が濟むと考ふることは大なる間違ひである、饑饉の慘狀は決して退却せぬ退却せるものはフーバー氏の北米政府の國家的救濟團アラー（ARA）のみである、米國は國家的に饑饉地方の子供に食を與へた（死なない程度に迄）然るに米人は商賣用である、救濟も商賣的に斷行して名聲を以つて引き揚げた、饑へた子供等は勞農露國の手に渡した而して一報に依ると米國は名聲を以つて引き揚げる時而かも一千萬弗の救濟金を使つて露國民の感謝を買つた上に其上にダイヤモンドや寶玉や金銀細工や毛革類一千萬弗以上の純益あるものを極々安價で買つて引き揚げたとのことである、米國は弗政治の國、弗外交の國、弗的經濟の國で倘還弗の勢力ある國と國民とであることは此救濟に依つても明かである。

然りと雖ども上記の事實は決して米國の全斑を代表したものではない、米國は近世の大國である其國民中にも無數の立派なる國民あることを忘れてはならない、然り資本家の米國あると同時に平民の米國殊に勞働者の米國あることをも忘れてはならない、排日の米國あると同時に親日の米國あることも事實である若しも全然一米國があつて全然此一米國が全國を意の如く支配し得たならば米國は必らず今日とは相違せる米國が出來たであらう、無論今日の米國は資本主義の最も濃厚なる色彩を放てる而かも之が最も勢力ある米國ではあるが他の階級も亦仲々勢力あり斷じて全く壓迫し盡された米國ではない、此は露國饑饉救濟事業ソブヒエツトロシアの友の事業に於て證明して居る、

F、S、R、（フレンドヲヴソヴヒエツトルシア）は共產黨が事實主宰となつて組織された對勞農露國勞働者の救濟團である、正金のみでも七八十萬弗を集め物品其他を合すれば百四五十萬弗に及ぶ救濟額であるが其內容を僕は玆に記載せんとするのではない、只玆に記せんとする事はF、S、Rの監下で露國を積極的に救濟せんと試みた一事業である即ち

トラクトル、ガングである、トノガ（以下略字を用ふ）は本年初夏に來た救濟團でF、

S、R、は今饑饉地方の直接救濟を目的としたものであるがト、ガ、は積極的農業發展を計つて露國民を救濟せんとしたのである、

之が目的を以つて約六萬弗の資金を募り五萬弗を以つて廿一臺のトラクトルヲ購求して十一人の農家子が一團となり一切の附屬品を携へて入露したのは去る六月の事であつた一萬弗が彼等の旅費に充てゝあつた、

先づ十一人のト、ガ、の素質から調べると彼等は皆何れも農業の實際家であつてトラクトルを日本農夫が鍬鎌を使ふように容易に使用に馴れたる農夫で血氣旺盛なる人々である、而かも其父兄は皆歐洲北部からの移民で自由國の米國に來り農家生活を爲し其子弟等は最新式の農具を使用し得る資格ある者となりたるが資本主義の米國では小農は大農に小資本は大資本に併吞壓迫されて來た、此等十一名の子弟の家は借金に責められて若しも差引すれば無一文となる割合である、知識あり最新式のトラクトルも使用するも結局は大資本に壓迫搾取せられ來たごとになる。

サテ此等の青年が勞農露國に來て何を感じ又何を爲したか實に彼等に取つて無限の感慨を與へ其前途に光明を見せしめられたのである、卽ち×××××青年に向つて絕大の將來を與ふることである。

彼等無論困難を經驗した、其持參せる廿一臺のトラクトルはパーマ湖に運搬され、鐵道から七十有餘ヴヲルストも持ち行き此處で仕事をするので橋から改善せねばトラクトルを運搬が出來ない。之が組立から薪炭燃料一切の調達等に時日を費し此話を聞きたる時は一ケ月と三日働きで歸來せる司配者の言である此一ケ月餘で五千チエクルを開墾種蒔をなし尙ほ今五千チエークルは來春の春蒔きに向つて耕耘せりとのことである、仕事は其れ丈けで別に面白い事はないが、露國農民に與へた深い〳〵印象と其影響とである、

彼等勞働露國の無知の農民は畑を耕やすに双手か牛馬を用ひ來たので其仕事の進捗は日本內地農民の其と大差はないが、トラクトルで一日數十倍の仕事を爲るので驚かざるを得ない、夢ではないかと耕耘した所を手で障つて見て其事實なるに大喜びをした。

斯くして彼等は村から村へ傳へ數百里の遠方から見物に來た今、迄個人主義で固まり數反數町の小地を得て之を耕耘して他を又顧みざりして彼等も個人主義の耕耘法の非なるを知り一村集つて共同耕作の利益なるを覺りよりより相談して此處に村有のトラクトルを購入せんと決定せる者續出せり、其教育的感化の偉大なるは驚くの外はない、十一人組は此結果に喜び來春は四百臺のトラクトルを米國より輸入する計畫であると無論營業的にであつて慈善ではないレニン氏は之が結果を喜び感謝の公開狀を其トラクトル團長に送り尙ほ進んで全露各區に一個宛のトラクトル、ガンゲを歡迎すべし之が準備を爲すべしと宣言した位いである露國民の勃興は實にスサマシイものである。

大正十一年十一月六日

ペトログラード

ホテル、ユーロッパにて

片山生

讀書欄

本月より本欄を設くる、その意は最近の著書で尤も快心の書一人一書たること、來月より一人二百字以內として可成多人數より推薦する

トルストイの『戰爭と平和』

小泉信三

改造社の問に接して直ぐ念頭に浮んだのは數年前に讀んだトルストイの「戰爭と平和」である。毎日々々と讀み續けてガアネットの英譯で千五百頁許りのものを幾いかの後にやうやく讀み終つたときには一事業を仕遂げたやうな氣持ちがした。勿論玆に論じやうとするのはその文藝作品としての價値ではなくて、此作の中に現れて居る杜翁の社會學的（若し新語を鑄造すれば戰爭社會學的）觀察である。トルストイが本文の描寫中にも卷尾の史論中にも繰返し力説して居るのは、戰爭は帝王元帥がするのではなくて兵士がする、參謀官がするのでなくて前線の戰闘部隊がする、從つて其勝敗は軍司令官及び幕僚の有能無能に由て決しないで、前線士卒の志氣素質の如何に由て決するといふ一事である。已れの立てた戰略通りに軍を指揮しようとする奈翁は失敗して、兵士の趨くまゝに導かれた野將Kutuzowは終に奈翁を國外に驅逐するのである。戰場に臨んで奈翁は、戰闘部隊に向つて刻々に命令を發するけれども、その命令の或ものは遂に其目的地に到達せずに終り、到達した命令の中にも行はれるものもあり、行はれないものもある。而してその行はれる命令は奈翁の命令だから行はれるのではなくてそれが兵士の意志要求に合致するから行はれるのである。

即ち奈翁は樣々の命令を下すけれども、其命令の中で、命令しないでも行はれる事を命令したもの丈けが行はれ、斯くして勝敗が決せられて行くのである。兵士は指揮官の命令に服從して戰ふのではない、戰はせまいと思つて戰ふのである。若し兩軍を相對峙せしめて、而して強ひて之を戰はせまいとすれば、兵士は軍司令官を殺しても戰はずにはゐないだらうと、確かボロヂノ會戰の前後の記述の中に、トルストイは書いて居る。此事を痛切に感じた作の主人公Andrei公爵は軍司令官の幕僚たることを辭して、聯隊長として前線に出て戰死するのである。

此のトルストイの主張は固より極端に失して居る。併し之を議論として聽かないで、精密鮮明な本文の描寫を讀めば彼れの説の眞理なることを認めざるを得ない場合に屢々出逢ふのである。此の指揮命令を不要無效とする觀察を社會組織の上に適用すれば當然無政府主義の結論が生ずる。クロポトキンが杜翁の此作を推賞するのは當り前である。クロポトキンは其「露西亞文學に於ける理想と現實」の中でも「戰爭と平和」を稱揚して居るが、自敍傳でもその西比利亞に於ける六年の行政的經驗に依つて指揮命令といふものゝ如何に無効なるかを覺つた事を記するところで、「凡ての歷史上の大事件（戰爭と雖も亦然り）に於て無名の民衆が勤める役目の如何に重大なるかを私は直接の觀察に由て知ることを得た。而して私もトルストイがその大作「戰爭と平和」の中で、民衆と指導者とに關して云つて居るのと同じ樣な考へを懐くやうになつた。……命令と規律とに基づいて働くのと共同理解に基づいて働くのとの相違が漸く分るやうになつた。前者は閱兵式の場合には役に立つが實際生活の上では全然價値がない一と

云つて居るのである。

私は一の經濟社會の構成原理としては無政府主義を認めないもので、その理由を説明したこともあるが（拙著「社會組織の經濟理論的批評」四二—九二頁）併しトルストイの上記の觀察の中には權力强制の有効の限界なる問題を考へる場合に參考すべき甚だ價値ある教訓が含まれて居ると思ふ。私は今 Heinrich Cunow Marxschs Geschichte-Gesel'schafts-und Staatstheorie を讀んで居るが、此書の中で著者は頻りに國家と社會との異同、其相互の關係を説いて、國家的秩序は社會的秩序を何の程度まで左右し得るか、或はシュタムラアの術語に從へば、法律は經濟を何の程度まで左右し得るかを論じて居るが、此種の問題を論ずるに當つてはトルストイの觀察は興味ある材料を供するものである。改造社の質問を受けて直ぐ「戰爭と平和」を思ひ浮べたのは或は偶々クノウを讀んでゐたからかも知れない。

萩原朔太郎氏の『新しき欲情』

村松正俊

讀者にある自分の好める書物推薦するといふことは、一つには喜ばしいことであると共に一つには非常な危險を冒さなければならない。自分の趣味で他人を律しようとするからである。しかしそれは同時に喜ばしさと危險とを伴ふの故を以つて、やはり自分一個の好みとして推薦することが出來る。

近ごろの文學書は質にその數が多い。私は幸か不幸か、可なりそれらのものを讀んだ。小説、戯曲、詩、評論等を通じて私が讀者にすすめたいと思ふ書籍は無數である。あるものは力に富み、あるものは理智の明晰を誇りあるものは情熱にあふれ、あるものはその技巧が眼につく。しかもそれらのすべてを通じて、私はつひに萩原朔太郎氏の「新しき欲情」を選び出さなければならなかつた。

この書の出版は一つの驚きである。それは詩を以つてやる思想である。しかもそれは思想そのものの表現といはんよりはむしろ思想からにじみ出た感情の味ひを滴らせてゐるものである。あらゆる思想家はその獨斷さの强い點を以つて彼を著名にする。萩原氏もまたその例にもれない。しかも氏は詩人であつた。私は斯くの如き强い思想の生きてゐる詩人を知らない。萩原氏彼自身自ら名をレミ・ド・グルモンに比し、ニイチエに比してゐる。その比較は私を微笑せしめる。さうして氏はつひに日本の詩人思想家に外ならなかつた。

何故にこの書が私を惹きつけたか。私の思想は必らずしも著者に近いとはいはない。しかし私の考へることでは、詩のにほひをもてる思想のひらめきが、私のもてるものと相應じ、それでゐて私の表現と全然反對になつてゐるからである。思想家は詩がなければならない。また詩人は思想を要する。日本の思想界、文學界はあまりに乾きすぎてゐる。この書こそその完全な融合を示してゐるものといふべきであらう。この書は單なる詩でない、また單なる評論でない。それは全く文學的カテゴリのいづれにも入り込むものである。それでゐて充分なる、否、すべての文學書にも優つて、存在の權利を有してゐる。

この本を批評するのに、その思想內容を論ずるのは第一の仕事でない。それはただ感ずべきである。その感ずることによつて思想が充分現れて來るのである。その思想は獨擅のそれでない。また書齋のそれでない。生きたる獨斷である。さうしてその故にて私がこの書を推めやうと思ふのである。

數學に於ける研究の對象に就て

園　正　造

アインスタイン教授が滯在中は到る處で空前の大歡迎を受け彼我共に非常に良い印象を殘し我國を去られましたが之を單なる一時的の御祭騷ぎに終らせずに此機會を利用して、一般民衆に科學思想の普及を計る目的を以てアインスタイン欄を新に設けられたのは時宜に適した思ひつきであると衷心贊成の意を表する次第であります。

本欄は記事の範圍を其名に拘泥して物理學及び之に關連する事項に限らないで數學物理天文から化學生物學に、更に進めて生理衞生から醫學の各方面に及ぼし、又內容も徒に新奇なものに限らず科學の上に於て必須と見られる觀念を說き、最近の研究にかゝる結果を紹介して、社會一般が科學に興味を覺え、之に理解を持つ樣に力めたいとの事でありまして、最初の籤が私に當りましたから何か適切なものをと思つてましたが、生憎餘り激烈に過ぎた寒氣のために元日から寒冒にかゝり臥床靜養につとめましたが今猶ほ不快を覺え從つて精神の集中もつきかねる次第でありまして誠に遺憾ですが、此度は數學に於ける研究の對象とは何んなものであるかを簡單平易に說いて責を塞ぐに止めます。

一

數學では數とか點とか線とかを取扱ひますが、唯一つの數だけを考へては算術も出來ず、たゞ一個の點のみを見て居ては幾何學も成立ちませぬ。そこで數學では數多の數の集合とか又は空間に於ける點線などの集りを考へることゝなるのです。例へば整數論では一二三等の整數全體或はモツト廣い意味の整數の集合を取つて其數の間にある關係を考察します。

數や點に限らず數字で取扱はれる個々のものを元素と云ひます。元素とは何であるかは數學では一般に定義もせず說明もしませぬが、他の方面から云へば純粹思惟の對象に當りませう。多數の元素がある時に之を一括して考へたものを元素の集合といひます。もつと數學的に言へば、有限或は無限に多くの元素の團體があつて、任意にとつた一つの元素に對して之が上の團體の中に含まれて居るか、居ないかを判定することが出來るか或は夫れを判定し得ると假定した場合に、上の團體を集合と稱へるのです。此術語を用ゐると數學に於ける研究の根本になる對象は元素の集合であると云はれます。

一つの集合を作つて居る元素の數が有限のこともありますし、また無限のこともあります。有限無限の區別は、先づ無限の方を定義して之に適しない場合を有限であると云ふのです。甲乙二つの集合に於て、甲の各の元素に乙の元素の各一つ宛を對應せしめ、逆に乙の各の元素に甲の元素の一つ宛を對象せしめる事が出來るときは、此兩集合は同じ濃度を持つて居る、或は互にエキヴアレントであると云ひます。濃度を考へる場合には集合を作つて居る元素の內容に就ては之を不問に附して、總ての元素は同等の資格を持つてゐる集合の一員であるとして二つの集合の元素を對應せしめるのです。いま甲集合として一二三等の整數の全體をとり、乙集合として二四六等の偶數の全體をとつて、甲の一に乙の二を甲の二に乙の四を、甲の三に乙の六をと順次對應して行くと兩集合の元素は餘すところなく互に一つ宛の元素が對應することゝなり兩集合はエキヴアレントであります。此例について見ますに甲集合は總ての整數を含んでゐるから、偶數のみからなつてゐる乙集合を其部分として含んで居り、而も兩者は互にエキヴアレントです。斯の樣に一つの集合が其元素の一部から成立つてゐる集合にエキヴアレントの場合には其集合は無限に多くの元素を含んでゐると云ひます無限でない場合が有限でありまして有限の元素からなる二つの集合がエキヴアレントのときは兩者に含まれる元素の數は通常の言葉で同一となりますが、無限集合については其元素の數とか又は二つの集合が同數の元素を含むとか言はず夫れ夫れ濃度或はエキヴアレントの語を用ゐるのです。無限といふ中にも種々ありまして之を考察したり又は其他集合に就て色々と研究する數學の部門を集合論と稱へます。

二

論理的に數學を組立てゝ行くに當つては、先づ集合の元素の間に相等及不等の定義を與へねばなりませぬ。此定義の立て方は全く我々の隨意でありますが、ただ三つの條件だけは滿足させねばなりませぬ。

（一）各の元素は定義の結果として其れ自身に等しくなり、又甲が乙に等しいときは乙は甲に等しい。

（二）二つの元素は互に等しいか或は等しくないかの一方に限られて居る。

（三）甲が乙に等しく、乙が丙に等しい時は甲は丙に等しい。

此三箇條以外に何の制限のないのでして、今日の數學に於る相當の定義は總て此條件に適して居ます。

次に二つの元素の結合といふことを考へます。例へば二に掛る三は六であると云ふのを形式の上から見ると、二と三といふ二つの數から六といふ數を想定することとです。一般に二つの元素甲乙に對して第三の元素丙を想定する事を甲乙の結合といひ、丙を其結果といひます。二つの元素の結合の仕方は時と場合に依つて色々でありまして一概に何うであるとは簡單に述べられませぬ。結合の種類もたゞ一つには止まらず、加法も一つの結合であり又乘法も是と異つた一つの結合です。玆に注意するのは結合される元素の順序を考へねばならぬことです。普通の算術では二と三の積も三と二の積も同一の結果ですが、一般に結合を考へる場合には甲乙の順序に於てしたときと逆に甲乙の順序に於てしたものと其結果が必ずしも一致するものとは速斷できませぬ。例へば群論に於ては甲乙兩元素の積は甲乙の積に必ずしも等しくないとして進めて行きます。

元素の結合は、例へば二に掛る三が六であるといふやうに、甲乙の二つの元素から其結合の結果が或る法則のもとに導き出されるやうに定義されて居ることもありますが、之に反して玆に一つの集合が與へられてあつて、之に屬する二つの元素は其結合が可能であるといふことだけを假定して推理を進める場合もあるのです。此後の場合には元素の結合に關して若干の公理を設けないと推理演繹が出來ませぬ。此公理の立て方によつて色々の種類の研究對象が出來、從つて之に應じて夫れ夫れの部門に分れるのです。

上の事柄を要約しますと數學に於ける研究の對象は元素の集合であつて之に相等及結合の定義並に結合の法則に關する若干の公理を含んだものです。

既に述た通り元素の相等不等については唯三つの條件さへ滿足して居れば或は何のやうに定めても差支へないのですから、茲に相等の定義と結合に關する公理とで規定された一つの對象があると假定しまして、公理の方は少しも變更せず其儘として、、相等の定義の方だけを變更することが出來ませうか。若し此れが可能とすれば何んな方法でせられませうか。相等定義の變更について、始めに互に等しかつた元素は定義の變更の後にも矢張り等しく、又相等定義變更の後にも各々元素は始めに與へられた公理を滿足するものであるとの條件の下に考へて見ましたが、或種の對象については確かに可能でありまして、之に依て整數論代數學に於て時と場合に應じて色々に定義されてあるコングルエンスの觀念を統一することが出來るのです。詳細は京大理學部紀要第一卷第三號について御覽を願ひたい。

以上述べた所は主として代數學及び解析學の方面の事でありまして幾何學の研究の對象である空間については物理學に於ける空間と併せて論ずる方が面白いと思ひますから、此れは他の機會に讓ることとしました。

三

古來數學の發達を見ても、之を教授するに當つても又之を應用する際にも、先づ元素の集合を考へて之に若干の公理を與へ、元素は此公理の示す條件に從ふといふ以外には何の內容も持たないただの記號であるとし、そして整數のときの公理體系は何れ、有理數のときは何れ、又複素數のときは何うなると一々公理的に數を定義して進みませぬ。其時の便宜に從つて直觀的の內容を各の數に與へて常識的に取扱ひ、之れで別に大きな誤りにも陷りませぬ。種々の研究對象を公理體系で規定して置くのは對象それぞれの成立の基礎を考へたり又夫れ等の間の關係を見るに必要なのは明かですが、**元素を無內容の記號と見做し公理體系のみを認めて數學を組立てるのは、元素に直觀的の內容を與へ或は之に適當**の表はし方を用ゐて常識的に進むのに較べて遙かに困難と面倒を感じます。だから數を取扱ふ部門に限らず何の方面でも公理主義を捨てて元素に適當の內容或は表はし方を與へた方が寧ろよいやうに見えますが、かうは速斷出來ませぬ。

國民の新聞　朝刊 夕刊　家庭の新聞

國民新聞は　國民の新聞にして政黨政派の機關にあらず

國民新聞は　言論の新聞にして輿論を導くの力最も大也

國民新聞は　文化の新聞にして時の問題を取扱ふや絶妙



定價一ケ月壹圓

發行所　東京京橋區日吉町　國民新聞社　電話銀座 七〇七一 二三〇〇　五一〇より 五一七まで

國民新聞は　家庭の新聞にして刊行以來婦人唯一の師友

國民新聞は　青年の新聞にして清新潑溂の氣紙上に溢る

國民新聞は　新聞の新聞にして報導機敏記事最も正確

山川均著

レーニンとトロツキー

定價壹圓九十錢
送料十五錢
四六判上製

忽九版

曠世の大偉人――世界の歴史に一大記錄をつくつた彼レニン、プロレタリアートの爲めに萬丈の氣を吐いた彼レニンは帳中漸く病の篤きを傳ふ、春日遲々として恨長きとき我々は本書を携へて彼レニンの偉業を瞑想してゐる。

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二

中西伊之助作

長篇小説

汝等

定價貳圓廿錢
送料十七錢
四六判布裝

最新刊

ロシアの青年たちは「人民の中へ」と叫んだ、彼等は「汝等の背後より」と叫んだ、果して背後より

數學に於ける研究の對象を規定する公理體系に範疇的と非範疇的の二種があり、之については嘗て雜誌哲學研究に述べた事がありますから此處に再記することを差控ますが、不完全ながら一言しますと、同一の公理體系で定義せられた二つの對象に於て、其一方に或る命題が成立てば之に相當して他の方にも必ず同樣の命題が成立つときに、其對象を規定する公理體系は範疇的であるといひます。之に反する場合即ち一方で成立つ命題の中に之に相當するものが唯一つでも他の方に成立たない時には非範疇的であるといふのです。範疇的の場合には、元素に何んな直觀的の內容を與へても、或は之に具體的の表現をとつても、公理の示す條件にさへ適して居れは、與へられた內容に附隨する特別の性質といふものが決して現はれて來ない、從つて元素のとつた內容の如何に拘はらず常に同一の結果が得られるのです。整數有理數實數複素數並にユークリッドの空間は範疇的に規定されますから、此等のものは夫れ夫れ直觀的の內容或は適當の表はし方をとつて取扱へばよろしいので所謂公理主義に從ふ必要は餘りありませぬ。併し之に反して非範疇的の公理體系で定義された對象については元素に或る內容を與へると之に附隨した特別の性質とか命題が生じて來ますから、全體に通ずる一般の性質を知るには何うしても元素を公理の條件を滿足する以外に何の內容も持たない記號として推理演繹せねばなりませぬ。故に此場合には研究が總論と各論とも稱すべき二つに分れまして、前者に於ては元素を無內容の單なる記號とみて公理から演繹して一般に通ずる性質を論じ、後者は元素に色々の內容を與へて之に附隨する性質を說く事となるのです。例を擧げますと群や環は非範疇的の者でありまして其研究も右に述べた二つの方面に分れて居ます。

以上を要約しますと、數學に於て取扱はれる研究の對象は元素の集合であつて、之に相等及び結合の定義並に結合の法則に關する若干の公理で規定されたものです。此れから推理し演繹するに當つては、範疇的ならば元素に便宜適當の內容を與へて進めばよろしいが、之に反て非範疇的の場合には元素に或る內容を與へると之に附隨して特別の性質が現はれることに注意すべきであります。

公理の立て方は何うであるか又は之れから何んな方針で演繹して數學を組立てるかなどについては他日稿を更めて述べたいと思ふひます。　（一九二三、一、一二）

アインスタイン博士答辯

一、宗教問題に對して

一、科學的眞と宗教的眞とは異つた立場に立つとお考へになりますか。

二、この兩者は相容れるでせうか。つまり科學的發見は宗教的信仰を改正し迷信を除外し得るでせうか。何故ならば宗教感情は科學的發見に對して衝突を起すことがあり得ますから。

三、「神」についてどんな概念をお持ちですか。

四、「救世主」についての御意見はどうですか。

右四項は我國の或る宗教家であり、科學者である人からの質問にかかる、それに關して博士は左の如く答へた。

足下

一、「科學的眞」なる言葉に明らかな意味を與へることは既に容易ではありません、「眞」なる言葉の意味は、それぞれ體驗事實、數學的定理、若くは自然科學的理論に關するに從つて異つてゐます。「宗教的眞」なる言葉のもとに私は然ら判きりしたことを自分に考へることは出來ません。

二、科學的探究は因果的思想並に普遍觀の要求によりて迷信を減らすことは出來ます。宗教感と連關せる理性の或る確信若くは世界の概念性がすべての精緻な科學的研究に根據となつてゐることは確かです。

三、經驗し得る世界にあらはれる一つの思考的理性のその確信は深い感情と結びつけられて、私の神概念を形づく

ります。これを別に云ひあらはせば「汎神教的(パンテイステイツシユ)」(スピノザ)とも名づけられます。

四、贖罪の信條を私はたゞ歴史的に且つ心理學的に見なすことは出來ます。私は之等に對しその外の何の關係をもちません。

親愛なる會釋をもつて

アー・アインスタイン

二、社會並に政治問題に對して

又博士は日本プロレタリア同盟の人々の社會及政治に關する質問には左の如く答へた。

足下等、

あなたがたのお手紙へのお答へがこれまで出來なかつたのは、お手紙と宛名とを私が失くしてしまつたからです。今山本氏から宛名を再び貰つたのでお答へしやうと思ひますが、お尋ねを詳しく思ひ出すわけにまゐりません。

最初にお斷りしなければないことは日本の社會的並に政治的事情についての私の觀察は余りに乏しくて、自分にも或る判斷を信頼し得ない程であるといふことです。私は第一の點に關しましては、一見適合しないやうな二つの事がらを見ました。それは眼立つた貧困と逼迫との缺けてゐることと、そしてそれにも拘らず他ヶに大部分家庭勞働であるところの手内職の恐ろしく廉いことです。この謎の解釋として私の推察するところでは、人間の慾求の少ないこと、その生活方法の適切なこと、その外特に酒精に對する節制に依るのではありますまいか。それはどうあらうとも、ともかく私は、この國の工業化が進んでゆくことや、又政治的の形勢から勞働階級の組織が必要になつて來ることを信じてゐます。

この組織が全體に對して希はしきものたらしめんとするならば、それを、長い間私たち歐洲に於て起つてゐたやうな、反對せんが爲めの意地惡き反對者に陷れてはなりません　特別に意識しなければならない事情は、家庭勞働賃銀の低廉の主因がこの國の人口過剩に存在してゐて、從つて純粹に政治的な方法では除去せられないと云ふことです。これに反して私に純粹の政治的問題と思はれるのは軍國主義に對する爭鬪です。これが私の意見ではこの國に對しての實際の危險です。日本は僥倖的にもその地理的位置のお蔭で只僅少の軍事的保護機關を要するだけなのですから。ワシントン會議は之に對し幾らか希望を繫ぎ得る最初の機會をつくつたものです。私は、將來に於て國民的努力が國際的協力並に組織に結びつけられて、決して軍事的企畫には結合しないであらうことを確信します。日本もそれ自身のために、且つ世界諸國のためにこの點から結論を引き出して欲しいものです。

特別の尊敬をもつて

アー・アインスタイン

Antwort über Religionsfrage

Als man Professor Einstein um seine Meinung über Religion bat, hat er auf nächstfolgende Fragen untenstehende Antworten erteilt:

1) Denken Sie, dass wissenschaftliche Wahrheit und religiöse Wahrheit auf verschiedenem Standpunkte stehen?
2) Fördern sich die Beiden, das heisst kann die wissenschaftliche Entdeckung den religiösen Glauben verbessern und Aberglauben beseitigen, weil das religiöse Gefühl zur wissenschaftlichen Entdeckung Anstoss geben kann?
3) Welchen Begriff haben Herr Professor über "Gott"?
4) Wie ist die Meinung des Herrn Professor über den "Heiland"?.

1) Es ist schon nicht leicht, mit dem Wort "wissenschaftliche Wahrheit" einen klaren Sinn zu verbinden. So ist der Sinn des Wortes "Wahrheit" verschieden, je nachdem es sich um eine Erlebnistatsache, einen mathematischen Satz oder eine naturwissenschaftliche Theorie handelt. Unter "religiöser Wahrheit" kann ich mir etwas Klares überhaupt nicht denken.

2) Wissenschaftliche Forschung kann durch Förderung des kausalen Denkens und Überschauens den Aberglauben vermindern. Es ist gewiss, dass eine mit religiösem Gefühl verwandte Überzeugung von der Vernunft bezw, Begreiflichkeit der Welt aller feineren wissenschaftlichen Arbeit zugrunde liegt.

3) Jene mit tiefem Gefühl verbundene Überzeugung von einer überlegenen Vernunft, die sich in der erfahrbaren Welt offenbart, bildet meinen Gottesbegriff; man kann ihn also in der üblichen Ausdrucksweise als "pantheistisch" bezeichnen (Spinoza).

4) Konfessionelle Traditionen kann ich nur historisch und psychologisch betrachten; ich habe zu ihnen keine andere Beziehung.

時評

樞密院と內閣との葛藤

室伏高信

樞密院と內閣との問題はたゞ樞密院と內閣との問題である。如何なることがこの兩者の間に起つてもいゝ。この兩者だけの問題である。兩者の間に勝手に議論、陰謀、排擠、妥協若しくは上奏も用ゐられるがよい。それが彼等の仕事なのだ。それが「國家」のためなのだ。彼等のためが國家のためなのだ。國家のためが彼等のためなのだ。國家と彼等とは完全な一體である。だから彼等は常に「國家のため」に働いてゐる。國家のために働いてゐさへすれば金もでき、爵位もでき、權力ももつてゐられる。國家のためとは自己犧牲ではない。自己犧牲は國家の犧牲である。自己犧牲は彼等のすることではない。平民のすることである。「非國家」、非國民のすることである，彼等は國家である。彼等だけが國家である。山縣公が生きてゐた時は山縣公が國家中の國家であつた。山縣公が死んでから國家が內部的に××した。小國家と小國家とが爭ふようになつた。樞密院も一つの小國家である。內閣も一つの小國家である。政友會も研究會も一つの小國家である。小國家間の爭ひには決定者はない。妥協か、でなければ上奏のほかにない。樞密院は內閣と覇權を爭つて上奏した。覇權と覇權との爭ひである。小國家と小國家との爭ひである。だからその爭ひは「彼等の」爭ひである。「神聖なザアへは神のザアへである」。國家の爭ひは彼等の爭ひである。われ〲はたゞ傍觀してゐればいゝ。どちらが勝つても負けてもいゝ。できることなら彼等が大に爭ひ疲れて共倒れになればいゝ。

樞密院が內閣に干渉するのが間違ひだと云ふ議論がある。內

閣の側から見ればその通りである。樞密院の側から見ればその逆である。第三者の側から見ればどちらでもない。樞密院が無責任の機關だと云ふことには勿論私にも異議はない。だが内閣だつて同じことではないか、内閣は何ものに對して責任を負ふか。國民に對して責任を負ふなぞと云ふのは煽動政治家の××である。彼等の國民とは政友會ではないか。政友會のほかの何ものでもないではないか。内閣が政友會に對して責任を負ふとしたら政友會にとつては好都合であらう。政友會は主權者であらう。しかも同時に政友會以外のものは非國民の地位に落されるではないか。政友會に責任を負ふことは非政友に對して無責任だと云ふことではないか。

樞密院の權限の尨大だと云ふことも事實である。日本の樞密院のような不可思議な機關は世界のどこにもないことだ。しかしそれも日本のように××批准しなくてはならない。裁可と批准のために一つの機關が必要である。機關が存在する以上それもたゞ目をつぶつてゐるわけにも行くまい。如何に樞密院は老朽の政治家や學者の集會所だとはいへ物も言はずに月給を只取りするわけにも行くまい。時々は内閣彈劾も結構である。樞密院でもやつてくれなくては今の内閣を彈劾するものがない。上院では多數無能の研究會が、下院では多數横車の政友會がグルになつてこの内閣を擔ぎ廻つてゐる以上この内閣を彈劾する法律上の機關は××してゐるわけである。この時に樞密院が内閣を彈劾したとて別にいゝことでもないが惡いことでもない。われ〱は樞密院の尻馬に乘ることもないとゝもに内閣の宣傳に乘せられて騷ぐにも當らないではないか。

樞密院が内閣を彈劾するのを默視するのは惡例を將來にのこすものだとの說がある。それは政友會にとつても憲政會にとつても所謂政黨内閣を組織して一つの政黨獨裁をやらうとするものにとつては惡例を將來にのこすものであるに相違ない。それにもかゝわらず目前の利益につられて憲政會の政治家連が樞密院の尻馬に乘つて反内閣運動をしてゐるのは愚かでもあり卑しくもある。が此邊が政治家の僞らざる自己告白だともいへる 何れにしても一つのお家騷動である。惡例はお家の中の惡例である。お家の外にゐるものにとつては惡例でもなく善例でもない。

外交上の問題もかゝわりがあるであらう。樞密院は對外硬を代表する。樞密院の方がより多く「愛國的」である。政府の方は世界の鼻息を覗つてゐる。より少く愛國的である。だから樞密院は攻勢的で内閣は防禦的である。しかし内閣は世界の

を窺ふのは世界平和のためでもなく、自己放棄の道德的政策でもない。假面をかぶつて英米の狡猾外交家並みに巧みに帝國主義侵略主義の素論を實行しようとしてゐるまでである　そして外交官の腕がにぶくて思ふに任せないと云ふまでゞある。帝國主義であり、對外侵略であり、「愛國」であるの點では決して樞密院と異るところはないのである。こゝにおいて日本は安全である「愛國者」が政界に滿ちて日本國民は安眠ができる。騷ぐことはない。安心のできないのは日本ではなくて支那である。若しくはロシヤである　從つて騷ぐべきは日本人ではなくて支那人であり、ロシヤ人であるべきである。

私たちは實に幸福な國に生れた　私たちは政治の患ひから遠ざかつてゐることができる。私たちには政治はない　政治は「彼等」のものである。私たちはだまつて見てゐればいゝ。見てゐなくてもいゝ。私たちの政治はたゞ「彼等」を全體として見る時に存在する、「彼等」と對抗する時に存在する。彼等が彼等であることを意識して一團となるの時があるであらう。その時は私たちが私たちとして自然に一團となるの時である。意識的な一團の政治及經濟人とが無意識的な他の一團の非經濟非政治人との對抗がきたるであらう。それが私たちの「政治」の初めであり、また從つて終である。

巴里會議の決裂

山川　均

一

一九二三年の歐羅巴は新年第一日から、ローザンヌ會議にはモズールの石油のかゞりが今にも焰を出して燃え上りかけてゐた。そして巴里會議では、石炭がいぶりつゝあつた。石油と石炭とは、資本主義を動かす第一の動力である。石油と石炭との焰は、資本主義の歐羅巴を燒き盡すには、決して不足のない火力である。

ヴェルサイユ平和條約は、世界のデモクラシーの爲だとか、民族自決だとかいふブルジョア政治の僞善と假面とを取り去つて見れば、比類の稀れな征服主義の條件であつた。即ち資本主義的帝國主義の勝利者が、戰敗者に對して銃劍の先きで命令した征服的の條件であつた。それは獨逸の軍國主義が武裝を解いた露西亞に强課した、ブレスト・リトウスクの講和條約と均しいものであつた。戰後の歐羅巴は、決してこの征服的條件の下に甦へることは出來ぬ。歐羅巴が若し生き永らへるとしたならば、ブレスト・リトウスクの條約が反古となつたように、ヴルサイユ條約は反古籠に棄てらる可き運命をもつて居る。そして事實に於て、ヴェルサイユ條約は最早や一片の反古となつて居る。この初から分り切つた事柄を學ぶ爲に——乃至は學ばぬように勉める爲に——過去四年の間、歐羅巴のブルジョア政治家等は絶え間なく討論會を開いて來た。昨年末の倫敦會議の續きである今度の巴里會議も、矢張り同じ學課の復習をする爲であつた。

そこで倫敦會議が何等の解決をも得ないで巴里會議に持ち越されたことは、資本主義的征服と歐羅巴の經濟的復興と云ふ、兩立すべからざる二つの事實が、共ま丶に本年に持ち越されたことを意味して居る。

二

この巴里會議は僅か二日で決裂した。英國の利益は獨逸を活かすことである。英國の資本は、獨逸の鷄に黄金の卵を産ませようとする。英國は其の卵が、當然自分の籠に這入つて來ることを知つて居る。そして佛蘭西によつて今ま此の鷄が絞め殺されることは、黄金の卵を失ふ所以であるばかりでなく、競爭者たる佛蘭西を、歐羅巴大陸に於ける支配者たらしめることを意味して居る。佛蘭西はその正反對である。佛蘭西には卵を持つだけの餘裕はない。彼は鷄を殺しても、即時に其肉を食はねばならぬ。

英佛の利害の相反してゐたことは、今日に初まつたことではない。唯だ姑息な妥協によつて、兎も角も今日までは糊塗せられて居た。また今日までは、尙ほそれだけの餘裕が存してゐた。ところが今度の巴里會議では、双方の態度は從來にないほど明白であつた。英國の態度にしても、初めから會議の決裂を豫期して居つたかの觀がある。之は歐羅巴の實際の形勢が、それだけ切迫して來たことを意味して居る。

斯くて三日目に會議が決裂すると、佛蘭西は獨逸が石炭の引渡しを怠つて居るのは、故意に賠償條約を履行せられたものだ

といふ口實の下に、又候、ルール地方の軍事占領を云ひし出た。六日にはマンハイムの上空を佛蘭西の飛行機が飛んだ。八日には千五百の佛國兵がチュッセルドルフに到着した。馬克は暴落した。十日には佛軍の前衛はミュールハイトに入らうとし、伯林政府は巴里及びブラッセル駐劄の大使に引揚げを命じ、ポアンカレーはライン駐屯軍に、同日午後十二時を以て進發すべき命令を出した

二た口目にはルールの占領々々といきり立てるのは、由來佛蘭西の口癖であつたから、今度も佛蘭西の眞意は疑はれて居つた。しかし今度といふ今度は、佛蘭西もどうやら腹を据え、愈々多年の宿地たるルール地方の占領を決行するらしい。

之に對して獨逸政府では、差當り軍事上の對抗をしようとは思はれぬ。しかし佛蘭西のルール占領は、伯林政府の意志がどうあらうとも、事實上、佛獨の交戰狀態に發展する恐れは充分ある。その結果は知るべしである。今、佛蘭西の武力を以てすれば、獨逸を押し潰すに譯はない。しかし獨逸を押し潰した時、このびつくり函の中から何が飛び出すであらうか。歐羅巴に於ける反動主義の盟主たる佛蘭西に取つて最も恐ろしいもの――社會革命――が顏を出すだらう。

獨逸に社會革命の起る時は、伊太利に於ける社會的勢力の天秤がはね返へる時である。そして佛蘭西も最早やポアンカレー氏の佛蘭西ではないだらう。

今日の巴里電報は、佛蘭西政府は、ルール占領を機會に、世界革命を畫策して居つた六名の共産黨員を逮捕したと報じて居る。佛蘭西のルール占領が、若し全歐羅巴の革命の發展したとするならば、その第一の功勞者は共産黨員ではなくて、歐羅巴のブルジョア政治家、就中ケー・ドルセーのブルジョア代辯者であることを忘れてはならぬ。

賀川豐彦三名著

星より星への通路

四十五版

愛の結晶とまで稱せらるゝは賀川氏である。現代の荒みに荒める精神界を根こそぎに革命せんとする著者の鋭き血の迸りは詩となり、歌となり文章となり遂に本書となつた、定めし又讀書界を賑はすであらう。

死線を越えて

（二八二版）

定價參圓
送料十九錢

太陽を射るもの

（一八二版）

定價貳圓八十錢
送料十九錢

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二

島田清次郎著

革命前後

定價壹圓六十錢
送料十七錢
四六判上製

第八版

豪宕の才筆に鳴る島田氏の傑作「大化維新」の裏に潜める鎌足と遠智姫との殉情的戀愛を題材とし、革命の裡に此種の情劇が芽生ゆる徑路を稠やかに織り出して若き人々の心胸に一つの炬火を投じた。

小說

勝利を前にして

島田清次郎著（十二版）

定價貳圓四十錢
送料十九錢

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

中澤臨川著

嵐の前

誰でもかゝる氣高き情熱の戀と愛は持たまほし、ニイチエの戀に憧憬するのは我が臨川のみではあるまい。

拾五版

東京 芝 愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

定價金貳圓
送料金拾六錢

中澤臨川著 ◇四六版◇上製函入◇定價金壹圓八拾錢◇送料金拾五錢◇第六版

電子說から見た世界

臨川の論壇に於ける盛名は誰知らぬものもない、しかも彼の志業は又別天地を有す、彼は本來東大工科の出、本書は彼が生涯中の最大快心の作と稱せらるる電子說より見たる世界觀の長篇を收む。詩より科學に入り美文を以つて理學を說きたるは本書を以つて嚆矢とす、量子說、相對性、原子、電子論、熱、エネルギー、X光線、飛動說、等が何人にも了解さるる樣に說きたる有益な書、本書は「新社會の基礎」が一ケ年半も品切であつたのを改訂したものだ。

東京芝區愛宕下町一ノ一

◇改造社◇

振替東京八四〇二番

片山潛著

自傳

第五版

世界人として堅剛鐵の如き意志と、熱火の如き情熱を以つて知らる〻彼は、露國では大臣を以つて待遇ざれ、極東共産黨及革命黨大會に於ては議長に擧げられ今回亦たウレーナー、スコツト等老雄の上に立つて、南北全米の第三インターナショナル總指揮官に推擧された、此の世界人がレニンと並んで嵐の如く雄飛する颯爽たる英風下にも此の如き涙ににじむ思出がある。

定價壹圓八十錢
送料十七錢
四六判上製

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四二



戯曲

石山開城記

——四幕六場——

長田秀雄

人物

本願寺門跡　顯如光佐
長子、新門跡　教如光壽
次子、、脇門跡　興正寺顯尊
三子　阿茶丸
北の方　教光院（如春尼公）
上席家老　下間刑部卿法橋頼廉
家老　同、按察使法橋頼龍
奏者　同、少進法橋仲之
連枝　願得寺實悟
同　河内顯證寺覺淳

常樂寺超乘	同、（御鑰取り役）
教光寺證誓	同、（御鑰取り役）
栗津源六季遠	本願寺重臣
矢木駿河守光直	同
平井越後守宗成	同
大多和惣兵衛元直	毛利家の侍
鈴木孫一持久	雑賀門徒の首領
黑丸の光玄坊	北國大一揆落人
願證寺華亮	伊勢長島一揆落人
蘭菊丸	本願寺小姓
町人宿老三名	大阪庄屋
おさめ	教光院侍女
隻眼の武士	（姓不詳、大與殿と呼ばれる
近衞前關白前久公	勅使
庭田大納言重保卿	同
勸修寺中納言晴豐卿	同

宮内卿法印　　織田方の使者
佐久間信盛　　同

その他、一門の坊主衆、武士、侍女、法師たち、門徒一揆の農民、野武士、など大勢。

時代――天正八年閏三月三日より同十年、六月三日まで。

場所――大阪、石山本願寺と、紀州鷺の森別院。

序曲

天正八年閏、三月三日の夜。

大阪石山本願寺の祖師堂に於て、門跡、顯如光佐が、和議の大評定を開いてゐる。正面に祖師の骨肉の御影を納めた大龕が内陣の奥ふかくかざられてゐる。

顯如光佐、願得寺實悟（九十才にあまる老僧）常樂寺超乘、顯證寺覺淳その他の連枝、下間賴廉、同仲之の一家老をはじめ、平井越後、矢木駿河、鈴木孫一などの重臣たちが綺羅星のやうに並んでゐる。

仲之。（一同を見廻して席より進み出で）御召によりまして、一同罷り出でまして御座ります。（平伏する）

光佐。敎如は如何いたした。まだ、見えぬやうぢやな。

仲之。御意に御座りまする。新門様、教行寺殿、按察使法橋、粟津源六などいまだ参られませぬ。

光佐。教如は今宵の評定に欠けてはならぬ。先刻つかせし大鐘の響が聞えぬ事はよもあるまい。如何いたしたのぢや。

仲之。先刻よりお待ちしておりますがあまり新門様の御出が隙どりまするゆゑ、只今、召使の者を北の御所へつかはしましたるところ、教行寺殿、按察使法橋など相詰めて、密々何事か御談合あらせらるゝ最中と申す事で御座りました。

一座緊張する。

光佐。勅使には明朝奉答の手筈ぢや、今宵はどうあつても、此石山立退の議をまとめねばならぬ。和議についての大阪町人の意向をたづねるため、召出たる宿老たちの参るも、もはや、間もあるまい。仲之。今一度、使を教如の館につかはせ。

仲之。かしこまりました。（退場。）

光佐。常樂寺。

超乘。はつ。

光佐。御龕の扉をお開き申せ。

實乘。はつ。（立上つて、大鑰にて、正面の大龕の扉を開く。）

世に骨肉の御影と呼ばるゝ、親鸞上人の影像が、燈明の光に照らされて、仄かに現はれる。

光佐は龕の前に進み、合掌禮拜する。

一同合掌。

光佐。（我座に戻る。）さて、昨夜の評定をつゞける前に、そちたちに一言申しきかせる。それは餘の儀ではない。昨日、禁裡より勅使として近衞前久公、庭田觀修寺の三卿が、再び、參られ、此度、織田右府との和議とゞこほりなく相濟み、禁裡に於ても祝着至極と思召さるゝとの御綻を玉はつた次第は、既にそちたちも承知いたし居る事ぢや。（一同頭を低げる）ついては、とてもの事に、この石山を立退かれたならば、織田右府に於ても定めし滿足に思はれ、和議も末長うつゞくであらうとの勅書にそへて、近衞公よりこまごまと御話があつた─所詮本願寺が、この石山を立退くか、退かぬかによつて、和戰いづれともなると云ふところが、あの勅書の眼目ぢや。あくまで石山退轉に異議をとなふる教如の心ばえは、十一年前、初めて織田殿と戰ふた頃のわれらの心ぢや。浮世の辛勞を知らぬ乳くさい考ぢや。教如一味の教行寺も賴龍も、軍にかけては豪の者と云はれやうが、心が練れて居らぬ。云はゞ一徹者ぢや。昨夜のやうに雙方意地を立てゝ論戰いたしたならば、今宵もまた小田原評定に終らうぞ。

賴廉。いかにも門跡樣仰せのとほり、この論戰は、何時までたつても、まとまる筈は御座りませぬ。併しながら、毛利家よりの糧道をたゝれし日下の窮境で、無謀の戰をつゞけますれば、宗門の滅亡は目前で御座ります。成程新門樣仰せの如く、この石山を退轉いたすは、御開山慧燈大師さまに對しても相濟まず、かつは、當寺の最初よりの言分を失ふ道理では御座りまするが、兵糧米もかくの如く殘少ない有樣で御座りまする上、門徒衆いかに猛くとも、十一年にわたる難戰にもはや倦みあぐねて居りまする。

光佐。そちの云ふとほりこの上の合戰は、もはや無益ぢや。併しながら、教如一味の者どもをかへりみず、このまゝ和議を進むる譯にもゆかぬ。そこで、昨夜より、とくと考へた末、やうやう案じいだした方略がある。それをそちたちにきかするぞ。（一同頭を低げる。）即ち、只今教如が參つたならば、なほ一應理解をといてみて、彼ら一味の者ども

が、承服すればよし、さもない時は、教如を勘當いたすつもりぢや。
　一同動揺。
賴廉。御勘當と仰せられまするか。
光佐。いかにも、久離切つて勘當ぢや。父としては、まことに忍び難い事ながら、宗門のためにはやむを得ぬ。
覺淳。門跡の仰せ、容易ならぬ宗門の一大事と心得まする。只今、法敵天下に充滿いたし、當寺を十重廿重に取りかこみ居りまする際に、御父子の間、さやうの事と相成りますれば、折角門徒衆決死の勇氣もにぶり、織田右府をして漁夫の利を得せしむる事になるで御座らう。此處はよくよく御分別が肝要で御座るぞ。
賴廉。顯證寺樣の仰せ至極と存じまする。かゝる大難の時にあたりまして、御父子の御不和は決して宗門のため御一門のため、目出度い出來事では御座りませぬ。恐れながら、その儀は今一應御熟慮遊ばすやう、ひとへに御願いたしまする。
平井越後守。顯證寺樣、刑部殿の御思案のとほり、何さま、宗門の一大事と心得まするゆえ、末席をもかへりみず、我我一同よりも御願いたしまする。（一同頭を低げる）
光佐。我らとて、それ程の事を考へぬではない。つくづく天下の有樣を思ひめぐらし熟慮に熟慮を重ねて［し上］の方略ぢや。
覺淳。新門は當流の嫡々、殊に利發の生れで御座る。宗徒の大將たちの内にも、門徒衆の内にも、新門のためには命も惜むまじと思詰めた者が數知らず御座る。この石山の法戰十一年の間にわづかに二度より敵に退けを取らぬは新門の軍略よろしきを得たゝめかと、憚りながら、愚僧は思案いたす。かの織田右府はなかなかの曲者で御座れば、たと

へ、門跡右府の思惑どほり、この石山を退轉さるゝとも、機をみて、如何なる難題を持ちかけるも知れませぬ。いま、新門御勘當あらば、その時にいたつて後悔臍をかむとも、もはや及ばぬ沙汰と相成りまする。

光佐。成程、一理ある言葉ぢや。そのやうな時が來やうも知れぬ。その時こそ、この光佐が「骨肉の御影」を奉じて、縣命の戰をいたすわ。宗門一大事とあらば、日本全國の門徒衆が、何事を於いても走せ集つてくれるであらう。

超乘　祖師親鸞上人は、御子善鸞を御勘當遊ばしました。また、三代覺如上人は、存覺と義絶されたと承はりまする。されど、これは御宗旨に異說を立てられた爲—即ち教義の上の解釋にもとづいたもので御座る。

光佐。待て、常樂寺。なる程、御先祖お二方が、その子を勘當遊ばされしは、そちの云ふとほり、教義の上の異說を許し難く思はれたからであつた。然るにこの光佐は、さやうな宗門の義理からではなく、たゞ、この石山退轉を肯んぜぬが故に彼を勘當する——そちはそれを申すのであらう。

常樂寺。さやうで御座りまする。

光佐。その儀ならば、無益ぢや。もはや申すな。

常樂寺（色を作して）無益と仰せられまするか。

光佐。いかにも無益ぢや。われらは宗門の義理にも、石山の退轉にも、一向、差異を認めぬ。今日目前の大事は石山の退轉ぢや。わが淨土眞宗門の教義が未だ固まらぬ内は、義理の上の爭が一大事であつた。然るに、今以つて、ひたすら教義の爭を尊しとするは、詮ずるところ、古になづんだ議論ぢや。（實悟の方を向く。）願得寺。慧燈大師の御子息の内で生殘つて居らるゝは御身一人ぢや。この儀についての御身の思案は。

實悟。（笑ふ。）いや、格別よい思案も浮び申さぬ。新門が參られて、談合さるゝ内には、何か思付くかも知れませぬわい。

光佐（しみじみと　常樂寺。血を分けた子供の事ぢや。われらとて、決して喜んで勘當はいたさぬわ。

超乘は頭を低げる。

下間少進仲之が出てくる。

仲之。使では埒のあきかぬる事もと存じましたゆえ、某直々に北の御所へ參上いたし、新門樣をおつれ申しました。

光佐。御苦勞であつた。

敎如と敎行寺證賢、下間按察使法橋頼龍、粟津源六らが入來る。敎如以下の人々はまづ骨肉の御影を拜して坐につく。

敎如。（光佐の方を向いて）評定の時刻に遲れまして、申譯も御座りませぬ。（一禮する）

證賢。我々一同よりも、遲刻の段御詫を申上げまする。（一同頭を低げる。）

光佐。勅使の方々へ明朝までに御返事いたさねばならぬゆえ、今宵は是非とも和戰何れにか決せねばならぬ。然らば早速ながら評定に移るといたさう。（間、一同の顔をづらりと見廻して）さて、此度の事はわが淨土眞宗門の法流に取つては、未曾有の大難である。即ち、今宵は宗祖上人樣にも、御同席を願つて、愼重に談合いたすために、この祖堂に集つて貰ふたのぢや。

一同頭を低げる。

頼廉。（座を進めて）只今、門跡樣仰せの御趣意に從つて、評定にうつりまする。昨夜御詮議を願ひましたる禁裡御勅書の件で御座りまする。皆樣も御存じのとほり、昨夜は遂に論戰と相成り、三更に及んでも、石山退轉の可否、何れとも定まりませんで御座りました。云ふまでもなく、これは當山草創以來の一大事で御座りまする。なかなか一朝一夕

に定まるべき事柄では御座りませぬ。そこで、引續いて今宵も御詮議を願ふ次第で御座りまする。門跡樣御演舌のとほり、明朝を以つて勅答の手筈になつて居りまするゆえ、何としても、今宵は御評定を終らねばなりませぬ。よろしくその邊の事をお含み願ひまする。

證誓。(突如として)刑部卿にたづぬる議が御座る。

賴廉。何事に御座りますか。

證誓。いや、餘の儀では御座らぬ。そもそも此度の石山退轉の儀は、恐多くも禁裡に於かせられて、深かく宸襟を惱され、勅使を以つて匆々和議取計らふやう仰出されしに初まる。もとより一天萬乘の君の勅に反き奉るは、臣下として不忠のきはみで御座る。さりながら、事の次第を深く慮かりみるに、石山退轉の難題は、法敵、織田右府がひそかに禁裡に手を廻して、勅書を强請いたせしかと思はるゝ節が御座る。いや、われらよりつかわし置きたる間者が戻つて參つて、密に織田右府より勅書降下につき、伏奏せし仔細をつぶさに物語り申した。織田右府と不和におはす前關白近衞公を、勅使と共に下らせしは、その謀を知られぬための手段かと愚考いたす。即ち、只今、この石山を退轉すれば、むざむざ敵の術中に陷る道理――この邊の思案、訊ね申す。

賴廉。成程、敎行寺殿仰せのとほり、この度の勅書は、或は織田右府のからくりかも知れませぬ、さればと申して兎もかくも叡慮より仰せいだされし儀に、もし異論をさしはさみ申さば、違勅の罪を云ひたてられ、右府の思ふつぼにはまり申すで御座りませう。兎角、織田右府は、日本一の曲者で御座りまする。かやうに幾重にも張られた網をのがるゝためには、餘程思慮なくては叶ひませぬ。

證誓(怒りて)愚僧には思慮なしと申すか。(つめ寄る。)

賴廉。これはしたり。何でそのやうな事を申しませう。たゞ某は右府の腹の黑さを、心に思ふまゝに申上げただけで御座りまする。

敎如。敎行寺。ひかへられい。父上の御前で無禮で御座らう。

光佐。敎行寺。やはり短氣はやまぬと見ゆるな。

證誓。（赤面して）何とも恐入りまする。

敎如。父上に申上げまする。

光佐。何ぢや。

敎如。只今、敎行寺が述べました當寺退轉の儀につきまして、昨夜御評定の果てますると共に、同心の者ども、私館（わたくしやかた）に引上げ、只今まで、さまざま思案を重ねましたが。何はともあれ、この際、當寺の動座は、私ども一統不承知で御座りまする。また勅諚の儀につきましては、敎行寺の申述べまする通り、右府の謀（たくみ）たる事は、もはや一點の疑ひも御座りませぬ。只今、刑部は違勅の罪を云立てゝ右府が必ず攻めて參るであらうと申しましたが、畏多い事ながら、眞實の叡慮ならぬ勅諚といたしますれば、敢て、恐るゝ事も御座るまいと思はれまする。當今の帝に於かせられましても、本願寺の忠節はよく御存知かと思はれまする。即ち一旦違勅の罪をうけても、わが法門を堅固にかたむるが、我らの取るべき途かと憚りながら思案いたしまする。

光佐。然らばそちに問ふが、もし、織田右府が違勅の罪を眞向に振りかさして、大軍を持つて攻めて參つた時は如何いたすつもりぢや。

敎如。その時こそ、某、門徒衆をはげまして、一心不亂に戰ひまする。織田勢、いかに猛くとも、念佛に凝りかたまつ

た門徒衆の必死の矛先には手向ふ事は叶ひませぬ。

光佐。（冷やかに）門徒衆の信心にこり固まりたる力は、もはや十一年の籠城によつて、よく分つて居る――併し、長籠城の果ぢや。さすがの勇士たちも、疲れはてゝしまふたのが、そちには見えぬかのう。

教如。たとへ、いかに疲れはてゝ居りませうとも、一旦法敵に立向へば、忽ち、勇氣日頃に百倍して、生死を忘るるのが、門徒の習で御座ります。

光佐。それ程の事は、弱年者のそちに習はいでも、われら、よう知つてある。これまでの長籠城にあたら門徒の生命を失はせた數をどれ程と思ふか。われら、それを思へば、あまりの罪深さに、夜もおちおち寢まれぬ程ぢや。

教如、これは異な事を承はりまする。今、海内は麻の如く亂れて、王法光を失ひ、下より上を剋する末法濁世の有様で御座りまする。當流は、御先祖の上人以來、屢危ふきに瀕して、或時は寺領を掠取られ、またある時は危難身に及び、忝なくも門跡の御身を以つて、悪徒の兇刄の下に立ち玉ふた事も御座りまする。即ち、信心の門徒たちが當流宗門擁護の爲め、降魔の利劍をふるつて、法敵に立向つたのぢやと、幼少の折より、父上の御教を受けて居りまする。

光佐。然らばあらためて云ひきかす。この本願寺が降魔の利劍を取つて立つたのは、兇悪無慘の法敵のために宗門の斷絕せむ事を恐れたからぢや。窮地におちゐつて、已むを得ず、身をまつたうせむが爲ぢや。決して、無辜の門徒衆の尊とい血潮を、無益に流すためではないぞ。

教如、いま、法敵の張本信長の憎むべき陰謀により、當流の總本山、忝なくも鸞燈大師御開山のこの靈場を奪はれんとする大難に殉ずる血潮が無益で御座りまするか、

光佐。父に向つて暴言を吐くか。無禮であらうぞ。

教如。いや、決して戯言では御座りませぬ、わが宗門を思へばこそ御怒りをもかへりみず、諫めたてまつる次第で御座る。

光佐。成程、この石山は無二の靈場、幾萬の門徒の血を流したる日本唯一の眞宗の道場ぢや。何人も捨てがたく思ふ人情にかはりはない。そも／＼われらが始めて籠城した時は、東國は武田信玄公と堅く結び、加賀の一揆、長島の門徒も盛んな勢であつたのぢや。また、北陸の上杉謙信入道、淺井朝倉の大名たちもわれらに懇心をつくして居つた。然るに、かの機山公は上洛途中に雄志を抱いて、空しく倒れ、淺井朝倉は、はかなくも織田に亡ぼされ、上杉入道も遂に天命に勝つこと能はず、病のために不慮の死をとげてしまうた。彼等は何れも信長の大敵であつた事は、そち知るとほりぢや。かくて勢にのつた信長は、加賀長島の門徒を討つて、わが本願寺の枝を刈り幹を切つてしまふた。今はもはや孤立無援ぢや。頼み切つたる毛利の援軍も、かやうに海路を斷たれては何としても來られぬ。寺中の兵糧も、もはや手薄うなつてしまつたのぢや。――われらが一旦、信長と和して、この靈場を退くのは、この上、無益の血を流しても、將來の見込が立ちかぬるからぢや。いやしくも宗門の束を司どる者は、そちのやうに血氣にまかせていたづらに合戰の夢ばかりみて居る事は出來ぬ。

教如。只今の御言、教如心外で御座りまする。某とて、人命の尊さはよく承知いたして居りまする。徒らに血氣にはやつて、合戰の夢ばかり見ては居りませぬ。宗門のため、よかれと思へばこそ、あゝまで籠城を云張る次第で御座りまする。

光佐。然らばそちはこれ程理解を説いても、承知いたさぬのぢやな。

教如。宗門のためには、致方が御座りませぬ。

光佐。(勃然として)默れ、教如。父が苦心も察せず、あくまで我意を云張る不孝者奴。

教如。阿彌陀如來も照覽あれ。某は決して我意を云張る次第では御座らぬ。僞多き信長に欺かるゝを恐るればこそ申すので御座る。（教如一味の者どもは自然と教如に寄りそふ。）

光佐。然らばそちはあくまで籠城をいたせ。違勅の咎をかうむつて、亂臣賊子と末世まで唄はるゝだけぢや。

覺淳。（見かねて）教如殿。御父子の間で何事で御座る。靜かにお話なされても分るでは御座らぬか。

光佐。捨ておけ。顯證寺。苟くも門跡たるわが心に反く奴は門徒ではない。未來かけて勘當いたす。

教如（立上る。）何、御勘當と仰せられまするか。

一座混亂。

一方光佐に味方するものは、光佐を取圍んで立つ。

光佐。（靜かに立上る。）不孝者奴。もはや父でもない。子とも思はぬ。立ち去れ。

教如。（呼吸を呑んで）致方が御座らぬ。たとへ御勘當を受けても信ずる處は曲げられぬ。

證誓。（殺氣を含んで）新門の仰せ、理に於て欠くる處なしと信じ申すによつて、われ等一同何處までもおとも致す。

實悟。（進み出る。大音に）おのれ。その言葉は何事ぢや。門跡に對して申し上ぐる言か。不所存者奴、退り居らう。

證誓。たとへ願得寺殿の御叱りをうけてもこればかりは曲げられませぬ。

實悟。その我慢を捨ていと申すのぢや、うろたへ者奴が。わづかの事に眼色をかへて騷ぎまわる見苦しさを恥ぢぬか。

（證誓不承不精に口をつぐむ。）

小姓蘭菊丸が現はれる。

蘭菊丸。申上げまする。大阪町人の宿老たちが、お召によつて參りました。

實悟。おゝ、丁度、よい處ぢや。すぐこれへつれて參れ。

蘭菊丸。かしこまりました。（退場。）

實悟。顯如殿も、新門もお聞きなされ。はからずもよい思案が浮び申した。はゝ、まづこの難義な時に、角目だつて父子爭ひをせずともの事ぢや。二人ともお坐りなされい。（間。二人が坐つたのを見て）そこでの思案ぢや、俺の思案と申すは他でも御座らぬ。凡て法師たる者は、天下萬民の幸を祈るが第一で御座る。決してわが身の利慾を先にいたしてはならぬ。わけてもわが淨土眞宗の法門は、宗祖以來、諸國の賤しい百姓や町人たちの間に彌陀の悲願を傳へて參つたのぢや。そこで、當地退轉の議については、俺は、まづ、大阪の町人たちの心をきいて、然る後に何れとも定むるが、一番ぢやと思ひまする。幸ひ、只今、これへ大阪の庄屋どもが參る故、早速ながら、きいて見やうでは御座らぬか。

頼廉。さすがは願得寺樣で御座る。天晴の御名案。憚りながら、刑部は感服仕りまして御座りまする。

賢淳。當時石山第一の學僧と云はるゝだけに、お年は召されても、智惠は曇らぬ——愚僧は願得寺殿の御思案に同意で御座る。

光佐。成程、これはよい思付ぢや。

實悟。老ぼれの世迷言をようこそ聞届け下された。お禮申す。さて、顯如殿。かやうに事がきまつた上はもはや、お父子の間に隔意は毛頭御座るまいのう。

光佐。われらに於ては、勿論隔意は御座らぬ。

實悟。教如殿とても同じ御心に御座らうのう。

教如。父上の御心さへ解けますれば、共に置きましても右様大殿で御座りまする。

實悟。（一同を見廻して）各々方にも、お父子のお言について異存は御座るまいと存ずる。

一同頭を低げる。

蘭菊丸に導かれて、大阪町人の宿老三人入り來る。

蘭菊丸。町人の宿老を召つれまして御座りまする。

宿老一。（末座に平伏して）お召によりまして、大阪島の内の庄屋、紅屋助兵衛、同じく玉造の庄屋、村田屋庄八、同じく野田の庄屋伊勢屋宗堪參上いたしまして御座りまする。（宿老二三も平伏する。）

實悟。下間少進。

仲之。はつ。

實悟。町人どもは、もはや、此度の和議について承知いたし居るであらうのう。

仲之。はつ。昨日、御評定が終りまするとすぐさま、仔細を申し傳へさせて置きましたゆゑ、一同とくと、相談の上、伺候いたした事と存じまする。（宿老たちに）どうぢや。

宿老一。仰せのとほり、下間樣よりお達しが御座りましたから、今朝、町の主だちました者どもと、談合の上、參りまして御座いまする。（平伏。）

仲之。然らば訊ねるが、この度織田右大臣家と當寺との和議について、町人中の意向はどうじや。

宿老二。村田屋庄八より御答へいたしまする。當本願寺様と右大臣家との確執は、もはや十一年に相成りまする。その間の百姓町人の難儀は、たゞ、御推察を願ふばかりで御座りまする。御和睦の儀が相調ひますれば、一同の喜、これに

越すものは御座りませぬ。（平伏。）

仲之。然らば當寺退轉の儀はどうぢや。

實悟。其方たち、遠慮はいらぬ。包まず心底を申せよ。

宿老三。有難い仰せ、恐入りまして御座りまする。その儀につきましては、伊勢屋宗堪よりお答へいたしまする。私どもも始め大阪の百姓町人は、大方門徒衆で御座りまする。したがつて、當御寺の退轉を好む者は一人も御座りませぬ。併しながら、只今村田屋より申し上げました通り、百姓町人の難儀の有樣をつくづく見まするど、私共、庄屋を相務めまする者どもは、何とぞして泰平の世の中に致し彼等の苦を救うてやりたいと、かやうに思はずには居られませぬ。身の程を知らぬ奴と思召さるゝかは存じませぬが、眞實さやうに考へまするので、申上ぐる次第で御座りまする。

實悟。然らば當寺の退轉を望むのぢやな。

宿老三。（平伏。）上人樣の深き御憐みを持ちまして　私どもの胸中御察しを願ひ上げまする。

實悟。よろしい。よく申した。もはや御用は相濟んだぞ。

三人。はつ。有難う存じまする。（平伏。）

仲之。其方どもは引取つてよろしい。

三人はまた一禮して蘭菊丸に導かれ退場する。

光佐。やはり推量したとほりぢや。

敎如が何か云はうとする。

實悟。まづ御聞きなされい。やうやう、俺の思案が定まり申した。敎如殿の云はるゝとほり、織田信長は心の知れぬ男

ぢや。一旦和を結んで、當寺の油斷を見すまし、何のやうな事をたくらむかも知れませぬ。ここで、當方でも何喰はぬ顏で和議を取結び、門跡殿はこの石山を去らるゝのぢや。教如殿は後に殘つて、織田の方へは引渡しの仕度中と云ひ送り、なるべく時を伸ばす工面をさるゝのぢや。はゝゝゝ信長に、もし、たくらみがあれば、必ずその内に知れまする。なければ重疊、新門も引取らるゝがよい。どうぢやな、教如殿。その邊で折合はれたがよくは御座るまいかのう。

教如。至極の御思案と存ずる。然らば、父上御退去の後　某はこの祖師の御影のお作をいたして當寺に居殘り、安土の様子を油斷なく探らせて置くで御座らう。

實悟。やれやれ、ようこそお聞き下された。これで俺も安心いたした。はゝゝゝ

— 幕 —

第一幕

第一場

石山本願寺内城門の内。正面の大きな門から遠く淀川より大阪の人家平野がみえる。

右も左も小高く築上げた城壁の上手になりゐる。その上に矢倉がある

「南無不可思議光如來」と大書した絹の白旗や、幢幡の形の大旗など、城壁に立てつらねてある。

城門の樓上には大幅の額に掛け「進足者往生極樂。退足者墮落無間地獄。」の十六字の大字を書いてある。

陽春四月初めの午後の事である。門徒兵、法師武者などが、大勢坐つて鐵砲を掃除したり、刀槍を磨いたりしてゐる。長閑な日射がその邊を照らして、雲雀の囀りがきこえる。

法師武者一。(鐵砲掃除の手をとめて)やれやれ、疲れたわ。玄沙坊。

法師武者二。何ぢや。

法師武者一。いよいよ春ぢやな。城外から雲雀の聲がきこえて來るぞよ。

法師武者二。かやうに日ましに暖かうなつて、花が咲き雲雀がなくと、嚴しう逆茂木を打つた城内にゐるのはつくづく厭になるのう。

法師武者一。久振りに京へでも行つて、花見酒が飲みたうなつたわ。

法師武者三。櫻ももう見頃ぢや。若い女の酌で醉ふて見たいものぢやな。

法師武者二。(鐵砲を掃除しながら)やれ、やれ、この錆はどうぢや。こすつてもこすつても落ちる段ではないわ。

法師武者四。錆びる筈ぢや。久しう使はぬからのう。

法師武者二。これに春先は濕氣が強い故、錆が來やすいのぢや。

法師武者一。鐵砲掃除がもう倦々したのう。(少し離れて鎗を磨いてゐる門徒一を見て)これこれ、雜賀の作右衞門殿。お身の鎗はどうぢや。まるで赤鰯ぢや。鐵の膚は少しも見えぬでは御座らぬか。

門徒一。去年の暮に花隈の戰に騎馬武者を突落したまゝ、一度も磨かぬために御座る。白髑人の脂は鐵には大毒ぢや。

門徒二。作右衞門。よう磨いて置かぬと、また組頭にやかましく云はるるぞ。

門徒一。いや、大事ない。いよいよ和議ときまれば、武器の類は悉皆織田殿へ差出さねばならぬ。切味はどうあらうと、たゞ點數がそろうてさへ居ればよろしいと組頭は云ふて居られたわ。

門徒三。してみると、今度の和議は本物かな。

門徒一。先日勅使の見えたときに、上人様は起請文と一緒に和議の受書をお出しなされたと云ふ話ぢや。（法師武者一に向つて）さうで御座つたのう。御坊。

法師武者一。さうぢや。下間三家の人々が血判した起請文ぢや。

門徒三。今度こそ、さすが、新門殿も、我慢の角を見事折られておしまいなされたと見ゆるな。

法師武者二。新門殿いかに軍好にわたらせらるゝとて、この上籠城は云張られまい。昨日焔硝藏へ行つてみて、愚僧は心細ふ思ふた。玉藥の箱が、もういくつも御座らぬ。

この群から離れて、無言のまゝ、一心に鎧の胴をつくらうてゐた三人の法師は顔を上げて、憎々しげにこの群を見つめる。叡山からのがれてきた法師たちである。服裝が他の者とは違つてゐる

門徒二。（それに氣付かぬ様子で）玉藥だけでは御座らぬ。何もかも手薄ぢや。これは聲高には云はれぬが俺の從兄が兵糧方に入つて居るのできいたのぢや。米も麥ももう殘少ない有様ぢやとのう。

門徒三。何ぼ戰がないとて、近頃のやうに飯米を減らされては叶はぬわ。

法師武者一。毛利の手から、二萬石の兵糧を入れてからもう四年にもならう。その上、このわたりの田は、何時も拔目なく織田方で刈つてしまうのぢや。今まで喰ひのばしたのが不思議な位ぢや。

法師武者四。二度目の毛利の兵糧船が、船戰に勝つて入つて居れば、まだまだ續く筈であつたに――殘念ぢやのう。

法師武者三。兵糧の話をしたら腹が空つてきた。（欠伸をする。）

門徒一。何せ此頃は敵も味方もたゞ砦を固めてゐるだけで、合戰どころか、小ぜり合もせぬから、分捕物が大不景氣ぢや。これには全く氣が滅入るわ。

法師武者一。昨年の春はよい体であつたのう。例の荒木村重が織田に叛いたので、よい機ちやとばかり、刑部殿の手について、天下茶屋の砦を夜討したのぢや。愚僧のこの太刀はその機の分捕物ぢや。

門徒一。(太刀を羨ましげにみる。)これは大將分のはく太刀ぢや。

法師武者二。いや、太刀ばかりではない。不意を打たれた敵が總崩れになつた後ぢや。砦の内には、あるわ、あるわ、刀劍、物の具の類は勿論、酒樽が十もずらりと並んでゐる—得たりかしこしぢや。鏡をぬいて我勝ちに飲つたわ。

門徒一。われらは丁度運悪く、あの頃は、福島の出城の守備に行つて居つたわ。御身は仕合せ者ぢやのう。

法師武者三。愚僧はあの機には飛龍と言ふ銘を黄金で象眼した種ヶ島の短筒を分捕つて參つた。

門徒一。それはまたいかい儲ぢや。して、その短筒はどうなされた。

法師武者三。それがのう。我々雜兵の持つ物でないと言ふので、加賀の黑丸の光玄坊に取上げられたのぢや。

法師武者四。これ、僞を言ふまい。光玄坊は北國大一揆の大將株ぢや。今でこそ、落人となつて、この城に來てゐらるゝが、御身の分捕物をたゞで取上るやうな人ではないわ。

法師武者三。(躍氣となる。)いや、本統ぢや。愚僧決して僞は申さぬ。

法師武者二。(笑ふ)、頑石坊。御身は、もう忘れたのぢやな。

法師武者三。何を愚僧が忘れたと言はるゝ。

法師武者二。あの短筒を御身は光玄坊に砂金一兩で賣りわたしたではないか。(法師武者三が何か言はうとするのを押えて)その晩、御身は賭事に負けて、折角の一兩をはたいてしまうたのぢや。はは、、、

皆笑ふ。

法師武者三。(立上る。血相をかえて)おのれはこの頭石に恥辱をあたふるのぢやな。

法師武者二。何、恥辱ぢや。ははゝゝゝ片腹いたい言草ぢや。

法師武者三。伊勢の長島で願證寺塔中の惡僧と唄はれた愚僧の手並をみたいのぢやな(打ちかゝる。)

法師武者二。えゝ、その高慢の鼻を打折つてくりやうぞ。(格鬪。)

皆は面白がつてみてゐる。矢倉から、長島願證寺同宿辨堯が降りてくる。

辨堯。(大音に)また喧嘩をいたす。喧嘩口論は堅く禁制と大將より御布令があつたにかゝはらず、そちたちは此頃、よるとさわると、すぐ喧嘩ぢや。さほど、喧嘩がいたしたくば、愚僧に向つて來るがよい。誰彼の容赦はない。つかみひしいでくれるぞ。(兩人の法師はこの言葉の間に格鬪をやめる。)

法師武者三、(間を置いて)いや、御布令に反くつもりは御座らぬが、きゝ捨て難き雜言を吐きまするゆゑ……

辨堯。えゝ、默らぬか。自體四五日來、軍兵どもの風儀が眼に見えて亂れて參つた——まだ、和議は、しかと定まつた次第でもないに、すぐ氣がゆるむやうでは、末代までの笑はれ者ぢや。以後、かやうなことが眼についたら、すぐさま、切つて捨つる——きつと申しわたしたぞ。(間、一同をねめ廻して)武器の掃除は、もう仕上げたか。

法師武者一。仕上げまして御座ります。

辨堯。仕上げた上は何故早く矢倉へ納めぬ。

法師武者一。はつ。(一同は立上つて、武器を運びかける。たゞ、鎧の胴をつくろつてゐる者どもだけ殘る。)

辨堯。武器を納めてしまふたら、すぐ、祖師堂の前に集まれ。(立去る。)

門徒二。また、祖師堂の掃除ぢや。(鉈を數本かついで、矢倉へ行く。)

門徒三。菩薩あの奴ときたら、一時も樂をさせぬ。（太刀を取集める）あやつは新門びいきの狂人ぢや。

法師武者一。長島でもあやつの組下は泣かせられたわ。（鐵砲を擔いで矢倉へ入る。）

法師武者二。まだ和議はしかと定まつた事でもないと云ひくさる——新門黨の奴らは、殺生が道樂ぢや。

かく云ひながら一同武器を矢倉へ納め、退場。

鎧の胴をつくろつてゐる法師たちは、凝乎つと彼等の後姿を見送る

法師一。どうぢや。良導。本門びいきの奴らは、臆病者の揃ぢや。和議の噂をきいて、犬のやうに尾を振つて喜ぶ有様は見苦しいのう。

法師二。脫柵して女遊びはする。賭事はする。その隙には、喧嘩沙汰ぢや。軍律も何もあつたものではない。

法師一。折角張りつめてゐた心が弛んだのぢや。あれでは、まるで烏合の百姓一揆ぢや。われらが見捨てきた叡山の墮落もひどかつたが。此處とても此頃ではあまり變りはないのう。

法師三。何故門徒がこの石山に籠城いたしたか、これすら、もはや忘れはてゝ、たゞ現在の安樂を願ふ淺間しい奴等ぢや。

法師一。さうぢや。慈悲忍辱の宗門すら、兵杖を以て守護せねばならぬ。これは大いなる矛盾に違いない——惨ましい矛盾ぢや。

法師三。併し、その矛盾の内に、われらに如來の御心を感ずる——所詮、新門殿の御思召どほり、あくまで法敵と戰ふのが本望ぢや。

法師一。われらもさう思ふ。この矛盾の内から、何者かを生みいだすのが、人間の務めぢや。

法師三。たとへ改宗はしても、叡山を信長に討たれた時のあの恨は忘れられぬ。（立上る。城門の額を仰ぐ。）足を進める

者は極樂に往生し、足を退くる者は無間地獄に墮落せんぢや。——この言によつて血を流した者の數は、計り知ることが出來ぬ。

法師二。城門の外から、下間刑部殿が、歸つて來らるゝ。

法師一。いや、下間殿ばかりではないわ。鈴木孫一、矢木駿河守の姿も見ゆる。

法師。三。一番後から來るのが平井越後のやうぢや。何れも本門びいきの御歷々ぢや。

法師一。本門黨の人々とは、面を見合せても蟲唾が走る——もはや鎧の修繕もやめぢや。（鎧を擔いて矢倉へ退場。）

他の二人も退場。

やがて、下間刑部卿法橋賴廉、鈴木孫一、矢木駿河、平井越後の四人が、城門で下馬して入つてくる。

賴廉。久振でよい遠乘をいたした。（馬丁に向つて）馬はもう入らぬ。休ませい。

（馬丁は四頭の馬を曳いて退場。）さて。各々、門跡樣御退轉の仕度もこれであらかた備つた次第ぢや。御出門は九日昧爽と內定いたして居る。さよう心得られい。

平井越後。承知仕る。然らば、この堺口の御門より御發足に御座るな。

賴廉。如何にも——そこで、御路筋は、この御門より只今檢分いたせし路を住吉、堺にお通りなされて、貝塚の願泉寺に御一泊。翌日鷺の森へ御到着の順序で御座る。

鈴木孫一。路次の警護、御行列の順序はいかやうに相成りまする。

賴廉。そこぢや。今朝未明に、かの間者の大學が京より歸つて參つて、織田殿、この度の御路筋にて、內々門跡樣を失ひ奉り長くわが宗門を滅さんとの御たくらみありと申す。時節柄、決して油斷はなり申さぬ

矢木駿河。いかさま右大臣殿の事ゆゑ、さやうのたくらみもないとは云はれませぬ。兎角要心いたさねばなりますまい。

頼廉。そこで、常樂寺様、下間少進法橋などゝ、昨夜額をあつめて考慮を重ねし上、大體かやうに決定致した。まづ、紀州に入れば、根來雜賀（ねごろさいが）の門徒衆が御出迎いたす手筈ゆゑ、心配は御座らぬ。また住吉の邊までは堺町の御門徒が警護いたすで御座らう。即ち御宿に當る貝塚岸和田あたりが一番心配で御座る。そこで當地御發足を未明の頃と相定めたのぢや。さやういたせば遲くとも、日の陰らぬ内に願泉寺に御着になるで御座らう。

平井越後。成程、して、御行列の順序は。

頼廉。まづ、先發はあのあたりの地理をよく心得た者でなくてはならぬ。根來の小密茶坊（みつちやばう）に頼まうと存ずる。その次が某、つゞいて門跡様、御範側は大學と七里三河等に堅めて貰ふのぢや、下つて、少進仲之、本泉寺殿、その他御堂衆、御一門の坊主衆、殿軍（しんがり）を矢木殿と平井殿に御願申す。

鈴木孫一。某は御行列に洩れまするので御座るか。

頼廉。いや、貴殿には大役が御座る。是非御願いたさねばならぬのぢや。

鈴木孫一。いかなる御役で御座るか。

頼廉。まことは今夕、常樂寺殿お一人御先發として紀州へお下りで御座る、御苦勞ながら、貴殿には、その御警護を御承引願はねばならぬ。

鈴木孫一。（不平の顏色）某は常樂寺殿を………

頼廉。成程、御不審も御座らうが、これには深い仔細が御座る。常樂寺殿御先發の列中に、此の方腰元衆、おさめ殿がまいらるゝのぢや。そのおさめ殿の守護がどうしても餘人には任されぬ。

鈴木孫一。これはまた不思議なお言を承る。何故某でなうてはなりませぬか。

賴廉。孫一殿。この儀是非とも御承引下され。本門黨一同になりかはり、某、折入つて御願いたす。その仔細は別儀では御座らぬ。（四方を見廻し）まことは、腹元、おさめ殿のかはりに、かの「骨肉の御影」を女輿に乘せ參らせ、ひそかに紀州にお伴いたすので御座る。（皆驚く。）いや、これはまだ門跡樣にも御承知なき秘中の秘で御座るぞ。

鈴木孫一。驚入つたる仰せを承る。かの「御影」は先夜の大評定の折、新門樣仰出されて當石山表に御殘りと定まり居りしやうに存じ申す。

賴廉。あれが某一期の失策で御座る。まことは新門樣如才なく仰出さるゝ前に、某より「御影」の儀は是非とも門跡樣お伴遊ばされて、紀州へ御移りあるやう申上ぐべきで御座つた。かの「御影」は忝なくも宗祖親鸞上人の御荼毘の灰を漆にまぜて塗り奉りし眞宗根本の御眞影で御座る。これなくば、石山十一年の籠城も、あるひは覺束なかつたかも知れぬ。また合戰の間にも、さまざまの奇瑞を現はされたる事は、各々もよく御承知で御座らう。即ち、もしこれが新門樣御手に移らば門跡樣はあれども無きが如く、眞宗の法燈はひとへに新門樣御手に輝く事となり申さう。いかに、各々方。それで御得心が參るかな。

平井越後。申すまでも御座らぬ。某は大不得心で御座るな。

矢木駿河。成程、只今承つて、驚入る。危ふい事で御座つたのう。

鈴木孫一。某もあの折、新門樣が、最後に誰も氣付かぬやうに「御影」の事を仰せられたを、いぶかしう存じては居りましたが、さほどの謀とは心付きも致さず、たゞ聞流して居りましたが……。……

賴廉。つまり新門樣に一パイ喰はされたのぢや。はは……そこで、北の御方と示し合せて、今朝、門跡樣お勤めの後、

常樂寺殿がひそかに御影を抱き出しまゐらせ、只今は北の御方の御居間に安置してあるのぢや、若殿に御願いたすのは、そのためのぢや。

鈴木孫一。（喜色を浮べて）成程、これは大役で御座る。

賴廉。然らば御承引下さるか。

鈴木孫一。承引仕る段では御座らぬ。が併し門跡樣御承知なくとも、後でお叱りは御座るまいな。

賴廉。その儀は御氣づかひには及ばぬ。既に北の御方も御承知で御座れば後々の事は某が取計らうで御座らう。

平井越後。北の御方が、あのやうに新門樣を惜ませらるゝは何とも合點が行きませぬ。

賴廉。それには深い仔細が御座る――この度の御父子の御不和も、源は北の御方ぢや。おゝあれに新門樣御出ましぢや。我々が寄合ふてゐる處と見付けられては、面白う御座らぬ。參るといたさう。

四人退場。

教如きらびやかに鎧ふて、澄塔、賴龍、粟津源六、黑丸の光玄坊、善堯、その他の武士、法師を引つれて出て來る。

教如。源六。

粟津源六。はつ。

教如。これで矢倉、矢倉を皆廻つた譯ぢやな。

粟津源六。さやうで御座りまする。この堺口の御門が最後で御座りまする。

教如。此處は善堯、たしかこの方の持場であつたな。

善堯。さやうで御座りまする。長島一揆の者どもと、叡山の殘黨が守備いたして居りまする。

教如。士卒の樣子は何うぢや。
善堯。やはり和議を喜ぶ本門樣びいきと、新門樣思召に從ふ者と二派に分れて居ります。
教如。志氣はどうぢやな。
善堯。和議の噂がきこゑて參りまして以來、殘念ながら、志氣は弛んで居ります。
教如。ふむ。誰の持場も同じやうぢや。して、士卒は殘らず此處に居るか。
善堯。廿人程、祖師堂の廣場の掃除に行つて居ります。それから木津の砦に交代に參りましたので、只今は三十人程殘つて居りまする。
教如。その者をこれへ呼出せ。
善堯。かしこまりました。(矢倉へ上る。)
教如。(澄誓をかへりみて)諸處の砦と城内の士卒をあはせて、われらに忠節の者がまづ八千ぢやな。
澄誓。いや、一萬は間違いなく當寺へ殘るで御座りませう。毛利家よりつかはされました者どもも一味いたします筈で御座りまする
教如。あれが二千は居らう。なるべく内輪に見つもらねばならぬからな。
善堯が先に立つて、士卒をつれて出てくる。
善堯。一同召しつれまして御座ります る。
教如。それへ並ばせい。
善堯。はつ。(士卒に向つて)一同それへ出い。新門樣直々の仰せがあるぞ。

士卒はそこへ並ぶ。一同頭を低げる。

教如。（進出て）さて、近頃はとんと合戰がないので、そちたちにも久しう合はぬ。さりながら、何時もかはらず當流宗門のために粉骨碎身するそちたちの志は、新門心の中で有難う思ふて居る。祖師上人樣も定めし極樂淨土で、そちたちの出精をうれしう御覽ぜらるゝであらう。（一同合掌。）そこで、今日、この新門が矢倉々々の持場をまわつてそちたちに言をかはす仔細は他ではない。薄々はもはや承知の事と存ずるが、此度、法敵、織田信長が、この石山を攻めあぐんで、卑怯にも、當今の帝の袞龍の御袖にすがり和議を申入れて參つたのぢや。御父門跡に於かせられては、ひとへに違勅の罪を恐れて、この石山を退轉さるゝ御決心である。然るに、この新門は何としても信長の心を信ずる事が出來ぬ。また、蓮如上人以來の靈場たる當石山の城を、空しく法敵の蹂躙にまかするは、前後十一年の大法難に血を流したる門徒衆の屍に向つても相濟まぬ儀ぢや。（士卒の間に感激の聲がきこえる。）即ちこの教如は、深く慮かる處あつて、この石山を立退かぬ決心の臍をかためた。たとへ信長大兵を以つて攻めて參るとも、我に如來の加護あれば、決して恐るゝには足らぬ。はては教如一人になつて、空しく骨を城門にさらすとも、宗門のためにさらに厭ふ所ではない。然るに幸にも門徒のために度々奇瑞を現はし玉ふた眞宗根本の骨肉の御眞像がわれらと共にこの石山に御殘りになる事になつた。有難い事ではないか。（一同稱名）然しながらそちたち門徒衆も、もはや十一年の法戰に疲れはてゝ居る。或は家里に歸りたいと思ふ者があるかも知れぬ。それも無理ではない。もし、さやうの心があるならば、遠慮はいらぬ。早速申出づるがよい。すぐさま望どほりにいたしつかはす。（一同を見廻す。門徒たちの顔には、複雜な表情が現はれる。）また、あくまで教如と生死を共にし、祖師の御影を守護して法敵と戰はうと思ふ者あらば、たゞちに申出でい。未來かけて我らの友ぢや。

鎧の胴をつくろふてゐた三人の叡法師が列中から駆出る。

法師一。御願で御座りまする。何時までも新門様の御側にあつて、祖師の御影に仕えたう御座りまする

法師二。生死をかけて御願いたしまする。

法師三。どうぞ、御聞届けを願ひまする。

三人平伏。

士卒の列中に動揺が起こる。

教如。三人の法師、顔を上げえ。そちたちの願、教如忝なう思ふぞ。

三人。(感激) 有難う存じまする。

教如。(法師一を凝乎と見て) おゝそちは先年、野田福島の戦の折、わが馬廻りをつとめて甲斐々々しう働いた法師ぢやな。(法師二に) そちもよう見覚へて居る。(法師三に) そちはあの時我らの馬の腹帯をしめなをしてくれたのう。

三人。(涙を流して) 新門様がわれわれをよう御見覚えぢや。生きてこの城は出られぬわ。(士卒の列中に、高い感動の聲が起こる。)

一同。御願で御座りまする。何時までも御傍に置いて下さいませ。(くり返しくり返し叫ぶ。列が亂れて熱狂した士卒は、次第に教如の身に廻るやうに寄せてくる。)

第二場

本願寺奥殿の北の方の居間、同じ日の夜、部屋の内、右手には几帳が置かれてゐる。正面、床の間、違棚、絢爛をきはめた花鳥極彩色の襖にて仕切る、廣い縁には勾欄がついてゐる。すべて寺院建築と寝殿造りとの混合

した様式である。前は美くしい庭園、今を盛りの櫻が、軒近く咲亂れてゐる。
短檠の灯を前にして、妖艶な門跡の北の方が、「骨肉の御影像」の御襟卷を直してゐる。腰元のおさめが出てくる。

おさめ。北の方様に申し上げまする。

北の方。何ぢや。

おさめ。只今、常樂寺様が刑部様と御一緒に內々お眼もじ致したいと仰せられて、あれにお待ちで御座りまする。

此の方。おゝお早いお出ぢや。此れへ御案內しや。

おさめ。かしこまりました。（退場。）

北の方は亂れ箱に疊んであつた日のさめるやうな打掛を取り出して、御影像に着せる。

おさめ。（常樂寺に下間頼廉を案內してくる。）常樂寺様刑部様御越で御座りまする。（退場。）

超乘。（旅裝束で）いよいよ發足の刻限が參つた。お暇乞かたがた先刻、御打合せいたせしとほり「御影」を頂戴に參つて御座る。

北の方。先刻よりお待申して居りました。超乘さま。勿體ない事ながらかやうに致して置きますれば、何人も氣付きは致しますまい。

超乘。成程、これならば、堺口の御門でも怪しむ氣づかいは御座らぬ。

頼廉。女義の御知惠はさすがにこまかく行渡りまする。

超乘。先刻、新門殿に御暇乞のため、北の御所に參りしに、今宵は士卒の風儀檢分のため、新門殿、御身をやつされて、城內を御巡りある由に御座る。見咎められては、一期の大事ぢや。

北の方。新門が城内を見廻られますするか。
頼廉。北の御所では、只今、その御仕度中で御座ります。
北の方。刑部。まだ、新門は何事も存じて居らぬであらうな。
頼廉。いや御氣づかいあらせられまするな。斷じて御承知では御座りませぬ。
北の方。心の鋭どい新門の事ゆえ、少しでも怪しう思はれたら、事の破れになりまする。
超乘。今朝、愚僧と刑部と二人して、ひそかに祖師堂より「御影」を取出し参らせしを見た者は、誰一人で御座らぬ。
北の方。なほ、この上とも用心が肝要かと思はれまする。門跡さまに御暇乞はなされましたか。
超乘。只今これへ参る前に御眼どほりいたして御座る。
北の方。「御影」について何かお話が御座りましたか。
超乘。たゞ、愚僧はそれとなく、宗門の魂たる「御影」をまだ本門跡をつがせられぬ新門殿にお渡しあるは將來のため面白う御座るまいと、かやうに申しました。
頼廉。門跡樣は御心中では深く御後悔の御樣子と拜し參らせまして御座ります。
超乘。いや、愚僧は御父子の情愛に兎角おなづみなさるゝ御樣子と御見受け申した。
北の方。何と御意遊ばされたのぢや。
頼廉。勘當いたせし者ならば、ともかく、願得寺のあつかいによつて、折角折合ふた上は、旣に新門跡をゆるした教如ぢや。「御影」をゆづつても大事あるまいとの御意で御座りました。
北の方。それならば、、安心ぢや。刑部の推察しやるとほりぢや。

超乘。愚僧はあの仰せは、眞實の御心底より出でしものと思案いたす。

北の方。なるほど、新門をいとしう思召す御心は、人一倍深くわたらせらるゝが、この度の儀はひそかに口惜しう思召しておいでぢや。

超乘。その仔細が承はりたう御座る。

北の方。思召に添はぬ時は、決して本心を明かされぬ御氣象ぢや。さやうな時には、何時も鋭どく機を見てお出でなされまする。

賴廉。この上は、門跡樣に、この度のはからひを申上ぐるのが一役で御座る。某が心を惱ましまするは、たゞ、それだけで御座りまする。

北の方。自體これは常樂寺殿にお願するが一番よいと我身は思ひまするが、生憎。今宵御發足ぢや。（賴廉に）そちが惡者にならねばなるまい。

賴廉。また肝にこたゆるお叱りを受くるので御座りまするなあ。

超乘。おゝ、もはや出立の時刻で御座る。鈴木孫一が待兼ねて居るで御座らう。

北の方。「御影」の御輿は參りましたか。

賴廉。御庭の木戸口に參つて居りまする。某が參つてこれへ召つれませう。（立上る。）

賴廉は庭先に下りて左の方へ去る。

北の方。「御影」の事は、たゞ、我身よりも門跡樣へ申上げて置きまする。

超乘。その邊はよろしく御願いたす。

頼廉に導かれて、鈴木孫一が、二人の士卒に女輿を舁がせて現はれる。孫一は北の方その他の人々に一禮する。

頼廉。（士卒に）その方どもは、只今の御木戸口へ參つて某が呼ぶまで待つて居れ。

士卒二人。はつ。（退場。）

頼廉。（その後を見送つて）憚りながら、「御影」をこれへ願ひまする。

超乘。承知いたした。（御影を椽に運ぶ。）

頼廉。恐入りまする。（御影を受取つて、輿に乘せる。）鈴木氏。只今の者どもをお呼び下され。

鈴木孫一。承知いたした。（退場。）

頼廉。（簾を下ろす。）常樂寺樣、この御輿は表御玄關に廻して置きまする。

超乘。然らば、北の方。これで御別いたす。

北の方。我身も、この九日には當城を發足いたしまする。また、鷺の森で御眼もじいたしまする。

超乘。お待ち申す。なるべく早く御出でなされ。御免かほむる。（退場。）

鈴木孫一が士卒をつれて出てくる。

頼廉。これを擔いて參れ。

士卒二人。はつ。

北の方。孫一。太儀ぢやのう。

鈴木孫一。恐入りまする。

頼廉。鈴木氏。道中の儀は、かねて、御願申せしとほり、よろしく御頼みいたす。

鈴木孫一。承知いたしました。然らば、御免下されい。
賴廉。御玄關にて、常樂寺殿のお出をお待ち下され
鈴木孫一。よろしう御座る。(退場。士卒も輿を舁いで孫一の後より退場。)
賴廉。(見送つて椽に上る。)心がかりで御座りまするゆえ、堺口の御門まで、某御見送りいたして參ります。
北の方。さうしてたもれば、我身も安心ぢや。
賴廉。御免かほむりまする。(退場。)
北の方。(呼鈴の綱を曳く。)
　おさめが現はれる。
北の方。慧燈大師さまの御身代りとはそちは果報者ぢやのう。
おさめ。恐入りまする。もはや御出かけに相成りまして御座りまするか。
北の方。只今。やうやう御出かけ遊ばした。大學はもはや參つたであらう。
おさめ。はつ。先刻よりあちらへ控えて居られまする。
北の方。ひそかにこれへ呼んでたもれ。
おさめ。かしこまりました。(退場。)
　やがて、蒼面隻眼の異様な男が現はれる。
大學。お召で御座るか。
北の方。おゝ、大學。夜陰の出仕太儀ぢやのう

大學。(侮けすむやうに微笑する。)北の御方の御召は、かへつて樂しみで御座る。

北の方。そなたに内々頼みたい事がある。まそつと、近う。

大學。御免下され。(近くにじりよる。)

北の方。(凝乎つと大學を見つめる。)大學。そなたはやはり我身へまことをつくしてくるゝ心であらうのう。

大學。申すまでも御座らぬ。武田勝頼公御最後以來、浪々の身となり、窮苦をかさねし某を、お救下されし御恩は、忘るゝ事では御座らぬ。

北の方。武田家は姉上の嫁いで居らるゝお家ぢや。そのお家に仕へたそなたを、我身が救ふに取らせたのが、何の恩義ぢや。ましてそなたは、これまで幾度か、當寺と武田家の御用をつとめた身ぢや。

大學。(皮肉に)仰せ、身にあまりたる名譽で御座る。

北の方。そこでそなたへの頼みぢや。きいてたもるか。

大學。某の身に叶ひまする事ならば、御辭退はいたし申さぬ。

北の方。只今、常樂寺殿が、門跡さま石山御退轉の先發として、此處を立たれたのぢや。お伴は雜賀の鈴木孫一ぢや。その御先發の一行の内に、恐多くも、祖師堂の「開山の御影」を女輿にお乘せ申してある。これは我身の計らひ、深い仔細があるのぢや。

大學。成程。

北の方。常樂寺殿は當家の御連枝、もとより御疑いたす譯ではないが、當時の人の心は計られぬ。そちは太儀ながら、これより御一行の跡をつけて鷺の森の道場まで行つてたもらぬか。

大學。常樂寺殿の振舞に眼を離さぬやう致せばよろしいので御座るか、

北の方。さうぢや。怪しい御振舞がなければよし、もし、腑に落ちかぬる事があつた時は、容赦はゐらぬ。お命を縮むるのぢや。

大學。（切齒するやうな苦しげな笑方をする。）承知いたした。よい御用ぢや。この大學は人の血を見ることが大好きぢや。

北の方。もはや堺口の御門をお出なされた頃ぢや。早う參れ。

大學。然らば御免かほむる。（退場。）

北の方は少時、何事かを考へてゐる。やがて立ち上つて几帳の處へ行き、几帳をかゝげて内に蹲つてゐる蘭菊丸の手を曳いてつれてくる。

北の方。（いたわるやうに微笑して）さぞ待遠であつたであらう。何かと用事が出來て參つて、そなたに窮屈な思をさせたのう。

蘭菊丸。（落付かぬ樣子で）いえ、いえ、さやうな事は御座りませぬ。

北の方。何でそのやうに物怯じ致たすのぢや。誰一人此處に參る者はない。靜かに落付いて、美しい笑顏を見せてたもれ。そなたとかうしてゐるのが、我身の人しらぬ樂ぢや。

蘭菊丸。今宵は何故か氣が沈んでなりませぬ。

北の方。（手を取つて、凝乎つと顏を見る。蘭菊丸恥かしさうに俯向く。）何かそなたは我身に隱してゐる事があるであらう。眼の色が少しも定らぬ。

蘭菊丸。さやうな事は御座りませぬ。

北の方。（獨語のやうに）何故かしらぬが、我身はそなたがいとしうてならぬのぢや。何事も包みかくさず話してきかせてたもれ。

蘭菊丸。私は何も包みかくしては居りませぬ。たゞ何となく心が騒いで、この世の相が、冷べたくすさまじく思はるゝので御座ります。

北の方。熱があるかも知れぬ。此處へきや。（蘭菊丸傍近くにじりよる。北の方。額へ手を當てゝ見る。）いや、膚は氷のやうぢや。これ、何が恐ろしうて、そのやうに顫ふのぢや。

蘭菊丸。北の方さま。まことゝ、私は新門さまが恐ろしうてなりませぬ。

北の方。何と申す。新門が恐ろしい……それはまた俄に何うしたのぢや。我身とそなたの秘事を知つて居るのが、氣がかりぢやと申すであらう。

蘭菊丸。はい。この頃の新門さまは、それは恐ろしい眼ざしで私を御睨なされまする。

北の方。その儀ならば、もはや心づかいはゐらぬ。九日にはそなたも我身もこの石山を立退くのぢや。

蘭菊丸。先刻、大書院の廊下で、御出合申しましたるときの殺氣を含んだ御眼の色は、思浮べても恐ろしう御座ります。

北の方。新門はあのとほりのしたゝか者ぢや。決してこの事を口外いたす氣づかいはあるまい。安心しや。

蘭菊丸。はい。私はたゞ北の方さまの御袂に縋つて居ります。

北の方。（蘭菊丸を抱きしめる。）そなたのその心がいとしいのぢや。のう、蘭菊丸。たとへ新門が如何ほど、そなたを憎まうとも、少しも恐るゝ事はない。何時も我身が几帳の蔭にかばうてやりまする。

蘭菊丸。北の方さま。嬉しう存じあげまする。

北の方。新門はこの年の始め頃より、そなたの様子に眼をつけてゐるやうぢや。此處へ忍ぶにも、よう心して氣付かれぬやうにしてたもれ。

蘭菊丸。かしこまりました。

北の方。わが腹を痛めた新門が、あれほど怖う思はるゝに引かへて、そなたがいとしうて耐らぬとは、罪深かいわが心ぢやのう。

蘭菊丸。何故、そのやうに新門さまに御怖しみをおかけなされまするので御座りまするか、私には不審でなりませぬ。

北の方。それはわが身の生立ちからぢや。そちはまだ知るまい。語つてきかせませう。

蘭菊丸。北の方さまは、細川晴元公の御息女と恐れながら、承はつて居りまする。

北の方。晴元公は我身の養親ぢや。あのやうなお方に養はれたばかりに、肉身の心も信ぜられぬ頑な心になつてしまうたのぢや。

蘭菊丸。それは何故で御座りまする。さやうな名家にお育ちなされたは、私どもには、この上もないお幸福と思はれまする。

北の方。我身のまことの親御は三條公頼と申す殿上人であつた。晴元公が、我身と姉上とを、深い思召から、養育たてられたのぢや。甲州の武田信玄公の北の方が、わがみの姉上ぢや。幼少より他人に育てられて、親の慈しみを知らぬ我身は、やがて、晴元公の御手元から、この本願寺に縁付いて参つてのう。それと云ふのも、晴元公がわが力にせうために、本願寺と親しうなりたいと思ぼしたからぢや。

蘭菊丸。當寺へ御出で遊ばしましたは、北の方さまが御幾才の時で御座りましたか。

北の方。やうやう十三になつた頃の事ぢや。此處とても我身には、冷たい住家であつたのぢや。

蘭菊丸。北の方さまの仰せのとほり、他人の内(なか)ほど辛らい物は御座りませぬ。

北の方。そなたも宿世がよう似てゐる。万に心が分かる筈ぢや。かやうに育つた者は、世の情け、親子の情愛などは、何としても信ぜられぬ。たゞ、おのれ一人が手頼(たより)ぢや。

蘭菊丸。仰せ、一々わが心に思當りまする。

北の方。新門をいとしう思はぬは、そのやうな育ちの頑(かたくな)な心からぢや。まして、近頃、そなたと我身の語らいを、氣付いてからは、一しほ、新門が憎うてならぬ。

蘭菊丸。新門さまも新門さまで御座りまする。日頃の御振舞は決して御母君たる北の方さまに御孝心深うわたらせらるゝとは、恐れながら申しかねまする。

北の方。これが前世よりの定まる業と云ふのであらう。いや、折角そなたとの逢瀬に、かやうな沈んだ話は無益ぢや。どうぢや。少しは氣が輕うなつたかや。

蘭菊丸。お情深い仰せ、身にしみて嬉しう存上げまする。私はまだ、何うやら氣が鬱いでなりませぬ。

北の方。氣病は心からと申す。待ちや。そなたは、かねて、箏の琴が好きであつたのう。いま、我身が弾いてきかするほどに、氣嫌よう笑ふて見せてたもれ。(自から立つて、側に立てかけてあつた琴を下ろす。)

蘭菊丸。恐縮で御座りまする。私がお手傳いたしませう。(ともに立つて琴をよい處に据える。)

短檠の灯影をあびて北の方は琴を弾じ唄ひ出す。蘭菊丸は凝乎つときゝ入つてゐる。長い間を置いて、二人は顔を見合せる。そして美くしい微笑をかはす。

おさめが慌たゞしく出てくる。

おさめ。(聲をはづませて)北の方さま。門跡さまのお入りで御座りまする。

北の方。(琴をやめて)何、門跡さまのお入りぢや。(顔色かはる。)

おさめ。もはやこれへ御出で御座りまする。

蘭菊丸は色を失つて。うろうろする。

北の方。お知らせもなく突然のお入り、何とも不思議ぢや。これ、おさめ。そちは蘭菊丸を伴なうて、庭口からつれ出しや。お出迎は我身が、みづからする程に。……

おさめ。かしこまりました。さ、蘭菊丸さま。お出でなされませ。

恐れおのゝく蘭菊丸の手を取つて庭先に降りる。

二人は木立の闇に消える。

北の方は二人の行衛を見送つて、立上り、静かに入口の襖の外へ出る。

やがて、北の方は門跡光佐を導びいて歸つてくる。腰元が三四人、その後につゞく。

光佐。いよいよ、九日には、この石山を立のかねばならぬ。そなたもわれらも、此處は深う馴染んだ土地ぢや。さまざまの忙がしい要事に急きたてられて、つひ、そなたを訪ぬる事も怠りがちであつた。今宵は珍らしう暇を得たので、久振にそなたの琴でもきゝながら、休息いたすつもりで参つた。

北の方。ようこそお入り遊ばしました。皆の者、酒の仕度しや。

腰元たち。はつ。かしこまりました。(退場。)

光佐。此道場に生れて、三十八年の日をくらしたと思へば、何となう去りがたい心地がいたす。そなたとて、十二の年から今まで廿年あまりの住家ぢや。今宵は一つ昔語りを致して、石山の別を惜しまうではないか。

北の方。それは何よりのお思付で御座ります。私も琴など弾いて、御相手をいたしまする。

腰元たちが酒肴を運んでくる。

光佐。(盃を取つて)鷺の森は片田舍ぢや。何かにつけて不自由であらうぞ。そのかはり、海の眺めはこの上もなくよい處ぢや。古歌に名高い和歌の浦も間近ぢや。打ちつれて、濱邊のそゞろ歩きに、日頃の憂を忘れやうぞ。

北の方。和歌の浦輪の名月の眺めは、さこそと只今より樂しみにいたして居ります。

光佐。(盃をさす。)そなたも一獻傾けてはどうぢや。

北の方。頂戴いたしまする。(盃を受ける。)

光佐。(また盃を受けて)只今、此處へ參る道すがら、久振にそなたの琴の音をきいた。早速ではあるが、一曲弾じてたもらぬか。

北の方。つれつれの手すさびに、只今、箏の琴を取出し、もてあそんで居りました。おはもじながらおきゝに入れませう。

(腰元に)只今の琴をこれへ出しや。

腰元一。かしこまりました。(琴を北の方の前に置く。)

北の方は琴を弾じはじめる。光佐は盃を手にして凝乎つと聞入る。

突如として、靜寂を破つて、若い男の悲鳴がきこえる。北の方はハッとしながら、强いて胸中の動搖を押隱し

て、琴を弾きつゞける。つゞいて女の悲鳴

光佐。何事ぢや。（耳をすます。列席の腰元たちは、怯ぢ恐れて互に顔を見合せてゐる。）誰か見て参れ。容易ならぬ聲音ぢや。

腰元たち。はつ。（一同様に出る。）

緊張した沈黙。やがて、教如が粟津源六と四五人の士卒をつれて出てくる。士卒は蘭菊丸とおさめの死骸を抱いてゐる。

教如。夜陰に及んで、奥殿をさわがし奉る狼籍の罪はおゆるしを願ひまする。

光佐。（立上る。）新門。如何いたした。

教如。（顔色をかへて、凝乎つと心を抑えてゐる北の方を尻眼にかけて）只今、奥庭の垣の外を通りかゝりまするると、怪しい男女の人影が、ひそかに枝折戸を開いて外に出まする様子ゆえ、引捕へむと致しまするると、忽ち身を翻かへして逃げ出しました。それとばかり追ひかけましたが、勝手を知つたる奴らとて、あちこちに逃げまわり、あはや、見失ならばかりで御座りましたゆえ、不憫ながら切つて捨てました。（士卒に）曲者の面を見せい。（二つの死骸を士卒が持ちは、そこに寢かし、灯を差出す。）や、これは驚入る。母上。曲者は、お側近う召使はるゝおさめと蘭菊丸で御座りまする。（凝乎つと北の方を見つめる。）

光佐。（教如の顔を見つめてゐる。）……

北の方。（深く憤つて）新門は、また、何用あつてこのあたりをお通しなされたのぢや。

教如。（冷笑ふやうに）和議の噂が出ますると、士卒どもの志氣が亂れて参りましたゆえ、ひそかに城内を検分いたす途

中で御座りました。(短かき間。)察するところ、この二人は不義をいたし居りました物と見えまする。

光佐。(教如の語氣と北の方の様子より何事かを感じる。)まこと、二人が不義ならば、かやうな淺間しい眼に會ふも、心柄ぢや。致方がないわ。

北の方は深い恐怖に襲はれて、光佐の顏をじろりと見たまゝ、眼を伏せる。

教如。(凝乎つとおさめの死骸をみる。ふと思出して)母上、おさめは何うして、城内に殘り居るので御座りまするか。

北の方。(憎々しげに教如を見る。)おさめは我身の召使ぢや、城内に居るのは不思議では御座るまい。

教如。(疑惑に沈む。)いや、先刻鷺の森へ御退けの先發として、常樂寺が城内を出ますするとき、確かに、母上御召使おさめが女輿に乘つて御一緒に參りました筈で御座りまする。

北の方。それは何人か、他の女子であつたであらう。

教如。堺口の御門を檢分中、通りかゝりましたゆえ、念のため取調べましたが、鈴木孫一の口より、しかとさやう聞きして御座りまする。(粟津源六をかへりみて)さうであつたな、源六。

源六。いかにも仰せの通り、おさめ殿が北の方御發向の前に、奥殿の仕度のため、下らるゝとの事で御座りました。

教如。(何か思當つたやうに)父上。

光佐。(探ぐるやうに)何ぢや。

教如。念のため承はりまする。「開山の御影」は確かに祖師堂に安置して御座りませうな。

光佐。一旦、そちの守護と定まつた物を、何で、われらが手をかけやう。安心いたせ。前のまゝぢや。

北の方は深刻な表情で微笑する。教如は凝乎つと光佐の顏をみつめる。

察

第二幕

第一場

紀州鷺の森別院。

廣い書院の內部。その年の夏の初めの事である。床の間には、二幅の大幅の南畫がかゝつてゐる。椽の內欄をへだてゝ、遠く海が見える。襖には雪中の江山の光景が、墨繪で書いてある。幕開くと、興正寺顯尊、下間仲之が勅使、前關白近衞前久、庭田大納言重保、勸修寺中納言晴豐の三卿と織田家の使者、佐久間信盛宮內卿法印の二人を案內してくる。

勅使ならびに織田家の使者は設けの席につく。

顯尊（平伏して）勅使の御高來、先刻より御待いたして居りました。父、顯如以下主從の者ども、只今、御眼どほり致しまする。何卒少時御待ちを願上げまする。

小姓が茶と菓子とを運んでくる。

前久。おゝ顯尊殿ぢやな。少時見ぬ間に大人びて來られた。（庭田勸修寺の二卿に向つて）門跡に面差がよう似て居らるるでは御座らぬか。

重保。いかにも近衞公の仰せのとほり、よう似て居られまする。

晴豐。この三月、石山にてお會ひいたせし折は、只今のやうにたくましう肥えてはお出でなされぬ樣で御座つた。

重保。顯尊殿。お年はおいくつぢや。
顯尊。十六歳に罷りなりまする。

江山白雲の襖が開いて、光佐、北の方、一門連枝の坊主衆、下間頼廉などが現はれる。

光佐以下の人々は、皆、靜かに設けの席につく。平伏。

光佐。遠路の勅使、御苦勞に存上げまする。
前久。門跡には、久しう御眼にかゝらぬ。見參らするところ、顏色なども、却つて以前よりつやつやしくなられたやうぢや。御壯健と見ゆるな。
光佐。恐入りまする。近衛公はじめ、重保卿晴豐卿にも、美はしき御尊顏を拜し奉りて、祝着至極に存じまする。
重保。御房。打絶えて御眼どほりいたさぬ。お變りもなうて、御目出たう御座る。
光佐。御言、痛み入りまする。
前久。さて、今日はるばる推參いたした次第は餘の儀では御座らぬ。例の石山の一件ぢや。どうも困つた物で御座るのう。
光佐。敎如の無分別なる振舞によつて、恐多くも勅使を玉はる段、何とも恐入るばかりで御座りまする。
重保（晴豐のさゝげた文箱をとつて）此れが勅書で御座る。謹しんで御聞きなされい。（勅書を開く。光佐は平伏する。一同もこれにならふて平伏。重保勅書を讀む。）此度は石山とゞこほりなく退去され、祝着と存じ候。然るに、新門跡、後に殘られ、何かと世の中騷がしきよし、織田右府より頻りに訴へ申され候。もし天下の亂と相成るやうの事もあらば、萬民の愛たるべく候。よくよく御分別有之べきよう內々叡慮よりも仰出され候。なほ、くはしき事は源大納言、

勸修寺中納言。兩人申上ぐべく候也。かしく。——本願寺僧正御房へ。(重保は讀み終つて、勅書を光佐にわたす。光佐膝行して進み勅書をうけて、一覽の後、卷納める。)

光佐。新門、いたづら者に加擔いたし、天下萬民の憂をもかへりみず、ひたすら我意を張り、端なくも叡慮を惱まし奉る段、光佐におきましては、たゞ、たゞ、恐入り奉るばかりで御座る。勿論、先日來、屢、使者を以つて、新門に石山立退の儀を申しつかはしましたが、如何なる天魔の魅入りしか、更に聽入るゝ樣子も御座りませぬ。もとより彼はわが淨土眞宗の法統血脈を嗣ぎまする者、光佐が杖とも柱とも賴む嫡々では御座りまするが、かやうに畏多くも違勅の罪をかさぬる上は、やむを得ませぬ。父子の緣を切つて、宗門より勘當いたす所存に御座りまする。

前久。門跡の御決心、御痛はしうは存ずるが、かゝる時節ゆえ、一時さやうの事と相成るも已むを得ぬで御座らう。

重保。御心中、深く御察し申す。禁裡叡慮に於かせられても、此度の和議が、かやうの事より萬一破談とも相成らばと、たゞ、それのみをお氣づかひで御座る。殊に織田右府は、知らるゝとほり、短氣の大將で御座れば、その點も、とくと御勘考あらせらるゝやうにとの勅諚で御座つた。

晴豐。門跡御房の石山退去については帝も深かくお喜びで御座る。今日、われら勅使の一行に、織田右府よりの使者、宮内卿法印。佐久間右衞門尉を差加へられたるは、上人御房の御思案をとくと承はり、石山の處置について、なるべく穩便に相濟むやう取計らふためと、右府直々のお賴みによつた次第で御座る。

光佐。叡慮の忝じけなさ、織田右府の御心勞、光佐、たゞ、たゞ、深かく恥入るばかりで御座る。

宮内卿法印。門跡上人には、打絕えて御眼どほりいたしませぬ。御無禮の段はおゆるし下されい。

光佐。いや、無沙汰はこちらのことで御座る。

宮内卿法印。右大臣家の御諚は、佐久間殿。貴殿よりお傳へ下され。

信盛。承知仕る。門跡上人に申上げまする。右大臣家には、一昨日、安土より俄かに御上洛遊ばされ、禁裡に於て、天機御伺ひ遊ばされし後、二條城にて、宮内卿法印と某とをお召あり、「汝等、早々勅使のお供いたして鷺の森に下り門跡御房に會ふて、石山の不始末を問ひたゞして參れ。」と、以つての外の御機嫌で御座りました。

宮内卿法印。打割つて申せば、右大臣家には、もはや御覺悟の態と、この法印は見受け參らせて御座りまする。新門様御勘當との仰せを承はりし上は、包まず申上げまする。かの若坊主果つるか、信長の天運盡きたるか、天下の兵をあげて、一戰に勝敗を爭ふてみやうずと、散々の御機嫌にて、お側の者どもに仰せられたを、この法印しかと承はりまして御座りまする。

（一座動揺。）

光佐。新門の振舞、まことに右府に對して面目も御座らぬ。

宮内卿法印。右大臣家御憤ほり深くして、まこと石山に天下の大兵を集められましたる節は、この鷺の森にも、何のやうな難儀がふつて參らるも知れませぬ。此處はよくよく御思案が肝要かと憚りながら存じまする

光佐。（憤る。）然らば、法印にたづねる。宗門の跡取りを勘當まで致せし光佐の心を推量もなく、なほ、内々、石山に一味内通いたすとの疑をかけらるゝのぢやな。

宮内卿法印。いや、決してさやうな義では御座りませぬ。たゞ、萬一の場合を懸念いたしたばかりで御座る。

光佐。思ふても見られい。新門は我が總領で御座るだ。殊に幼少の折りより共々に籠城いたし、幾度か生死の間をくゞつて參つた者ぢや。愚痴では御座るが、決して憎うは思ひませぬ。天下の爲を思へばこそ、勘當いたしたので御座るぞ

信盛。只今、法印の申しましたる義は、門跡上人の御心を、いまだ御承知なき右大臣家の御謎で御座りまする。憚りながら、我ら兩人立歸つて、御當地の様子を包むところなく右大臣家に申上げましたならば、右大臣家の御疑は忽ち晴るゝで御座らうと愚考仕りまする。

光佐。（顏色を柔げて）いや、われらとて、右府の使者たるその方たちに、殊に勅使の御前にて、かやうな事を申しつのる心はさらに御座らぬが、あまり心外の疑をかほむるゆえ、つひ、持前の短慮より、もはや、勘當も無益ぢや。あはれ、新門と共々に織田殿を今一度苦しめ奉らうずと、ふと、かう思ふただけぢや。（法印と信盛とは、驚いて眼を見合せる。）はゝ御容赦あれ。もはや、心にわだかまる物も御座らぬわ。

前久。（光佐を見つめる。）御房、恐多くも、主上はじめ、我ら骨折つて、やうやう和議のとゝなふたる折から、只今の御言は穩で御座らぬ。つゝしみ召され。

光佐。御無禮の段は平におゆるし下され。たゞ、一時の短慮より、ふつと思ひつめた事をそのまゝ包まず申しただけで御座る。まことは、昨日、われら一門の覺悟と申す者を石山につかはし、勘當の趣を申してやりました。

前久。それは驚き入る。もはや、教如殿を御勘當で御座るか。

光佐。いかにも勘當いたして御座る。この儀につき、勅許を仰ぐため、今明日の内に、これなる下間刑部卿を京へ上すつもりで御座つた。

頼廉。只今、門跡より申上げましたるとほり、某使者を承はり京へ上つて、禁裡へ共のよしを申上げ、なほ、安土へも伺候のつもりにて、仕度を急ぎ居りました次第で御座りまする。）

前久。右大臣家の使者たち。

宮内卿法印
(平伏)はつ。
佐久間信盛
前久。門跡の御言を承はつて、その方たちも安堵いたしたであらう。
宮内卿法印。仰のとほりに御座りまする。
前久。實悟殿と申すは、かの蓮如上人の御實子で御座らう。
光佐。さやうで御座る。蓮如の實子にて、わづかに生殘り居りまするは、願得寺實悟一人で御座る。彼は一門の長老で御座りますれば、教如とて、無下にその諫を退くる事も叶ひますまい。實悟は深く此度の義を痛心いたして居りまするゆえ、勘當の趣を申し傳へ、なほ、幾重にも理解を說いて、石山を立退くやうに申しきかすると言ふて、出かけて參りました。
前久。それは重疊、御心づかひ、定めし主上に於かせられても、御滿足で御座らう。
重保。右大臣家もそれを聞かるればさぞ御喜びで御座らう。
信盛。我々使者として參上いたしました、者どもの面目も立ち、この上の喜は御座りませぬ。
晴豐。然りながら、門跡御房はとも角、女義にておわす北の方が、さぞ情なく思ぼしたで御座らうのう。
北の方。(會釋して)何事も天下のためと申しきけられ、たゞ、涙を飮んで居りまする。
前久。われら、いとほしう思ひ居りまするぞ。(北の方頭を低げる。庭田觀修寺二卿に向つて)さて、門跡御房をはじめ、當寺一統の御心を伺ふた上は、われらも、今一度、石山に參り、教如殿に御眼にかゝり、勅諚の次第、右府の心中などを、とくと申しきけ、教如殿並びにつき從ふ面々の理解を說いてみやうでは御座らぬか。

重保。その儀も、もつとも然るべく存じ申す。
晴豐。石山は幸ひ、歸洛の路筋に當りまするゆゑ、日數もさしてのびませぬ。
前久。(法印信盛に)その方たちはどうぢや。
法印。是非とも、御伴を願はしう存じまする。
前久。然らば、さやうに致す。敎如殿も、われらとは、きはめて入懇の仲ぢや。かへつて、よい都合に參るかも知れぬ。
北の方。(光佐に向つて)御用相すみましたる上は、仕度も出來て居りますれば……
光佐。然らば、あれなる海近き座敷に、仕度いたさせ置きましたれば、打くつろいて御休息下されい。
前久。御心づかい、かへつて痛み入る。
北の方。都とちがふて、むさくるしうは御座りまするが、和歌の浦輪を見はるかす景色だけは、自慢で御座りまする。
さ、(顯尊に)御案内しや。
光佐。われらも後刻、酒の御相手に參るで御座らう。
前久。然らば仰にしたがひ、休息いたさう。
勅使とその一行は案內せられて退場。
光佐と北の方と二人だけ殘る。
光佐。(心中の苦々しさを押隱して)そなたも部屋へ下つて休息いたせ。
北の方。(焦燥の心地)わが夫に申上げまする。
光佐。何ぢや。(ふと思返して)いや。いや、今日は勅使の御成りぢや。何事もきくまい。

北の方。（押迫るやうに）恐れながら、火急にお耳に入ねばなりませぬ。御聞き下されませ。
光佐。（立上る。）いや、何事も明日の事ぢや。今日はそなたに構ふては居られぬわ。
北の方。（悄しみの眼ざしで、凝乎つと光佐を見る。）さやうな言をかまへて御逃遊ばすとは卑怯では御座りませぬか。
光佐。（怒りを顔に現はす。やがて冷やかに）近頃のそなたの心は、われらには分らぬ。部屋へ下つて、凝乎つと落付いて考へるがよからうぞ。
北の方。何故、そのやうに、あなたさまは、御自身の心をお包み遊ばします。（間。鋭どく）新門が可愛ゆうてならぬと何故正直に仰せられませぬ。
光佐。（悽い眼ざしになる。）みだりに人の心を推量るは、かへて、そなたの身の爲であるまい。
北の方。（冷やかに笑ふ。）もはや私は覺悟をいたして居ります。かやうに、お心にさからふは、覺悟の底から湧き出づる女の恨で御座ります。
光佐。（烈しい悄しみで）女子を夜叉と申された如來の御言に僞りはない──恐ろしい心ぢや。
北の方。そのお言で、新門を身にかへてもと思召す御心が、よう分ります。ほヽヽヽ
光佐。（勃然として）默れ。そちはあくまで、この光佐をあなどるのぢやな。然らばきかう。眞實血潮を分けた母と子の間で、それ程までに新門を憎むは、何の爲ぢや。
北の方。たゞ、憎いから、憎みまする。
光佐。おのれ、あくまで欺かる心ぢやな。そちが新門を憎むは人畜生にも生れ劣つたさもしい心からぢや。これだけ云ふさへ、口のけがれぢや。

北の方。何時ぞや石山の奥庭で御覧なされた二つの死屍が、それほど御心の惱になりなさするか

光佐。（殺氣を含んだ眼ざしで）む、やはり疑ふたとほりぢやな。

北の方。あれこそ、嚴しい御法度をなみして、不義をいたせし二人の者に下りました天罰で御座りなさする。

光佐。いや、さうは云はせぬ。もはや、そちの口占で明らかに知れてしまふた――今頃は蘭菊丸が焦熱地獄で、不憫や、さぞ、そちを待つてゐやうぞ。

北の方。それほど御疑ひなされますなら、何故私をお責めなされませぬ。只今も申すとほり、もはや、覺悟は致して居ります。たとへ身は八裂にされても、少しも厭ひませぬ。

光佐。そちは、まだ、われらの刑罰をさとらぬか。さりとは鈍い心ぢやのう。

北の方。何と仰せられまする。

光佐。そちには、身を切らるゝより辛い事がある筈ぢや。

北の方。（間を置いて）そのやうな事は御座りませぬ。

光佐。また、僞を申す。久離切つて勘當いたせし新門を、まことはわれらいとほしう思ふて居るとしたらどうぢや。

（北の方の顔色變る。）これがそちの一番の苦しみぢや。

北の方。それはまことで御座りまするか。

光佐。（凝手つと北の方を見つめる。）阿茶丸は末子ぢや。萬一新門の勘當を赦さうなら不憫ながら、この本願寺の門跡はゆづられぬ。

北の方。………

光佐。次男の顯尊を興正寺の跡取りにやつてしまうた上は、そちの最愛の阿茶丸が門跡になる順ぢや。併し新門が戻つて參ると、さう行かぬ事になるのう。

北の方。いえ、いえ、いかにいとしう思ぼせばとて、御勘當の勅許が下りました上は、もはや、御白山にはなりますまい。

光佐。恐多い事ながら、また、御赦免を願ふばかりぢや。

北の方。（唇を嚙んで）恐ろしいたくらみぢや。

光佐（憎い程冷やかに）さやうな時が參つたならば、新門は、さぞ、そなたに孝行をいたすであらう。

北の方。（身をふるはせて）いや、新門をいとしいと思ぼすのは、たゞ、私を苦しむるための僞ぢや。それに違ひは御ざりませぬ。よう分つてしまひました。

光佐。それはどうとも、そちの推量にまかするがよいわ。

北の方。新門をいとしう思ぼすが、まこと定なら、何故、「開山の御影」を當地に御移しいたしたと、御叱りなされませぬ。あれが、まこと御心の證ぢやと、私は思案いたしまする。

光佐。何故ぢや。

北の方。「御影」のないところで、何で門徒衆が熱い血潮を流しませう。あれで、あなたさまと、新門との心は遠う離れてしまひました。

光佐。（沈痛に）いかにわれらが憤つても、もはや、あゝなつては、何うもならぬ。恐ろしいは、女子のたくらみぢや。

阿茶丸が泣きながら乳母につれられて、現はれる。

乳母。北の方さまの御側へお出でなされたいと、おむづかり遊ばして、何としてもお聴入れなされませぬゆゑ、御用談中とは存じましたが、お伴れ申しまして御座りまする。
北の方。おゝ、阿茶。これへおぢや。（手を擴げて抱からうとする。）
阿茶丸。（泣きつゞけて）麿は父上の御側へ參りたいのぢや。
北の方。何、父上の御側へ。（險しい顏になる。）
阿茶丸。（光佐の側に走りよる。）父上。
光佐。何ぢや。阿茶。むづかつてはならぬ。
阿茶丸。父上。新門さまを、おゆるしなされて下さりませ。
光佐。（笑ふ）ふむ。そちは顯尊から智惠をつけられて參つたな。
阿茶丸。父上、御願で御座りまする。兄上が此處へお戾り遊ばせば、また、石山へ參らるゝゆゑ、御勘當のおゆるしを父上に願ふて御覽なされと刑部が麿に申しました。
光佐。（顏色をかへて立上る。）阿茶。何故、そのやうな事をきいて參るのぢや。いかに頑世がないとて、以後さやうな事を申すとゆるさぬぞ。
阿茶丸。（泣出す。）……
北の方。（阿茶をかばひながら）何で阿茶をそのやうにお叱りなされまする。兄弟の情合とは思召されませぬか。
光佐。刑部も卑怯な奴ぢや。「御影」の供について、わが心を計りかねて居る——阿茶を使ふて、ひそかに探らうと致す（急にむら〳〵と怒る。）言語同斷。今度こそゆるさぬ。眼に物見せてくりやうぞ。

阿茶丸は光佐の帷幕に恐れて、聲だかく泣きながら、いよ〳〵北の方にしがみつく。

第　二　場

石山本願寺祖師堂の内部、同じ日の事である。もはや、夕方近い日射が、一方の窓から、異樣に赤く映しこんでゐる。

大龕の扉を堅く閉めてある。げつそりやつれた敎如と、證誓、賴龍、粟津源六。その他善亮、加越大一揆の落武者黑丸の光玄坊などが、圓く坐つてゐる。

敎如。（神經的にあたりを見廻す。聲低く）賴龍。

賴龍。はつ。

敎如。開山上人の「骨肉の御影」の有無を疑ふ門徒どもが、たとへ如何やうに迫つて參つても、決して、この祖師堂に入れてはならぬ。腹心の者どもに、よく緣外を固めさせい。

賴龍。かしこまりました。（立上る。）

敎如。待て。賴龍。緣外を固むる者どもの太刀を取上げて置け。かやうな機ぢや。血迷ふて、刄傷沙汰でも起さば、いよ〳〵、人々の心が荒まうぞ。

賴龍。承知仕りました。（退場。）

敎如。（眼を輝かして）まだ、決して、落膽してはならぬ。門徒たちは、開山上人の「御影」を信仰いたすあまりに、たゞ疑を持つて參つたのぢや。「御影」が、眞實、此處にたうて、鷺の森の御坊にお移りなされた事を知る者はあるまいと存ずる。

證誓。愚僧もさやうに思ひまする。たゞ、この上は、鷺の森より參る者を嚴重にせきとめて、門徒に先方の樣子を知らせぬやうにいたさねばなりませぬ。

教如。さうぢや。それがなかなかむづかしいわ。

光玄坊。いや、新門樣の御諚では御座るが、愚僧はさうは思ひませぬ。門徒たちが、第一不審いたすは、新門樣朝夕の御勤めに「開山の御影」の御開帳を遊ばされぬ儀で御座ります る。

善堯。まだ聲たかう申しはいたしませぬが、彼等の間では、もつぱら、それを怪しんで居りまする。

教如。御鑰取り役の常樂寺が、鷺の森へ先發いたしたため、お鑰の所在が分らぬ。追て、先方に問合せ、お鑰を見出すまで、御開帳は取止めぢやと、布れてあつても、やはり疑ふのぢやな。

善堯。さやうで御座りまする。

教如。(間を置いて沈痛に、)門徒どもの疑が、そこまで深うなつて居ると、この祖師堂は、もはや、迂闊には離れられぬ。今日より、我らはじめそちたちも、此處に寢とまりいたす事に致す。

證誓。さやうの事を致せば、却つて、門徒の疑を增す道理では御座るまいか。

教如。(深刻に)もはや、門徒の疑など、かへりみては居られぬ。此處を離れて、この御鑰の正體をみられたが最後、我らの身の上は、どうなるか分らぬ。身を守るためにも、一味同心の者はひたと寄合ふて居る事が肝要であるぞ。(一同緊張)が、併し、その內には、先日矢文を以つて云送られた四國の長曾我部元親の軍兵が參るであらう。彼は南海の英雄ぢや。近頃、織田を恨み。將軍家に好を通じて居る。これが參れば、門徒の心も、また、振ひ起らうぞ。

源六。元來、門徒どもは、新門樣御爲ならば、生死も念はぬと堅く誓つて置きながら當寺の落月をみると、すぐさま、

かやうに騷ぎ立てまする。不甲斐なき奴らで御座るのう。

敎如。それが人の心ぢや。此度は吾らも、よい學問をといたしたわ。

證誓。將軍家義昭公より更に御消息が御座らぬが、いかゞ、いたし居られまするか、心掛りで御座る。毛利殿の方の相談が首尾よく參らぬと見えまする。

敎如。羽柴秀吉が備中まで攻入つたと云ふ話ぢや。毛利殿も今が懸命の合戰最中であらう。この上、本願寺を援助さるゝ望はまづないと見ねばなるまい。大多和惣兵衛がこゝに參つて居るだけでも過分と思はねばならぬ（間。）我らが賴むは、たゞ、長曾我部だけぢや。あれが參れば、天下に恐るゝ者はない。

賴龍が入つてくる。

賴龍。仰のとほりに取計らひ置きました。

敎如。太儀であつた。

賴龍。只今、毛利家よりつかはされ居りまする大多和惣兵衛が、御眼通りを願ひ出でゝ居りまする。

敎如。眼通りゆるす。これへ呼べ。

賴龍。はつ。（退場。）

證誓。惣兵衛は何を願ひ出づる心で御座らう。

敎如。もし歸國の願であつたら、今暫らく居殘つて貰ふやう說いてみねばならぬ。彼の手には二千の中國勢が居る。只今の二千はなかなか大切ぢや。

光玄坊。惣兵衛の願は歸國の儀で御座る。彼は愚僧に度々、さやうの心を洩らして居りまする。

教如。そちの持場は惣兵衞と、隣りあひぢやのう。

善亮。さやうで御座る。愚僧は堺口の御門、彼は天王寺口の御門をかためて居りまする。

教如。中國勢はやはり門徒と仲がよくないか。

善亮。以前のやうに喧嘩口論はいたしませぬが、やはり何事につけても、白眼み合ふて居りまする。

教如。困つた者ぢや。

頼龍に案内せられて、大多和惣兵衞元直が出てくる。

惣兵衞。（平伏。）御眼通りの儀、早速御ゆるし下され有難く存じまする。

教如。何時もながら出精、新門は忝なう思ふぞ。

惣兵衞。恐入りまして御座りまする。

教如。して、その方の願と申すは何事であるぞ。

惣兵衞。火急の御願、他の儀では御座りませぬ。去ることは主人の小早川隆景より、密々の消息が御座りまして、新門様にも、既に御承知のとほり、織田家の大家備中に打入りし由を申參りまして御座ります。つきましては、甚だ心なき儀のやうに御座りまするが、火急御暇を玉はりたう存じます、御願のために、眼どほりを願ひました次第で御座りまする。御當寺只今の有様を見すて參らせて、歸國いたす事、某に於きましても、心苦しうは御座りまするが、何にいたせ、主の大事で御座る。譜代の家來の身と相成りますると、かやうに他國の空で安閑と暮らしては居られませぬ。某の胸中何卒御推量の上、直刻歸國の儀、おゆるしを願ひたてまつる次第で御座りまする。

善亮。貴殿の御願、御もつともの次第とは存じ申すが、御覧のとほり、當寺は、只今が危急存亡の場合で御座る。殊に

門跡御退去の後は、籠城の門徒も次第に散じはて、一時五萬にあまりし士卒が、今や、わづかに一萬にも足らぬ有様で御座る。それとても、烏合の衆、甚だ、頼み甲斐なき者どもで御座る。然るに、幸にも、かの南海の長曾我部元親が、柄の津に座す將軍家の御懇請によりて、伊豫土佐の兵を以つて、當寺を救ふよしを申して參つた。

教如。惣兵衛。この儀は、まだ何人にも明かさぬ。たゞ、そちだけがきくのぢやぞ。（惣兵衛は頭を低げる。）さやう心得えい。

證誓。即ち、四國の荒武者たちが、當寺へ參るは、もはや間もない事で御座らう。折角、これまで、共々に籠城いたし生死を共にいたせし我々で御座る。どうぞ、それ迄、御待ち下されい。

惣兵衛。教行寺殿の事を分けたる御物語、殊に、陣中、誰一人知らぬ秘事まで打明けての御頼み、惣兵衛、肝に銘じて忘れませぬ。なれど、此處は一つ新門樣に御考を願はねばならぬ處で御座ります。某はじめ當寺へ參り居ります中國勢は皆、毛利の家の數代恩顧の者どもで御座ります。古今未曾有の戰上手と承はるかの羽柴秀吉が、天下の大兵を率いて、備中より因幡に攻め入り、只今は鳥取城を取圍み居る樣子に御座ります。万一鳥取城が落城いたさば、もはや、毛利一家は、枕を高くしては居られませぬ。當寺の難義を見捨て申して、歸國を願ふ惣兵衛が心底、お汲取を願ひ上げまする。

教如。惣兵衛。先刻よりそちの申すところ一々、新門は深く感じ入る。主の難義を見捨てかぬる段、まことにもつともぢや。すぐ歸國いたせとわれらに於てはから申したいのは山々ぢや。併し、當寺も今や、大難に會ふてゐる最中ぢや今そちが二千の中國勢をひいて歸國いたせば、恐らく門徒たちは、臆病風にさそはれて、散々になつてしまふであらう。さすれば、父に反いて、あくまで籠城いたさうと云ふわれらが志は無益になつて、空しく天下の物笑ぢや。そこ

をとくと思案して玉もるまいかのう。（惣兵衞は俯向いたまゝ、返答をしない。致如長く惣兵衞を見つめてゐる。一同不安は刻々につのる。）どうぢやな。惣兵衞

惣兵衞。（無骨に）折角では御座るが、どうぞ御暇を下されい。同じ死ぬるものならば、この惣兵衞は主の馬前で死にたう御座る。

源六。（怒氣を含んで）惣兵衞殿。これ程、事を別けて新門樣御賴みあるは、よくよくの事で御座るぞ。あまりと云へば情ない御返事ぢや。今一應の御思案頼つて賴入る。

惣兵衞。……

賴龍。成程、承はれば、毛利家に於かせられても、此度は難澁の御樣子で御座る。然しながら、毛利の御家は中國の大藩、譜代の勇士が雲の如く居らるゝでは御座らぬか。貴殿一人御歸りなくとも、合戰に事は缺き申さぬ。それに引換へてつ當寺は、たゞ今のところ、知らるゝとほり無人の有樣、殊に、まだ、御主君より歸國の仰せが御座らぬ上は、お止まり下されても義に於て缺くる處も御座るまい。

惣兵衞。按察使法橋の仰せのとほり、主人より歸國せよとはまだ申して參りませぬ。成程某一人當寺に殘りましたとて、合戰に事を缺く事は御座りませぬ。なれど、それは佛心眼の御思案で御座る。當の某の胸中は、なかなか以つて、さやうな呑氣な事では御座らぬ。

源六。（憤然として詰めよる。）惣兵衞殿。お控え召され、

惣兵衞。（飛びしさりて刀の柄に手をかくる。）……

源六。きくに耐えぬ惡口雜言、無禮で御座らう。かくなる上は、もはや武士の意地ぢや。決して歸國はゆるし申さぬ

惣兵衛。（じりじりと後へさがる。）然らば某は刀にかけても歸國いたす。（拔き合はうとする。）

敎如。（一同の殺氣立つのを押靜めるやうに）待て、源六。方々も何事ぢや。座らぬか。

源六。あまりと申せばきゝ分けなき……

敎如。えい。われらが命ずる——座れ。（源六はじめ一同しぶしぶ座る。）惣兵衛。そちの歸國はゆるしてつかはす。さうさう仕度いたせ。さりながら、惣兵衛。肝に銘じて忘るゝな。此儀は敎如に取つて、身を切らるゝより辛い事ぢやぞ。

惣兵衛。はつ。恐入りまする。（涙をふり拂つて）新門樣の御心中、深かく御推量仕りまする。自體この度の歸國は、まことを申せば某の心中では御座りませぬ。召しつれました中國の者どもが、强つて歸國を云張り、いかやうになだめ諭しましても、いつかな聞入れませぬ。果は、一揆にも及ぶ樣子で御座りまするゆゑ、心を鬼にして、御願いたす次第で御座る。御無禮の段はいくへにもおゆるし下されい。

敎如。（思はず嗟歎す。）もはや、士卒どもの心は、さほどまで、この新門を離れてしまうたかのう。（一同言なく。あたりが少しづゝ暗らくなる。）

惣兵衛。御痛はしうは存じまするが、これで御別いたしまする。（雙眼をおさへる。）各々方にも、もはや御眼にかゝりませぬ。御免下されい。（平伏。）

敎如。そちも堅固でくらせ。

惣兵衛（泣く。）。はつ。（靜かに退場。）

敎如。（窓を見返つて）空の色が不思議な赤さぢや。やがて、暴風雨が來やうも知れぬ。次第に暗らくなつて參つた

わ。

（此時、俄かに、祖師堂の外に叫びのゝしる聲が騒がしくきこゑる。致如ぎくりとして）何ぢや。あの叫び聲は。

頼龍。門徒どもが「開山の御影」を拜みたいと申して、迫つて參りましたので、御座りまする。（出て行く。）

外は烈しい騒擾。內では一同が何時となく致如を圍んで、近くよりかたまる。やがて、騒擾が靜まる。頼龍が歸つてくる。大學を縛つてつれてくる。

頼龍。不思議な曲者を捕えまして御座りまする。（大學の髻つかんで、引上げる。蒼而隻眼の大學は、につと人を侮げすむのやうに笑ふ。）

致如。（覺えず乘りいだす。）おゝ、そちは大學ではないか。（大學答へず。）どうして此處へ參つたのぢや。

頼龍。只今。門徒衆を取靜めて居りますると、この祖師堂の緣の下よりひそかに這出づる怪しい曲者が御座りまするゆゑ、捕えさせて見ますると、この大學で御座りました。

致如。（血相をかえて大學に）そちは母上の間者となつて、此處へ忍んで參つたのぢやな。

大學。（また侮げすむやうに笑ふ。）如何にも御推察のとほりで御座る。

致如。（赫怒。）おのれ、ようもほざいたな。打殺ろしてくりやうぞ。

大學。かやうに捕えられた上は、生かさうと殺さうと御身の自由ぢや。もとより塵芥のやうな生命ぢや。惜しいと思ふた事は、近頃ないわ。（眼を閉る。）

源六。新門跡樣に對して無禮の雜言。おのれ、言をつゝしまぬか。

大學。（切齒するやうな聲で苦しげに笑ふ。）何ぢや。新門樣ぢや。（笑ふ。）新門も人間なら、おれも人間ぢや。

諦誓。おのれと新門様とは、自づから位が違ふわ。
大學。四海平等ぢや。人間も鳥獸もかはらぬ。死んでしまへば髑髏ぢや。（また。笑ふ）おれは、その位が氣に入らぬわ。
致如。（冷笑。）それ程、位が氣に入らぬ者が、何で母上に召使はるゝのぢや。
大學。（俯げすむやうな微笑。）御身の母御前は美くしい後家ぢやからのう。
致如。（勃然として）源六。そやつを切捨てい。
源六。はつ。（立上る。また門徒の押寄せる聲が遠くきこゑる。）
致如。（苦悶。）待て。成敗は追つて命ずる。まづ、一間に堅く縛しめて置け。
源六。はつ。（大學を引立てる。）

兩人退場。

門徒たちの騷擾が段々近まつてくる。

あたりはますます暗らくなる。

致如。（暗然として）母上の事を思ふと、心が暗らくなるぞ。……

門徒の騷擾が祖師堂の外で烈しく起る。致如の周圍に一座の人たちが不知不知寄りそふやうになる。扉が開いて、一人の法師が入口に平伏する。

澄賢。（こらへかねて）何事ぢや。
法師。只今、鷺の森の御坊より顯得寺様が御出で御座りまする。

教如。何、實悟殿が見えたと申すか。(澄誓、賴龍と顏を見合せる、)思ひもかけぬ人が見えたものぢやのう。

澄誓。よい事では御座るまい。

教如。何はともあれ、これへ通せ。

法師。はッ。(退場)

やがて、願得寺實悟が現はれる。源六も戻つてくる。

教如。實悟殿。珍らしう御座るのう。

實悟。新門跡にも、御無事で珍重で御座る。やれやれ、今少し早う參る筈であつたが、堺の門徒衆に引止められて、つひ時を過ごし申した。時に寺内の樣子は如何で御座る。變る事も御座らぬかの。

教如。(苦々しげに)寺内の有樣は散々で御座る。貴僧としかと御約束いたし置きたるにもかかわらず「開山の御影」は母上のたくらみで鷺の森にお移り遊ばさるゝ。門徒どもの心は日ましに險しうなつて參る。何にせよ。只今が一番苦しい處で御座る。

門徒の擾亂絶頂に達する。

實悟。ほう。それは御心づかひで御座るのう。只今、愚僧が案内せられて、この祖師堂へ參る道すがら、門徒衆が口々に何かわめきながら、押しよせて參つたは、あれは何事で御座る。

澄誓。「開山の御影」を拜ませいと强訴いたすので御座る。

實悟。門徒衆の心が、そこまで險しうなつたとすれば、まことに容易ならぬ儀で御座る。御身のためにも、早う此處を御引上げなさるゝが、ようは御座るまいかのう。

敎如。いや。この敎如は、斷じて石山は離れませぬ。たとへ、骨が砂利になつてもぢや。

實悟。成程、悧發なやうでも、まだ、新門殿は心が御若う御座る。世の中の事はさやうに堅苦しう考へては、生きては行かれませぬぞ。

敎如。實悟殿。もはや、その御話は無益ぢや。御免かほむる。われらの決心は、たとへ如來の仰せでも變へられぬ。まづ、御用向を承はらうでは御座らぬか。

門徒の聲次第に靜まる。

實悟。さ、それぢや、愚僧がたゞ今、申上げた事が、自然、此度の用向にかゝはつて參るのぢや。

敎如。只今も申せしとほり。その御用ならば、もはや承はるには及ばぬ。御立歸り下されい。

實悟。(きつとして)新門、ようきかれい。此度愚僧が當地へ罷越したる用向は他では御座らぬ。本願寺當代の門跡上人は、新門跡敎如、及び、その一味の者どもを、改めて宗門より勘當いたさるゝ。それを申しつたふる爲に參つたのぢや。

一座動搖。

敎如。御勘當で御座るか。(みるみる内に血相がかはる。悲憤の聲をしぼつて)いや、此期に及んでは、御勘當をうけても我が心はひるがへさぬ。自體、父上は如何なる仔細あつて、かくまで、この敎如を憎ませらるゝので御座るか。なる程、御心にそむいて、この石山に籠城いたした段は、敎如重々恐入る次第で御座るが、これとても、宗門の爲を思ふ故で御座る。阿彌陀如來も照覽あれ、敎如の心には、一點の惱ましい處も御座らぬ。(涙をふり拂ふ。)實悟殿この敎如は、幼少の折より、父上を世にも慕はしう思ふて居りました。只今とて(嗚咽)かくまで無殘な御言を承は

つた只今とて、父上を慕ひまつる心は更にかはりませぬ。

實悟。敎如殿。門跡も、御身をいつくしむ御心は決して御身に劣らぬと、この實悟は推量いたす。たゞ、何事も天下の爲ぢや。血の涙を流して。御身を御勘當なされたので御座る。そこの御思案が肝要ぢや。

敎如。いや、父上はたゞ、われらを憎ませらるゝのぢや。もし、父上に子を思ふ御心が爪の垢ほども御座るならば、かの「開山の御影」を召上げらるゝ筈が御座らぬ。われらは父上にかほどまでに憎まれ參らするが無念で御座る。

實悟。「開山の御影。」の儀は、門跡も我らも、夢知らぬ内に、此處を御動座遊ばされたので御座るぞ。

敎如。もとよりこれは母上の御計らひとは承知いたすが、それならば、何故、再三御願ひいたすにもかゝわらず、當方へ戻し下さらぬので御座るか、それと云ふも、所詮は、敎如を好かせられぬ故えで御座る。

實悟。御身の思案が、憚りながらまだ若いと申すはそこで御座るぞ。かの「御影像」は、淨土眞宗根本の「御影」で御座る。一旦、門跡と共に鷺の森にお移りありしものが、またまた故もなく、當寺へお戻りなされては、宗門の威信にもかゝはり門徒の信心もゆるぎ申さう。成程、當地より移し奉りし手段は、よいとは申されぬ。門跡も心中深かく御憤ほりの御樣子ぢや。さりながら、只今、事を荒立てゝ、かの謀が、外に洩るゝやうの事が御座れば、それこそ一大事ぢや、そこをよう考へて御覽なされい。

敎如。（悲憤）。それにつけても、母上は罪深い御方ぢや。この恨は、敎如決して忘れ申すまじ。

　一人の武士があはたゞしく入つてくる。

武士。申上げます。只今、嚴しく縛め置きました大學が、隙をうかゞい、繩を嚙み切つて、何處ともなく逃げさりいたして御座ります。

賴龍。何、あれ程堅く縛しめ置きし繩を噛切つて逃れたと申すか。（敎如に）御免をかほむり、取調べて參りまする。

（退場。）

武士も退場。門徒たちの擾亂がまた烈しくなる。

敎如。實悟殿。繩を噛切つて逃れたと申すは、母上の間者で御座る。この敎如の身の上を探ぐるために母上がひそかにつかはされし間者で御座る——恐ろしい御心では御座らぬか。

實悟。いかに末法濁世とは云ひながら、御親子の間柄で何事で御座る。勿論、北の方も御心得違いで御座るか、御身とて、北の方に孝心厚うおわさるとは申されぬ、よう、考へて御覽なされ。北の方とて、罪なき者を憎まるゝ事は御座るまい。

敎如。（北の方に對する憎惡と侮蔑とを露骨に現はして）それには仔細が御座る。當地を御退去ある數日前、わが奧庭深き木立の闇にてわれらがかの蘭菊丸を殺害いたせし次を母上は深くお憎みぢや、これより深うはわれらが口からは云はれぬ事で御座るが、生け置いては我家の恥辱と存じ切つて捨てた次第で御座る。その邊の仔細は御推量下されい

實悟。敎如殿。ひたすら理を立てゝ一步も曲げぬ御身の心は結構で御座るが、理になづみ過ぐると、はては淺間しい我執の鬼とならねばならぬ。我らは元來、罪深う生れた人間ぢや。決して阿彌陀如來では御座らぬ。此所を念へば、自づと心の凝りが解けて參る筈ぢや。此度の御勘當とて、やはりさうぢや。當道場の開山蓮如上人の御文章にも「むつかしき題目なんど出來あらん時は、速かに、この在所に於て、執心の心をやめて、退出すべきものなり」とあるでは御座らぬか。實悟は決して悪しうは計らい申さぬ。早う此石山を御立退なされい。さすれば、折をみて、門跡の御心をなだめ奉り御勘當御赦免のために骨を折り申さう。

致如。（悄然として）云はれな、實悟殿。もはやわれら一味の者の心は決し申した。嗚呼がましけれど、致如は、當流の御開山親鸞上人の嫡々で御座る。たとへ父上母上と云へども、無法の仰せに阿容阿容從ひ奉る譯には參らぬ。かゝる上はあくまで石山に立てこもり、父上、もし、「開山の御影」を奉じて門跡とあほがれ玉ふならば、われらも門末の寺々を獨り催ほして、新たに本願寺を開くばかりぢや。

一座緊張。

門徒たちが「御願ひで御座ります。御願ひで御座ります。」と呼ぶ聲が外からきこえてくる。

實悟。こは容易ならぬ事を示はる。宗門の掟を破つて、新たに別派を開かるゝは、謀反と同じ罪過で御座るぞ。

致如。それもやむを得ぬ事と存じ申す。非理非法の兩親の憎しみが、致如を、かくまで墮落いたさせたのぢやとお傳へ下されい。

「お願で御座ります。御願で御座ります。」と云ふ聲が次第に烈しくなる。

賴龍が入つてくる。

賴龍。殘念ながら、大學の姿は、もはや何處にも見えませぬ。

致如。賴龍。また、門徒どもが喧しう申す。取靜めて參れ。

賴龍。そこで御座りまする。折角、御用談中と存じ、威しつすかしつ、さまざまに申しなだめて見ましたが、狂氣の如く湧き立つ門徒どもは、いつかな靜まる段では御座りませぬ。

致如。えい云甲斐なき者どもぢや。然らばわれらが自から參つて、說きさとしてくれるわ。（立上る）

一同變色を現はす。擾亂その極に達す。

頼龍。(袂をひかへて) さりとは輕々しい御振舞、何事で御座りまする。只今、御姿を御見せなされましたら、どのやうな事にならうも知れませぬ。

教如。(凝乎つと頼龍をみる。)構はぬ。離せ。

一同、「口々にお危なう御座ります。およしなされませ」」と云いながら、教如を取りかこむ。

此時、烈しい騒擾と共に、門が折れて祖師堂の扉が開く。門徒たち亂入。

門徒五六人。(敷居の處に蹲まつて) 御願で御座ります。「開山の御影」を拜ませて下さりませ。(口々に叫ぶ。)

教如。(莊然として) 退れ、無禮者奴。(門徒威に打たれて、靜まる。)先日より度々申しきかすとほり、「御影」は確かに御龕の内にある。やがてお鑰さへ見付からば、何時でも拜ませてつかはす。

一座の者どもは太刀を拔きそばめて、教如を守る。

門徒を掻きわけて、第一幕に鎧の倍總をしてゐた叡山法師が三人前に出る。

法師一。(熱狂して) 開山の「御影」は既に鷺の森に御着座と承はる。直賢、此處に御座りまするか。

法師二。(恐ろしき顔付きにて) 此處に御座るならばその證を見せて下されい。

教如。直賢この御龕の内に安置してある。決して僞は云はぬ。(頼龍源文等をかへりみて) 決して太刀を拔いてはならぬぞ。よいか。

法師三。(僞りぢや。此處にはもはや御座らぬと確かに承はつた。

法師一。(斧を提げて立上る。大言に) 地獄に墮ちても構はぬ。「御影」の在所を確めやうぞ。

(亂入す。)

法師二三。それお龕を打ち破れ。(つゞいて亂入。門徒七八人祖師堂に入込む。格鬪。)

法師一は斧を振つて、龕に迫る。

敎如。(こらへかねて叫ぶ。)それ、無法者を切つて捨てい。

光玄坊が太刀を振るつて、法師一を後から袈裟がけに切りさげる。法師一は倒れる。法師二が、その隙に龕に近づいて、扉を打破る。善堯がおのれと叫んでその脇腹を刺通す。法師二死す。

龕の扉が破れた處にしつかり法師三が取りついて、內を覗く、源文がその背中を刺す。

法師三。(刺されて苦しみながら、後を振返つて)空ぢや。何もないわ。(悲痛なる大笑。そのまゝ、ぐたりとなる。)

門徒それをきいて一時森と靜まる。敎如手を以つて顏を蔽ふ。窓に映る夕榮ますます赤く異樣に輝く。

第　三　幕

巨鐘の響が狂亂したやうに鳴りわたる。少時、幕開く。鷺の森別院本堂。規模も少さく、一體に調度、その他も粗末である。中央本尊阿彌陀如來、一側に「祖師骨肉の御影」の粗製の龕。共に扉を開かれてゐる。未明燭台に火を點じ、佛前の燈明も燃えさかつて、晝のやうである。時は、天正十年六月三日、前幕より二年以後の事である。

光佐、顯尊、實悟、覺淳、超乘その他御堂衆、一門連枝の坊主衆が居流れる。

光佐。(晨朝の勤めの讀經を終ふ。)あの巨鐘の響を止めさせい。もはや走せ集まる門徒もあるまい。

法師。はつ。(退場)

遠く、鐵砲の響、斷續。つゞいて喊聲。

超乘。いよいよ刑部が打つて出たやうで御座る。

顯尊。刑部もわづか二百の門徒では、目ざましい働も出來かねるで御座らう。

超乘。刑部が打つて出たといたすと、もはや大手には平井越後の手の者が百人あまり殘つて居るだけで御座る。

光佐。もはや、それだけか。

超乘。法師も門徒も打ちませて、物の役に立つは、それだけで御座ります。

光佐。（沈新に）それではいよいよわれらの最後が近づいて參つた。（顯尊に）そちの母は如何いたした。

顯尊。只今、最後の御行水で御座ります。

光佐。そちは、もはや行水をすませたか。

顯尊。はい。父上の御後で頂きまして御座ります。

法師武者が驅けてきて、本堂の入口に蹲まる。

法師武者。愚僧は平井越後の手の者で御座る。只今、下間刑部殿が、打つて出でられましたが、忽ち寄手の先陣、丹波殿の手の者に押包められて、苦戰の體と見うけまする。越後手勢を以つてくり出し、刑部殿をお救ひいたさうと存ずる。その儀如何で御座らうか。

光佐。控えの勢は何程あるのぢや。

法師武者。一番手の鈴木孫一殿、殘りすくなに打ちなされて、只今城内では休息中で御座りまする。控えと申してはその他には御座り申さぬ。

光佐。よし、孫一が居るならば、直ちに打つて出でい。

法師武者。承知仕る。（驅けて退場）

烈しい銃聲

光佐。常樂寺。織田勢は一萬をこゆるであらうのう。

超乘。さやうで御座る。濱手、山手を合せて一萬四五千は確かで御座ります。

光佐。それに引換えて、味方はわづか七百に足らぬ烏合の衆ぢや。もう一時とは持つまい。昨夜申しきけたとほり、最後の用意をいたせ。

超乘。かしこまつてござる。然らば防矢を仕る者どもにその趣傳へて參りまする。（退場。）

侍者。はつ。

光佐。そちは下人どもに、この本堂の周圍に薪を積ませい。あるだけの薪を殘らず積まするのぢや。

侍者。はつ。かしこまりました。（退場。）

光佐。（瞑目して）いよいよ、寄手が、城内に亂入いたすを合圖に、誰でもよい。この本堂に火をかくるのぢや。いやかやうな時には得て、うろたへるものぢや。（眼を開いて一座を物色する）覺淳。御身に賴み申さう。

覺淳。（たゞ、頭を低げる。）……

光佐。しかと賴み申すぞ。

覺淳。承知仕る。

光佐。（實悟をかへり見て）生きながら、荼毘の灰とならうぞ。

一座甚深なる感動をうく。

實悟。（涙を押えて）この實悟は、はや九十に餘る年で御座る。さまざまの世の相も見て參つたゆえ、餘生をむさぼる

心は更に御座らぬが、門跡はまだ四十にもなられぬ。かやうな亂世に生を受けられ幼少の機より、雖儀な事ばかりなめて來られた。いよいよ御最期と思へば、たゞ、御痛はしう御座る。

光佐。いやしくも一宗の束を司どるわれらが宗門と共に果つるは當然の義理で御座る。たゞ、われら何んとも諦らめかねるは、石山籠城以來、幾千とも知れぬ門徒衆の生命を失はせた事ぢや、所詮われらは淨土に往生は出來まい——いかに如來の慈悲が廣大無邊ぢやとは云へこの罪業を償ふ事はむつかしう思はるゝ。

覺淳。それは門跡御一人の罪では御座らぬ。

光佐。いや、われらのこれまでの生涯を思へば、恐ろしい惡業のやうな氣がいたす。所詮、かほどまでに亂れ果てた世の中に、宗門をひろむるのぢや。降魔の利劍をふりかざして身を守り人を押え、この國土の上に眞宗一流の政を敷かねばならぬと、かう思ふたのがそもそも過りであつた。

實悟。如來の慈悲は廣大にして、如何なる惡人も攝取不捨と承はる。石山は一年の合戰に生命を失ひし門徒衆は、いまや、寂光淨土に往生して、門跡のお出を待ち居るで御座らう。

光佐（珠數を爪ぐつて）門徒たちの斷末魔の聲がまだ耳に殘つて、正念の往生を妨げ申す。南無、阿彌陀佛、南無、阿彌陀佛………

（超乘が戻つてくる。）

超乘。門跡の仰せ。大手、搦手の大將に傳へて參りました。

光佐。御苦勞ぢや。

（覺淳がこの時、突然泣き出す。）

光佐。如何いたしたのぢや。（不興げに。）心が怯れたか。

顕尊。いや、決して怯れはいたしませぬ。父上。御ゆるしなされて下さりませ。私は兄上に御眼にかゝりたう御座りまする。

（一座皆泣く。）

光佐。（思はず涙をハラハラとこぼす。）興門。もはや、それを申すな。

顕尊。はい。（唇をかんで泣く。）

光佐。強いて烈しくあくまで親に反いて、宗門に別派を樹つる勘當者が、そちはそれほど慕はしいか。云甲斐なき奴ぢやのう。

顕尊。もはや、死なねばならぬ身で御座りまする。たゞ、一眼お眼にかゝりたう御座りまする。（泣く。）

光佐。（手で顔をおさへる。）愚者奴……

（大寂寞。やがて。銃聲、つゞいて烈しい喊の聲がきこえる。）

（北の方が、眞蒼な顔で阿茶丸をしつかり抱きしめて急いで出てくる。腰元三四人恐ろしさうに、ひたと北の方の後について現はれる。）

北の方。わが夫。つねの居間は危うて居られませぬ。たゞ今、行水を致して居りまする間にも、濱手の方より飛んで參り敵の流彈が、幾つとなく間居を打貫きまする。

覺淳。いよいよ敵が間近くよせて參つたと見えまする。

超乘。少進仲之が少づかの手勢で防いで居りまする。

實悟。濱手の敵の大將は誰で御座るか。
超乘。三七信孝殿と見受け申す。
實悟。然らば濱手の人數は、山手の方より多勢で御座らう。いや、われらもかやうに安閑として死を待つより濱手御門へ參つて仲之に力を合せ防矢の一筋も仕らうでは御座らぬか。
超乘。いかさま。顯得寺殿仰せのとほりぢや。各々方。參らうでは御座らぬか。
（御堂衆、一門の坊主衆一同立上る。）
坊主衆の一人。いざいざ、御伴仕らう。
（一同退場。）
（光佐と北の方、顯尊、阿茶丸、腰元たちだけが殘る。）
實悟。（本堂の扉の外にて）東の方が白んで參つた。やがて夜も明けやう。
光佐。（獨語）夜の明くる時がわれらの身の終りぢや。腰元たちが聲高く泣出す。
北の方。（險しい顔色にて）これ、見苦しい。何事ぢや。靜かにしや。
侍者。（戻つてくる。）仰せのとほり本堂の周圍に薪を積ませまして御座りまする。
光佐。そちは表へ參つて、合戰の樣子を見張りいたせ。いざと云ふ時は、馳せ戻つて顯證寺と共々に薪に火を點くるのぢや。
侍者。はつ。かしこまりました。（退場。）
光佐。（北の方に）敵が亂入いたしても見苦しうないやうに奥殿の方は取片付けて參つたであらうのう。

北の方。はい。仰のとほり、取片付けて参りまして御座りまする。

光佐。（深い眼差で凝乎つと北の方を見る。）この上はたゞ、心静かに最後の時を待つばかりぢや、

顔俯眼を俯せる。腰元たち、また泣く。

北の方。（歯を喰縛つて）はい。（北の方にしがみついてゐた阿茶丸が、突然、泣叫ぶ。）静かにするのぢや。阿茶丸。

光佐。阿茶丸をこれへおこせ。

北の方。はい。さ、父上の御側に行きや。

阿茶丸。父上。（わつと泣きながら、光佐にしがみつく。）………

光佐。（凝乎つと阿茶丸を見つめる。身を顫はし聲をうるませて）阿茶。もう泣くな。われらが、何時までも抱いてゐてやらうぞ。

阿茶丸。死ぬのは厭ぢや。父上、麿は死にたうは御座りませぬ。（泣く。）

北の方は顔を袂でかくす。

光佐。これ、阿茶。よい子ぢや。さやうにむづかる物ではない。この父も母も、みな、ともども浄土へ行くのぢや。如来さまが可愛がつて下さるぞよ。

阿茶丸。恐い――麿は恐いのぢや………

光佐。（北の方に）阿茶はまだ、物心もおぼえぬ幼子ぢや。火に焼かれ、烟にむせんで、泣狂ふ姿を見ては居られぬ。われらが最後まで、抱きすくめて居らうず。

北の方。（顔を上げる）何と仰せられまする。

光佐。（悽い顔付になる）最後を亂さぬやう。わが腕できびしう阿茶を抱きすくめて置くのぢや。

阿茶丸は光佐の心を感じて、前から悶えてゐたが、此時、懸命の力を振つて、光佐の手から逃れ、母にしがみつく。

阿茶丸。（泣きながら）母上、私は父上が恐ろしう御座ります。

北の方。（阿茶をやさしく抱きしめて）わが尖。

光佐。（迫る）阿茶をこれへ。おこせ。

北の方。いえ、上げられませぬ。（ハラハラと涙をこぼす）何でそのやうな無慈悲な事が出來ませう。阿茶丸は私の最愛の子で御座りまする。

光佐。おこせと申すのぢや。

北の方。（憎しみの眼で、凝乎と光佐を見つめる。）厭で御座りまする。阿茶を手放しては、私は死なれませぬ。

光佐。（悄然として）またしても、われらに逆ふ——おのれ、おこさぬと、かうしてくれるぞ。（立上る。）

北の方。（悽く笑ふ）何れにしても死ぬる身で御座りまする。思ふとほりになされませ。たゞ、阿茶だけは死んでも離しませぬぞ。

光佐は飛びかゝらうとする。

顯好。（見かねて泣きながら）母上、何事で御座りまする。此期に及んでの御爭は、往生の障になりまするぞ。罪深い事とは思されませぬか。

光佐。（男泣になく。）生死の境まで、現在の妻とかやうに悩み合はねばならぬとは、何と云ふ罪ぶかい宿業ぢや。

喊聲また烈しくなる。

傷ついた一人の武士が驅けて出て來る。

武士。大手の大將刑部賴廉申上げまする。敵はもはや、逆茂木を打破つて、御門の塀際までひたひたと押寄せ申した。遲くも半時とは持つまいと存じまする。最後の御用意遊ばされませい。

光佐。（きつとなる。）心得たと申せ。必ず氣を落とすな。最後の一人になるまで防矢仕れ。

武士。はつ。承知仕る。然らば御免。（退場。）

大砲の音がやゝ遠く二三發きこえる。賓悟と覺淳が戻つてくる。

賓悟。もはや、濱手の御門は危ふく御座る。防矢仕る者も、僅か五十人程になりました。それとても、寺内に召使はるゝ雜人原を狩り集めた後詰の勢で御座れば、所詮たのみにはなりませぬ。

覺淳。寄手もさすが攻めあぐねて、只今の處は、一丁ばかり引退ぞき、呼吸を入れてをります。もはや御最後の御仕度と存じ、先刻の御賴みを思出して、新に火をつくるために戻つて參りました。

光佐。然らばいよいよ最後ぢや。（腰元たち聲高く泣く）

大砲の響が、近く二三發鳴り響く。

阿茶丸。（泣出す。）

北の方。これ、靜にしや。よい子ぢや。この母が抱いてゐるのぢや恐ろしうはないぞよ。

賓悟。夜が明けて、あたりが明るうなつたので、海上を警しむる九鬼の軍船より、大砲を發ちまするのぢや。

覺淳。（恐ろしげに）城崩し國崩しとやら名づけ申して、雷のやうに鳴るゝ物を打碎きまする。

光佐。願證寺。御身は薪に火をつくる前に、この本堂の外に廻つて、扉をことごとく閉め、釘を打ちつけて置くのぢや
發淳。何と仰せられまする。釘づけに致しまするので御座りまするか。
光佐。さうぢや。
　腰元たち色を失なふ。
發淳。（力なく）承知仕る。（退場。）
光佐。（腰元たちに）もはや何としても逃れられぬ。不便ではあるが、そちたちも覺悟いたせ。（實悟と顯珍に向つて）
火が廻つて參るまでの間、臨終の正念を亂さぬために、共々に、彌陀の和讃を唱へやうでは御座らぬか。
實悟。（深刻なる顏付で）生きながら、如來の引接に預りたてまつる御心ぢやな。よい思付きと存ずる。
光佐。（顯珍に）そちも仕れ。
顯珍。かしこまりました。（哀願する。）母上。せめては後世安樂のため、共々に、唱へ奉らうでは御座りませぬか。
　扉の外より釘を打つ音が心を通すやうに響く。腰元たちは耳をおさへて顫いゐる。
北の方。（わが身内に釘を打たるゝやうに苦惱す。）……わが身は、阿茶と共々にのたうちまわつて苦み死をするのぢや
實悟。（周圍の光景を見聞きせぬやうに眼をつぶり合掌して）南無阿彌陀佛。々々々々々々
光佐。（澄んだ聲で和讃を唱へはじめる。）
　無明の長夜をあはれみて、
　法身の光輪、きはもなく、

牙礙光佛としめしてぞ、
安養界に影現する……

一同これに和す。念佛稱名、
扉の外に烈しい擾亂の聲、素破とばかり一座は最後の大緊張をしめす。
腰元たちも立上つて、恐しい恐怖の叫びをあげる。—扉をたゝく音。
實悟。(大聲に)敵が亂入いたした。(思はず立ち上る。)
光佐。(思はず顯如を相抱く。眼を爛々と輝かしてひたと扉の方を見つめる。)神經的な叫び火ぢや。早く——火は如何がいたした。

北の方は切れるやうに阿茶を抱きしめて、眼をつぶる……
烈しい聲、人聲。扉が破れる。「父上。」と云ふ帛を裂く叫がきこえる。堅く鎧ふた教如が轉ぶやうに入つてくる。つゞいて教行寺澄誓。按察使法橋賴龍、栗津源六が、同じやうに甲冑をよろうて入つてくる。源六は傷を負ふてゐる。

光佐。(少時は氣付かぬ樣子。凄い顔付で鋭く。)誰ぢや。何者なれば、さやうな狼籍をいたすのぢや。退がれ。退がれ。
教如。(跪づいて)父上、私で御座ります。教如で御座ります。
光佐。教如(かう云ひかけて、凝乎つと教如の顔を覗くやうに見る。少時、思はず叫び聲を上げる。)教如ぢやおゝ、
そちは教如ぢや。
教如。父上。(かう云つたまゝ、硬ばつたやうな顔付で、凝乎つと光佐を見る。やがて、その表情が破れて、涙がハラハ

ラとこぼれる。壁をうるませて)教如。嬉しう存上げまする。………
光佐。おゝ、よう戻つて參つた。(涙を押拭ふ。)
顯尊。(教如の側ににじりよる。)兄上。
教如。興門。父上はじめ、そなたにも計らずも今生の内に再び廻りあふて、嬉しいぞ……
顯尊。(泣く。)兄上の事を思はぬ日とては一日も御座りませんでした。
教如。(顯尊の手をしつかり握つて)天下廣しと云へども、只今、われらをさほどまで思ふてくるゝはそなた一人ぢや——その志 教如は決して忘れぬぞよ……
實悟。(がつかりしたやうに)教如殿。よい時に戻つて來られた。見らるゝとほり、本堂の扉をことごとく釘にて打ちつけ、外より火をかけんといたし居つた處で御座る。今一時遲くば、もはや今生の内には御眼にかゝれぬ筈で御座つた。(涙をおとす。)
教如。(手に顔を埋めて)われらは仕合者で御座る——如來は、まだまだわれらを見離し玉はぬ……
光佐。そちが戻つて參つたので、親子一門、打ちそろうて、彌陀の淨土へ參らるゝ。(しげしげと教如の顔をみる。壁を曇らせて。)やつれては居れど筋骨もたくましう天晴の男になつたのう……
教如(心弱くなる。)父上、この二年が程は、教如も、これまで覺えぬ辛苦を致しました。(泣く。)
光佐。(耐らなくなるのを凝乎つと耐えて、わざと強く 親に反いたよい見せしめぢや。
教如。(泣きながら)この期に及んでも、まだ、それを仰せられまするか。それ程までに、この教如は親の憎しみを負はねばならぬとは、よくよく因果な生れで御座りまする。

顯尊。（ハラハラして）父上。只今が、一門の者どもの身の終りで御座りまする。兄上の罪をお咎め遊ばすことをどうぞおゆるし下されませ。顯尊、身にかへて御願いたしまする。

光佐。（泣く。）これ、顯尊、そちには、この父の心が分らぬかわれらは決して教如の罪を咎むるのではない――わが子がいと愛しいのぢや。所詮わが者と思へばこそ、かゝる愚痴も出るのぢや………

教如。（泣く。）父上、どうぞ、おゆるし下されませ。今までは父上の御心がこの教如には何としても分りかねたので御座ります。さればこそ、一昨年以來勿體なくも父上を恨みたてまつり、荒びはてた心を以つて、諸國を流浪いたしたので御座りまする。

光佐。教如。もはや、何れにも參るなよ。

教如。はい、かしこまりまして御座りまする。

光佐。（神經的に笑ふ。）いま死ぬる身ぢや。もはや參らうとて、參られぬわ。

一座皆泣く。

大砲の音、喊聲。

教如。（聞耳を立てる。決心をハツキリ顔に現はして）もはや、最後の時で御座ります。あの喊の聲には、勝ちほこつた寄手の勢がみなぎつて居りまする。（阿茶丸を抱いたまゝ、教如をわざと見ないでゐる北の方の側に寄る。）母上不孝な教如は、長い間、母上にも御歎きをかけました。おゆるし下さいませ。（凝乎つと北の方を見る。萬感胸にあふれて、自然と涙が出て來る。教如聲をうるませて）さ、母上、最後の御別れで御座りまする。どうぞ、ゆるすとたゞ一言、仰せられて下さりませ。

北の方。（熱し切つた冷やゝかさで）父上に栖ついて、門末の寺々を集め、宗門に謀叛をいたす程のそなたぢや。この母のゆるしなどは、望みではあるまい。

敎如。（顔を手で覆ふ）あゝ、やはり御心は前と變らぬ。母上、どうぞ、おゆるし下さいませ。御憎しみを負ふて冥途へ參るは、罪深い事で御座ります。

顯尊。母上。どうぞ、兄上をおゆるしなされて下さりませ。

北の方。（淡い微笑）阿茶、そなたと二人で、焔に燒かれて、抱合ふたまゝ死にませうぞ。（頬づりを烈しくする）

光佐。（耐えかねて）鬼畜にも劣つたる心根ぢや。その心を改めずば、淨土には參られまいぞ。

北の方。（泣くにも泣けぬ苦しみに身を顫はせて）かやうな淺間しい心根には、何人も好んでなりはいたしませぬ。鬼畜に劣つた心は、生きながら地獄に落ちた苦しみで御座りまする。

光佐。それはそちが自づから求めたのぢや。

北の方。（泣く）現在のわが夫にさへ知られぬわが身の心ぢや。呪はしいはこの世の中ぢや。

矢叫びの聲が突然、大きく響きわたる。

覺淳。（入り來る。大聲に）いざ。御用意遊ばしませ。もはや、寄手は一の木戸を打破りました樣子で御座りまする。

大恐怖、大叫喚、光佐は立つて、「開山の骨肉の御影」を取出し、しつかり抱く、北の方は阿茶を抱きしめたまゝ俯向く。敎如は顯尊と手を取り合ふ。腰元たちは人心地なく突伏してしまふ。賴龍源六は互に刺違へやうとして、刀を拔く。賓悟と澄誓は瞑目、念佛——阿茶の泣聲が、高く響く。

少時。

下間刑部頼廉が入つて來る。

頼廉。不思議に御座りまする。只今、寄手の面々が、既に一の木戸を打破つて、ひたひたと城内に入こみ、もはや、かうよと見えました折から、如何なる仔細か、そのまゝ足並をみだして、遠く城外へ引さりまして御座りまする。

光佐。(ほつとして)何、引去つたと申すか。

超乘が呼吸を切つて駈けてくる。

超乘。御喜びなされませ。敵は、もはや退散いたしまして御座る。

光佐。(覺悟をかへりみて)然らば、新手が寄せて參るまで、生命がのびたのぢや。

頼廉。いや、これには何か仔細が御座らうかと存ずる。既に一の木戸を打破りし上は、新手を入れかふる迄も御座りませぬ。そのまゝ亂入いたすべき筈で御座る——それを俄かにあはてふためいて、引去りましたは、察するところ、當寺に味方の者が、寄手の後より、ひそかに攻めかかりましたるかと思はれまする。

光佐。織田殿の威勢、海内を壓するこの頃の時節に、當寺に加擔する大名もあるまい。

教如。私は四國の長曾我部にかくまはれて居りましたが、京よりの間者が戻つて參りまして、織田殿大兵を以つて四國討伐の御仕度中と申しましたゆえ、かねがね惱ませらるゝ本願寺ぢや。鷺の森は道筋にも當ることゆえ、危ならうと存じ、すぐさま、志の大名たちに加勢を求めましたが、應ずる者とても御座りませんでした。

光佐。大手搦手共々に引去るとは不思議ぢや。併し、油斷はならぬ。やがて、前に倍する勢を以つて寄せて參らうずるぞ。

法師武者が駈けてくる。

法師武者。鈴木孫一申上げまする。寄手は既に影も形も見えぬまで引去りましたが、直ちに後を慕ふて、追撃いたしませうや。

光佐。いや待て。――敵は如何なるたくみがあらうも知れぬ。決して早まりてはならぬと云へ。

法師武者。はつ。かしこまりました。（退場）

教如。かほどまで取圍みたる軍勢が俄かに旗をまいて立去るとは、よくよくの仔細と覺えまする。（澄賢をかへりみて）われらが敵の圍みを打破つて、此處まで參るにさへ一方ならぬ難儀をいたしたの。

澄賢。何にいたせ。貝塚、丹の輪あたりより此方には敵の後詰の者どもが、みちみちて居りまする。

大學が血だらけになつて本堂の扉から覗く。

北の方。（眼早く認めて）おゝ、大學、何時戻つたのぢや。

大學は本堂に入つてくる。

大學。皆お揃ぢやな。（苦しげに笑ふ）北の御方、御喜びなされい。信長は死んでしまうたわ。はは……

光佐。大學、何と申す。織田殿が死なれたとは、そりや誠か。

大學。（悔げすむやうな微笑）われらは大身の人たちのやうに僞は云はぬ。一昨夜、京の本能寺で、明智光秀に襲はれて、腹切つてしまはれた――血なまぐさい有樣であつたわ。はは……

教如。明智光秀に――むゝ、謀叛ぢやな。

北の方。（狂氣して）わが夫――みなみな助かりましたぞ。

光佐。おゝ、命拾ひをいたしたわ。（立上る。」

一座動揺。腰元たちがわつと泣出す。

鈴木孫一が足に傷を負つて、出てくる。

孫一。只今、御注進いたしましたとほり、うらゝかな朝日影に小手をかざして見渡しましたが、もはや、寄手は影も形も見えませぬ。まづ、これで、暫らくは、呼吸をやすむる事が出來まする――早速、物見の者をつかはし置きましたゆえ、やがて寄手の樣子は相知れませうと存じまする。

光佐。孫一、(ハラハラと涙をこぼす。)喜べ。織田殿は一昨夜、御自害ぢや。

孫一。何と仰せられまする。

大學。右大臣の位に上つて、天下にはびこつて居つた信長も、明智光秀の恨みの刀に刺貫かれて、死んでしまふたわ。われらはこの眼でよう見て參つたのぢや。人が何百人となく傷を負ふたり死んだりいたして、それは快よい有樣であつたわ。(歯を喰ひしばるやうに笑ふ。次第に顔が蒼ざめてくる。)

孫一。(狂喜)うれしや、われらは救はれ申した。(かう云つて、孫一は跛を引きながら、聲を張上げて唄ひ舞ふ。)

あら、目出たやな、目出たやな。

法敵亡びて、萬々歳

淨土他力の宗門は

末廣がりに御繁盛……

光佐は「骨肉の御影」を龕におさめ合掌禮拜する。

北の方。阿茶。そのやうに顫ふ事はない。もはや死ないでもよいのぢや。

阿茶丸。死ないでもよいなら贅はこれから、柔なしういたしまする。(北の方の胸に顔を埋める。)

北の方。(涙ぐんで)おゝ、可愛ゆい言を云ふて。——母は悲しうなりまするぞ。

光佐。(合掌瞑目してゐる實悟をかへりみて)願得寺。この開山の御影ほど、さまざまな難儀にお合ひなされた御影は御座らぬのう。

實悟。さようで御座る。わが父蓮如上人の御時に、叡山の法師に襲はれ、小さき灰小屋の内に忍び不思議に助かり玉ひしも、この御影で御座る。南無阿彌陀佛々々々々々……

仲之が出てくる。

仲之。只今承はれば、織田殿、明智に襲はれ、本願寺に御甍去の由、何とも夢のやうで御座る。これで宗門はいよいよ御繁盛、祝着至極で御座りまする。(平伏。)

光佐。おゝ、そちたちにも苦勞を見せたが、もはや萬々歳ぢや。

北の方。(大學に眼をつけてゐる)大學、どういたした——傷を負ふたか。

大學。只今當寺に參るため寄手の陣中を驅けぬけて參るとき、劍を以て脾腹を突かれ申した。いや、惜しい生命でも御座らぬ。死んでしまへば、何人も髑髏ぢやはは……

教如。刑部。

頼廉。はつ。

頼廉。されば……二百も居りませうかと存じまする。

教如。(思案する。)二百か……父上、御頭に御座りまする。

教如。味方の軍勢は何程殘つて居るのぢや。

光佐。何ぢや。

教如。宗門の恨みは、織田殿一人では御座りませぬ。石山以來、味方を苦しめし織田の士卒を、たゞ阿容阿容、このまゝ歸しては、教如、何としても腹が癒えませぬ。何卒二百の門徒をお借し下されませ。まつしぐらに敵を追ふて、志氣の弛んだ奴原を皆殺しに致してくれませうと存じまする。

光佐。(烈しい憎惡の眼で、教如をみる。)何と申す。そちはこの上、人を殺したいか。

教如。恨ある奴原を生かしては歸されませぬ。

光佐。(勃然として)默れ。教如。そちの心には夜叉が宿つてゐるぞ。やうやく萬死の內に一生を得て、愁眉を開いたところぢや。今、われらには、敵も味方もない——たゞ人間がいとしいのぢや。法敵の大將織田殿でさへ、もし、生きて居らるゝならば、手を握つて、涙ながらに物語をいたしたいと思ふくらひぢや。それに何ぞや、修羅の心を忘れず舊き憎しみによつて、逃げゆく者を皆殺しに致さうとは、宗門の者の心ともおぼえぬ。やはり、そちは母の心を受けついで居る。もはや、われらはそちを見棄てた。七生まで勘當いたすぞ。

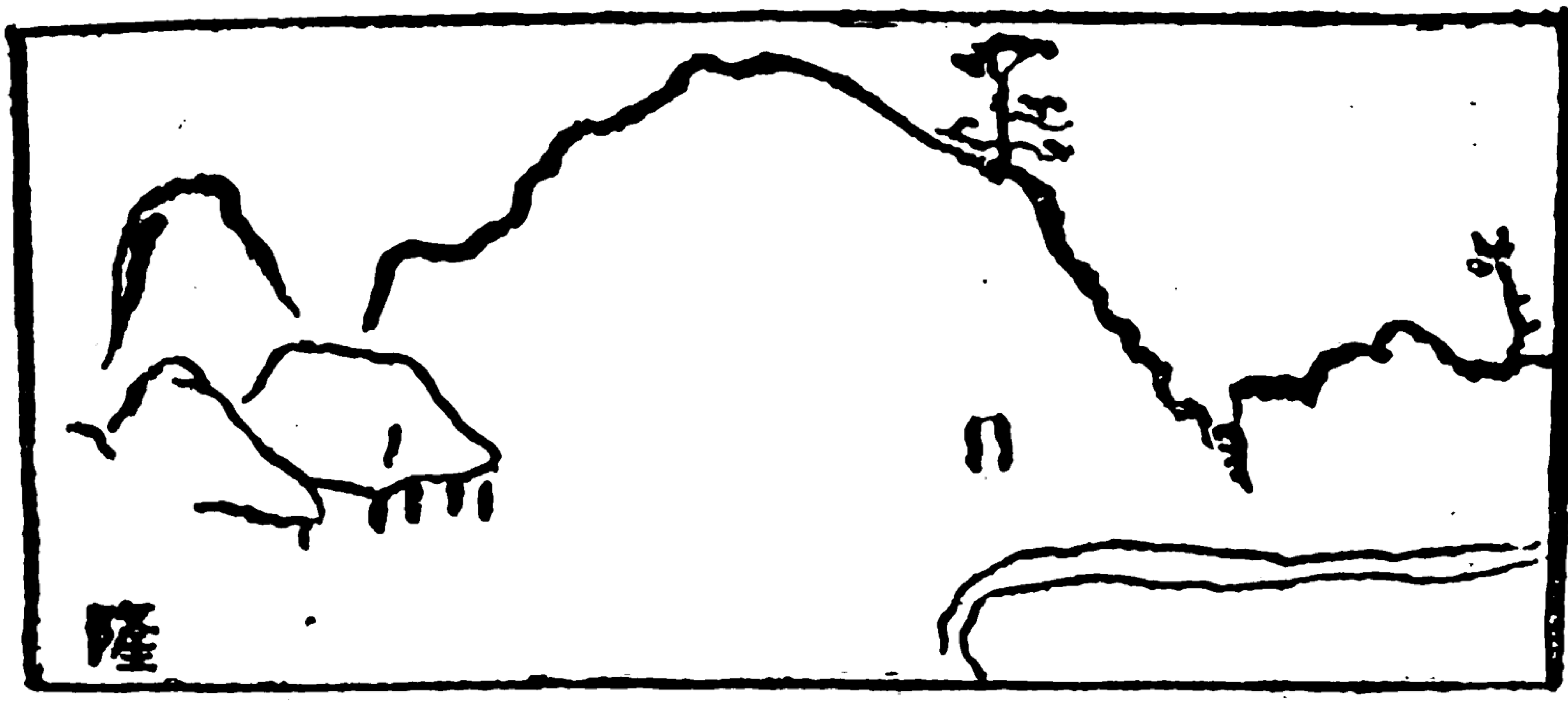
大學。(狂氣のやうに、蒼ざめた顏で笑ふ。)…………

(やがて大學は力なく倒れて死んでしまふ。)

顯尊。(泣きながら)父上、あゝ兄上……

覺悟。(合掌したまゝ顯尊に向つた)興門、よう、御聽きなされい。人間が、かやうに憎みあひ、抱きあふのは、如來の下された深い謀で御座る——何ともわれらの力には及ばぬ事ぢや…………

—幕—



或る男

武者小路實篤

A。君の「ある男」は半年程休んでゐたね。もうやめたかと思つたら又かくのか。

M。さうだ。僕はもう少しおちつきのいゝ處までかいて一先づやめるつもりだ。自分が結婚する處でやめるか、自分が新しき村の仕事を始める處でやめるか、自分は新しき村を始める所までかくつもりでゐるが、まだはつ切りわからない。

A。新しき村を始めてからもう五年になるのだらう。

M。さうだ。

A。現在までかいたらいゝぢやないか。新しき村の仕事を始めてからいろ〳〵のことがあつたらう。そして誤解されてゐることも多いだらう。

M。しかし新しき村の仕事はまだあまりに初歩だ。だん〳〵生長して來てゐるが、あまりに中途だ。今迄に失敗してゐたなら又かくのもいゝだらう。又ある所まで成功してゐるのならそれもいゝだらう。しかしもう二三年たゝないと書いてもゝのにならない。だから新しき村の土地さがしに出る處か、土地がきまつた處まで

で、一たん筆をおからうと思ふ。しかしそれは思ふやうに仕事が出來た話だ。それに、他にやりたい仕事が出來たらその仕事の方をさきにしたく思つてゐる。「或る男」のやうな作は時間さへあれば、どんな時でもかゝらうとすれば書けるものだ。處がある種類のものは、ベルリオの作曲する時のやうに、一寸姿を見せた時につかまへないと二度とつかまへることの出來ないものだ、さう云ふものが、姿を見せた時は「或る男」はさしおいてそれをかゝないわけにはゆかない。さう云ふものが姿を見せない限り、つゞけてかいてしまうつもりだ。もう半年もかゝつたらかきおへるだらう。それも一方他の仕事をしての話だ。この仕事だけにかゝつてゐると、頭が窮屈がつて欠伸を時々したがる。自分はこゝに自分の傳記をかくのが目的ではない、元より自分のこまかい經驗をかくのが目的ではない。すべての花が自分を通して、日光の内にある色を表現するやうに、自分は自分を通して自分をつくつたものゝ意志を見たく思ふ。

A。君の所謂人間性を君の内面生活を通して表現したいと云ふのだらう。

M。俺は自分がどの階級に屬してゐるか知らない。俺の父や母は公卿の家に生れた。しかし二人の母は共に百姓の娘であつた。俺の血の内にはどんなものが交つてゐるか知つてゐる人は手を上げて見るがいゝ。俺は知らない。しかし俺の育ちは、今迄にかいて來たやうな有樣だ。しかしどつちにしろ自分は人間だと思つてゐる。階級的な根性も持つてゐるだらう。しかし人間だと云ふことは更に事實である。勿論、俺と云ふ人間は、母に云はすと偏人で、或る友達は「氣違ひの理窟づけ」だと云つたさうだ。自分では自分程人間らしい人間は少ないと思つてゐるが、他の人に云はすと少しかはつてゐるかも知れない。しかしかはつてゐるとしたら他の人はまだ人間になれ切れない所を俺より多く持つてゐるからにすぎないと思つてゐる。ともかく僕の言葉の方が人間にはわかるはづだと思つてゐる。

A。まあ効能書きはあとにしてもらはう。ともかく君の自信の強い點は仕合せだ。思つた通り、かいて見るさ。つまら

なかつたらすてられるだけの話だ。

M。俺は何と云はれても、俺の言葉切り出せない、俺の頭はつくられた通りに切り動かない。だからどんな批評家が出どんな讀者が出て來てなんと云はうとも安心してゐられる。俺のものもよろこんでくれる人がある方が不思議な位いだと一方思つてゐる。又一方人々はよろこんで讀むべきはづだとも思つてゐる。まあ云ひわけはこの位いにして、あとは出來上つた仕事の結果で見てほしい。俺は自分のことをかいてゐることをよく忘れる。たゞ一人の男、彼のことをかいてゐると思つてゐる。

A。一寸待つた。君はこの前何處までかいた。

M。それは彼が札幌にゐて、初戀の人にあつてよはつてゐる所に、彼の作を辯護士の立場に立つてゐるやうな人から價値のない、頭の悪い作にあつかはれてまいてゐるのを、彼の友達が慰めてゐる處までかいた。それから彼はどうしたかを之から書かうと思ふのだ。

A。うまくかき玉へ。

M。なか〳〵易しさうでむづかしいので困つてゐる。何しろ十二三年前のことだからその時分の實感がいかすのには創作慾が強く燃えてくれないと、粗雑になり易い。其處がむづかしい、しかしその方は專門だから、不可能なことゝは思つてゐない。その世界に入りこめばいゝのだ。三十九の男より二十五六に若かゞへれ。

一三五、

落ちつけない彼は短い詩のやうなものをよくかいた。彼はそれを發表した時、和辻氏から詩だけはやめてもらいたいと云はれた。しかし彼は自分に元氣を與へるためにかゝないわけにはゆかなかつた。

「自分に自惚れろ、自惚れろ、
傲慢になれ、傲慢になれ、
君は小さくならなくつていゝ、
どん／＼進め。
かう云つてくれる人がある、
自分の目に涙があつた」
彼は又こんな詩もかいた。

「我は今の日本に
悲觀すべき理由を認めず
今の日本を以つて
最も面白き國と思ひ居るなり
日本が思想上偉大なることをなし得る時は、
この五十年の内なるべし
我はしか信ず、しか感ず。
日本に、ゲーテ、シルレル、
エマーソン、ホイツトマン
ドストエフスキー、トルストイ、

イプセン、ビヨルンソン
メーテルリンク、ベルハーレンの
生れるは今なり、
若き國、目覺めつゝある國、
オ、ソリチーのなき國こそ
樂しけれ。」

彼は之を本當に感じてゐた。あはよくば、自分はその一人になりたい。傷ついた弱蟲の彼の内には、この力は消えない。ますく其處に彼は生る道を見出す。

「百里歩かねばならぬ人と、
千里歩かねばならぬ人とは
自づからその歩き方がちがはねばならぬ
その意氣組がちがはねばならぬ」

彼は六月の始めには神田さんと一緒に東京へ歸つてゐた。

彼は札幌では何にもしなかつた。夜學校の先生になる氣はなくなつてゐた。しかし彼はこの旅行を忘れることは出來なかつた。

彼はこの旅行によつて武郎さん夫婦に感謝した。又神田さんと親しくなつた。しかしそれ以上彼は鍛えられた。彼は涙の谷を通つたので。

彼は東京へ歸る日お貞さんに東京へ歸ることを知らせた。それは彼が小樽の停車場を通過したあとでお貞さんの手に入るわけであつた。

彼はどの位いお貞さんに逢ひたかつたゞらう。だがそれからさきを恐れた。その上に彼には彼女（たか子）がゐた。大概駄目にはきまつてゐたが、彼はまだそのことを思ひ切つてはゐなかつた。お貞さんからは東京へ手紙が來た。それには停車場までゞもお送りしたかつたのにとかいてあつた。又もう一度來て戴けると思つてゐたと書いてあつた。彼は殘念に思はないわけにはゆかなかつた。しかし外に仕方がないと思つた。そしてお貞さんの手紙は彼をよろこばした。その後二三度彼はお貞さんと文通した。そしてお貞さんが「あのへガキのことはもう何とも思つてゐません」と云ふ意味のことを手紙にかいて來た時、彼はがつかりした。このことは前にかいたはづだ。

一三六

彼は東京ではます〳〵友達の處を歩きまわつた。彼は友達と逢ふと元氣になれた。又仕事の出來る時に彼は元氣だつた。白樺はつゞいて出た。損はしてゐたが、少しづゝ讀者はふへた。

文壇にたいする彼の考は段々かはつて來た。彼は始めつから夏目さんと獨歩をのぞく他はあまり尊敬しなかつた。しかし自分を井の中の蛙のやうに何となく思つてゐた。そして大海を知らないお坊ちやまのやうに心の何處かに思ひ込んでゐた。處が文壇のことを少しづゝ知るやうになつて、彼は世間には存外偉い人間のゐないことを知つて來た。自分が私かに遠慮しながら感じてゐたことは、遠慮せずに感じていゝことの氣がして來た。今迄彼は世間の人が感心してゐるものを自分が感心出來ない時に、自分の方が正しいとは思つても、何か自分に足りない處があつて、他の人が感じてゐることを自分が感じられないのではないかと思つてゐた。しかし彼は文壇の人を少しづゝ知るにつけて、自分が自分に

遠慮しすぎてゐることに氣がついた。

學習院だつて世間だつてちがつてはゐない、存外世間とは物のわかつた人が居なくつて、物のわからない人が得意になつてゐる處だと云ふことを知つた。そして物のわかつてゐるはづの人が存外物がわかつてゐないのに氣がついて來た彼は自分の主觀を段々信じ、又主張する氣が段々强くなつた。

彼は當時の文壇の空氣の冷たいのと、小利口なのと、何ものにも興味を持たないことを得意にしてゐるやうな傾をよろこばなかつた。彼は自分の内にある熱をさますものをよろこばなかつた。又彼の生長力をしなびさすものをよろこばなかつた。それに反し、彼に力を與へ、彼に熱と眞劍な氣持を得させ、何處までも彼の生長力に役立つ、泰西の藝術家の群を極愛させた。彼は其處に知己とそして力の泉を見出した。

彼は「白樺」の六號で文壇の空氣に私かに戰ひをいどんだ。そしてこんなことをかいた。

『自分はどうも現代人ではないやうだ。自稱現代人が現代人ならば、

『少くも日本の現代人の特色はすべて根本のものに興味を失ふことにあるらしい。自然とか、人類とか、社會とかから見捨てられた人を云ふらしい。又それ等のものを自己の方から愛想をつかした人を云ふらしい。幹からはなれた枝葉のやうな人を云ふらしい。

『彼等の見る所では、メーテルリンクとか、ベルハーレンとか バン・ゴオホとか、セザンヌとか、ロダンとかは現代人でなくなるわけだ。

『今の若い人が現代人がらうとしてゐる腑甲斐なさをはがゆく思つてゐるものだ。雷同的現代人程やくさなものはないと思つてゐる。

『今は過渡期の時代だ。亡びるものは亡びる時だ。榮えゆくものは榮えゆく時だ。意志の弱い奴はどん／＼亡びてゆく時だ。亡びてゆくものに興味をもつ人の多いのはあたりまいの時だ。しかし希望のかゞやいてゐる時だ。痛快な時だ。

『現代人は亡びてゆくものゝシンプルだ。亡びゆくものは美しく亡びよ。

『やがてくる人は意志の強い男でなければならない。執着の強い男でなければならない。自然と人類と社會と自己との爭鬪に耐え忍べる男でなければならない。眞の苦悶は若き人に近づきつゝある。

『勝利者と敗者の區別のつくのは近き將來である。

『かう思ふと力がわいてくる。自分は實に若いのだ。自分は二十才の人よりまだ若いのだ。（六月十六日）

彼の意氣組はかくの如きであつた。

彼は又云つた。

『日本人にかけてゐるものは意志だ。根氣だ。從つて大きさだ、重さだ、深さだ。

『だから日本人は怖ろしくない。自分のやうな人間が勝手氣儘なことを平氣で云へるのは日本人が怖ろしくないからだ。どんな敵が出來ても三年辛抱すればいゝのだと見切りがついてゐるからである』（十七日）

彼はまだものにならない人間であらう。だが彼がものになれば、彼は彼の父に似て燃え、彼の母に似て辛抱強いことだ。

一三七、

彼は北海道に旅行する前と同じ生活をつゞけて居た。女中との間も深くもならず、淺くもならなかつた。

或る日、母がそれに氣がついた。彼の母は氣がちがうやうな聲を出して走つて逃げて行つた。彼はおどろいて母のあ

とを起けて母を横抱きにつかまへた。母は全身をふるはして泣きぢやくりしてゐた。そして「私は死ぬ、私は生てはゐない」と獨りごとのやうに云つた。

彼は母に安心するやうに云つた。十分か二十分あとには彼の母はおちついた。彼は母が安心したのをよろこんだが、それは自分の卑屈を非難されるやうにもとれた。彼等は愛してゐない、何にもうちあけも、一言の話もしない、そしてたゞ瞬的に禁斷の果を味はふとしてゐる。もし之が愛してゐたのなら、自分は勇ましさを感じて母と衝突をさけなかつたらう。だが自分達の間はもつと醜いものにすぎないのだ。彼はさう思ふと母を安心させた自分を耻ぢそして、自分の罪を思はないわけにはゆかなかつた。しかし幸ひ彼はその女も自分を愛してはゐないことを知つてゐた。彼はその女を愛することも、尊敬することも出來なかつた。だが好意と謝罪の氣持をもつて、その女の幸福をのぞみたく思つた。少くも不幸にしたくなかつた。その後母の看視は彼等の間を二人だけにさゝないやうにした。その後まもなくその女中は彼の家にその時分居た從弟と仲がよくなつた。このことは彼にとつては不快よりはむしろ安心の方であつた。それだけ彼は自分の美しくないことを知らされた。彼の母はなほ安心したことゝ思ふ。自分の子供のことより考へない彼の母よ。

一三八

彼のそばに愛しうる女が與へられてなかつたことは彼をして賤しくさせた。彼は十九の時から二十七まで一人の女の友も持つ機會が與へられなかつた。彼は一言も話したことのない女を戀した。そして少しも愛することの出來ない女で性慾の滿足をぬすもうとした。彼もよくない、だが境遇もよくなかつた。

彼はそれを耻ぢ、又それがために他人に寛大になれた。しかしいぢけやうとは思はなかつた。彼はいぢけることの罪なことを知つてゐた。今の彼にとつては自分を何處までも生長さすことが大事件だつた。

萬事は實力が出來てからの話と思つた。自分を健全に生長さす、それに役に立つものは何んでも愛し、それに害のあるものとは戰ふことを辭さなかつた。

『自分は自分を侮辱するもの、殊に自我を壓へつけやうとするものに對して制し難き惡意を持つ。母はよく云ふ。「お前は私がそんなことをしてくれると死ぬと云つておどしたら、そんなら死んで下さいと云ふにちがいない」と實際自分もさう思ふ。自分のしやうと思つてゐることを母が親の權利で壓へつけやうとする時、自分は母に對して恐ろしき憎惡の念に打たれる。腹が立つてたまらなくなる。自分は之は生長させる爲に自然が、人間、殊に男子に與へてくれた本能のやうな氣がする。

この本能に今の日本人は少し無頓着のやうな氣がする。今の自分にはこの本能程、面白い本能はない。』

彼は遠慮すればする程、自己に不忠實になることを知つた。自分の信じてゐる道をこつこつ歩いて、何ものにも自分の道を讓つてはならないことをますます信じるやうになつた。批評家は何とでも云ふがいゝ、自分は歩ける道を歩くより仕方がない。

一三九

彼は東京へ歸つた翌月二つの對話をかいた。

一つは「平凡なる四人の男の會話」と云つて、耶蘇がゼルサレムに入るのを岡の上から現代人が見て噂してゐる處だ。耶蘇にたいしてさへ呑氣なことを云つて自己の優秀を感じて得意になれる人間の多いのを彼はそれによつて嘲笑した。彼はそれをかき上げると得意になつて柳の處へ持つて行つてよんで聞かせたものだ。

他は「おどりくらべ」と云つて、技巧專門の魂ぬきの連中のおどりと、山上にゐる人間の心をもつた一人の男の無器

用なおどりが征服する所をかいた。

二つとも彼が當時の彼のものにたいする批評にたいする態度を示したものである。勝利の自覺を彼は感じて來つゝあつた。

當時彼は長與と知りあいになつた。始め彼は半年程前に一日丸善に行くと其處で學習院の學生にあつた。その學生はドイツの畫の本を見てゐた。そして彼がそばに行つたら挨拶した。そして面白い畫の本を知らせてほしいやうに云つて居た。

彼は一つ二つの本の名を云つた。その學生はそれを旣に持つてゐた。そしてそれを學習院の塾にかくしてしまつてゐることを話した。その本の内にはスツユツクなぞが入つてゐた。それは露骨な男女の裸體でたはむれてゐる畫が澤山入つてゐる。

彼はそれを聞いた時面白く思つた。

當時學習院は乃木さんが院長してゐて、非常に嚴格だと彼は聞いてゐた。シエンキヰツツの「何處へ」なぞも、持つてゐた人はとりあげられたと聞いてゐた。何處でも噂の方が誇張され、又かげではその人さへしつかりしてゐれば可なり自由のきくものだと彼は思つた。彼はその學生にホフマンの本をすゝめた。其處にも無邪氣ではあるが、女の裸體の畫と、裸體の男女の接吻してゐる畫があつた。學生はその本を買つて歸つた。

彼はその時その學生の名は聞かなかつた。しかし柳なぞから聞いてゐた長與と云ふのがきつとこの學生だらうと思つた。あとで柳にその話をしたら長與にちがいないと云つた。そしてそれは長與だつた。

彼はその夏、母や三つになる甥と日光に行つた。其處へ柳がたづねて來て四五日一緒に生活した。柳はその時、兼子さんと結婚することを報告に來たのだつた。彼はそれを聞いて萬事がよくいつてゐるのを祝したく思つた。柳は彼よりずつと若かつたので羨やましい氣はしなかつた。そして二人の間の美しいのを氣持よく思つた。彼等の仲間でさう云ふ話がうまくいつたのは柳が始めてだつた。だからなほ氣持よく思ひ、柳達の爲に祝したく思つた。殊にわざわざ知らせに來てくれたことをよろこんだ。

一四一

彼が北海道から歸つてまもなく浮世繪をロダンに三十何枚送つた。その内で北齋の三十六富士の内の一つや、豐國の女形の立つてゐる姿や、他に二三枚づぬけていゝものがあつたが、何しろ金が少ないので、二三圓をこすものは少なかつた。しかし送る前に、園池の處で展覽した時、皆感心して見た。手放すのが惜しいやうな氣がした。それを送つて本當にロダンの手に入るのか知らん、入つてよろこんでくれるか知らん。デッサンを一枚でもくれゝばいゝが、それもあてにはならないと思つた。しかしともかく送ることにした。

するとニ三ケ月たつてロダンから手紙が有島（生馬）あてに來た。そしてそれにはロダンが隨分よろこんでくれたこと、そしてブロンズを三つ、「ロダン夫人」と「小さき影」と、「ゴロツキの首」を送つてくれるやうにかいてあつた。皆あまりに意表外なのでおどろいた。そして夢中によろこんだ。しかしブロンズは中々とゞかなかつた。それから十二月の二十二日にとゞいた。彼等のよろこびは大したものだつた。

柳は税關に知つてゐる人があるのですぐ横濱にとんでいつた。その日の日記に彼はかうかいてゐる。

「十二月二十二日

ロダンのブロンズとうとう三つ來た。

この日午後郡、山脇、志賀、長與が來て居た。柳はロダンの彫刻のことで橫濱に行つてゐる。四時頃山脇歸る。五時頃柳より電話かゝる。あわてゝ行く、「うまくいつたよ。萬歳だよ」と云ふ。「何處へ持つて行かうか」と云ふから。早速「志賀や郡や長與が來てゐるから持つて來ないか」と云ふ。柳承知した。

四人興奮すること三十分許りで、柳來た。「よかつたね。」「とうとう來たね。」「萬歳」などと皆狂喜した。丁寧につゝんである紙包をあける。汽車にのらないので箱は橫濱に置いて來たのだ。方々に電話をかける。大概不在で殘念だつた。夕飯の時皆でロダンのブロンズを持つて飯食ひにゆく。とられたり地震があつたりするといけないからだ。それに見たいからだ。母に見せる大喜び。

飯食ひながら喜びと讃美の聲をあげる。飯の最中兒島來る。宅に歸つて暫くして雨村友とくる。

九時半頃雨村と雨村の友歸る。その後暫くして皆歸る。興奮してつかれたので寢やうとしたが中々眠れない。何んべんも起ては電氣をつけて見た。

二十三日

今日ロダンの彫刻を見に大勢の人が來た。

午前有島、里見、小泉、

午後、雨村、齋藤（與里）君、山脇、志賀、長與、高村君、郡、木下、細川、柳、兒島、正親町、青木、前後してくる。夜東松くる。

彼はロダン夫人を本棚の上にのせて一人で見てゐると、その前から力があふれてくるやうな氣がして、帝王の藝術と

云ふ氣がした。「小さき影」は彼の持つてゐるロダンの本にも出てゐて、ロダンの一番元氣のいゝ時の作のやうにかいてあつた。彼はその充實さにおどろいた。

彼は嘗つてロダンの彫刻のくるのを夢みた。その彫刻は警察署の裸體畫にたいする態度を皮肉るために、大理石像の接吻にしてあつた。彼は、その内にかうかいた。

「日本に來たのだね。この目で日本で眞物が見られるのだね」

「さうださうだ、だからじつとしてゐられないのだ。」

「とうとう來たね。夢が實現されたのだね」

「さうだ」

「日本に來たのだね、日本のものになつたのだね」

「我々の美術館のものになつたのだ」

「この手でさはることが出來るのだね」

「さうだ」

この空想は三年後に叶えられた。そして今では日本にロダンの彫刻は隨分澤山來てゐる。そして彼等も十年あまり齡をとつた。

ロダンの彫刻は三日許り彼の處にあつてそれから雨村の處へ二三日あづけることになつた。

その時、岸田から始めて彼は手紙をうけとつた。その手紙には彼にたいする厚意と信頼が示されてゐたので彼はよろこんだ。

彼はその前岸田に仲の處で遇つたことはあつたが碌に話しもしなかつた。彼はすぐ返事を出した。その返事をうけとつて岸田は彼の處をたづねて來た。彼は岸田と氣持よく話した、そして一緒に雨村の處へロダンの彫刻を見に行つた。その時岸田は二十一二だつたらう。

一四二

翌年の一月だつたらうと思ふ。(まるで時を思ひちがいしてゐるかも知れない)

當時スバルをやつて居たＨ氏が正親町を訪ねて、スバル、三田文學、新思潮と白樺とが合同して當時勢力を得つてゐた自然主義に敵對するくわだてを話した。そして四月に華々しく合同して歐外さん頭に戴いて大きな雜誌を出さうと云ふ申し込みをした。そしてその相談會をしたいから、上野の精養軒に何日に來てほしいと云ふ話だつた。

それを聞いた時、志賀や彼は閉口した。彼達は自然主義に滿足はしてゐなかつた。しかしそれと同じ程度にスバル、三田文學なぞに滿足はしてゐなかつた。殊に歐外さんには厚意を持つてゐる人は多かつたが、頭にいたゞく氣の人はなかつた。彼や志賀は歐外さんをさう尊敬もしてゐなかつた。頭のいゝのや、品のいゝのは認めても、情熱がなく、何をかいても大事な所をす通りする傾をよろこばなかつた。彼等は夏目さんなら尊敬を示してもいゝやうに思つてゐた。しかしその他の人は尊敬を示す氣はしなかつた。

しかし何かの都合で會合を斷るわけにはゆかなかつた。しかし彼等は始めつからＨ氏の申し出をことはるつもりで會合に出かけた。

彼等は會合に出るのを好まなかつた。正親町、里見、殊に郡は前からスバルの人達と仲がよかつた。會合にもよく出かけた。しかし彼等はさう云ふ文士の會合をさけてゐた。しかしその日は彼等は殆んど皆會合に出た。

歐外さん、荷風、白秋、その他スバル　三田文學、新思潮の連中は來てゐなかつた。彼は自分よりあとに出た谷崎が有名になつても壓迫はうけなかつた。彼は谷崎のもう一歩深かく入らなければならないのに入れないのを感じてゐたから。別に恐ろしいとは思つてゐなかつた。

荷風は一時、彼等にすかれてゐたが、江戸趣味に入りこみすぎてから、彼等ははなれ出した。白秋は彼等の仲間の一部に當時、愛讀者をもつてゐた。彼も友達が暗誦してよく聞かせられたので、「銀と何とかゞ、散るぞいな」とか何とか云ふのを覺えてゐたものだ。もう忘れてしまつたが。

歐外さんは皆に最敬禮されてゐた。彼等の仲間はそれにいく分反感を起して碌にお辭儀もしなかつた。

H氏や荷風、本屋の主人その他によつて夕食がすむとすぐ相談が始められた。

彼は志賀や柳とそのそばの窓口下で話してゐた。話はだん／＼はづんで行つた。スバルと三田文學が主であつて、白樺は新思潮と共に問題にされてゐなかつた。話はすゝんで、いよ／＼四月に合同すること、そしてその月には四つの雜誌は休むことの相談が始まつた。この時彼は不意に志賀にこらえられないやうな調子で云つた。

「白樺は休むわけにはゆかないね」

志賀はそれに贊成した、それと同時にH氏は彼に食つてかゝるやうに云つた。

「休むわけにはゆかないのですか。」

「えゝ、休むわけにはゆきません」

彼はさう斷言した。そして席が白けて、その話はそのまゝ流れてしまつた。

彼等はそれをよろこんだ。そして玉突にゆく連中のまねして彼等の仲間は、自分達だけでバルコンに出てさわいだあ

と、白秋は彼の仲間に入つて一緒にさわいでゐた、會合からぬけ出てしまつた。そして思つたよりうまくいつたねと彼等はお互によろこびあつて、家に歸つた。

一四三、

二月の或る日彼は前に一寸かいた「或る日の夢」を二三日かいて書き上げた。彼にはこの脚本をかいた時程、自分の胸の痛みに自らさわる苦しみに參つたことはなかつた。失戀の痛手に自らさはつてやつと出來かけた薄皮を一つゞゝはいでゆくやうな氣がした。

彼は泣きながらかき、少しかいては休み、少しかいては休みした。それをかき上げてまもなく、彼は二人の知らない人から手紙をもらつた。それは佐藤惣之助君と土屋昌介君だつた。隨分賞められたので、彼はよろこんで返事をかいた。

その時分、始めて彼を公けにほめたのは高村光太郎君だつた。彼はそれを感謝した。

彼は少しづゝ自分の仕事が反響を見出しつゝあるのをよろこんだ。

一四四、

五月十二日彼の誕生日の夕方、彼は帝劇の女優劇を見に出かけた。そして電車に乘らうとした處で彼女が向ふからまがつてくるのに實に思ひがけなく逢つた。すると彼女は急に足をとめた。そしてたしかにうろたえた。そしてあともどりして道をかへた。

彼は彼女の美しいのと、一寸見ない内に華かになつたのにおどろいた。女優の誰もよりも彼女は美しい。

彼は誕生日に偶然彼女にあつたことをたゞの偶然とは思へなかつた。そしてそれをよろこんだ。そして之は自分が彼女にたいしてもつと積極的に出ることを勸められてゐるやうにとつた。そして帝劇で志賀に逢つてその話をした。そし

て芝居見てゐる時も、彼女のことをよく思つた。そして家に歸ると彼女あてに手紙をかいた。それは最初の手紙であつた。

彼はどんなことをかいたかはつ切り覺えてゐない。彼の小説友情に、杉子にあてゝ知らない男からの手紙が出てゐるが、あれはそれから八九年のちに彼が自分の手紙を思ひ出して少し滑稽化してかいたものである。隨分思ひちがいがあるかも知れないが、大概そんな見當である。

それは實に理窟ぽい手紙であつた、自分がどの位い彼女を戀してゐるか。それは彼女が自分の態度から知つてゐるはづだと彼女は思つてゐたのだ。「友情」の內の手紙はかうかゝれてある。

「今日偶然、私の誕生日にあなたに三月ぶりで往來でお目にかゝつたことは、私には、たゞの偶然とは思へませんでした。それでもう一度手紙をかゝして戴きます。私にはあなたを赤の他人とは思へないのです。自然がこんなにまで強くあなたのことを思はないではゐられないやうに私をつくつてくれたことを、私は無視することは出來ないのです。其處には何かの意志が働いてゐて、私があなたを得る爲に出來るだけ骨折ることを命じてゐるやうに思へるのです。その命令に從ふと云ふ理由で私はこんな厚かましい手紙を、淸いあなたにかくのです。私の心はもうあなたは感じてゐて下さるでせう。私は何にも云ひたくありません。私はあなたに價ひしないものと云ふことは感じてゐます。しかし私はあなたなしに生きるのは淋しすぎるのです。運命があなたをつくり、私をつくり、そして二人を逢はしたことを、私は無意味とは思へないのです。二人が一つになることが二人にとつて最大幸福であり、又それが何かの意志と思ふのです。私はあなたの運命を傷つけることを恐れることでは誰にもまけません。あなたの幸福をのぞんでゐます。あなたが私の處にくることがあなたにとつて一番幸福のやうに思ふので、こんな手紙をかくのです。私のことは氣になさらないで、あ

なたの一番幸福を自由につかんでほしく思ひます。私はあなたの前に跪いて、泣いてあなたの手を要求したく思ひますが、私も男です。あなたの意志を尊重します。私の手に歸るのが本當でしたら歸つて來て下さい」

この手紙は恐らく本當の手紙とはちがう處が多いであらう。本當の手紙は彼女の手にとゞいたかとどかないか知らないが、恐らくもうとつくに失なはれたらう。彼はなほ、彼女が結婚することがきまつたら知らせてほしいとかいてあつた。そして封筒の上にも彼は本名をかいて出した。

翌朝十時頃彼は神田の齒醫者に出かけた、彼は何と云ふことなしに、いつも通る道を通らずに、少し遠ふまりして齒醫者に行つた。すると又彼女に出逢つた。この偶然の重なり、彼女の家は代々木の方にあるのに、神田の九段下のある横町で彼女に逢つたことは、彼はどう解釋していゝかわからなかつた。そして彼は家に歸ると二度び手紙をかいた。之が彼女にあてゝの最後の手紙である。

その手紙に何をかいたか彼はもう覺えてゐない、たゞまた二人を逢はしたものに、再度の手紙をかゝし責任をきせたことだけ覺えてゐる。

そして彼はその後、何度郵便函を見に行つたか知れない。しかし運命は思はぬ處に彼を待ち伏せしてゐた。

一日間をおいての十五日の晩、彼は志賀の處へ行つて夜おそく歸つて、郵便函を見た。其處に女の手のハガキが一つ入つてゐた。しかしそれは彼女からではなく、逢つたことのない二人の女からのよせがきのハガキであつた、その内の一人は彼にその前から時々手紙をよこしてゐた女だつた。その女はその後間もなく紅吉と云ふ名前で有名になつた。今の富本君の夫人であつた。そしてもう一人の女は、今、彼の妻になつてゐる房子である。二人で彼の處に來たいと云ふのだつた。

彼女からはその後何とも云つて來なかつた。かくて彼が二十二の時から二十七まで續いてゐた、一度も話したことのない彼女との話もやつと最後になつた。

彼の手紙は彼女にとゞいたか知らん。恐らくとゞいたであらう。そして兩親か兄にそれを見せたであらう。それが彼の手紙の最後であつたらう。

彼は友情には、その手紙は兄の手で横どりされて當人に見せなかつたことになつてゐる。そして次のやうな會話をしてゐる。

「手紙を見せないのも可哀さうだね」

「妹が十八になつたら見せてやつてもいゝ、しかしその時分になつたら、この男はもう他の女と結婚して、妹と結婚出來なかつたことを反つて幸福に思つてゐる時分だらうよ」

それから十一年後の去年の秋、彼が上京した時或る日電車にのらうとした時、彼女らしい人にあつた。その人は「改造」をもつてゐた。十一年逢はなかつたので當人がどうかはつ切りはわからなかつた。だがその人の美しさは彼女を思はすのに十分だつた。幸福であれ。



如何にして私は相對性理論を創つたか

アルベルト・アインスタイン

これはアインスタイン教授が自分で筆をとられたものではありません。昨年十二月十四日京都帝國大學に於る歡迎會に臨まれた際に一般學生に向つてこの主意で教授が演述せられたものを、私が自分の言葉で譯し綴つたものです。若し多少でも記憶の謬り意味の取りちがひなどがあつたとしたなら、それは私の責として教授並に讀者に謝さなければならないことを感じます。しかもそれにも拘らすかやうな演述は教授の口づからに聞くより外に、現に普通に行はれてゐる書物などのなかに到底見出し得ないところの、極めて尊い且つ興味あるものを含んでゐることを信じて、私は斯てこれを公けにしたいと思ふのです。この意味で教授並に讀者の寬宏なる諒恕をお願ひしておきます　（石原　純）

私が相對性理論にどうして達したかをお話することは決してさう容易なことではありません。そこには人間の思惟を働ますいろいろな隱れた複雜さがありますから。そしてまたそれらがいろいろな强さをもつて之にはたらいてゐるのでありますから。私は併しそれらの一々をこゝに述べることはしますまい。また私の書いた論文を數へることをもしますまい。たゞ簡單に最も直接な思想發展の要點をつまんで申し述べてみませう。

最初私が相對性原理を立てやうと云ふ思想を得たのは凡そ十七年以前でした。それがどこから來たかと云ふことは固より明確には言ひあらはすことは出來ません。併しそれが勿論運動體の光學に關する問題のなかに含まれてゐたのは確かです。エーテルの海のなかをとほして光は傳はつてゆきます。そしてそのエーテルのなかを地球はやはり動いてゐます。若し地球から見たならエーテルは之に對して流れてゐるのです。けれどもこのエーテルの流れを明らかに私たちに實證するところの事實は、物理學の文獻のなかに少しも見出すことが私に出來ませんでした。私はそこでどうにかしてこのエーテルの地球に對する流れ、即ち地球の運動を實證して見たいと考へました。私は當時この問題を自分の心に起したとき、エーテルの存在と、そして地球の運動とを決して疑ひはしなかつたのでした。そこで一つの光源からの光を適當に鏡で反射せしめ、地球運動の方向と之に反する方向とに從ひて、そのエネルギーに差のあるべきことを豫想し、二つの熱電堆を用ひて、之に生ずる熱量の差によりて試めさうとしました。この考は丁度マイケルソンの實驗に於けるものと同樣でありますが、私はまだこの實驗を充分に明らかにしなかつたのでした。併し私がまだ學生として之等の思考を自分にもつてゐたときにこのマイケルソンの實驗の不思議な結果を知り、そして之を事實であると承認すれば、恐らくはエーテルに對する地球の運動と云ふことを考へるのは私たちの謬りであらうと直覺するに至りました。つまり之が私を今日特殊相對性原理と名づけてゐるものに導いた最初の路であつたので、このとき以來私は、地球が太陽のまは

りを廻つてゐるけれども、その運動は光の實驗によりては認知し得ないものであることを思ふやうになつたのでした。

私はこゝで丁度ローレンツの一八九五年の論文を讀む機會を得ました。ローレンツは即ち第一近似の程度に於て、云ひ換へれば運動體の速度と光速度との比の二乘以上の量を省略する範圍に於て、電氣力學を論じ、之を完全に解くことが出來たのでありました。私は更にフイゾーの實驗を問題となし、ローレンツの立てたやうな電子に關する式が、私たちの座標を眞空におく代りに運動物體の上においても同樣に成り立つことを假定して之を論じやうとしました。ともかくもこの時私はマクスウエル・ローレンツの電氣力學の方程式が確かなものであり、正しい事實を示すことを信じました。しかもこの式が運動座標系に於ても成り立つと云ふことは、謂はゆる光速不變の關係を私たちに敎へるものですけれどもこの光速不變は既に私たちの力學で知つてゐる速度合成の法則と相容れません。何故にこの二つの事がらはお互に矛盾するのであらうか。私はこゝに非常な困難に衝き當るのを感じました。私はローレンツの考をどうにか變更しなければならないことを期待しながら、殆ど一年ばかりを無効な考察に費さねばなりませんでした。そして私には容易にこの謎が解けないものであることを思はずにはゐられませんでした。

ところがベルン（瑞西）にゐた一人の私の友人が偶然に私を助けてくれました。或る美はしい日でした。私は彼を尋ねて斯う話しかけたのです。

「私は近ごろどうしても自分に判らない問題を一つ持つてゐる。けふはお前のところにその戰爭をもち込んで來たのだ」

と。私はそしていろ〳〵な議論を彼との間に試みました。私はそれによりて翻然として悟ることが出來るやうになりました。次の日に私はすぐもう一度彼のもとに行つてそしていきなり言ひました。

「ありがたう。私はもう自分の問題をすつかり解釋してしまつたよ。」

私の解釋と云ふのは、それは實に時間の概念に對するものであつたのでした。つまり時間は絶對に定義せられるものではなく、時間と信號速度との間に離すことの出來ない關係のあると云ふことがらです。以前の異常な困難は之で始めてすつかりと解くことが出來たのでした。

この思ひ付きの後、五週間で今の特殊相對性原理が成り立つたのです。私はそれが亦哲學的に見ても甚だ至當のものであることを疑ひませんでした。そしてそれはマッハの論とも一致すべきことを見ました。固よりこゝでは、後に一般相對性理論によりて解かれたことのやうに直接にはマッハの言と關聯してはゐませんけれども、併し彼が多くの科學上の概念を明かに解析したなかに、間接にはさう云ふ關係をもつてゐると謂うてもよいのでありませう。

かやうにして特殊相對性理論は生れたのでした。

一般相對性理論への最初の思想はその二年後、即ち一九〇七年に起りました。しかもそれは或る目立つた有樣で起りました。

私はもと運動の相對性がお互に一樣なる速さの運動に限られてゐて、之を任意な運動に及ぼすことの出來ないのを不滿足に思つてゐました。そしてどうかしてこの制限を取り除けることが出來ないであらうかと云ふことを常にひそかに心に懷いてゐました。丁度一九〇七年にスタルク氏の依囑を受けて彼の主宰せる「放射學及び電子學年報」に特殊相對性理論の諸結論を纏めて書かうとしたときに、すべての自然法則が特殊相對性理論によりて論じ得られる間に、只獨り萬有引力の法則に之を應用することの出來ないのを認めて、どうにかして之が論據をも見出したいと云ふことを深く感じました。併し私は容易にこの目的を達することが出來なかつたのです。そのなかで私の最も不滿足に思つたのは、慣性とエネルギーとの關係が特殊相對性理論によりて美ごとに與へられるにも拘らず、之と重さとの關係、即ち重力の場

のエネルギーとの關係が全く不明に殘されなければならないことでありました。恐らくはこの說明は特殊相對性理論によりては到底達し得られないものであることを私は想うてゐました。

私はベルンの特許局に於ける一つの椅子に座つてゐました。そのとき突然一つの思想が私に湧いたのです。

「或る一人の人間が自由に落ちたとしたなら、その人は自分の重さを感じないに違ひない。」

私ははつと思ひました。この簡單な思考は私は實に深い印象を與へたのです。私はこの感激によりて重力の理論へ自分を進ませ得たのです。私は考へ續けました。

「人が落ちるときには加速度をもつてゐる。この人間が判斷する事がらは即ち加速度のある體系に於けるものに外ならない」

と。そこで私は單に一樣な速さで動く體系ばかりでなく、加速度をもつ體系へまで一般に相對性原理を擴張しやうと決心したのでした。そしてそこには同時に重力の問題を解くことが出來るであらうことを豫想しました。何故ならば落ちてゆく人間が重さを感じないのはそこに地球重力の外に新に之を打ち消す重力の場をもつからであると解されるからです。即ち加速度をもつ體系では新に重力の場を要求するものであるからです。

併し私はこれからすぐに問題を完全に解決することは出來ませんでした。實際の關係を見出し得るまでには私は尙ほ八年を要したのです。只それを含むやうな稍々一般的の基礎は既に幾分かその以前に私に知られました。

マッハはやはりお互に加速度をもつ體系をすべて等値であると主張した人であります。けれどもこのことは明らかに私たちの幾何學と相容れません。何故ならば若しかやうなすべての體系を可能としてゆるすならば、その各にはもはやユークリッド幾何學は成り立ち得ないからです。幾何學を捨て丶法則を記すのは、言葉なしに思想を云ひあらはさうと

するのに等しいのです。私たちは先づ自分の思想を盛るに言葉を求めなければなりません。私たちはこゝに何を探し求めたらよいのでせうか。

この問題は私には一九一二年まで解けずに殘されましたこの年になつて私はふとガウスの表面理論がこの神秘をひらく鍵として深い理由をもち得ることに思ひ當りました。ガウスの表面座標を私はそのときほんとうに意味深いものの如くに自分に思ひ浮べました。けれども私はそれ迄、リーマンが幾何學の基礎より深く論じたことを知らなかつたのです私はひよつと學生時代に數學教師がガイサーに幾何學を教はつたなかに、ガウスの理論のあつたことを思ひ出し、そこにこの思想を導き出したのです。そして幾何學の基礎が物理的の意味をもつべきことに考へ及んだのでした。

プラーグからチューリッヒへ私が歸つて來たとき、そこに自分の親友であり數學者であるグロースマンがゐました。彼は以前私がベルンの特許局にゐた頃も、數學の文獻に自分が多くの不便を感じてゐたのに對し、いろいろ便宜を與へてくれた人です。私はこのとき彼によりて先づ最初にリッチを教へられ、それから後でリーマンを聞き知りました。そこで私はこの友人に、私の問題が果してリーマンの理論で解けるかどうか、即ち曲線素の不變によりて自分の見出さうとする係數が完全に決定されるかどうかを相談しました。そして一九一三年に彼との共著として一篇の論文を書きました。けれども未だそこでは正しい萬有引力の方程式は得られませんでした。私は更にリーマンの式をいろ〳〵研究して見ましたが、自分の思ふやうな結果は到底之によりては得られないと考へられる多くの理由を見出すだけでありました

二年間の苦心が之に續きました。そしてその後で漸く自分の以前の計算に誤のあつたことを悟りました。私はそこで再びその不變理論に戻つて萬有引力の正しい式を求めやうとしました。そして遂に二週間後に始めてそれが私の眼のまへにあらはれたのでした。

一九一五年以後に於て私のした仕事のうちでは只宇宙論の問題だけを擧げたいと思ひます。これは宇宙の幾何學と時間とに關するものでありまして、その根據になつたのは一般相對性理論に於ける限界條件の取扱ひと、又他方にマツハの惰性に關する考察とであります。勿論マツハの場合に惰性の相對的本質について、どれほど明確な意見をもつてゐたかは私は具體的に知りませんでしたが、少くとも私に取りて彼から受けた精神的影響の頗る大きかつたことは確かであります。

私はともかく萬有引力の式に對する限界條件を不變にしやうとして、遂に世界を閉ぢられた空間となして限界を除去することによりて宇宙論の問題を解くことが出來ました。そしてその結果として惰性は全く物體相互間の性質としてあらはれ、相對的に對立する物質が存在しないとすれば、物體の惰性は亦消滅すべきものであることが導かれました。一般相對性理論は之によりて認識論的に滿足なものとなつたことを私は信じます。

以上に於て私は相對性理論の要點がいかに創り上げられて來たかを簡單に歴史的に述べたつもりです。

編輯を了へて

◇諸君になぜ政事の眞中に飛び込んで行かないか、鼻汁ばかりすすつている老人に命より大事なものをどうして任せておくのです。

◇ソラ政治家となれば、盆暮にうまい黄金袋は賄つて來ないに限つてゐる、銀行員や會社員のやうにいい女は來ないに極つてゐる、小文官のやうに持參金付きは來ないかも知れない、しかしそんな奴原を吹き飛ばす時代は來てをるぢやないか、この日本の現狀を見、この世界の行き詰り方を眺めてそれで氣がすむか。

◇街頭に出でよ、汗を流せよ、大八車も推せ、そしてシミジミした世相を味へ、道樂息子を羨むな、特權階級のものどもを可哀そだと思へ。そしてる。

誰も彼も火の出るやうに額で推して推し切つてくれ。

◇教員も、藝者も職人もモット時代に生きてくれ、そしてお前一箇の腕と精神とを信じてくれ、他人を頼らないで固く自分の存在を意識してくれ。

◇凡そ大衆の完成は自分の力量を信ずるのが第一だ、その第二はない、第三もない、

◇回向院も面白くなつた、ストライキのむずかしい意義は別として、去つた幕内、十兩の未來と、置き去られた貴目の大頭以下の將來が何ものだ、新興文學もかくして興れ、その位の大芝居を打て、今の投書も一そ全部抜きにしたらどうだ、我等は所謂大頭以下の成長に期待する。

◇潜めるものよ、地中の友よ、陽はあか〳〵と登らうとしてゐる、我々はどれほどお前たちを待つてゐるか。地上のあらゆる既成物が權威なくなつた時、お前の出現のみが、權威でもあり、生きた生命でもある。

◇佛蘭西よ!! お前はなぜ獨逸の債權を棒引せないのぢや。

◇黒人ルネ・マランの快著バツアラ出づ、地理的に、黒白人對境的に讀書界に意義あるものだ、虐げられた有色人が讀めば淚は出るだらう。

◇本月本誌編輯截「如何にして相對論理を創めたか」の原稿は世界中「改造」の讀者以外の人は讀み得ない貴重なものである。自分のことは斷じて口にもせなかつたア氏が本社員の要求もだし難く京都大學で講演したものだ。

◇西田氏の「眞と美」の寄稿も容易に得がたいものであることは讀者は御承知だらう、それから斯境に期待せらるる北聆吉氏が獨逸から歸つた。

◇高畠素之、上杉愼吉氏發企のもとに愛國黨が生れるさうだ。

◇本誌表題は自今再び Kaizo とする、獨、佛、英、米學者にそれで通つてゐることと、それから郵便その他營業に不便が多かつたから。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	八十錢	貳錢
半ケ年	五圓六十錢	[illegible]
壹ケ年	拾圓廿錢	[illegible]

註文の注意

本號定價金九十錢

本誌一頁廣告料 一等百圓 二等七拾圓

○本社廣告取次所 博報堂 萬盛舍 日本電報通信社

◇[illegible]は凡て前金とす

◇[illegible]

◇[illegible]

◇[illegible]

◇[illegible]

◇[illegible]

大正拾貳年一月二十日印刷納本
大正拾貳年二月一日發行

編輯發行兼印刷者 東京市芝區伊皿子町四十番地 平田貫一郎

印刷所 東京市京橋區新榮町七番地 秀英舍

發行所 東京芝區愛宕下町一ノ一 改造社

電話 芝(長)一六三八 芝二八五四 芝四三〇三

振替東京八四〇二

葛西善藏作

小説 哀しき父

定價壹圓九拾錢

送料十七錢

四六判上製

有島生馬氏は本書が最近文壇の壓巻なりと激賞せり

文壇獨特の境地を有する葛西氏の長編小説「不良兒」等を收む。愛兒の不良に惱める父の悶えと一の環境の情趣を描く、憎むにはあまりに悲しき慘苦に充ちたる哀れな父の運命と、その子の運命は眞に沈痛な此の世そのまゝの現在劇であることによつて我々に悲痛なる生存難の或一齣を寂しく暗示する。

悲痛深刻を極めた大正の名藝術

第五版

東京芝愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二

改造社出版目錄

◇山本有三著

山本有三戲曲集

定價貳圓八十錢　送料十九錢　四六判上製

五版

天才戲曲家として一作を出すごとに讀者の血を躍らし、そしてその核心をシカと把握して離さないのは山本氏の戲曲である。本書に收められたる五篇「津村教授」「嬰兒殺し」「生命の冠」「女親」「坂崎出羽守」は東都の舞臺で幾萬の人を泣かした。

◇志賀直哉著

壽々

定價貳圓八十錢　送料十九錢　四六判上製

四版

秋の澄み渡つた空の如き透明な雅の持主である作者は何と云つても小說界の大巨匠であり最高權威である。日本の藝術を語るものは先づ氏のしみじみした作品を味ふべきである。そこに藝術の殿堂はある。

◇野上彌生子著

小說六つ

定價貳圓參拾錢　送料十九錢　四六判上製

三版

綺羅星と並ぶ劇作壇に赤輪唯一花、それは野上彌生子である、女作家も多い、しかし野上氏に比すれば總ての作家は果して比較になるだらうか、氏の半生涯に於ける小說から特に六つを抽出して江湖に發表する。

◇尾崎士郎著

長篇小說 **逃避行**

定價壹圓六十錢　送料十七錢　四六判上製

七版

若き日の輝きに充つる一大雄篇を提供する若き社會運動家が社會主義運動の裏面を赤裸々に告白し、自分は漂然として逃避するに至つた悲しき社會記錄だ。各篇火の如き熱烈さに充ち〱してをる感激多き小說。

◇尾崎士郎著

長篇小說 **懷疑者の群**（逃避行第二部）

定價壹圓六十錢　送料十七錢　四六判上製

三版

若き社會主義者その內面生活の素破抜きであり、その首領連の裏面史あり、そして若き日の惱み多き戀の秘密である。本書を一讀せずして彼等社會主義者の內面を窺ふことは出來ない、本書は逃避行の續篇。

◇バートランド・ラッセル著

愛國心の功過

定價壹圓八十錢　送料十五錢

六版

日本人にかくも鋭い警告を與へた思想家はない我々は此一書を讀むごとに、「誤れる愛國心」「眞理に徹せざる我國民」「哲學なき貧しき自分」「ラ氏の論議は論議の基礎をなす原品」「光る眞珠」だとしみじみ感ぜしめ學ばせる。

◇阿部次郎著

北郊雜記

定價壹圓九十錢　送料十五錢

十一版

著者が折にふれ、感興に應じて執筆した水晶の如き透徹した評論と隨筆だ、氏が論壇に於て第一人者なるが如くその文章のスッキリして滋味津々たること斯界唯一の寶石だ。

◇文學博士 醫學博士 榊　保三郎著

丁齡より學年迄の

精神發育研究

定價四圓　送料二十七錢

四版

著者が十一ヶ年を費して研究した、世界的權威の大冊子で、六歳より廿一歳までの兒童の精神發育を研究した空前の大名著、小學校、中學校には一書を備付くる要がある。本書によりてのみ兒童精神の推移は判明すれば也。

◇文學博士 醫學博士 榊　保三郎 ◇醫學士 諸岡存共著

スタイナハ

若返り法研究

定價一圓三十錢　送料十三錢

五版

スタイナハの深遠なる生理學の智識と、十數年に亘る嚴密なる實驗によりて組立てられたる「若返り法」は七十にて尚ほ廿歳前後に見る性慾生活に生き得べき事を説く。我「若返り法」研究の大家榊博士及諸岡學士の解説せし權威ある書。

東京芝區愛宕町下町　**改造社**　振替東京八四〇二

直輔の夢

里見弴作

谷崎氏の「愛すればこそ」と共に大正十一年度の二大傑作と稱せらるる里見氏の「直輔の夢」と（山本有三氏評）大毎紙上で好評嘖々たる「甘酒」の二大長篇を集めたのが此一著です、

直輔の夢の筋書

（蒲柳な質の直輔が中學時代に肋膜を患つてそれが癒つてから何の氣もなかつたが丁年過ぎて貰つた女房と一年位同棲してから氣が合はぬとて離緣し自分は兄たちからの仕送りで獨身生活をつゞけ三十三の冬風邪がもとで發熱し肺病の初期だと診斷され逗子に保養しながら今まで親しんだ油繪の筆を投げて南畫など試みて日を暮してゐるとその昔直輔も時折入りびたつて我儘の振舞をした沖津の女將が待合をよして鎌倉へ住まつてゐる知らせに訪ねて行くと昔馴染の藝妓小しんが弗且の桐谷といふ某會社の重役が東京市の瀆職事件に連坐して入監してから病みつき鎌倉の長谷や小田原に轉地療養してゐるのを共にたづねて昔の戀の情緒纏綿など物語るなど、作者一流の麗筆で描かれたものである。

最新刊

◇四六版上製◇

定價壹圓八十錢

◇送料十七錢◇

◇東京芝區愛宕下町◇

改造社

◇振替東京八四〇二◇

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY. TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO

大正八年三月廿一日第三種郵便物認可